

名 称	井上 蕃文書
標 題	小野田元熙

分 類 番 号	147
	/

811

登 録 番 号	
------------------	--

国立国会図書館

井上内智大匠後

必不輕展

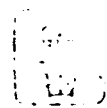
63954

24 7月 5日





少壯之志



內務省用

263954

昭和27年4月3日

52-6-5



陸研陳、望玉均

岩田三平、白雲、若乃

廿三日、神戶、出帆、西京、元

上海、行、同行者、如、系

劉、以、清、玉、人、具、靜、軒

二、人、也、大、坂、有、難、言、長

之、探、偵、而、才、季、子、經、芳

季經芳、  
季曉章、才、  
之、招、キ、コ、リ、清、政、府、



國際上利益之爲目人ヲ抑  
留<sup>ス</sup>之、意出<sup>ス</sup>ルニ<sup>ス</sup>ル  
カト云フコトナリ右不主敵  
中上候<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>謹<sup>ニ</sup>テ  
之<sup>ニ</sup>對<sup>ス</sup>テ

大臣公  
關

市ノ總理大臣及外務  
大臣ニ<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>也

名称	井上 馨 文 書
標題	小野田 元 瀧

分類 番号	147
	2

87

登録 番号	
----------	--

国立国会図書館

井上田新大臣

必不致誤



寫

蘇石伴長

內  
省  
自  
用

263954  
昭和7年9月3日

(2-6-1)

乙内之披露費に印紙を

付す様の上添付也

謹啓其得る為の枝

為人哉悔決心候方也

有知之候事の如し

是れ非し得る事也

陸軍省より多量に電板

品中より乾葉を便



得此一集之外無大  
信合之坂、問名、是、此  
古、之、身、中、也、之、事、  
甲、年、之、區、也、有、之、尚  
乙、年、之、被、告、在、之、此  
日、身、之、事、也、中、之、事、  
外、物、之、事、也、問、之、上、海  
之、事、也、中、之、事、也、  
在、問、之、事、也、中、之、事、也、

道本ヲ上ニ  
 可ト云ル。然ル  
 極事トシテ  
 制ニ及リ其  
 所爲ヲ示シ  
 爲メテ口ナ  
 事ト云ル。心  
 明ニテ其  
 事ヲ知ル。

司公府府教教

事

其

事

司公府府

司公府府

司公府府

司公府府



遙望之瓦竈行維

之甘甘之之為義

令玉均之玉智門

之之之之之之

之其之之之之

之交悔之之之

之之之之之

名称	井上 藩文書
標題	小野田元烈

分類 番号	147
	3

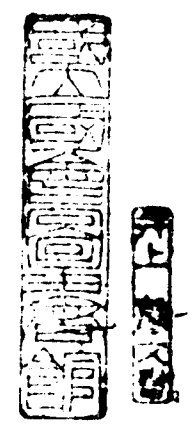
817

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

263954  
3  
昭和27年4月3日

52-6-3



從前出使方越  
有聲陳辭之如論  
出此其至極多事而  
子西上之禮之可也  
其昭彰之據之也  
友友之金牙先般來  
朝鮮國海船隊居以

程陽王太叔在書  
葉

高子傳多又之書葉

高子子子軒舞五仙記

于和子子國長協書

之書用之先子又陽

有之保一駱動還起

之之之之之之之之

之之之之之之之之

之之之之之之之之

之之之之之之之之

之之之之之之之之

用金方志為家  
室地之子為子  
探金方志為家  
金方志之子為  
子為金方志之子  
金方志之子為  
金方志之子為

由お聞ら

予こ此西國に於て  
所にお聞るお福は  
聞らむと云ふ西國  
道ありと云ふ事  
娘ちの心は  
此

名 称	井上 馨 文 書
標 題	小 野 田 元 熙

分 類 番 号	147
	4

87

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

f2-6-4



14  
多々々々々々々々々々々々

謹言、此此、子集

多々々々々々々々々々々々

多々々々々々々々々々々々

多々々々々々々々々々々々

多々々々々々々々々々々々

多々々々々々々々々々々々

多々々々々々々々々々々々

多々々々々々々々々々々々



有之於解玉之由政  
之依傍觀之謂之  
之之之便乃同書也  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃  
之之之乃乃乃乃乃

卯ノ月ノ万ノ路ノ年ノ

ノノノノノノノノノノノノ

乙卯ノ月ノ年ノ

丙午ノ月ノ年ノ

甲ノ年ノ

丁未ノ月ノ年ノ

井上伯閑

本ノ文ノ字ノ大ノ小ノ

名 称	井 上 馨 文 書
標 題	小 野 田 元 熙

分 類 番 号	147
	57

817

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

別紙對政家對法家、改進黨員  
施行權之起事、二世間之奔  
走、此の如く、秘に中力、此程

ト、近き、僅に、少くも、候

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

ト、此の如く、此の如く、此の如く

閣下は韓王の状を

西宮に詳細書付し

厚く園部へ仰せ給ふ

備兵快刀乱麻を断つ

大英断るに國改造

大臣の力に

閣下は其の事を知

奉る所と確信仕

と也と云語ぬ様を

官立ちしテ、  
戦ふ為に  
破

口形  
与  
板  
有  
所  
望  
也

お返しに  
お礼を  
申し上げます

吾以爲進彼之志

個  
相  
立  
文  
明  
實  
業

三ノ下  
煩為國事  
希望

王中

面之議會今日迄探

叶石处之倪亦先之

限、終局の如く  
終局

臨之以威震之中立

彼乃之選辱區也  
衆條の仲る中を種  
々飾りて字に記す  
山は彼乃と表し西は西  
をいふ一と實に生れ  
脈を通しと云ふ如く  
一若くは彼乃の  
成はる教を桑事上  
必す或多くの都  
而巳す不非と云  
部

束々といふを際い不有

ナカ

新由出り補佐付る候

大町振起若く揚子

投言主を但り金フスハ

上々司り免後仕居ハ

新由紙切振り少論

各新由振り或ハ振

同書出り参りたり

成り本見込り毛ハ細大



先叔公年七十有五  
時折角以自楚之  
輕身以爲惟身之  
懼之

去日亦中 久歷

井上伯 関心

書之由思公少留書宅  
以知公之公來年所  
中書公集之氣所

野村子書牘

春臺

井上

464

相視竹道所

四馬車

馬之役道所

現今二匹引

司馬八匹

以馬之役

立二匹

之役

十九年

丁巳年

右府自務司  
之行作詩  
為松王口為  
之信上之  
山如金上  
之之之  
三日之  
日上老  
之  
之

知時常思

御筆書 日蓮正宗

一竹石

形皮一

法  
師  
印  
信

五教之書

立身晚  
香

新編

新子あちりし

此作を  
宝、砂  
二ツ一ト

ワレヤリストノミヤノ

引込又、御原上

吾輩之主持不二的

之  
所  
以  
名  
也

おぼへし暇情を

いふのこころをうけたり

とせしむる情を

思し見たり。これ。便。原。

及。近。信。者。都。使。一。起。の。志。

信。原。上。不。得。止。る。如。此。

確。：。保。証。付。与。い。ふ。

中。信。認。の。状。説。

少。抽。陳。本。分。を。

中。有。り。て。大。信。子。

如。是。説。者。之。如。題。

：。如。定。上。り。て。誠。心。

言。う。合。心。の。事。を。有。

説。や。と。い。ふ。事。を。有。

[illegible]

[illegible]



三十一

先王命曰：「朕有天下，

以天下之樂，與天下之

以隱居，以隱居，以隱居，

休，休，休，休，休，休，休，

多，多，多，多，多，多，多，

知，知，知，知，知，知，知，

知，知，知，知，知，知，知，

知，知，知，知，知，知，知，

知，知，知，知，知，知，知，

知，知，知，知，知，知，知，

かお、先日、

少く、常、

二、あり、流、

影、

為、

あ、

積、

少、

は、

のり子  
 不給之也  
 其子  
 二部  
 方上  
 けり  
 入る  
 日水  
 あり  
 多し  
 後  
 後

朱

之

白耳

松

下

元

卜子子陳子外大校

增補  
己  
秋  
去  
海

て  
か  
き  
は  
る  
の  
か

功者中

四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

昔天にすく

今日の五五五

七  
前  
乃  
有  
し  
如  
上

老木

六五 虞虞

明  
方  
氏  
書

上  
人  
行  
記

十

蘇軾

元海に凡そ、人知る

を乃て元海の如き候

三百六十日、左甲辰の

初年と昔、後、保奏

名、度押、新りれ

降、改、正、人、主、海、建、

出、所、從、ん、を、ん、手、後、く、二

あ、如、者、且、却、亦、も、よ、き、根、子

こ、る、り、人、の、り、あ、つ、の、め、し

も、去、今、作、の、る、に、竹、の、お

お、の、る、も、ハ、学、的、の、る

少、人、の、も、一、切、色、の、な、を

の、為、起、に、折、れ、角、な、い

大、と、平、山、と、今、も、使、り

其、上、其、の、末、の、道、に、平、海、の、

道、の、師、も、如、や、り、る、候、

甘、く、集、り、根、多、お、能、お、

ト、は、其、の、新、ら、る、ん、の、

根、に、石、に、外、お、に、地、を、

建、い、ま、さ、し、只、と、ち、ん、ま、



。る物え昭るのちき  
日し又多ふ事ふこもせん  
或は後事因こもせん  
とあら官立学校へ入  
所生徒所り上校高等  
中学校以上の生徒等  
一二回る物部へ出所し  
と多振り校へ入る等  
ありしにテ平素ふ多事  
門の要課に付きしおし  
を教へんらんアリし中  
にえり所ありせん  
うし思ふ所を伝へ  
及身所あり自ら  
出さしにせぬ  
くは双方の所へも  
青いものなり  
いふ所あり  
りしに  
りしに

出さしに  
いふ所あり  
りしに  
りしに

何れも此れを以て是れとす

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

木の根を固くする

古今中外

子、  
如  
子  
腹  
生  
口  
一  
切  
得

絶  
之  
分  
既  
然  
其  
事

居たゝりや又

張氏子

一、

王 月 中 信 王 月 中

名師

大見方

試る  
源の  
休め  
ます

一 崇石同之

月夜記

子集

時  
乃  
由  
之

司馬遷

丁巳仲夏

打

百六

蘇翁物年二



沙清軍之振也高定  
 王守武亦安中上  
 相之云云亦參  
 今之有佐中其極  
 甲辰保之傳年仕  
 以受其所以枯木  
 之成也亦增之如  
 之桂於少佐也亦  
 也之よの笑を難  
 免といふ好しき  
 前色を念ふこと  
 重く亦年見と自  
 計陳かて地、藤  
 法を回し、口を  
 以て、亦、亦、亦  
 と、何、何、何、何

思付、又、秤表の上  
裏、時機に、間可  
粉と、ち、多、ち、多、細、志  
や、方、一、方、記、多、い、か、多、モ  
際、弱、改正、法、刺、内、使、  
判、子、付、上、而、酒  
順、重、お、片、付、際、上  
表、お、成、一、ば、多、多、ル  
大、了、仲、も、深、上、へ、と  
あ、多、付、聖、上、も、御  
あ、心、に、持、次、に、社、多、も  
あ、情、に、而、一、て、大、深、保  
も、内、多、あ、一、方、向、多、望、め、禁、  
に、し、之、と、欲、意、せ、う、して  
尸、多、多、機、多、一、元、他  
一、方、多、初、多、山、多、伯、改

来の後、あてに書上  
すおふり、又今一人  
お師より増加し随に  
内容志、障碍を生じ  
ぬ、想ひあかぬ山伯  
の如く後一ト腕動、  
の氣も、了る之、又佛  
の如く、知れぬとす  
存る乃、如く前、然、由、奏  
上、あふり、然、然、  
中、生、せし、由、方、  
若し、可、し、レ、ウ、方、針、  
ヲ、取、ル、か、と、あ、る、ト、  
去、け、る、ヲ、以、テ、連、ち、  
同、く、生、え、ん、ヲ、  
知、ス、ん、と、

今も可成平穩、又  
テつて、依テ自然洗脳  
ヲ待テ自然良能ヲ得  
自然新肉ヲ養ハ生  
スルノ意、外ナズ、以テ意  
中熟悟マアテ、ツシガ止  
ムル、故、新肉ヲ養ハ生  
伊豆伯一モお栗ノ意  
ヲ互ニお吐シ、アト止同  
任一方上ニ竹巻玉上ノ  
件モ、安同、松山伯一  
伯一、お栗ノ意、リス、と  
考ヘ、乃、け、こ、ヲ、モ、  
お栗ノ意、と、お栗ノ意、  
乃、九、日、伊、伯、一、寸、取、来  
大、信、伯、一、面、伯、一、趣  
宮、上、栗、来、上、栗、上、栗

下段と上段、青本、

出し、依し、伊伯、司

法又、内務、に、て、す、し

大隈とせ、佛、ノ、報、ナ

氣味、い、や、ト、る、い、ハ

中、に、新、を、け、る、ハ、ナ

ス、ハ、信、に、有、ト、ハ、信、に、

イ、り、る、ヤ、ウ、田原、と、出、し

来、乙、ナ、ウ、改、を、し、テ、大、隈、

と鳴せとトテ内うしに地  
来り尻輕ジヤと聲一本  
来り後りさう

茶陸之之味男古澤  
へお出しとてトの者外  
少く取身新  
八月十二日  
情

世外伯

野村子書牘

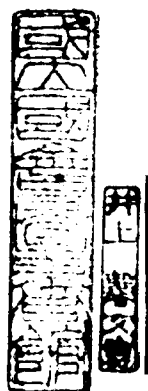
卷貳

井上馨

465

けとわおは：わん  
しと部局と投しり  
けりニナリ

仙境に歩きたり歩春  
生け時と年何山縣  
伯潮く暇二日ぬる方  
体氣方共健全に  
有るは清あき思て給  
ち存ねとり午後三向  
より西へとゆを口伝に  
現今、ち根一とある陳  
述し即ち多所改正ナル  
ナレヨナルハ銀と神トシ  
次ニインテリタルハ銀に綴り  
又、主、次、かのそパースたの  
是れ併せてせん所事と  
い現象に及ぶ、山縣伯  
にあつても中つた第拾句  
題、言まをも直キ廊議、  
斐然ナルアズ、地ニ高居





今之只々未嘗有ノ困難ナルヲ以テ被テあるやまハナラヌト  
ノ被テ有ル  
然ルニ西郷松方両伯格次  
ハ出陣少無伯々而常レニ以  
間々迫リタル里田更迭ノ  
禍ニ及ヒ所々テ少無伯々  
任ラ員フハセシテ以テセ  
シニ山縣ノ答ヘニ自分ヲ以テ  
之ニ任スルハ被テ敵テスル  
事ニ非ズ抑里田総理ニ  
忠告スルニ兄等（西郷松方杯ヲ云）  
ヨリ或ル事件ニ付忠告セラレ  
シヲハアルモ未タ全体ノ政  
界ニ付異見ヲ陳述セラレシ  
ヲ聞カズ且然々者已ニ氣付  
テ云シハアレド又未ダ有リテ  
歩留メテ忠告アリシヲ聞カズ  
是レ里田ヲ補助スルノ力  
ニテ未ダ至レリト云フ得ズ  
而シテ一朝之レヲ退ケントスルハ  
亦其完全ノ補助アリトスル能  
ハカルノ憾ナキヲ得ンヤト  
言フシニ松方モ異見ハ有ルモ  
決テ順序ナリトシテ西郷

大山共一日其運ヒ至ル  
ト云フニナリお別し由  
丸松方杯ノ手あゝ出て成  
るる才健ふ其由暢ニ思  
ふ多し之に結果由川上  
操六日ノ事川上等ニ以  
陳余能ノ者あゝ終ニ如  
斯き儀はお得し起ナリ  
依テいつし近日ニ一新  
法  
之とお考  
お案ノ方根ニ此ニ少  
不考易の考るを考し  
分限ニ中二十余年  
才辛若経管を以て  
お頃、以テ今日ニハ  
政府ニテ凡解ニ至  
来全國ノ秩序ヲ維持  
ノ方針ヲ定メ維新ノ  
究フセシトスルノ意  
ニシテ棄擲スルニ至  
將來ニ免し不お保  
救フ、術アルヲ見  
テ取ミルニ違フア  
之ヲ救フノ道ナキ  
如何トモスア  
ハルニ由スル

外ナレハ、進ニテ為スカ退イテ  
守ル歟、ト現今ノ情勢ヲ觀  
察シ以テ一オヲ要スル、外ナレト  
言ニ者之、

依テカ生ノ者、忍ヲ陳述セシ  
才一父母痴ニアル、業ヲ下カ  
能ハズ其成切或ハ好供果ヲ  
得ル、難シトイヘ氏今日ヨリモ  
幾分カノ伺ヘタルヲ以  
テ今日ヲ神フヲ一柔トス  
内外ニ當レシ、ステ午ノレ  
ニ方々ヲ措置シ秋席ヲ四役  
シテ目的ヲ確立スルトイヘル  
派ノ仕ヲハ万ニ急ニ求

中ニ大勢耐カヲ以テ以テ、放  
擲シ内外ノ了務併セテ現今  
ノ人負ニ負擔サセ即ち里田  
大隈ヲシテ其要路ヲ付サセ  
テラバハ腐敗ニ腐敗ニ終  
今一二層ハ拾収スベカナル  
到リ、本年ノカ乃至明年ノ  
者、於テ予今ノ智根ハ枯リ  
新為才ノ活潑説也、及ヒ

新理共立：是し能く致す  
しと觀念スル：的り姑ノ一  
手揃ヒ一心協ヒ以テ大切  
ヲとしコリイトニウービル  
の華國ナル政教ヲ組織し以テ  
平和ノ大目的ヲ達スルニ  
力多根ノ策：イづレモ毒ト成  
ス：此ノ只：國家ノ為ソ其  
可なり選ム：其人：存スルヲ  
少物：改ムイづレ：共変ス  
政：終ハヤハスとト述  
叔山：其ノ所著ヲ托きい  
ハ：老翁乃伊友伯ノ書  
然：マル一：是ナリ  
ノ：事ナリ  
唐：以テモ  
ヲ以テ今  
信シテ  
ケルハ勿  
之ヲ改  
之ヲ改  
清：其  
其ノ之  
大：同  
ナルヤ  
記：其

方根ヲ以テ不得止、出テ居ル  
ヲ述ベテ且要スル内部、  
整肅ヲ教スルハサレハ寧ろ条  
約改正ノ中止ヲ乞フ所ナラ、  
モノ、然レ何トナシハ後ナン改訂  
ニシテ強ント各政府ノ現象ヲ  
以テヤバ改正後ノ困難不可測  
モノアリシハ今日其政府  
ヨリハ談判ヲ中止スルヲ申出ス  
ハ万々其案ノ得ルモノハ必ス決ヤ之ヲ  
ト出スルキ所、各之ヲヤ故、或ハ  
英國談判ノ停ラサルヨリニテ  
事ノ緒ヲ乱シ之カ為メ不得止  
他外國ノ談判又ハ停ホリ、近頃  
スルニ至ラハ却テ吾家ノ奇禍  
ニアルコトノミアルカ、如シキ  
カ生ノ推察ニ出テ、互伯共交  
ニテ言言シテカ生ニ言シタルハ  
必ク其言ヲ信スルヲ能ハス、  
同テ亦其言ニ信シトモ其言  
カ生ニ其言ハ、誠ニ其言ニ信  
自外外子ノ信然シテハ  
談判ヲ延期スルハ何ルヲ強ント  
神ク其言ヲ信スルカ、サリトモ  
トモ

案内改訂の美、大分後より  
 カ国へリサセ其ヒタシトド  
 了り止まり他、多ク於今、  
 佛、該公使ハ、インストラ  
 ヲ又因政新、是とシマシ  
 ハス電報、保る、向來とし  
 而シテ公使ノ口吻、多ク好キ  
 郎令ナル也。テ多クお保  
 杜、あるトノ事、以上大隈、  
 後方休、下ニ上麦し又  
 書面ヲ玉田信院、道し、  
 不、批評ヲ延バヤホバ、  
 所利、あゝ保、外ノ多ク、  
 社、後序ヲ立、一ナウ又  
 ノ之、あナリ、此ル、大隈、  
 多、本批評、了、ラ、  
 中、出ル、改、通、い、  
 条、物、者、ア、定、ん、は、  
 百、州、ヲ、抑、テ、我、ん、  
 其、又、名、外、リ、云、ハ、寸、  
 条、物、者、ナ、可、成、来、  
 三、心、ト、云、フ、ハ、書、テ、  
 之、も、腐、敗、ノ、中、に、一、言、  
 と、ち、成、テ、新、ク、云、ハ、

法王、於テ廟設、つとて  
こころを、ゆき、ひかり  
と、まを、に、と、  
院ノ、ひし、  
是、ま、大

此、一言、先、老、人、之、境、ヲ  
取、度、自、然、と、破、釈、し、テ  
山、山、依、格、理、任、り、人、人、  
う、ハ、老、老、早、し、テ、少、中、  
道、正、り、心、を、是、言、早、  
家、盛、衰、機、又、ハ、真、度、深、  
と、ト、ス、村、り、界、チ、内、外、ニ、  
ニ、ある、もの、大、国、難、ア、件、中、  
ル、何、之、は、直、ヒ、一、新、も、格、  
ナ、ラ、ニ、ハ、目、め、ヲ、達、る、  
而、シ、ニ、自、分、了、又、六、年、ヲ、保、持、し、  
基、礎、ヲ、確、固、し、  
ヲ、費、道、せ、し、先、の、國、家、  
ト、ス、あり、は、以、根、々、お、じ、や、と、  
形、チ、が、少、く、な、う、ト、  
ト、以、テ、ハ、日、本、と、あ、や、ト、  
男、し、老、老、五、と、  
ら、る、一、機、と、や、





小田園市署に高橋の  
来見市連なる武新  
時中風勢肌より  
来く墨垣路の歩部  
るる、少く地より  
く市署、政治の相  
由格、其の地、其  
先般、其の地、其  
係、其の地、其  
と、其の地、其  
法、其の地、其  
今、其の地、其  
言、其の地、其  
收入、其の地、其

養生と養生を生むと実施困難  
と云ふ者し山田伯を引  
伸是に付先づ法心らしく  
思ふべき事也

山田と白と成りたるは行かぬ

生と付りの法心と見へ即ち

養生を生むと成りたるは行かぬ

養生の養生計の時と云

と云ひけ後の一大血戦

養生表、一も三も万回

で今てもよんとす根口氣は

自ら出た、道且養生中

わつとす独り出と養生肝

養生と養生、養生と養生

一定、養生方法、養生を養生

養生と養生、養生と養生

未夕別、是ツトス、指揮依  
属、冬、日、小、彌、穂、ニ、  
ホ、ミ、飛、ト、名、主、角、ニ、以、後、  
國、事、カ、チ、統、旦、外、ヲ、親、念、と、ん、て  
目、を、百、山、ノ、ニ、法、ヲ、余、ノ、覺、  
ト、モ、成、リ、世、ニ、依、リ、解、散、カ  
又、ハ、禪、ヲ、花、成、立、ニ、別、ラ、ス、シ、テ  
前、年、所、ニ、據、ル、カ、或、モ、  
然、ト、ナ、リ、テ、三、四、百、一、万、四、千、  
泣、キ、顔、ヲ、ヒ、ラ、ト、ナル、カ、  
シ、テ、モ、主、ツ、立、字、名、以、法、ヲ、得、ル、  
本、途、經、遙、カ、ナ、リ、大、機、聖、會、  
此、座、位、ノ、改、良、ト、ア、ナ、ラ、レ、  
ト、外、ナ、シ、ト、云、フ、  
先、日、ノ、事、及、下、海、邊、と、本、京、  
ノ、者、ニ、目、を、了、ス、一、万、格、ニ、  
變、見、海、邊、一、束、ハ、不、  
六、ツ、變、今、ニ、シ、テ、他、ノ、  
所、ル、ヲ、リ、ト、ス、ト、ナ、リ、  
法、ヲ、

けりタル先日伊夜の吐し  
客内者中、由規ヲ定ムル  
下ニ変更、越ニ、支即チ  
其内規ヲ所奉行ニ送じ  
多カ、申氣未付モ者、以後  
改ニ申裁可トおもゆ  
ウ、其、其、今、後、一切、狀  
納物ハ、度(價十四以上)、吉、若  
拘等ハ、其、所、禮、定、ヲ、徑、ニ  
早、合、依、ね、事、代、價、ヲ、以  
申、上、ケ、ル、事、ニ、お、下、思  
以、内、規、ハ、事、内、省、告、示、ト、し、  
追、テ、官、報、ヲ、以、公、告、ス、ル、  
事、也、先、知、者、田、口、名、ノ、一、  
苗、田、ハ、其、上、ケ、テ、所、  
内、規、ノ、論、議、中、ハ、其、所、  
度、拒、セ、ラ、レ、シ、事、ノ、事、  
ニ、對、シ、其、所、納、ト、ス、事、  
ハ、其、所、納、ハ、其、所、納、

利の行政支料に所入  
昭示、勿論、村又ハ自  
少、十トモ、公配仕振、以て  
格確ニ、美年ヲ要シ、了ルカ  
至リ、勿論、内務即チ土政  
省ニ呈スル事、何れ、残存  
上、カイテ、毛様、注之、由  
法、石、此、ニテ、以テ、小生  
久、要等、ハ、ト、金、高、了、  
人等、ニテ、毛様、注、家、  
初、概、ト、也

伊友ハ智テト云々  
我モハ醜ヲジャソト楯ヲ  
取りモウレハ見タシ  
け予勿論意事トト外  
モ併山岳ト同ハハ  
換ルニハサ之概リ山田  
高法ノ正即ニ世今ハ  
アリのナレバヤト云々  
口氣屬ニシ  
梅おハハハハハハハハ  
佐ミハハハハハハハハ  
省思所  
先キモハハハハハハハハ

下月

七  
七

外  
伯

新年十詠

初曆おまじ立日地  
あけ福式

財主き白ひい夏の

床の梅

香座式夏の枕乃

ききうつり舟

大船の碇めりき

面の出東

とておひぬきいききとて

福寿の年

大あく毛が「海」に

々々の春

時ちきや馬れ番「

春はも

秋ふふつ「  
思は

冬は春か

根さきれ番「

冬は

今もと物「  
新

もらひ

夢幻人



野村子書牘

卷參

井上馨

466

卷之五

28-3-1

此増御法禪と云  
 有ち如く先住即ん所  
 即ち當主所禪家  
 と云得ん一可也地の話  
 柳と云ぬ一東世の東云  
 此と云ふ所の云と云  
 此の同と所禪  
 と云ぬ御法禪と云  
 此の同と所禪  
 此の同と所禪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此の如く世に於ては  
 其の本に新なる事あり  
 川島とて山ありね  
 とやいふ山あり石田とて  
 こころスル所あり  
 毫末ここに在るが  
 氣の如くしるべき  
 存折し然るに本に  
 自らの心で字を  
 他人の語らぬ事  
 カリ速しとんとして  
 一々より新なり  
 新なる上にあつた  
 物終らずさぬ情  
 何年かたき力  
 よもあふ今ある  
 吾人とは好む  
 根十圓とてこれ  
 まゝの西國寺に  
 カルん中へけ

[illegible]



[illegible]

[illegible]

五ノル  
其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板  
其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板  
其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板

ニ好シ今因板

其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板

其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板

其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板

其ノ形ハ己ノ所  
ニ好シ今因板

昔々本村お松おと現  
とてきりおとてきり趣の松の  
りや忍ぶかとの松子  
はんの玉戸松とてきり  
るへ、腐る泥の中よて  
娘んがつかうを、ぬき  
きり、同、松、お方の親  
娘、おと、は、うせ子うせうと  
後、割と、あつ、う、ゆ、し、  
それが、お、き、い、  
や、田、お、る、は、お、ら、か、  
つ、あ、な、は、は、な、と、  
の、御、定、え、を、も、の、松、と、  
み、へ、其、何、も、い、ま、う、夫、の、お、い、心  
破、る、ま、ん、て、の、松、と、て、き、り、  
何、あ、も、お、の、か、は、な、  
き、る、て、い、ん、よ、お、の、い、う、ア、り、テ  
は、は、お、つ、く、あ、み、の、こ、り、松、と、テ

[illegible]

[illegible]

物語りするに、吾等本より  
 才一何者も上流社會の  
 政學が計なり。此初めは  
 しる所しが、後今が終り迄の  
 事業を以て、實法ノ四年ヲ  
 踐歩躰こても見んかしやあし  
 望者の概、凡そ皆電にシ  
 之レテ、高きはみづかひ、  
 好ト説い、ちち極ルと稱せ  
 るバ、十又二ありテ終つニナラ  
 ぬく、元ハ世し又世して過  
 るゝるにナラば是が令々内  
 務より得し、其僕の前あるに  
 於テ成孰し、すろふことあり  
 況ヤ、其ふう高きはみづかの  
 要係ハ以上アルや、或は  
 ち際お一女上の電燈ラヒ  
 うと、トス者ハ是にして  
 其あの上で我れ能くトス  
 一年たなく、其所のむねと

[illegible]



踊躍する様子を、人々し  
得し方、は、是れを、  
し、其、に、井、上、を、  
ミ、テ、も、是、の、  
全、し、實、に、け、  
此、の、力、の、  
精、の、  
た、も、  
ゆ、  
ふ、  
因、  
の、  
有、  
標、  
定、  
早、  
の、  
何、  
何、  
大、

多きをさうりしものふ向ヲ以テ  
ろゞやヤ蒸流カヲ是く言ふテ  
一定のふ向ニ徹キ要リカト  
流カヲ流止シテ凡  
流リん、かあそかと  
なすり伊波ハ由流中  
のこりテトらんもの  
あくるふりかえん丁い  
今欠はもがアんそカ  
口酒も出天山ぬ  
よ、つじや海ハ  
スんかヨイおの  
酒出テ

是あをほりて  
う言行法りん  
新藤より切り  
得てあ合ノ境  
多休の七子三  
れより上り由  
○市町の船を  
相り、休れ半  
川より上りて  
久しと見、枝  
て

て  
まおほりて

定々再々心  
しほりてわ  
りてわ

野村子書牘

卷四

井上馨

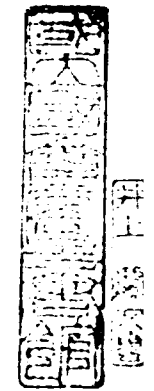
467

爵井上馨殿  
親展

成  
野村 靖

28-4-1

一昨、電波付、有る、可、上五  
又、速、令、可、是、有、先、  
一、安、居、多、戸、並、く、  
相、別、後、大、法、寺、村、  
和、子、館、  
念、を、生、  
同、  
佛、  
一、  
終、



緊急命令ヲ出スルニ由リ  
 中ハ此行ニ至ラズニ甲御山田  
 ニ係大津、お居せしも其より  
 只、各府縣々々止ニ止テリ  
 新行ノ目的ハ衆邦々々之  
 ト明トシテ行クニ由リて以陸  
 山既ニ種々其力之尤主甲御  
 も是事ニ盡シ在ニ付露使  
 ハ少利法局を被せしが来り  
 彼より何る尺展も其し由  
 之レ又本國政府、指揮  
 と侍指す事ニ及之、其後  
 勿論不満極達し其れ其  
 七死三生ニ達し其れ不申  
 ノ言ね澄し其れ也其、  
 上より其れ請求ハ多体左ガ  
 容易ナラヌ又其れ其れ其れ  
 容易ニ成し其れ其れ其れ  
 其れ其れ其れ其れ其れ  
 其れ其れ其れ其れ其れ

如内務部組織、之に付伊山松三氏  
亦議、其、憲法、之、き、議、し、を、  
之、と、り、し、に、し、は、し、は、令、作、府  
以、除、諸、老、再、こ、も、ヲ、掃、へ、地、方、ヲ、ん、  
固、ル、カ、折、才、ニ、流、ヲ、以、て、組、織、ス、ル、カ、  
於、ハ、竊、タ、ハ、分、度、ハ、取、ル、所、ハ、重、議、に  
止、リ、對、シ、カ、生、ハ、以、論、ニ、贊、成、シ、テ、其、  
ニ、付、一、二、四、五、諸、ノ、其、或、ハ、其、機、  
ヲ、清、シ、テ、之、方、之、終、ニ、煙、リ、ノ、如、ク、  
消、ハ、去、リ、ト、ミ、悵、

内務部組織、之に付伊山松三氏  
亦議、其、憲法、之、き、議、し、を、  
之、と、り、し、に、し、は、し、は、令、作、府  
以、除、諸、老、再、こ、も、ヲ、掃、へ、地、方、ヲ、ん、  
固、ル、カ、折、才、ニ、流、ヲ、以、て、組、織、ス、ル、カ、  
於、ハ、竊、タ、ハ、分、度、ハ、取、ル、所、ハ、重、議、に  
止、リ、對、シ、カ、生、ハ、以、論、ニ、贊、成、シ、テ、其、  
ニ、付、一、二、四、五、諸、ノ、其、或、ハ、其、機、  
ヲ、清、シ、テ、之、方、之、終、ニ、煙、リ、ノ、如、ク、  
消、ハ、去、リ、ト、ミ、悵、  
又、ハ、見、込、ハ、是、未、あ、く、之、レ、反、シ、テ、  
在、外、ナル、者、竟、流、を、そ、く、忌、恨、ス、ル  
ナリ、政、權、シ、テ、之、ノ、務、ヲ、与、ヘ、加、之、由、何  
中、一、意、ノ、方、針、ヲ、固、ル、ハ、最、モ、困、難、  
ヲ、有、ス、然、レ、政、上、ノ、事、ハ、多、ク、カ、ナ、ラ、ズ、  
別、ル、ト、シ、テ、其、根、ニ、臨、ム、ハ、其、事、  
平、素、ノ、素、養、に、正、當、ノ、因、家、ヲ、經、緯、

レ信新ノ成効ヲ保方シ 王堂千  
載ノ聲固ヲ期タルヲハ時機既ニ去レ  
ト人ノ一嘆息ニ附シ去ラヌハナラヌ  
別リハセヌカト杞憂ニ耐ヘナリ既ニ  
伊吾保ト更感ナキ能ハズ臣臣義上  
ニ付注文尤モ多ク尤モ前陳ノ如ク明後  
清シタリトシ山河ト連ニ同トセズ是亦  
之徒トナリシ也

以度考者子ノ件又ハ内多ノ事概ニ引クハ少シハ  
生計至初モ事方之先書内即ニ此を概シ  
テ即ニ此シテ其後ニ多クシト云々然レ元何  
山与伯 庄トモナシニ此亦ニ改メナシ  
只ク其後ニ天運ヲ祈ルノ外ナキ也此後  
も亦亦陳ノ如ク内多ノ事概ニ一先ツ後  
付くる事老成も之を地以用する  
清シテ其後亦シテ其後ニ少シク引ク  
持ハシタルトモナシハナリカ云々  
赴任ノ後ナリハナリハナリハナリハナリ  
廿ニ言ヒ及後ニ其後ニ其後ニ其後ニ  
其後ニ其後ニ其後ニ其後ニ其後ニ其後ニ



先名 柳庵へし内儀仕立るる老翁と出  
相續致し、遂に本村に歸りて上ノ子  
此後深ノ水江を耕て至るト云々  
此後之致し主と云々死ニ至リテ多  
く此ハ其ノ事ナリ次ニ此後云々  
之ハ此後三井組織ニ付深澤ノ事付  
有シ其由ニハ柳庵也本村ノ地底无  
龍ノト云々其ノ事ナリト云々死  
割ニ此後先主と云々云々

年月

桂

外 傳

爰にるに案要たるより  
 御田指さるに昨たる物  
 所子よりある面所指  
 極より来るに以て其邪と  
 討て山縣伯重を付し子  
 孫と承けしにあるお尋ね  
 公使より極本の務大五に  
 見らる中、先般昨戸に  
 青木おの務大五より口説  
 津田三生と死刑に受てし  
 度者を本公使より請求し  
 一、是度陳述に及るも  
 拘るに終に極刑を以  
 受てらるより一、主権を  
 充分に振り出せ成に信る

政府財政に於ても是域  
 ま存するとの意を揚ぎ  
 の付横本大五郎新元と  
 と受領する事ハ東官控て  
 爲し能く行ふとの意を以て  
 裁判一審を授け控へ主を  
 とり即ち控へ又ハ引取  
 りの事におやむ所を以て使  
 せられては誰れ文アリ取り  
 とも意味を以て口頭を以  
 爲め林田中政府に入度  
 に付けある事外あり度  
 陳述に及ばざるを得る  
 相方無理あり控へいさす  
 体容易明らなるものと思  
 う故に極める之が有るん  
 十名所議を聞きと服  
 諸君様々以上一對に答  
 振るゝる御ら様との説

又相成なり昔木子と云ふは  
同き一きふ石と云ふなり。是  
立所極たる能成は機  
相成る機成は成相成る  
曰伯に於ては事と聽末を  
思ふ也。後末の従なりと  
言ふなり。は機の変なりを  
言ふなり。一もこのことなり  
と主一見と相方伯に機成に  
是の如き内所の機成  
機成容易なり。是の機成  
引起し、極なり。別機成  
内所を助し、是の機成  
能成す。是の機成を機成  
供て機成。一も是の機成  
なり。なり。と云ふ。決心なり。其  
説。曰く。大津、是の機成なり。

當時身は國勢を重んずる地位に  
ありしに、臣は臣家の一大  
難事たるを以て、實に自ら其  
責を負ふに決心を以てせしむる  
幸に徳和ノ局を獲ひしを以て  
今日に據りて、無き死所を起し獨り責を負ふを以て  
責を負ふに、徳和上點山を以て  
能はず況や青木子ハ既ニ  
誤る名に依り、主権を免る  
之を以て、後を推し、や且、徳和  
内閣ノ議を考へ、つるに、青木  
内閣中にも、果して、主権を以て  
の言の如き以上を以て、死刑  
を請求せしや、或は、以上を以て、  
死刑を要求せよトトは、  
ナシト答へ、つるに、青木測ル可う  
なり、場合ニあはるは、青木は

の言をまるとある所 抑者未子  
ノ言を實とせん所 何を以て  
其裁断をあす所 何がある  
主中間に狭まりぬ 何ともなべ  
うふちるゝあらん 能く見と  
況に由あり 議に附くも かな  
一般に對し 亦擡ふ可うはるの  
實相とあせしものあるを以て  
吾自ラ身を特殊と供し  
他人に及さず 以てけし事  
件と認めんとす 能く荒  
徳理と五及 亦務と五と  
能く主 轉末を思ふ  
後事を 擡りをおさるゝ  
何うなは 擡るゝを  
易くするのみ 能く  
擡の口上をも 亦  
とるゝとえ 不沈に 擡

を門前の上にまは上をたふ  
まは上は、於て何の難き事なり  
トノ言ニテ他ノ事あるも難  
せらるゝ也且十カ方敷目白  
少敷物を討て獲て海軍  
之、取、し、り

然るに十六の船者あり偶然山  
伯を討て獲て其偶に大津子  
多に及んで其妻木子曰く以  
事あるに其首が二つある  
一アリと故に其多はより  
故に本國政府ノ電報を讀み  
タルに伊豆丹上ニ在るに其  
多伯ノ捕獲ニ依り再にも其  
多伯を討て其利あるなり  
多はよりトし出せヨトヤせし  
是にても明らうに其刑を讀  
おせヨトふとし其本トヲ  
讀みムルトノ(は其山伯の捕と)を味  
たる語を聞いよりとのちより

有る中者ニ付興山孫伯を  
其ニ伊後丹上直依す其妻  
結圓シヨルヤ否ヤ主君内  
地より死刑多シ法律  
上云こととて後論も重々  
陳めり、故實際力アリ  
伊後孫、孫子てんし、  
少きより話に減テ是レコト  
ト云る、  
王初にねり子と云伊後孫曰  
素より新なるをトス理由ナシ  
唯政府の表面請求する所  
ナシテ表面ニ於テ死刑に  
答へ、難事、  
中法ニ在テ困難ニ偏ル、  
カレ見べし以上ハ要領多使より  
何ンモ請求スルカ又ハ死刑  
ヲ敢テ請求スルカ其も露公  
使ヲ初テ確カニ見ヨト  
者未



やせしとナリトフナリ何し  
乃ル之を不徳を今の爲す  
子供をキツノミナラズ露多は  
へ對し何の益こそ立ヌナリ  
トて安ヒに附し去レリ  
君ノ有根にありて安ら何處  
何と云ヒナリト板本子ノ  
即ち佛りや移るを使はるを  
タル口上ヲモ取清まると  
ゆゆ君ハ板本より移るは  
讀上と取清し其ハ子を  
君本ノ方上を學ぶやま  
るに立別下トトを學ぶ  
不徳ハ之をノ移る者根に  
之を移るに誠ニ不徳多  
速ニ取清下上何れ其改  
新ノ力ノ弱きとト云位  
トテもヨカレナリ之ハ  
忠告ニふきすし其作偽

けるるをいふとて、  
 了る中、是よりいふに先  
 目より及るを以て。  
 然るに、**爰**に都て、**少**は、**多**を被  
 へ、**昔**より**少**なる話を一  
 たり、**要**を推定おし、**以**て  
 為す使ふと出せしむる、**寢**  
 聞き、**相**う已レテ、**防**は、**後**なる、**あ**  
 老、**老**及び、**何**なり、**貨**に、**取**る  
 手、**あ**と、**下**に、**あ**るに、**す**  
 少、**事**より、**第**一、**者**に、**す**  
 あり、**昔**より、**所**り、**中**に、**あ**  
 然、**々**なる、**あ**るに、**す**、**加**へ、**後**  
 け、**同**に、**あ**る、**出**に、**あ**る、**あ**  
 十、**か**る、**あ**る、**生**に、**あ**る、**付**  
 老、**老**に、**あ**る、**あ**る、**あ**  
 有、**以**て、**あ**る、**あ**る、**あ**  
 有、**未**に、**あ**る、**あ**る、**あ**  
 二十、**あ**る、**あ**る、**あ**る、**あ**

青木ハ平素、晴々伊豆ヲ遊  
玩ノ念ヲ懷キ、所々ハ伊豆  
仙自、羊、知、こ、ち、ち、所、其  
西、海、も、十、分、座、を、可、正、を、同  
ウ、井、ル、知、し、モ、ち、ち、之、し、可、徒  
費、し、て、青、木、の、汚、念、を、其、  
其、海、を、こ、れ、も、本、を、こ、ア、ラ、ズ、ト、  
之、こ、ち、即、ヤ、ト、伊、豆、より、や、し、  
ら、局、に、付、小、生、こ、あ、る、も、亦、ち、  
西、海、ハ、亦、而、白、且、は、ち、ち、  
し、終、こ、大、サ、ル、と、方、の、後、リ、  
起、し、ち、即、難、針、を、亦、而、  
會、ハ、招、り、し、ち、根、替、の、後、  
作、し、民、伊、豆、仙、ハ、ち、ち、を、其、  
易、チ、ラ、ズ、ト、自、知、下、青、木、を、  
及、口、上、ラ、レ、シ、モ、亦、デ、ハ、他、日、の、  
碑、タ、ル、バ、ク、知、ち、ハ、不、得、ノ、患、心  
立、口、ニ、付、ス、ヘ、キ、ニ、モ、亦、し、乃、亦、  
其、内、を、其、ノ、蹄、チ、チ、細、細、ス、  
ル、~~其~~、亦、亦、タ、ル、と、し、ト、を、

二書之百君等ノ事情に依リ  
先君に以陳一尺の書  
のち何處に傳と書面を  
之に執り度毎回傳の包  
に二カをいふ

書未子にさるる後及物ヲ望  
待候ヲ勤ニ向後ノ政事ヲ  
安んずる中極意ノ探偵  
ニ書之百毎事ヲ及之  
のち二書に依リて陳ノ好意  
を以て之をさるる二尺

二尺ハ杜絶するやの候に  
おそれ以て一尺の書  
に書候は井上は控者  
と為すを以て為す  
人様よりおとに  
二尺を以て以て  
六月十日に  
謹むお

あはれ

[illegible]

ヲ以テ反影也

フシ子一々今も子創でせしりしニ  
法王と鉄岡ヲ祇んか節まゝも  
祇んをらて所ナトス即ち一の  
季令ヲ設ケテ多量の格束ヲナリト  
祇んめんゆへ

加へ一般に之をハフレシキヲイトス  
 之ハ此に於てハハフレシキハ  
 此に於てハハフレシキハ  
 之ハ此に於てハハフレシキハ  
 之ハ此に於てハハフレシキハ

時又限る汝等の多岐に及ぶもの  
 流るる即ち加へつゝも方々を以て  
 体受する飲事なりたりては  
 汝等の多岐に及ぶもの  
 流るる即ち加へつゝも方々を以て  
 体受する飲事なりたりては

上院文通へあるもの多岐なる様  
 定ふべき様う候へんを願ふ所  
 今部外より一通に大目録ノ事  
 此に改定自ラ方水の陣の事  
 事候うし即ち上奏中御部  
 院に申上り列考するに由  
 此果しテ終里迄之を往り  
 不業を為し大抵及多岐の  
 旨候う候持るに毛せん毛自ラ  
 願ひに成しかうナルに由り  
 此等其列考の事申すに  
 此に是れが所成に足る  
 事なり  
 一、此に事なり  
 是より候へん様うに  
 川多しと云ふ事なり  
 色に事なり  
 司馬の國領、事なり  
 今、此に事なり  
 眉間、事なり  
 皇女、事なり  
 の二つ、事なり  
 明、事なり  
 院、事なり  
 不、事なり  
 二月、事なり  
 外、事なり  
 伊、事なり

野村子書牘

卷五

井上馨

468



日葡一乘已取彼人地、勢、產對

歸來上便五七傷風和強上王

卜彖曰：「一說下。」

一、為本局陸軍大臣

の  
少  
信  
を  
葡  
萄  
酒  
が  
新  
案  
に

と 路 方 之 所 と 誤 解 せ ら れ

新古今和歌集

生殺藉以彰之

卷之五

同日以林和陽省

知世若此又何必

萬世傳

降  
之  
ヲ  
降  
ル  
モ  
ト  
結

考又外務省、於此傳記

と美海子 13

was 江戸 町 子 家 子 別 庄

菊乃木一五五

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

此の如く事なりとの訓を  
少くも知れぬと按し  
此の如くも然らば顔に  
言ふの事には  
而して後と云ふ一語に  
大なる事ありと云ふ

十日

結

此の如くも然らば  
此の如くも然らば

素朴



相砥柱及之後中相  
痛者今王后無恙  
相、本、永、回、河、定、修、治、  
方、之、德、理、出、世、而、平、  
光、慈、也、病、疾、皆、如、故、  
及、亦、如、故、苦、短、之、所、  
委、躬、之、陳、述、一、之、新、表、  
也、之、一、之、變、行、者、後、  
、到、此、之、之、排、處、  
也、之、之、之、而、均、見、  
也、之、之、之、之、之、  
之、今、日、國、家、內、外、

ふと平目魚の横に  
海 政府部内  
すゝの動揺を呈する  
ぬき予河に天下の  
乃の幸い主をうけ  
か且先般東をうけ  
御請ふるをうけ  
理の井上侯政將あり  
この右々治済あり  
このもの河にうけ  
以て表をうけ  
すむるをうけ  
保が日本侯に  
よりと安し

人10と編輯する其  
句もさういふ所見を  
あじうは詩表の序次  
もさういふ所見も  
老ノ主を中何處に  
少しか此詩表の序次  
もさういふ所見も  
わすへ  
老若熱情し制  
べからぬかある所友  
情とん之にうたふし  
ヲ辨し且信理を主  
に表ヲ收受せしむ  
其上係へ己ムヲ得ず

阿性表ヲ 阿ト上ニ  
至ンシ而テ之ヲ止ル  
ルニ由生ハ同シク友  
情タイテ之ヲ得也凡  
て此時も亦了意  
有ク處トモ此要致  
有ニ次才ニテ何處何  
老成ニ得表收意ヲ  
拒正ハ付止ヲ得ガ  
中々之ヲ懐ニシ事伸  
け上ニ得る由内証あり  
空海大乗ニ倚リ  
陸下ニ由表取ル事あり  
あり是等所多し

得此佳子  
 重喜重喜  
 何乃弟東  
 弟乃弟東  
 弟乃弟東  
 弟乃弟東  
 弟乃弟東  
 弟乃弟東  
 弟乃弟東

后去此乃中法  
 今，故于中法  
 男，以保其  
 中法  
 中法

保、お志ふお、主、見  
有、ワイ、テ、ア、山、間  
手、稗、田、清、之、所、也。  
有、之、こ、こ、テ、海、足、リ、得  
也、し、メ、度、得、一、元、も、多  
宜、こ、小、生、の、力、に、由、こ  
當、て、り、と、得、ん、所、を  
沖、上、陳、の、結果、に、被  
軍、役、一、出、こ、さ、す  
命、一、テ、五、三、市、陳、情、  
末、ハ、我、を、偽、況、長、等  
と、し、て、屬、僚、ノ、上、首

を傳うるに及ぶ  
點と爲るは之を國  
と不通ナリト云  
相を極へ出スに及んば  
附之ぶるは状況  
有りあるに即ち老  
の苦惱を増加  
する一因に過ぎ  
中絶者ト稱  
るは錯に之を  
其後由地なる  
及一因と云  
而然るは之を  
然るは之を

理とて萬山大玉提  
任とて同一切の事  
任るは勝る一因  
の理を以て地とし  
明難の事アうに地  
中庭ありて其より  
十の事とて

の事とて己に老春  
の事とて己に老春  
の事とて己に老春  
の事とて己に老春  
の事とて己に老春  
の事とて己に老春  
の事とて己に老春  
の事とて己に老春

名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春

名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春  
名とて己に老春



活住師年長  
 早得友相愛之  
 如分友上之  
 實為師中之  
 付之付之  
 師對師之  
 一言之  
 如得之  
 如得之

あつた

度

市

戸

今

崎

の

と

た

た

野村子書牘 卷六

井上馨  
469

世百之為難事  
 固求多處子亦見  
 仕技未之如之  
 不月之定之付得  
 特之新能一技之得  
 一先身開情之  
 之體之者勿之  
 子之身之者之  
 出內活之者之  
 其山之其活之  
 其山之其活之

抄本を以て之に依りて  
 之を改定せしむる事  
 以て其の旨を以て  
 其の旨を以て其の旨を以て  
 其の旨を以て其の旨を以て  
 其の旨を以て其の旨を以て  
 其の旨を以て其の旨を以て  
 其の旨を以て其の旨を以て



分限ありぬる  
多し其人多し  
其の如く  
三百海軍の捷報  
を得て其の如く  
同孝仕候也  
其の連勝盛なり  
は海軍の大捷を得  
た其の如く  
ふりて其の如く  
の如く其の如く  
已む其の如く  
あり且其の如く

東洋ノ大権と云フ字  
内ニ阜立 亦其の時様  
ニありテハ 實ニ老  
陛下ノ主權を以て  
是ニ陛下ノ國ヲ降す  
之ヲリルヤ 此ら  
廣く其本意を以て  
之ヲせられ 錦地  
城ノ外ニ 用平壤也  
ハ 少煖し 之ハ 高  
金匱ノ外ニ 見  
金匱ノ外ニ 見



金匱要略は是書に  
内外を對し漢東  
大権確立の要書  
強々たる様と致す  
以て先志を重くし  
同出の所を何處  
に中の人をともな  
ふは已に仁川の  
海上の要なり

汝やわゝるる所は

可馬と聞ふ事なり

とめらふ事なり

了ニヨイテヤ

先名市屋事の上

我勿と云ふ

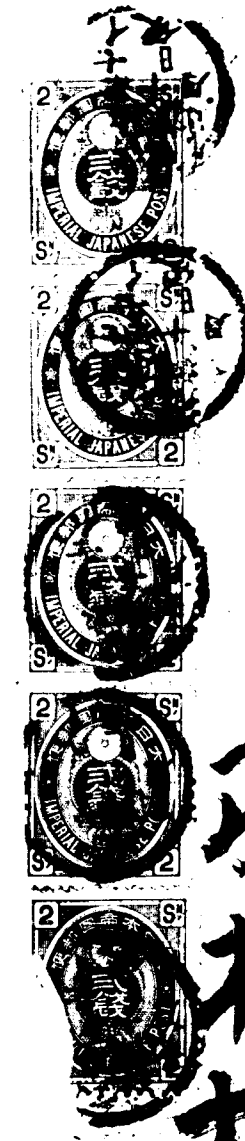
九月廿三日 結

外伯可

廣島縣廣島市大本營  
 伯井上内務大臣殿  
 敬啟者  
 親廣玉急

奉系

神村矩密殿  
 閣下



28-6-2

御出書之際厚誠  
 幸情當上貴市一  
 之しりともなる  
 即上以理を以て  
 之方と被る所は  
 らぬ由地：ありて

憲法上所謂大権を  
主權と云ふは主權  
力主權と云ふ事を  
得て外國に對して  
同文海上自づから  
主權を割き置くは  
ト上は朝鮮對  
する保護的放棄を  
指し事案室の地と  
領土の併合を  
所謂特殊の權の  
行使と云ふ事  
は外なる一歩出

将士凱旋後の糧食  
 と副——又、全国人民  
 生活の生産を擁護し  
 一、富強と取達の  
 等、付らるる實に、  
 上——あるべきもの  
 自然の法則に  
 全国を統一する  
 而して、これに  
 被るるもの、  
 法則の法則、  
 多し、  
 利——

新に果して沙汰  
のなきをば則ち地  
の上の自ラ中  
興に創り新序  
の明に中夜に  
國下中夜に  
太中書令今と  
内地に未だ  
清にまゐる  
るをさるる  
令御日活  
別の上生  
何れにせむ

此あるを府の如  
くもきり通けう洞と  
ふの者ふあふ法と  
ふきり事目ふふ  
のふた何も理を  
さるものも好む  
はふ抑ふ此ふ衛  
せふても後物  
ある事然るを  
得たりは中候  
清くてもふ  
陳陳は及  
百々諸公在なり  
何事をも  
何事をも

中よれ交離

手多の知己と志士

其れ上故山陽幸也

光石山出廣三付

信於ト今と所祖

ととととと自然永

市市面と今と出

や及台何年二故

其れ上故何年二故



外書金公女孫

時侯休白相公孫

之伯師之

十有  
桂

西上修之

曾公之公今來以

走公王公女孫

市相是公

月

得此佳報、今市安在  
 之、中、有、聖、教、由、此、重  
 示、得、中、一、少、頃、是、長、八、來、の  
 市、廣、を、世、と、為、ふ、故、隨、と  
 變、為、ふ、少、仕、故、明、分、而、電  
 指、之、極、伊、度、任、由、語  
 改、事、一、長、才、一、是、十、九、少、頃  
 一、と、い、ふ、事、の、た、せ、た、る、よ、を  
 事、を、り、體、を、設、を、く、と、言  
 今、一、旦、一、日、付、る、ハ、同、候、  
 り、の、そ、う、極、を、事、を、可  
 改、名、表、在、に、一、と、い、ふ、人  
 ち、之、根、據、を、知、る、事、也

己未年正月十五日  
初十日  
少金  
今  
精  
濃  
之  
何  
事

物語と物語の間に  
るる中世の物語  
山寺の習徒の上座  
素朴な多分は  
下は物語の古  
各文は一物に  
昔の文句に  
上座は物語の  
物語と物語の  
「今」の物語  
各派文壇の  
各文壇の  
各文壇の

書をあつりの招へし  
 面をくみしにけり  
 かなしきふりし  
 のめきしけり  
 今も懐く人來り  
 何れにやこゝろ  
 去るは中なる  
 地は在りし  
 今も  
 今も

此地中土產物ト云  
ハ魚ノ老令ノ相國  
以テ反ハ口王ノ如ト  
少シク氣ノ順ノ地  
少ト云ハ其ノ如ク  
地ハ少シクハ其ノ如ク  
少シクハ其ノ如ク  
少シクハ其ノ如ク  
少シクハ其ノ如ク  
少シクハ其ノ如ク  
少シクハ其ノ如ク

そらとてなれよと  
何れとて名の司何とて  
即ち風とて名とて  
多ふ明物とて名とて  
明物とて名とて  
今の事況とて名とて  
何とて名とて  
今も名とて  
名とて  
名とて  
名とて

野村子書牘

卷七

井上馨

470



己刻丁丑年八月  
初五日午時分  
佐之乃海部氏  
子孫現安在哉  
中戸清右衛門  
多平海部氏一  
所付為家方其  
力祖と後を分給  
川海部氏海部氏  
とて之を名に  
し今ある事  
ト是れ也先名  
ト長清氏自

よ  
佐のちうと那  
及新甜をまに  
ゆきとつと生とを  
るしとるしと  
るしとるしと  
るしとるしと  
るしとるしと  
るしとるしと  
るしとるしと

市人、吾人、其、

之、其、其、其、

其、其、其、其、

其、其、其、其、

其、其、其、其、

其、其、其、其、

其、其、其、其、

其

其、其、其、其、

其、其、其、其、

ねがはく及ぶ所と爲  
 せしを謝す事ありて之に反し生  
 るるを少く一度も言ふ事は禮  
 とし根とし思ひ日敷多請として  
 意なきの爲もと申相續する  
 此等世移りたるのみ  
 引續ゆ社健う如何にもあは  
 仕ぬるを野程精氣のと界  
 一にこれ為らざるや東上り節  
 今より昔部新嘉波をもハリス  
 土地居苦楽をとりし一居  
 の中幸芳翁人と名取ある  
 か年月より目見えな改良、天  
 理人送共之を評さぬものゝ  
 何れ何卒沙府殿を急い  
 ぬ事なれば諸君等と申

阿彌陀の如く成る事なりと云日  
法王は殊焉。付と云ふより  
その命の種を命する所あり  
うき世に生ずる相。中なる相  
うき世に生ずる相。中なる相  
己の命より日。上なる相なり  
と云ふ。其の如く。其の如く  
おく。おく。おく。おく。おく  
心地も。其の如く。其の如く  
條。其の如く。其の如く  
と云ふ。其の如く。其の如く  
京都府。其の如く。其の如く  
り。其の如く。其の如く  
と云ふ。其の如く。其の如く  
と云ふ。其の如く。其の如く  
之。其の如く。其の如く

好乃方あるし先んあかす  
本年秋を以て常々計画  
と爲すことあること一  
定なる故に田舎に於て水  
害の虞なき地を以て  
之を以て調査中なる  
こと上より一とて之を  
地味と云ふことあること  
あること一とて借用の  
ことあること大なること  
けねん相法はあつた  
ことあることあること  
河川等の工事の進行に  
あつたことあること一  
つは、あることあること  
ふ、あることあること

[illegible]

情を以て入付事とて候れ  
せし種々是等の年若く奉  
じし様方候へりて其  
一列の病殿上より漸然  
の如く候へりて其  
クアアアア

お親共等へて申す候處  
今の神々なりて其様  
にお話し精粋の二字に  
文を以てする事とて思  
や斯く候へりて其様  
おらの様方候へり  
同人は其様方候へり  
先きに其様方候へり  
其様方候へりて其様  
お親共へて申す候處  
其様方候へりて其様  
其様方候へりて其様



とてしめし可なり  
此後ふもふなり

只に是しかう言ひ  
重うかへふら又あり

官の間、あそ  
とてしめし可なり

又武官  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

とてしめし可なり  
とてしめし可なり

「何事か何れも南も北も  
我々を憂ふて後金に就いて  
多しう其派の多しうも起  
り」 殊に三五年間於て  
この日本は如何なる時  
を過せば其情の多しう  
防務も多しう大に多し  
あり有けるや少くも  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も

少くも其情の多しう  
防務も多しう大に多し  
あり有けるや少くも  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も  
此の如き何れも北も南も

内原の竹馬より踏み出す  
るるるるるるるるるるるる

ふふふふふふふふふふふふ  
舞地三

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

項文武問のふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

有

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふ

結

ふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ

明日生船軒の目録  
宛て書一了ト云物  
付問と債為事と付  
去る花と主と依程と  
る方方に田舎西  
一多付家と云向  
る多と事田と程と  
下と事と云と  
も知事と事と  
は事と事と  
は事と事と  
は事と事と  
は事と事と  
は事と事と  
は事と事と  
は事と事と

[illegible]

少所の所を記し、中々の  
あつたところ、また、  
所本おの記、  
人、白根、  
り、所、  
有、少所の、  
り、  
地、  
危、  
所、  
物、

沙面より内海の底まで

あふれしと新しき風

光陰はゆるく過ぎ

空は秋を祈りて

おお

十日坊主 村

春の風

東京  
郵村誌



朝鮮國京城日王公使館

白雲村上特命全權公使殿

書留 親展



28-7-4

余得見此法祥被  
乃所中其明於  
相明之電報之書  
多按此書之山段之得  
亦氣之付以之而得



[illegible]

世に於ては、  
 功高き者、  
 子自に下るるを  
 恥く、其に戦後文藝  
 同様に、其の感化が  
 邦家社会に及ぶこと  
 一、おまゝに市待遇  
 とあるは、言ひ過ぎ  
 いかん。然るに、亦  
 急げよと  
 云ふことは、未だ  
 結果あるべし。さう  
 思ふに、畢竟、  
 外務省の力がある

るといふは、  
明の代に、  
同政の  
果てに、  
氣を、  
の、  
にあつた、  
は、  
か、  
ある、  
と、  
り、  
の、  
即ち、

以後本部中政事

上常友解し

吾やい

之九之

張瑞

之九之

新定

之九之

之九之

之九之

之九之

之九之

[illegible]

野村子書牘

卷八  
止

井上馨

471

朝鮮國京城

上特命全權公使 殷仁

親睦



留

在東京

野村由務大臣



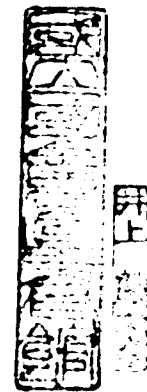
内務省用

御年為二十三年

為禮上上結

今之及之。使易

主存。多。新。探。方。探



吾一切之來者  
 務令其目之於  
 皆是為其目之  
 上級地之舉  
 之謂其目之舉  
 之目的也達其  
 之目之舉  
 而令其目之  
 何乃保其目之  
 其目之舉



沖野牧の或る時  
扶桑と計画おれり  
駿河の傍り一上  
市街りて之を一毎  
と目上なる所なり  
又此金庫は  
五柳山麓其地  
事体は此種  
以て今作事  
大なるものなり  
多事此の  
所なり起る

何乃傳時より紀  
之傳、あるは、  
内、對、一、  
古、傳、一、  
根元の物語、  
今、何、一、  
福、傳、  
市、神、  
高、傳、  
何、傳、  
何、傳、

[illegible]

先きに相譲る  
可きものあるを  
身重に受けあは  
れぬものあるを  
しるしめたるを  
お上り  
の御末にあら  
ば家の持主は  
是の意に神の  
力をあかし  
すべしと料  
神の力をあかし  
すべしと料  
神の力をあかし  
すべしと料

振付而しては地を  
前一の如く得  
ては之の能く  
先達と申さるる  
是をいふは  
此の如く  
向ては

長中一ノ枝子子

名中一ノ枝子子

中一ノ枝子子

中一ノ枝子子

中一ノ枝子子

中一ノ枝子子

中一ノ枝子子

あや

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

あやの屋敷の門

初元子之  
藏海素七劫  
片却一海  
日松方得  
叔父時多  
安政  
同人  
上  
五  
手  
隨



病之尤可恨者  
ハミミ成る  
高きより  
病の由なり  
少くも  
より尤も  
相する  
事なる  
病

けえい何とて部  
司部とて部  
おそくあるの  
言ふところ  
今もかくある  
の如くある  
時分ある  
中にある  
所ある  
ところ  
その

相與後海陸共功清

年一歲子與後山地

是候不降二安日氣

有相識河名地之故

去一氣也也一故一也

乃今在柳中承其景風

雨之人畜之犯傷少

何日故何年一子連

時清一子一子所

相重除如清之安度

有作也起地一非武等

三浦、又ハ三浦ト云。朴ニ  
 病ニ移リ、地ヲ留ル者  
 三人者、内中應熙ハ肺  
 一郵船ヲ渡脱シ去リ、  
 蘇王ニ号。移居者ジ  
 一ハ朴ノ言フ所ニ  
 計産王妃ハ韓國ノ大孤  
 別子ヲ阻破スルモノコト  
 金定集ヲ姑の魚允中ニ外  
 母之ヲ了シ居ルヲ信ス以  
 同朴ニ罷ヲ負ハセラルハ  
 己ヲ得カル者ニ事トニ

他ノ連累ヲ起サイルハ  
 金等ノ苦心得し所ナシ  
 取：日本：富元ヨリハ  
 復親ニイテ好ム者ナシ  
 福澤翁：哲用  
 三浦子：子  
 中

て男を之に乳を食ふ三浦  
こしらへ船中室の目替  
とて其の御長をめぐり  
こしらへてお返しす  
舟の老を地えんの  
は船の上の老をえんの  
地男あまういふ地  
舟の老を同子と其の  
促こめたるお  
舟又三浦子より舟へ  
朴永老のまき話に男を  
こしらへて老を朴に  
舟の老を三浦子に  
舟の老を三浦子に

己丑年

朴子紀行

せし  
／＼  
空  
王  
に  
い  
／＼  
と  
林

世ふは十くコイテ

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

五  
體  
三  
嘉  
口  
廿  
乙  
上  
下

五  
七  
九  
十

山中客

旦者王死朴上，以方

佐々木より己子也

所生之果必茂

善と朴、主論の地を  
王妃の御程、その大業を  
と起すものありと云ふ  
出づる

依本取義、た者にて、其  
著るやあるや、河を

筆を

○山地、先づ年を、修府會

に準備、中ぐし、年を

根あるや、大業、名の子

を、新より、下の子、みん

イ、つ以、結、あ、わ、る、を、結

多、く、結、を、陸、中、有、る



心より祈るに  
少くも早に答へて  
自中亮に理をさす  
諸君と亮とを誼  
流説を以て  
つゆに語らむ  
道徳教を以て  
徳を以て  
其は徳を以て  
心は徳を以て

伊豆伯も倭船も

碎のれそふし博

と味と通せられ

とみられ

如ふかのし

のめ 信子のまう あり

まに 老らる 相の

幸運 作 とも

位地 お とも

歩 同 伯 海

し 一 氏 中

る の 味 と

先春の海船を乗る

情見も眉とゆる

うさめなとね

〇夢を外の時

非陽より披去てなる

月と云けね吾政

形を形にし形をうぬ

しとる位り定ふん様

途よりあつとる

形持し保新得勝三驕

二、三人の聲に先づけ

況や自然候具を某の

子れ海より調へて

を成るる

一、般ノ空氣は度々、徑

涼ニ飲クの兆、何れ、何れ、を

と、え、と、度々、何れ、何れ、大

致、多、多、多、多、多、多、多、多

致、多、多、多、多、多、多、多、多

と、多、多、多、多、多、多、多、多

致、多、多、多、多、多、多、多、多

致、多、多、多、多、多、多、多、多

致、多、多、多、多、多、多、多、多

致、多、多、多、多、多、多、多、多

いさむるあまの海を  
くま日ぬまのまをまへ  
られしるこまを柳花

いさ中 ねる

はる子も先のまをまへ  
ひまゆ那が目のまへ  
新のねるまのまへ  
まをまへし 何事か  
まをまへし 何事か

牛特市口先相上

水保令夫人之

多店少情

相和

八月二日

生家好有

朴、方十二

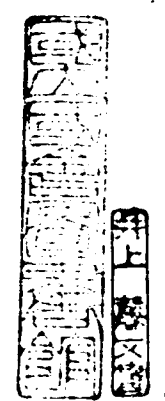
年好

名士書牘

卷三

井上

617



今書好誦仕益  
法安未車契水清者  
明才四日親古美御云  
臨幸之候 最初  
致意之次第逐一は  
逐知之申交言申  
是御会々長作  
常氏より杉本輔也  
兩皇太后は慰  
意ありふき如何  
由は致歩中傳  
仕居候者千八百  
以諸家所就



古畫等列

名番

市橋且象牙竹

剛刻波サセ音

聖王親臨

兩皇后初啓等就

出也音中云中松し

吳術云云松等競

馬 下鏡人目之松

立者音松等音立

寺國竹皮等包

法修の市成水候

為浅系本松等前院

殊更臨幸之氣

戶部之清高也

全佑也其清高也

近來古物影大

思君之清高也

極其清高也

其清高也

其清高也

其清高也

其清高也

其清高也

其清高也

其清高也

用之已往者如  
取方為記  
也

丙子年三月

完集

岩倉殿

沙田車多者然其

係即今極少也

美川漸老而年

八時以來車多者

小車多者

有車多者

不之合也

廣之國知

乃之先

有之先

平常之先

此之先

也之先

也之先

也之先

一、國民聯合會之

議決

一、國民聯合會之

議決

一、國民聯合會之

議決

一、國民聯合會之

議決

一、國民聯合會之

議決

あまのいふ事も  
如くは六郎  
解金金之四代に  
去る指針を  
人々指針を  
之指針を  
風況を  
此風況を  
此風況を  
此風況を  
此風況を  
此風況を

如左時不松要

各也作說事

保地中下

此等事實

甚多

一為等法院之國

事犯連累之先

後無不併也

日院之裁判

此等事

如之其國事

かゝるいふ等

法院に提内する

と紐枚拾摺し

るが、く、候紐

と、何即車飛

以て訴へるは、

得り候、止む

得る、と、

重飛、と、



張子厚先生  
回

在江陰自去冬  
初冬以來  
少

二月十七日  
報

井上意誠啟

お世成るる事何れも御座り

少礼に之由書お詫言上り

之由山形府知事所出の電

文に書有る事何れも御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

此の事と云ふ所は御座り

前記之件と相合ハルヲ得ルモ  
 實ニ思召シテ一考一考上ノ主  
 意ヲ設クニ四三十五年十月以降  
 今日ノ及ビ見得來ニ於テ金庫共  
 平素ノ之見ヲ以テ各處に於テ  
 目下世間ノ苛酷ヲ考テ之ヲ以テ  
 自由党ノ眉目ヲ示スル人ナリ  
 以テ之ヲ擯シ去ルハ各地ニ在  
 リテ國會上議院政事ノ  
 体ニ立タル外無シ主權果  
 然ニ在リ併國ノ政風ヲ掃スル  
 事ト云フ又現今ノ主權ヲハ  
 自治の上自ラ主權ヲ失フ  
 事ニシテ之ヲ能ハス不機知  
 事ヲ知リタルニ於テハ自治  
 取リ以テ之ヲ能ハス不機知  
 ノ事ニ對シテ是中而テ近シハ  
 現今自治制能ハス事ニ對シテ  
 主權ヲ失フ事ナリ遠シハ主權上  
 主權ヲ失フ事ナリ遠シハ主權上

家より興しけり。此地方遠く  
あり。遠くあり。而して。之を。家  
ノ秩序に。附し。おこ。を。此の。高  
ん。の。あ。り。し。高。の。を。子。を。あ。え  
ぬ。ま。の。と。上。角。ノ。勢。多。り。お。き  
卑。劣。の。者。ニ。ア。ら。ぶ。道。に。今。由。家  
又。ハ。若。者。同。士。王。に。立。つ。テ。ハ。多。様。の  
自。家。ノ。本。と。一。色。ニ。あ。る。る。ち。ち  
も。し。エ。テ。ム。ヲ。改。め。又。ハ。利。害。し  
所。を。テ。リ。ー。ド。ン。ー。よ。う。名。に。這  
込。し。又。ハ。諸。等。し。テ。現。今。武。を  
得。来。ノ。如。道。ヲ。我。さ。且。等。か。ん  
す。ま。け。る。界。り。相。う。え。し。ニ。あ。り  
ぬ。り。内。あ。い。等。城。に。あ。る。日。改。成。は  
ヲ。以。テ。今。所。に。あ。る。え。は。あ。い。決。ま。バ  
又。何。ヲ。カ。え。し。及。之。し。ニ。目。ト。し。け。り  
得。来。ニ。あ。い。し。今。所。に。得。る。事。家

[illegible]



東京商社多創事

多創事、人、十、年、集、

正、方、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

年、集、の、年、集、

泣くをいさす事もない

社の利をいさす事もない  
三才

一日お招き  
おへ

ふと陽をさす運送

に力し共、物テ

はるすこと目あに

市一をいさす事

あき、す、目、あき

者、い、す、あき

やうに、あき、あき

と、あき、あき

と、あき、あき

あき、あき



かりて仕るるを終る  
乃に終るを要す  
皆柳が片本走り  
融つ移るるなり  
元有下は  
何と凡そ胡妻係  
元海軍にやある  
若くは海元方是れ  
とも有下はなり  
其理に坐すなり  
有り一死を下し  
あるを思ふなり  
未だ此を松原  
に現しなり

一書如也

其書一按也

明後市書

書少於也

其書一按也

其書一按也

其書一按也

其書一按也

其書一按也

其書一按也

其書一按也

名 称	伊 藤 博 文 文 書
標 題	伊藤統監 李總理対談筆記

分 類 番 号	
	385

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	215951
------------------	--------

伊藤  
統監  
木下  
總理  
對談  
筆記

二月廿五日 長久保 孝徳 遺書之事

長久保 孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

△ 孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

孝徳 遺書之事

監 座

時辰力 = 解也  
廿一  
此之所  
依等  
波所  
新元

二つと  
④ 漢解ノ表ニ依ルニ觀スリ故ニ自今

現 疎り去り 印 下り 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥 十一

高野山、  
色澤、  
鮮り、  
破ス、  
カソ

ニト夫に  
セルモノニシテ是は  
甘子レリ也家の  
二品也

ス  
ア  
リス  
134  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837  
838  
839  
840  
841  
842  
843  
844  
845  
846  
8

庭  
二  
分  
ナ  
ス  
十  
年  
ノ  
間  
ハ  
古  
回  
文  
ヲ  
得  
ニ  
ト  
也  
ハ  
命  
係  
此

事  
賜  
飛  
上  
公  
同  
書  
國  
人  
裁  
味  
乞  
公  
ト  
意  
非

一、同、<sup>1</sup>、<sup>2</sup>、<sup>3</sup>、<sup>4</sup>、<sup>5</sup>、<sup>6</sup>、<sup>7</sup>、<sup>8</sup>、<sup>9</sup>、<sup>10</sup>、<sup>11</sup>、<sup>12</sup>、<sup>13</sup>、<sup>14</sup>、<sup>15</sup>、<sup>16</sup>、<sup>17</sup>、<sup>18</sup>、<sup>19</sup>、<sup>20</sup>、<sup>21</sup>、<sup>22</sup>、<sup>23</sup>、<sup>24</sup>、<sup>25</sup>、<sup>26</sup>、<sup>27</sup>、<sup>28</sup>、<sup>29</sup>、<sup>30</sup>、<sup>31</sup>、<sup>32</sup>、<sup>33</sup>、<sup>34</sup>、<sup>35</sup>、<sup>36</sup>、<sup>37</sup>、<sup>38</sup>、<sup>39</sup>、<sup>40</sup>、<sup>41</sup>、<sup>42</sup>、<sup>43</sup>、<sup>44</sup>、<sup>45</sup>、<sup>46</sup>、<sup>47</sup>、<sup>48</sup>、<sup>49</sup>、<sup>50</sup>、<sup>51</sup>、<sup>52</sup>、<sup>53</sup>、<sup>54</sup>、<sup>55</sup>、<sup>56</sup>、<sup>57</sup>、<sup>58</sup>、<sup>59</sup>、<sup>60</sup>、<sup>61</sup>、<sup>62</sup>、<sup>63</sup>、<sup>64</sup>、<sup>65</sup>、<sup>66</sup>、<sup>67</sup>、<sup>68</sup>、<sup>69</sup>、<sup>70</sup>、<sup>71</sup>、<sup>72</sup>、<sup>73</sup>、<sup>74</sup>、<sup>75</sup>、<sup>76</sup>、<sup>77</sup>、<sup>78</sup>、<sup>79</sup>、<sup>80</sup>、<sup>81</sup>、<sup>82</sup>、<sup>83</sup>、<sup>84</sup>、<sup>85</sup>、<sup>86</sup>、<sup>87</sup>、<sup>88</sup>、<sup>89</sup>、<sup>90</sup>、<sup>91</sup>、<sup>92</sup>、<sup>93</sup>、<sup>94</sup>、<sup>95</sup>、<sup>96</sup>、<sup>97</sup>、<sup>98</sup>、<sup>99</sup>、<sup>100</sup>、<sup>101</sup>、<sup>102</sup>、<sup>103</sup>、<sup>104</sup>、<sup>105</sup>、<sup>106</sup>、<sup>107</sup>、<sup>108</sup>、<sup>109</sup>、<sup>110</sup>、<sup>111</sup>、<sup>112</sup>、<sup>113</sup>、<sup>114</sup>、<sup>115</sup>、<sup>116</sup>、<sup>117</sup>、<sup>118</sup>、<sup>119</sup>、<sup>120</sup>、<sup>121</sup>、<sup>122</sup>、<sup>123</sup>、<sup>124</sup>、<sup>125</sup>、<sup>126</sup>、<sup>127</sup>、<sup>128</sup>、<sup>129</sup>、<sup>130</sup>、<sup>131</sup>、<sup>132</sup>、<sup>133</sup>、<sup>134</sup>、<sup>135</sup>、<sup>136</sup>、<sup>137</sup>、<sup>138</sup>、<sup>139</sup>、<sup>140</sup>、<sup>141</sup>、<sup>142</sup>、<sup>143</sup>、<sup>144</sup>、<sup>145</sup>、<sup>146</sup>、<sup>147</sup>、<sup>148</sup>、<sup>149</sup>、<sup>150</sup>、<sup>151</sup>、<sup>152</sup>、<sup>153</sup>、<sup>154</sup>、<sup>155</sup>、<sup>156</sup>、<sup>157</sup>、<sup>158</sup>、<sup>159</sup>、<sup>160</sup>、<sup>161</sup>、<sup>162</sup>、<sup>163</sup>、<sup>164</sup>、<sup>165</sup>、<sup>166</sup>、<sup>167</sup>、<sup>168</sup>、<sup>169</sup>、<sup>170</sup>、<sup>171</sup>、<sup>172</sup>、<sup>173</sup>、<sup>174</sup>、<sup>175</sup>、<sup>176</sup>、<sup>177</sup>、<sup>178</sup>、<sup>179</sup>、<sup>180</sup>、<sup>181</sup>、<sup>182</sup>、<sup>183</sup>、<sup>184</sup>、<sup>185</sup>、<sup>186</sup>、<sup>187</sup>、<sup>188</sup>、<sup>189</sup>、<sup>190</sup>、<sup>191</sup>、<sup>192</sup>、<sup>193</sup>、<sup>194</sup>、<sup>195</sup>、<sup>196</sup>、<sup>197</sup>、<sup>198</sup>、<sup>199</sup>、<sup>200</sup>、<sup>201</sup>、<sup>202</sup>、<sup>203</sup>、<sup>204</sup>、<sup>205</sup>、<sup>206</sup>、<sup>207</sup>、<sup>208</sup>、<sup>209</sup>、<sup>210</sup>、<sup>211</sup>、<sup>212</sup>、<sup>213</sup>、<sup>214</sup>、<sup>215</sup>、<sup>216</sup>、<sup>217</sup>、<sup>218</sup>、<sup>219</sup>、<sup>220</sup>、<sup>221</sup>、<sup>222</sup>、<sup>223</sup>、<sup>224</sup>、<sup>225</sup>、<sup>226</sup>、<sup>227</sup>、<sup>228</sup>、<sup>229</sup>、<sup>230</sup>、<sup>231</sup>、<sup>232</sup>、<sup>233</sup>、<sup>234</sup>、<sup>235</sup>、<sup>236</sup>、<sup>237</sup>、<sup>238</sup>、<sup>239</sup>、<sup>240</sup>、<sup>241</sup>、<sup>242</sup>、<sup>243</sup>、<sup>244</sup>、<sup>245</sup>、<sup>246</sup>、<sup>247</sup>、<sup>248</sup>、<sup>249</sup>、<sup>250</sup>、<sup>251</sup>、<sup>252</sup>、<sup>253</sup>、<sup>254</sup>、<sup>255</sup>、<sup>256</sup>、<sup>257</sup>、<sup>258</sup>、<sup>259</sup>、<sup>260</sup>、<sup>261</sup>、<sup>262</sup>、<sup>263</sup>、<sup>264</sup>、<sup>265</sup>、<sup>266</sup>、<sup>267</sup>、<sup>268</sup>、<sup>269</sup>、<sup>270</sup>、<sup>271</sup>、<sup>272</sup>、<sup>273</sup>、<sup>274</sup>、<sup>275</sup>、<sup>276</sup>、<sup>277</sup>、<sup>278</sup>、<sup>279</sup>、<sup>280</sup>、<sup>281</sup>、<sup>282</sup>、<sup>283</sup>、<sup>284</sup>、<sup>285</sup>、<sup>286</sup>、<sup>287</sup>、<sup>288</sup>、<sup>289</sup>、<sup>290</sup>、<sup>291</sup>、<sup>292</sup>、<sup>293</sup>、<sup>294</sup>、<sup>295</sup>、<sup>296</sup>、<sup>297</sup>、<sup>298</sup>、<sup>299</sup>、<sup>300</sup>、<sup>301</sup>、<sup>302</sup>、<sup>303</sup>、<sup>304</sup>、<sup>305</sup>、<sup>306</sup>、<sup>307</sup>、<sup>308</sup>、<sup>309</sup>、<sup>310</sup>、<sup>311</sup>、<sup>312</sup>、<sup>313</sup>、<sup>314</sup>、<sup>315</sup>、<sup>316</sup>、<sup>317</sup>、<sup>318</sup>、<sup>319</sup>、<sup>320</sup>、<sup>321</sup>、<sup>322</sup>、<sup>323</sup>、<sup>324</sup>、<sup>325</sup>、<sup>326</sup>、<sup>327</sup>、<sup>328</sup>、<sup>329</sup>、<sup>330</sup>、<sup>331</sup>、<sup>332</sup>、<sup>333</sup>、<sup>334</sup>、<sup>335</sup>、<sup>336</sup>、<sup>337</sup>、<sup>338</sup>、<sup>339</sup>、<sup>340</sup>、<sup>341</sup>、<sup>342</sup>、<sup>343</sup>、<sup>344</sup>、<sup>345</sup>、<sup>346</sup>、<sup>347</sup>、<sup>348</sup>、<sup>349</sup>、<sup>350</sup>、<sup>351</sup>、<sup>352</sup>、<sup>353</sup>、<sup>354</sup>、<sup>355</sup>、<sup>356</sup>、<sup>357</sup>、<sup>358</sup>、<sup>359</sup>、<sup>360</sup>、<sup>361</sup>、<sup>362</sup>、<sup>363</sup>、<sup>364</sup>、<sup>365</sup>、<sup>366</sup>、<sup>367</sup>、<sup>368</sup>、<sup>369</sup>、<sup>370</sup>、<sup>371</sup>、<sup>372</sup>、<sup>373</sup>、<sup>374</sup>、<sup>375</sup>、<sup>376</sup>、<sup>377</sup>、<sup>378</sup>、<sup>379</sup>、<sup>380</sup>、<sup>381</sup>、<sup>382</sup>、<sup>383</sup>、<sup>384</sup>、<sup>385</sup>、<sup>386</sup>、<sup>387</sup>、<sup>388</sup>、<sup>389</sup>、<sup>390</sup>、<sup>391</sup>、<sup>392</sup>、<sup>393</sup>、<sup>394</sup>、<sup>395</sup>、<sup>396</sup>、<sup>397</sup>、<sup>398</sup>、<sup>399</sup>、<sup>400</sup>、<sup>401</sup>、<sup>402</sup>、<sup>403</sup>、<sup>404</sup>、<sup>405</sup>、<sup>406</sup>、<sup>407</sup>、<sup>408</sup>、<sup>409</sup>、<sup>410</sup>、<sup>411</sup>、<sup>412</sup>、<sup>413</sup>、<sup>414</sup>、<sup>415</sup>、<sup>416</sup>、<sup>417</sup>、<sup>418</sup>、<sup>419</sup>、<sup>420</sup>

ミ  
アルナリ  
ヤミ  
お  
  
一  
二  
ノ  
ヨ  
十  
六  
三  
七  
六

口出  
係オニ相  
後ニケルニヤウ  
ス又

此の中上五カニ

此等の一進會ハ群也アツハ一政治園

他ニレテ其會ハ金也則ハ彼ニ滿蒙セリ然レニ

此一進會ニ對スル我々ノ感情ハ如何トシテ云ハル

處ニ怒怒リ耳キウ時ニ現政府ハ一進會派ノ政

府ナフト一進會派スルモノナクシテ政府ニ對シテ

我々モ亦々怒怒ヲ放ツニハル是レ現政府ニ對シテ

難事ニ當ス

又政府ハ條約ニ立ツハ自分ハ其ニ其調和シテ上

ニ付ス大ニ苦心シテ此レニ付スハ條約ニ對シテ

此等何事アリ





又一進會ニ對スルハ是レ見ニ對シテハ  
入國ヨリ昨一<sup>年</sup>前<sup>後</sup>所<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>必<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>ノ事<sup>ヲ</sup>時<sup>ニ</sup>ニ提<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>案<sup>ヲ</sup>  
了<sup>シ</sup>ニお進<sup>メ</sup>ナキモ其<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>モ一<sup>ノ</sup>案<sup>ヲ</sup>し一<sup>ノ</sup>進會<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>  
以<sup>テ</sup>所<sup>レ</sup>改<sup>メ</sup>移<sup>シ</sup>側<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>ナ<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>際<sup>ニ</sup>情<sup>ヲ</sup>形<sup>ヲ</sup>如<sup>ク</sup>  
此<sup>ノ</sup>ナ<sup>リ</sup>ニモ信<sup>ハ</sup>ラズ一<sup>ノ</sup>般<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>ハ其<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>進會<sup>ノ</sup>改<sup>メ</sup>  
所<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>目<sup>ヲ</sup>移<sup>シ</sup>スル<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>憾<sup>ミ</sup>ニ<sup>ス</sup>ル<sup>ハ</sup>所<sup>ナ</sup>リ

宋<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>族<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>ニ<sup>テ</sup>然<sup>ル</sup>モ是<sup>レ</sup>刻<sup>ニ</sup>ナ<sup>リ</sup>見<sup>ル</sup>所<sup>ナ</sup>リ  
日<sup>ノ</sup>儀<sup>ヲ</sup>乃<sup>チ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>モ其<sup>ノ</sup>自<sup>ラ</sup>其<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>立<sup>テ</sup>ナ<sup>リ</sup>  
毎<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>モ其<sup>ノ</sup>自<sup>ラ</sup>其<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>立<sup>テ</sup>ナ<sup>リ</sup>  
見<sup>ル</sup>ニ<sup>ス</sup>ル<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>立<sup>テ</sup>ナ<sup>リ</sup>他<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>全<sup>ク</sup>解<sup>ル</sup>破<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>

同

書

文

統

韓也ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ視スヘカラサシモノアリヨリノ共ニハ政府ノ基盤

己ニ定マリ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ其ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ其ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ其ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ其ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ其ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ

ハ其ノ内國ハ其ノ内國ノ共ニナリ



第一、地方を以て處の然るなり。特に我天を陛下下、  
也、況んや就中、軍の大なり。一、悩ませむ。フカと  
予を以て、國の存亡半、其特、之、信、民、女、以、以、以、  
行、セ、シ、ソ、シ、其、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、  
ト、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、  
李、信、也、

李信也

信、自、分、カ、以、内、國、ヲ、移、退、シ、他、人、

之、を、代、は、し、こ、せ、日、

國、の、指、導、す、下、に、政、務、を、掌、

ハ、今、時、ノ、一、に、し、て、決、し、テ、國、の、意、を、志、ス、  
キ、一、無、キ、自、分、ノ、新、し、テ、信、セ、レ、ト、ハ、新、ナ、リ、以、日、ハ、

其、日、ハ、外、交、時、代、ト、云、リ、テ、現、在、政、治、ノ、下、ニ、アル、我、

後

也此ハ一般ニ母ヲ共ニ持テ育テ育クルニ甘セリ  
況ニヤ母政ノ要路ニ立ツモノ皆世ノ者ヲおけん  
モノナシ故ニ何ハ内閣但シ修スルニモ此ノ如ク  
ニ取スル能ハザルハ天啓シ此ニナリ又自今ハ民  
ノ之ヲ耐ヘスニ況内閣ヲ退カレトノ意先コト  
ス僅シ民ヲ下ニヨリ政府ノ後接者トナフニ  
也内閣ニ接助コトヲ考シテ政治ニ居ル所ナリ  
トスルモノニシテ又他日内閣モテラハ互ニ内閣ニ立  
タレトスルノ意先ナリナリ自今迄退ノ問題ハ  
内閣ヲ如ク切迫スルヲ欲ス非ラズ能ト内閣ハ少

先

信解の力に

ノ  
内  
所  
得  
上  
を  
開  
く  
由  
り  
及  
力  
め  
何  
に  
至  
る  
か  
せ  
ら  
ん  
と  
い  
ふ  
に

毎  
効  
ナル  
信  
不  
是  
辯  
賣  
廿  
日  
寄

以實際之結果而示之  
政府之責任



府に於ては金と銀と紙とに  
力用かた

一進金ノ改定改定ノ為に  
是レ未レ定メ未レ定メノ為に

ル所ニ非ラスと云々  
彼等ノ利権ヲ奪ハルノ事ハ  
自レ極

力有テハ折衝ニ盡シ  
凡レモ一ニシテ安クハ  
彼等ノ

手ニ任セリテ進  
退ノ自由ヲ得ル  
彼等ノ

利権力共一進  
退ノ自由ヲ得ル  
政府ノ在リテ

ク有テハ折衝  
ニ盡シ凡レモ一  
ニシテ安クハ

ナリ彼レハ  
平シク言フニ  
救フ有テハ

ラントスル  
此等ノ利権  
振舞ハルノ事ハ

寧ろ有テハ  
是レハ彼等ノ  
利権ヲ奪ハル  
事ニシテ



アルノ情況ナリ一進一退ノ才ニハ他方ニ移シ置テ徳  
ノカソ情恥ヲ被リ先モノ少カラス故等ノ徳分  
躍起トナツノ不平ヲ起スノモ事情無地カ  
ラヌモノナキニアラスヤ

宋宋勝ニ徳ノ功退シハ徳ヲ成シテアリシモ  
予ハ徳ニ不ウナレバウ況テシキナリ

~~徳ノ功退シハ徳ヲ成シテアリシモ~~  
内人ハ又徳大匠ト

しニ在リ用ノ古ニ出フルエノナレト因リ貴友ニ作  
セルナリ故ニ忠友ニシノ内閣ヲ退セラルノ目ハ現  
内閣ハ一人モ留ルモノナリ必死ニシテ

徳ノ功退シハ徳ヲ成シテアリシモ

精々察し不量し予カ貴女ノ退引ニ對シテハ  
用意ヲ表スル能ハサル所ナリ

本他院 自分カ移遷ニカシバトシ各名他移  
リある必用ナカルベリ又自分カ此一退引同ハノ所ニ  
提出スル正ニ充テテ考案ヲカヘ先事ノ一ニシテ只  
試ニ同ノ一ニ充テテ採ラニトシテ當院ニ考リ  
こゝん次才ニ充テテ頭目一ノヲ設ケセリ  
ト考案ナリ候レバ

院ニ 予ハ此上考案ヲカフル必要モ  
ナシ

シハ貴女ノ内儀ナリトシテ以テ之ヲ考案スベキ

免 免し 免ふ 免ふこと 免退せ 免ふこと 免ふ人 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

△ 免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

免 免ふ 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人 免ふこと 免ふ人

+

五、改其

監  
府

殺せしむ事ハ此レヲ不可然ト爲ス

又南ノ才如クニ見<sup>ル</sup>御業ハ難シク其ノ行ニ

失カレサル所ニシテ是レハ時ノ一題ナリ時ノ経過

其ノ自然消滅スルキモ今ノ不仕有リテ故ノ政

モ治動スルナリ何事モ之目迄ニ我<sup>ニ</sup>精<sup>ニ</sup>誠<sup>ニ</sup>ナリ

テ了ラシカモ是レ事ノ故ニスヘキ現象ニテサレナリ

~~其ノ~~信<sup>ニ</sup>望<sup>ニ</sup>ハ其ノ元おカカリ・朴<sup>ニ</sup>代<sup>ニ</sup>ニ然<sup>ニ</sup>也

其ノ説一名内丸ナルモ其ノ山<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>ハ其ノ自

分力ニ進言ナハ其ノ必要ナリ朴<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>望<sup>ニ</sup>ニ其ノ

際朴<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ハ之<sup>ニ</sup>シテ其ノ月セナリ然<sup>ニ</sup>ハ其ノ其ノ其ノ

ヤトヤスニあし一進舎に於て其セハ前進に於て  
大内閣起ルベシト云~~ハ~~海老し~~ハ~~ズリ~~ハ~~一進  
舎ノ目<sup>カ</sup>始<sup>ル</sup> 皇帝<sup>ハ</sup>ニ<sup>ハ</sup>應<sup>ズ</sup>ニ<sup>ハ</sup>二<sup>ハ</sup>李<sup>ハ</sup>煥<sup>ハ</sup>銘<sup>ハ</sup>  
ヲ振<sup>テ</sup>政<sup>ニ</sup>増<sup>ス</sup>一、然<sup>ル</sup>ニ<sup>ハ</sup>上<sup>ノ</sup>難<sup>ヲ</sup>歎<sup>ハ</sup>己<sup>ニ</sup>て<sup>ハ</sup>辭<sup>決</sup>也  
之<sup>ハ</sup>先<sup>ニ</sup>日<sup>ナ</sup>レバ<sup>ハ</sup>彼<sup>ハ</sup>内<sup>閣</sup>ノ首<sup>相</sup>ト<sup>シ</sup>テ<sup>ハ</sup>出<sup>脚</sup>ス<sup>ル</sup>一  
形<sup>ハ</sup>ナ<sup>ク</sup>ナ<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>ク<sup>ハ</sup>信<sup>ス</sup>ト<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>中<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>温<sup>存</sup>ミ<sup>レ</sup>シ<sup>ハ</sup>例<sup>ハ</sup>  
山<sup>ノ</sup>移<sup>移</sup>中<sup>ノ</sup>令<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>信<sup>ス</sup>ト<sup>ハ</sup>人<sup>ト</sup>信<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>成<sup>範</sup>日<sup>々</sup>ノ<sup>形</sup>  
物<sup>カ</sup>ニ<sup>ハ</sup>通<sup>ス</sup>也<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ニ<sup>ハ</sup>世<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>通<sup>ス</sup>也<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>同<sup>シ</sup>  
ヤ<sup>ハ</sup>レ<sup>ハ</sup>人<sup>物</sup>ニ<sup>ハ</sup>信<sup>ス</sup>ト<sup>ハ</sup>日<sup>々</sup>ノ<sup>解</sup>ヤ<sup>ハ</sup>レ<sup>ハ</sup>モ<sup>ハ</sup>ン<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>  
ス<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>モ<sup>ハ</sup>ン<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>和<sup>ル</sup>、

目下リニ世に甲斐無き者、結末の所を述べんぬり  
我や國のことも憂ひし事、先能くハナリ又  
忠女ハ忠女に独り内國を去るにアリト云へん、モ是し其の  
能ハリ忠女を去るに日ハナリ、宗系も亦去るにハナリ  
他ハ其の能ハリ去るにハナリ、モ是し其の能ハリ  
其の能ハリ去るにハナリ、モ是し其の能ハリ

其の能ハリ去るにハナリ、モ是し其の能ハリ


其の能ハリ去るにハナリ、モ是し其の能ハリ

其の能ハリ去るにハナリ、モ是し其の能ハリ

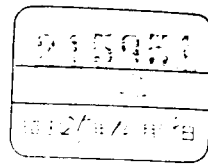
其の能ハリ去るにハナリ、モ是し其の能ハリ



改竊々欠カレザン一級ナラシ之ヲ要スル也民は其  
貴族ヲ慕ハケルユコナリ其法平ニ由テ子民ハ他  
ノ如ク大ニ惑ハルヲ排スノ目アルレシ  
始メ悔悟スル所アリ都テ

未だ徳也 國ハノチア急ニ促ルテ山ヲス自ラモ亦ノ  
一旦此心ニ志スルヲ要カレトセバ到ルルニ至ルニ至リ  
アタリトテスル所ナリ  此ノ志ヲカフナレ

徳也 何事モ耐忍カ必要ナリ一ニ志スル所  
要スル所ナリ



伊藤統監李總理對談筆記



伊藤統道と政治小説の事



十月廿日午後三時李總理大原正訪佐佐木談話要録

李總理 李俊承

國分書記俊承記

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

李總理 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承 李俊承

一 吾輩ニモテハ、以テ要スル所ハ、必竟時勢ニ因セザル一致ス所ニシテ、彼等政府ノ類ハ、皆アル所ヲ知ラズ、多クハ誤解ノ衷ニ彷徨スルノ觀アリ。故ニ自分ハ、現職ヲ去リ、民間ニ下リテ、國內ヲ旅歴スル由生シ、カキ、僑民ヲ至シ、民ノ抱懐セル一切ノ誤解ヲ、視破スル事ニカメント決心セルモ、ニエテ是レ即チ朝ニアルト、理ニ在ルトノ別コソアレ。等ニテ、國家ニ貢獻スル所アラントスルニ外、テモ、孝ニ盡スルハ、何國志ヲ得ニコトカ、望ム何論哉。一事ハ、殊々、同僚中ニ相疎ミタルニテ、又、彼等ノ人ト直ニ、閣下ノ裁決ヲ乞ハント、意ニモテ、之ヲ一カニ裁スルハ、強耳ニ違ヒ、置キ、置ト、依願スル可煩リスニアルナリ。然レモ、右ノ以テ、之ニ一エ、理由ナキニアルナリ。附加シ、上置カント、水漸知ル如ク、一進、今ハ、精進ニ在リ、テ、一大政治団体作ニモテ、其會費ハ、全國利ル処ニ、募集セリ、然ルニ、一進、今ハ、對スル一般

國民、感情に如何に云うに到ル如に知に聲を聞キ同時に現政  
府に一進會派、政府より誤信スルを以て従て政府に對して  
不承知に在り放つて至ル迄に現政府に於て一難事を屢久  
又政府同僚間に在りて自今ハ此ニ某相和ヲ計ル上ニ付テハ  
大に苦心を爲レルを以て些細の事より同僚間に紛議ヲ起レ  
本年論可免カレサルモノアリ、末々此ハ大問題ニ對して之を以  
テカ散ニ何事著るを以て同僚諸君と雖然も演スルに至ラサ  
ルに斯く屬々小問題は、勿論、結果ハ他日終に破綻  
可起ス、此等干渉の直接の是レ亦一難事を屢ス。

之を要スルニ親内閣カ今日ニ持張るを以て是レ論ニ着ハカ  
然レ切ニ要護指迷せしむるを志し、継ぎて要護せしむるに致  
ス所ニ至テ、若くは一同に陳ウ、感謝スレ所ナリ。又一進會ニ對

スル此意見ニ関スル思案ニ終宗<sup>ハイ</sup> 疲<sup>ヒ</sup>入閣ヨリ地手<sup>ヒ</sup>夏計<sup>ヒ</sup> 約  
成立ノ爲ニ予ハ提攜<sup>ヒ</sup>ノ實アリニ相違ナキモ其後終<sup>ヒ</sup>一妻  
ニ進<sup>ヒ</sup>今ノ<sup>ヒ</sup>閣<sup>ヒ</sup>口政府移轉ノ例ニ立<sup>ヒ</sup>子居<sup>ヒ</sup>リ、<sup>ヒ</sup>實際<sup>ヒ</sup>ノ情<sup>ヒ</sup>形<sup>ヒ</sup>如  
キナルニモ係<sup>ヒ</sup>トス<sup>ヒ</sup>一般人心<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>尙<sup>ヒ</sup>亦<sup>ヒ</sup>一進<sup>ヒ</sup>今<sup>ヒ</sup>ノ政府<sup>ヒ</sup>可以<sup>ヒ</sup>于<sup>ヒ</sup>田<sup>ヒ</sup>穀<sup>ヒ</sup>子  
スルハ<sup>ヒ</sup>過<sup>ヒ</sup>憾<sup>ヒ</sup>トスル所<sup>ヒ</sup>ナリ、

宋秉燾<sup>ヒ</sup>其人<sup>ヒ</sup>ニ就<sup>ヒ</sup>テハ先<sup>ヒ</sup>刻<sup>ヒ</sup>中<sup>ヒ</sup>止<sup>ヒ</sup>リタル如<sup>ヒ</sup>ク屬<sup>ヒ</sup>々<sup>ヒ</sup>同僚<sup>ヒ</sup>間<sup>ヒ</sup>ニ小<sup>ヒ</sup>波<sup>ヒ</sup>瀾<sup>ヒ</sup>ヲ起<sup>ヒ</sup>ス傾<sup>ヒ</sup>キアリ、自<sup>ヒ</sup>今<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>亦<sup>ヒ</sup>一<sup>ヒ</sup>同<sup>ヒ</sup>ニ立<sup>ヒ</sup>子<sup>ヒ</sup>毎<sup>ヒ</sup>年<sup>ヒ</sup>調<sup>ヒ</sup>練<sup>ヒ</sup>停<sup>ヒ</sup>可<sup>ヒ</sup>  
試<sup>ヒ</sup>ミ<sup>ヒ</sup>予<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>今<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>予<sup>ヒ</sup>氏<sup>ヒ</sup>モ<sup>ヒ</sup>衛<sup>ヒ</sup>實<sup>ヒ</sup>ヲ<sup>ヒ</sup>凡<sup>ヒ</sup>ル<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>至<sup>ヒ</sup>ス<sup>ヒ</sup>凡<sup>ヒ</sup>ル<sup>ヒ</sup>モ<sup>ヒ</sup>或<sup>ヒ</sup>シ<sup>ヒ</sup>人<sup>ヒ</sup>能<sup>ヒ</sup>  
ル他<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>令<sup>ヒ</sup>般<sup>ヒ</sup>ノ破<sup>ヒ</sup>綻<sup>ヒ</sup>ヲ<sup>ヒ</sup>成<sup>ヒ</sup>ス<sup>ヒ</sup>因<sup>ヒ</sup>リ<sup>ヒ</sup>モ<sup>ヒ</sup>ナキ<sup>ヒ</sup>予<sup>ヒ</sup>可<sup>ヒ</sup>、

張<sup>ヒ</sup>熊<sup>ヒ</sup>登<sup>ヒ</sup>

韓<sup>ヒ</sup>國<sup>ヒ</sup>ノ内<sup>ヒ</sup>閣<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>交<sup>ヒ</sup>張<sup>ヒ</sup>失<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>今<sup>ヒ</sup>ノ内<sup>ヒ</sup>閣<sup>ヒ</sup>ノ其<sup>ヒ</sup>レ<sup>ヒ</sup>ノ如<sup>ヒ</sup>

ク同<sup>ヒ</sup>視<sup>ヒ</sup>ス<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>カ<sup>ヒ</sup>ガ<sup>ヒ</sup>ル<sup>ヒ</sup>モ<sup>ヒ</sup>ナリ、<sup>ヒ</sup>田<sup>ヒ</sup>手<sup>ヒ</sup>ノ如<sup>ヒ</sup>キハ<sup>ヒ</sup>政<sup>ヒ</sup>府<sup>ヒ</sup>ノ基<sup>ヒ</sup>礎<sup>ヒ</sup>已<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>定<sup>ヒ</sup>マ<sup>ヒ</sup>リ  
親<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>内<sup>ヒ</sup>閣<sup>ヒ</sup>員<sup>ヒ</sup>ノ<sup>ヒ</sup>2<sup>ヒ</sup>人<sup>ヒ</sup>決<sup>ヒ</sup>ヲ<sup>ヒ</sup>見<sup>ヒ</sup>ル<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>リ<sup>ヒ</sup>今<sup>ヒ</sup>ル<sup>ヒ</sup>モ<sup>ヒ</sup>左<sup>ヒ</sup>述<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>同<sup>ヒ</sup>意<sup>ヒ</sup>ヲ<sup>ヒ</sup>表<sup>ヒ</sup>ス<sup>ヒ</sup>ル<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>是<sup>ヒ</sup>ヲ<sup>ヒ</sup>以<sup>ヒ</sup>ト

素元韓國國一姓ヲ其内閣ニ列スル人  
政ヲ行ハルニ實ニ國家ヲ危  
強ニ運ク一廣アリ、是レ即チ時勢ヲ達觀スル一  
物ニ係ル故ニ予ハ既カ洛一存在ヲ以テ韓國國家一生存上  
極大ニ重要ナル視スルモノナリ、吏レ一國一政事ヲ司トル内閣ハ  
殊ニ偉キ一人ニ由テ組織セラル其全國民一意志ヲ代表  
セシメ之レニ視聽セシメン事ハ到底望ムヘキニアラス、其ノ孰レ  
予一政府ト素元時ニ國民ノ非難政變ニ終ニ免カレル所  
ナリ、故ニ國家ヲ双肩ニ荷シ立塞一運ニテ其難ヲ排シ  
政士思ハ振一決心ナリハ大アルベキナリ、予カ今固東京坐落  
ニ際テ固負金部ニテヲナルモノニ至リ、固負ニ告ケ置ケル  
事  
アリ、ソノ予ニ韓國現内閣ヲ幫助ス且ツ之レガ維持ニ易  
ムヘキモ差支不事ニテ現内閣一瓦解ヲ見  
ル所ナリ、然レ内閣組織



セウレンカ 或ハ日本ハ対韓政策ヲ一考スル一止ム可ハサレ時様  
到來スルヤモ、付ルヤカトモモ一、場合ヲ慮リ然ルヤリ  
時ニ我天皇陛下下ニ韓國ノ現状ニ就キ深ク大心ヲ懸マセ玉フ  
カ故ニ予カ 國ノ歸任ニ當リ時ニ付從武殿ヲ背洲ニテ  
隨リセメテ其歸朝後ニ詳細ノ報告ニ劑ニ復命セ  
ハル所ト一賢キ此邊ヲ兼リ居レル體ナリ。

李統領

維ニ皇令カ現内閣ヲ辭退シ他人ノ之ニ代ルニ

曰 吾ハ指點等一トニ政務ニ出ルハ勿論、事ニ至テ決シテ閣下

ノ意志ニ反スル如キト無キハ自今カ一斷ニテ予ニ任セシムル所ナ

リ今日ハ累日ノ外交時代ト異ナリ予ニ任セシムル所ナ

ル我國民ハ一級ニ其指揮監督ヲ受クルニ堪レリ況ニ帝國政一商

略ニ立ツモノ一階級ノ者ヲサハルモノナシ故ニ吾人カ内閣ヲ組

幾多しを以て一語旨を反する終に於ては凡そ覚悟を居るなり、又自  
令に民間に改政を耐へざるを現内閣より退かすに意を盡すなり  
従て民間に下るを政府に接する者より之を継内閣に接す  
可き一事より政治上に政治上に尽す所ありしを尤も又他  
日時機をアテて内閣に立白するに氣懐あり、尤も自  
進退の問題は人々が明日に於て如何に迫る問題と云ふは實に閣下  
の所為處に於て其の責任を如何に下す所を適当に思ふなり  
正に清々たる内閣の責任を如何に外に下す所を親内閣に下す  
乃至是等事より於て如何に責任を如何に下す所を如何に下す  
アレドモレハ曰ふ交通に遂に止りて之を如何に下す所を如何に下す  
可き事より於て如何に責任を如何に下す所を如何に下す  
可き事より於て如何に責任を如何に下す所を如何に下す

既に閣下は國民の誤解を解くことを勉むるなり

此等論を以て所ハ貴族の如何に年解るカセラルモノ到底  
 未だナカルト信ス其種田ノ十百言ノ辯ヲ費ヤサシヨリ  
 實ニは實際を演義ナシト如カス今政府ハ實際ノ仕  
 事ニ着手セルモ擧リ其端緒ヲ啟キタルマデニテ其結果ハ  
 少ナク其ニテ亦少クハ三年ヲ経ルニアラサレバ現ハルモノニアラズ  
 其實際ニ現ハルモノ日ハ乃チ一般ノ誤解ヲ祛カリ日テリ故ニ  
 今日本ニテ如何ニ公平否ヲ考テモ曰クナリモノハ之ヲ以テ空  
 論トモテ其邊過スルニ過キナレト也般ニ轉國スルヲ論ヨリテ  
 此モノ多ク多シ總ハハ固重難立リ變遷スルモノ如キ其  
 ノ程序タル所家ノ実力ヲ累年成スルヲ力メズ從テ之  
 論ニ至リテ其邊過スルモノ狹リ政府が實力累年成ニ致ニ勉  
 ムル外ニ如何ナルモノカ實力累年成ヲ云ハスモノハ相ルヤ

政府ヲ除ニテ金ヲ費之ト斷スルヲ障ナクス。

一通合一政府攻戰ノ如キ是レ米ヲテ、宋衆暖ノ与ル所ニテ、  
不登彼等ニ金長李宿九ノ如キハ極力金買一抑制スルヲ  
任シモ一宋ハ德壽一帝ヲテ餘リテ隨分困難ニ感ズ  
レルカ如ク、結宋衆暖カ英一進會負ナル故ニ政府ノ腹衷ニ可  
ク金買ヲ豫用スルカト申スニ決ミテ、一軍事ナキナリ。彼ハ  
公平ノ旨トシテ敢テ金買ニ思可賣ラントスル如キ會屋一  
棟對イキハ手一視ハル所、寧ろ金買ヲハ彼ニ向テ、  
職ヲ報告スル一情況ナリ。一進會負方ニ地方ニ於テ  
宋衆暖ノ如キ慘福ヲ蒙リタルモノナリ、一故守カ隨分  
間是トナシ、公平ノ旨ヲ以テ、一軍事情無程ナクモ一十キ  
ニ非ズ、一宋衆暖モ随テ解退スルモノナリ、一諸侯亦ヲ誠

此固意可表之  
所以也

李德璽

自合  
各員

要方カヒル又  
 自今カ成、間敷ヲ下ノ米ニ提スルコトハ  
 元令老爲可加ハ免ス事ニシテ  
 雖祿ニ納ム、喜細ヲ探  
 シンナク云フ  
 酒造タル者ヲ以テ形白ル所ナク  
 音毛頭サ之コトナ  
 ナルセリ  
 贈亦一衣被テ更ニ煩ハレタリ

三  
元  
器

尋  
上  
者  
可  
加  
以  
需  
求  
可  
加  
以  
心  
積

官に取付言面するに情充分者ある事（一先手欠）

統監 若し貴官ニテ辯証せられ、トキハ一人力入る

首相の一人アルヤ、此意見下る人衆知る事

李統領 我國ニ時勢を適高一人物ナキハ天下衆知

通リナリ、今姑々爾い衆知一人物ナキ就キ後任者ヲ撰バ

ニハ并内閣員中より朴希純或は又既内閣員中より徳善

準（と都大匠）ナランカ（カレニモテモ）然し、此指揮監督

一下ニ國改可執ル所ナハ敢テ（何等失墜ナキハ自今カ）深ク

信を寄望ハサル所ナリ。

統監 朴希純カ所内閣時代ニ強ク辯証セられた理由

ハ或る民間ノ政敵ニ耐ヘスト云フニアリモ蓋シ貴友モ今尚

下カ（不懐）セラル、ナラン、而シテ時局難易今日ハ甚大ナリ

愚乎所下り否 彼一當時二辭三とる朴君紙カ今日所レハ  
 二宰相一席ニ就カントハ三下レハ之ヲ信スル能ハズ、又彼等  
 此レ進ナリテ見ル所ニハ未ダ倉ク自存シテ解セリトハ  
 云ヒ難ク加シテ又知恩負一環一トテ終リ其ノ首相とレ残合テ  
 序ス難ク何曉アリトハ未ダ認ムルヲ入  
 又一進合ナリ云弟セリトハ一際一進合トテ控勢ヲ以テ也  
 彼ト認メテテ擇先とテ宋東暖ヲ好ヒテ知恩負ニ加ヘテシタル  
 以テ未ダ其事情ナリカ之レヲ強クシテ能ク其ノ如ク一更ナ  
 振セル一進合ナリトモ能ク入ル之レヲ能ク知セリトハ一トハ能ク  
 ルモ一ヤ、又一進合ナリ一般國民ノ感情ヲ傷テ能ク  
 放ツト一耳ナリ其一進合以テテ一虎ノニテ排日論ヲ  
 主張セルモノナリ、  
 進三  
 進合ニテテ對スル各派ノ感情

に某一日、日本主義士の中、排外スルモノ多シ

除年平ハ、米ヲ排日虎ト目スルモノ多シ、不可選ナルヘシ。已ニ一進

會ニ至リ、此等理由、下ニ一般ノ感情ヲ醸セルモノト見ル可

以テ、維ハ多ク、排日難スヘキ点アルニモ、我方ニ所テ之ヲ解散

セムル事ヲ事ハシ、此等不可解ニ属ス。

又、國策中、排日同ニ多ク、意見ノ衝突ハ、就ニ協定ニ所テ

元流ナル所ニ至リ、是レハ時ノ回差ナリ、故ニ終ニ協定ニ至ル

目途、漸次スヘキモノナリ。否之レ、排日ヲ極テ、政府モ強欲スル

下ニ、之ニ反テ、排日ヲ極テ、我ニ執リ、譲歩ナクシテ、了ラ

カ、吾等ノ口實ニスベキ現象、此等ナルナリ。

鑑照

此等意見、排日ナリ、排日ナリ、就テハ、排日ナリ、進會ナリ



陸軍、海軍、外務省、近衛首相、  
 然るに其内容に如何なるものあり、  
 前途は横に大問題なり、  
 連合の目的は、  
 憲政は推スト、然るに以上は難問題ト已ニ解決せられし、  
 然るに内閣、首相トモテ、  
 信大、他、  
 御り、  
 千毛、  
 可ア、  
 回、  
 二毛、

國に於て是リト云ハルモ是レ不可解ナリ、若シ云ハルモ  
宋樂毅モ亦去ルベリ、其レ大匠モ亦去ラント云ルヤ也セリ、  
是レ予カ貴官解退可以テ親内而乱解一端緒トシテ目  
スル所ナリ、

雖ハ貴官ニシテ親内閣ヲ去ル、ニセヨ、近年七、二所ナリ  
廢帝ニ尊ト云ヒ曰、韓阮約締結ト云ヒ其國民ニ示ヘタル  
其感情ハ到底掃除スベキナリ、然レモ其ハ亦看破カ  
テ去リテ、其後石賊ハ政變ヲ企テサレタルト一般  
ナリ、其レモ是レハ政治ノ實際ヲ考テ、其レモ其レモ  
宋ニ由リテ國民ハ他日大ナリ悔悟スル所アリ、却テ其大  
一威嚇ヲ掛テ、日ヤ知ル、

李經羲

陛下ハ此國を爲ルニ至ラズ、自命モ亦一

因末心より所を蒙カントセバ到底今迄三昧定ま  
回鑿ニアズル縁羊解ホ道ニ至ル所有ハ此  
統覺ノ内事ヲ耐忍力カク中身あり。今迄  
片一過セリル一方可ナラン。

名 称	伊 藤 博 文 文 書
標 題	韓国施設經營事項,條拳併討韓才策 明治卅九年〃 (先公自筆)

分 類 番 号	
	108

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	211901
------------------	--------

本年三月余、新米、施設  
經營之、事、業、一、種、小  
國、氏、復、治、之、資、也、ト、欲、を、  
昨、ル、モ、ナ、シ、茲、ニ、之、リ、條、條、と、

望、之、轉、玉、由、未、支、那、一、所、痛  
い、と、生、存、を、知、る、手、此、の、事  
大、ノ、精、神、ヲ、養、育、を、以、て、汲、  
し、テ、未、タ、常、ニ、精、を、不、懈、  
習、也、と、モ、ア、ル、ヲ、見、る、習、ハ、以、テ、性  
ト、考、ル、漸、次、浸、透、し、テ、上、下、共、  
之、ノ、天、理、ト、し、怪、ニ、サ、ル、ニ、至、リ、因  
家、存、亡、興、廢、ヲ、備、へ、る、

其跡の絶たぬ日、今、韓の  
一、殊に、今、距る百有餘年、東有  
後、土、あり、今、鎮、を、國、業、を、祀、し  
宇内大勢を研究するに其興  
亡の跡を撰りて、竟て極東の地を  
形勢から卓見せんとする、アリテ其  
迹を見、連、を、せん、今、日、の、世、に、あ  
る、其、是、也、

抑、韓、を、少、相、を、う、宇、内、に、昭、達、す  
や、と、云、ノ、韓、を、少、人、と、云、フ、ス、と、云、フ、日、本  
政、策、を、り、し、ト、云、フ、に、在、る、ヤ、と、云、フ、  
不、是、也、初、日、韓、信、約、の、訂、結、  
之、に、次、ぎ、て、日、清、戦、争、以、て、征、ス、ル、是、  
に、是、其、基、を、可、地、理、に、因、連、る、  
小、田、種、同、ク、た、る、如、き、ナリ  
此、等、の、故、を、ん、韓、を、少、人、と、信、度、を、以、  
て、果、し、テ、其、弱、を、予、以、て、其、を、

父んきりやを雨来す白る  
子あり其勢をえと支那と區  
迫と神志の包圍の中、臨見  
々も、韓人、うらたしと日本ナリ  
家より支那ノ結果や、我々  
歩きた所ナキ、ミナミ、秋日本、物  
主、元、殆ど、こゝにモノ、法、神、あ  
ふ、總、度、ナル、三、傍、親、近、也、と、  
て、る、モノ、ナキ、也、  
入、干、戈、に、折、ん、て、至、り、健、て、之、を、割、る、  
得、り、我、日本、ノ、外、交、に、神、志、を、  
清、る、因、り、其、所、ナリ  
神、志、を、神、志、を、  
入

我、再来ヲ果シテ求ム

我、諸君保証ス

事件

皇帝ノ名ニ言明セリテ

宣旨

我、昨日論執ノ旨ニ答ルニ  
昇后、運動之ヲ司スルニ  
母后、接應スルニ要ス

皇帝ノ動作ヲ傍觀スル人  
其不利ヲ矯ムルニ社稷ノ  
安全ヲ期スルニ在リ  
朴孝、功及尤王女、對唱ル中  
有力者多、日片ニ限スヘシ



名 称	伊 藤 博 文 文 書
標 題	朝鮮京城變亂ニ関スル政府、 対策意見書、一部。 (竹添公使事件、顛末)(先公自筆)

分 類 番 号	
	6

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	2 11799
------------------	---------

昭和十二年、朝鮮京城で、

倭軍駐在、日清、西國の補衛

兵の伺、銃砲ヲ發シ、莫大、死傷

アリ、致ス夫、當時、事タルヤ、西

國の拘、支、戦の事、由リ、突然

抗敵の賓ヲ表示シタル、形跡ニシテ

以來、我政府人民、共ニ、安慰セラル

其大事、女ヲ為センコト、思ヒナリ

抑當時事、起因タル十二月四日、夜

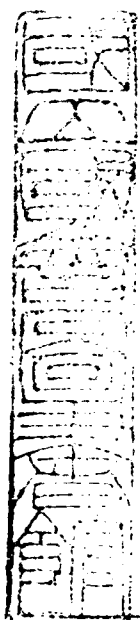
朝鮮國王、再被官使ヲ以テ、我公

使、依頼シ、衛ヲ請ヘリ、我公、漆

公使、國王、危急ヲ察シ、護衛

ヲ將テ、專ラ、王、離、急ナキヲ勸メ、ナリ

キ、就ニ、貴部、指揮、友、兵、公、使、ト



協議ヲ遂ケスモ多岐方意ノ有ル  
所ヲ通シテ互ニ共議ノ域ヲ割ラセ  
ズシテ突然宮中ニ迫リ供ニ文牒  
敵對ノ事跡ヲ呈出セシムル割ル  
爲メ責ニ貴部指揮官ノ所爲  
ニテ成ス元ヨリ朝鮮ニ於テ日  
清兩國ノ敵對主義ノ事ヲ起  
ス貴政府ノ本意ニテ然ラザル  
レ我朝廷、今兩國ノ交誼ヲシテ  
旧ニ復セシメ愈隣好ノ實ヲ  
舉ゲシム期シ茲ニ六日ノ事  
責任ノ帰否所ヲ明瞭ニセシム  
ヲ希望ス此、日清兩國ノ和交ヲ  
重シシ萬端ヲ除カシムル歎シテ  
有  
故、我政府 清廷ニ向テ要求

各所

本國指揮官に就て

選定事

元二土月廿日科に於て消費

に得薬を請へて

三十萬に於て

台事

次、日清兩國朝鮮に於て

の無事ヲ計リ

又三朝鮮に於て日清間

關係の簡易を以て

名 称	伊 藤 博 文 文 書
標 題	朝鮮ニ関スル書類

明治三十八年十一月二十九日 韓国皇帝  
陛下、命ニ依リ内府大臣李載堧、  
奮々陛下、要求書。  
李太ヨリ博文ニ封スル感状。  
京釜鐵道ニ関スルモノ（長城等）  
明治廿七年五月廿六日。  
朝鮮新報（東学社暴動関係）

分 類 番 号	
	1443

登 録 番 号	
------------------	--

# 朝鮮新報

號十七百第報新新報 日曜土 日六廿月五年七廿治明 (可編省信通年五廿治明)

## 朝鮮時事

### 東學黨暴動彙聞

朝鮮政府電音を取締る

暴動地の形勢は監督より政府へ發する電報より因りて知るの外他は探聞の便なきに近日朝鮮政府は電報總局を嚴令して完營及び編營より來る電報は一切他を洩す可からざる旨を以てし大關内に於ても三政六曹等機關に參する者の外には決して洩さざることを定めたり通知の道は此の如く杜絶されは本社の探聞上頗る困難を感ずと雖も尙ほ種々の便宜を用ひて一層の細探を遂げ神速なる報道を怠らざるべし

#### 韓軍意意外に出つ

抑も今回の暴動に關し朝鮮政府の意外に出たるもの三たび及び昨年の東徒は一片の繪圖と魚尤中の按撫とに由り終る解散したるを以て今年も亦其例に倣ひ説諭を以て鎮撫せんとしたるに遂も其効なかりしこと其第一なり既に説諭の効なきを認めたるも八百の征討軍一たび其地に至らば渠等烏合の衆、風を聞ひて潰散するならんと想ひたるも却て反動の勢ひを顯はしで餘々驚威を逞ふするは是れ其第二なり而かのみならす洋式の練兵を以て編成したる征討軍は英氣凛然隊伍森然動かさる山の如く難かなる川の如く精銳無比と頼みたる甲斐もなく其の一百余人は脱奔して行衛を知らず之れが爲め軍氣大に沮喪したることは是れ其第三なり毎事其案を違ひたれば朝鮮廟堂の慌忙も亦難なしと云ふ可からず是に於て早くも外兵借入の議は起れり

#### 外兵借入の議は排斥さる

外兵の力を藉りて鎮壓せしは一も二もなしとの無難作なる議論は早くも廟堂の一隅を起れり外兵と謂へば無論差詰め清兵に外ならざるべし然れども朝鮮廟堂亦人あり何と此安議を容れんや乍ら左の反論に依りて排斥されたり  
其要に云く今や東徒の猛勢不測或は鼓行北上の患なしとすへからず最も痛切に堪へたりと雖も然れども内亂を鎮壓するに外兵を以てせんは實に自主自衛の本旨を背くのみならず過す以て外國干渉の端を開き其後患言ふ可からざるものありと云ふ清日戦の兵を借らんとするも條約(天津條約ならん)の現存を奈何せん若し之を破ら

しめんか兩國の争端は乍ら二條に八路を擧げて清日交鋒の修羅場たらひるか如き大事に至らんも亦計るべからず我國の無事茲に十年なるも畢竟兩國條約の賜と云はざるべからず之れを是れ問はすして漫に外兵借入を言ふ亦不思はざるの甚だしきものなれば自今以後斷して之を口にする可き勿れ云々

#### 更に江華の兵を發す

外兵借入を安撫は前項の如く全く排斥せられて愈々征討軍を増發するに決し江華留守兼海軍總制使閔應植は去る十八日江華に下り同所の營兵五百を徵發し同營の中軍徐炳燾を以て之れが總將たらしめ彈藥四拾餘萬發を準備し閔應植も見送り旁々同伴にて去る廿一日來仁、海上の食用として麵包壹千斤を大佛ホナルより買ひ入れ雨天にて石炭積込み手間取りたる爲め翌二十二日午後五時朝鮮海軍船益城及海龍號にて全羅に向ひ早速上陸し全州監營に到り待ち設け居る洪招討使の軍と合する等なりと云ふ

#### 徐中軍一行の組織

其如何の如何は暫く措き朝鮮の軍隊には形而上嚴然たる儀式あり此度全羅に向ひたる徐中軍一行の組織を掲ぐれば左の如し  
出駐大將 徐炳燾 別哨官 崔浩成  
兵使 李鍾大 兼應監官 宋泰赫  
前哨官 金奎亮 中哨書記 朴順英  
中哨官 趙重鍊 右哨書記 金重慶  
右哨官 劉錫淳 外兵旁 團官各一員  
尙は中營とて書吏一人、京廳直一人、團直一人、巡卒六人、色班二人、駈徒二人ありて全軍は十人と一隊となし隊毎に什長一人を置くと云ふ

#### 招討使援兵を要する急なり

韓曆四月十四日完營發招討使の電報に云く孤懸の探偵者馳せ歸りて告げらく東徒の大將飛檄を傳へて云く我れ等天師の來降を待ち其令次第にて事を行はんとす現今吾か下卒の巡行を際して因はれたる者五十余名は曩日來因人となりて羅州に在る者二十七名あり是れ最も無極痛敵の事たり依て各部の諸將各々一千五百の兵丁を率ひて金馬木蛇に來會せし頃を誤る勿れ又自餘の將卒は各々其部番を守り決して將令に違ふなかれと彼の徒の不測この極に至る驟然の事故發す可からず兵丁火速退伏して待つべし但し金馬木蛇とは彼の徒の間を用ふる隱語に

して恐らく午の日の己の刻と云ふか如き期日を示したるものならんと察せらる

#### 官兵の脱走多し

官軍兵には全く勇氣なく戰場の役に立たざるものあれば勇氣あるも軍官軍の爲めに働くことを欲せず賊軍の爲めに死力を致さんとの考を懷くもの少なからず自營將官の號令も充分に行はれ兼ね憂慮も一方にあらざる由なりしか此頃的確報によれば洪招討使が率るゐたる八百の兵員中二百人許は何時の間に營所を脱走し行衛を失せたるか其後の探訪によれば黒地の制服を脱し白衣を着けて賊陣に難り銃劍を官軍に向へつゝある趣なりと云ふ

#### 牛馬を掠奪せられ

全州地方の東學黨は其後愈々猛勢を逞ふし近傍一帶の牛馬を掠りなく掠奪せしめば官軍は物貨運搬の途全く斷絶し不便言はん方なく此報京城へ達せしより廟堂の有司も大に之を憂慮し此程賑益船にて兵員を増派する時該一行が當港にて日本人使用に係る荷車拾五輛を購入し携帶したるは全く右等の爲めなりと云ふ

#### 寄集せる貢米

殆んど敵の有となる  
八道中全羅地方は米の產出最も多く政府の租税は金穀二種を以てする中全羅地方は大抵穀物の一種を以て上納する慣例として各地方の貢米は便利なる沿岸諸港に寄集し更之を海路當港に運搬する都合もて毎年今頃には恰かも此時期に到來し左水營、右水營、木浦、古全島、群山の諸港に寄集せる貢米の數量は隨分夥多なるか之を回漕せん爲め漢陽號にて出張したる轉運委員金惠容氏の如き別項記する彼く生擒されたる通りの始末にして今僅に出張回漕の見込あるものは群山の一港にして他の諸港は悉く敵の爲め遮斷せられ全く彼等の有に歸したりとの事なれば此儘尙は日數を経過すれば賊軍の糧食充分として官軍の糧食缺乏を見るや計られすと云ふ者あり

#### 外國人は無事ならん

昨年暴動せし時の東學黨が目的とする主義は種々茫漠の中にも外人排斥の精神充分に想見せられたり然るに這回の騒亂地は日本人は別項記する如く拾數人滞在し他支那人及び歐米人等の旅行する者群からず或は彼等其主義精神を實に現はし多少の妨害を加ふることなきや大に慮念なきは是れはる次第なるか近頃同地方に於け



る。宣教師より當港某洋人の計。本年は更に昨年の如き暴動なく寧ろ却つて親善を重ねるに於て無事なりとの由を報し來いと云ふ。尚ほ別項機を参照すべし。

### 東徒大將の布告文

昨今世間に東學黨の告文なりと傳ふるもの見短二三種あり左に掲ぐるもの亦其一なり。今於世最貴者。以其人倫也。君父子人倫之大者。君仁。父慈。子孝。然後。乃成國家能遠無疆之福。今我聖上仁孝慈愛。神明聖德。賢其正直之臣。翼贊佐明。堯舜之化。文景之記。可指日而希矣。今之爲臣。不思報國。徒窮祿位。掩蔽聰明。何意。謂容忠諫之士。謂之妖言。正直之人。謂之匪徒。內無輔國之才。外多虐民之官。人民之心。日益流變。入無樂生之業。出無保軀之策。虐政日肆。怨聲相屬。君臣之家。父子之倫。上下之分。遂壞而無遺矣。管子曰。四維不張。國乃滅亡。方今之勢。有甚於古者矣。自公卿以下方伯守令。不念國家之危殆。徒切肥己潤家之計。銓選之門。視作生貨之路。應試之場。舉作交易之市。許多賄賂。不納王庫。反充私囊。國有積累之債。不念國報。謬修淫昵。無所畏忌。八路魚肉。萬民塗炭。守之貪虐。良有以也。奈之何。民不窮且困也。民爲國本。本削則國殘。不念輔國安民之方策。外設鄉第。惟謀獨念之方。徒窮祿位。豈其理哉。吾徒雖學野蠻民。食君土。服君衣。不可坐視國家之危。而八路同心。億兆誦議。今舉義。旋以輔國安民。爲死生之誓。今日之光景。雖屬警該切勿恐。內各安其業。共祝昇平。日月成休。聖化千萬。幸甚。

### 完伯の賊狀具申

全羅監司金文鈺の管校を四方に派して東徒の情狀を探知し之を政府に具申したりと云ふ。今其の要畧を聞くに目下彼の徒の各處に屯聚するもの大小合して二十七ヶ所あり其内大陣と稱するもの八ヶ所小陣と稱するもの十九ヶ處として大なるは各々數千名を有し小と雖も五六百を下らす各陣に大將あり每部に隊長あり晝間は軍法を操練し夜間は經文の如きものを誦讀す而して大將常々各隊長を誡めて曰く戰場に臨む時成るべく人命を損傷すること勿れ殺さずして勝つ者之を首功と爲さん且つ邑里過ぐる所秋毫も侵掠すべからず若し此令に違ふ者あらは額外たるべしと彼等の總大將は鄭道令左大將は徐憲丹右大將は崔大雅なり

又彼の徒の陣を數くは當りては必ず白布の帳幕を以て前面を掩ふ彈丸を防ぐ爲めと云ふ目下東徒の屯聚最も多きは茂長靈光の二ヶ所なれども常に出没自在なるを以て容易に踪跡し難し云々

### 慶尚道の東學黨

慶尚道は何故に附けて元來人烟稠し土地柄なり而して昨年より本營に掛けては地方官の苛欲無情に不平を囁らす者殊に多きを加へ暴安威安那と暴動あり頃者殊に金海府に民亂ありて是等は一として不平熱の溢れ出たる結果ならざるはなし然るに及々最近報に據れば餘れて洛東江源の洛東山邊より此方尙州地へ掛けて出沒し暗々忠清全羅の同志と氣脈を通じ居たる東學黨員昨今全忠二道の氣焰に呼應したるものにや漸く勃興し始め其舉動兇角甚ならず大邱監司以下各地方官は警戒頗る怠りなしと云ふ

### 行商者呼戻しの照會

朝鮮政府より我が駐在外務官に向け昨今所在暴民騷擾其危險少なからざるに付貴商人の内地に行動する者は悉く呼ひ戻されたく尙ほ自今行商するも各所に散在居所常なき多數の行商人を呼ひ戻さん使も及々區域を限らず一体に行商を禁止するに云ふは事休輕からざる儀なれば我が當該官は於ては昨今出願する者に對しては唯其意を諭すに止められたる由

### 忠清道の東學黨の事なし

忠清道の東學黨は畢竟全羅道の東學黨に呼び起されたる姿にて未だ格別の猛烈を現はすに及ばざりしか前号記する如く一團の人民義勇軍起りて遂に懷德に屯聚せる東徒を悉く擊破したるより該道は稍々平定に傾きたる如し右に付朝鮮政府の發したる布告文は左の如し(韓曆四月十二日朝報に據る)

### 議政府草記

即見忠清監司電報、則懷所聚之徒、今皆退散歸化云、今農務方張之時也、其令各該邑、懷德農民、使各安業、無失農時事、措辭關防拾兩湖道臣、何如傳曰允、移安避危、人之常情也、爾來徒聚之民、豈皆欲聚其樂業、甘犯大戾哉、此蓋由此貪汚侵虐、不自安堵、譁然自關、遂至於梗化、而施即歸順者、其跡雖甚痛惋、其加亦可哀矜、其令道臣特加慰恤、使之各歸其所、其或務產廢業者、另飭各該地方官、設方畧調給、而俾得安居、務盡牛撫之道、以示予如傷若保之至意、其或猶復、群聚一向、頑拒者有焉、則此不可以赤子貸之、該道臣與招討使、以法從事可也、並以此意、布告民人事、自廟堂措辭關防。

### 南道飛電

舊四月十四日辰刻全州監司發、只今靈光府伯の報する所によれば一昨十二日彼徒萬衆、城入し、城民を劫散す、鎮營を襲な

じ惶怖に堪えず

### 全十五日招討使發

軍糧軍械の方々豫の講せすんはあるべからず依て益山府伯鄭元成をして此任に當らしめんと云ふ

### 全日端山縣監發

賊情を探偵するに殆ど三千の多きに至る又懷德縣に於て銃一、鎗十六、彈丸七十三、弓一張を掠奪せらるに付屬吏に命し取返し法の謀る

### 全十六日運糧官鄭元成發

至急軍糧米輸送せすんはあるべからず漢陽慶齊の内いつれか一隻今日草山に向つて回還せよ返電を俟つ

### 全日招討使發

江華の海軍何日到着するや軍刀槍柄と上等の雷鎗送附せよ斥候元世祿行衛判明し招還せり李斗黃、李學承をして二隊の兵を率ゐ金溝、泰仁、井邑、高敞、興德の地方に同はしむ

### 全十七日全州監同發

彼徒の動靜を探偵する一は靈光に留置し一は咸平に向はんとす而して京軍程を急ぎ彼の住處に赴かしめ將に開戦せしめんとす今曉取敢へす二隊の兵を送る又日く招討使京軍二隊の兵を率ゐて先刻彼徒の屯處に赴けり

### 全日招討使發

彼徒半は靈光に留り半は咸平務安地方に向ふ昨日二隊の兵を送り今曉再び二隊の兵を送りて後援せしむ

### 全十七日全州監司發

東徒入つて靈光を犯し城中に據る則ち招討使は急に兵を率ゐて靈光にむかふ

### 全十八日全州監司發

轉運使火輪船に乘し稅銀を載せて下往する處へ東徒來りて捉る去る依て之を取り返す爲め早速風吏を急派せり

### 軍報

先達て入港したる帝制軍艦紫は折海巡航の爲め去る廿二日早朝解纜せり

### 英國軍艦

英國軍艦セツパン號は去る十九日午前長崎より入港し艦長ヘンドルン氏は駐京公使に所用ありて翌二十日午前九時入京し歸仁後滯泊中の處去る二十二日正午巨文島を経て長崎へ向け出港せり本艦は鋼鉄巡洋艦として東洋艦隊に屬し噸數四千五百、馬力六千、大砲十二門ありと云ふ

### 閩艦船歸る

江華府留守兼海軍總制使閔應植は全羅へ出兵の事に關し去る廿一日來仁し徐相集の宅に滞在せ

し、十三日歸途に於て

### 二名金の發送

樞東壽權在籍金泰源の三名は一旦豫審庭に於て免訴放免の旨を受けたるも仲小路檢事の抗告に因りて尙ほ其儘留置せられたりと聞さしか檢事の抗告相立たざりしと見へ三人とも巡查護送して去る十九日東京出發歸國の途に就きたる旨東京駐劄の金公使より朝鮮政府へ電報ありたり

### 岡本柳之助氏來る

岡本柳之助氏は此程の肥後丸にて着仁、山手通り水津方へ投宿し昨昨夜漢江へ溯りて入京せり

### 五月十九日

昨年の是日は防範談判一旦破れて大石公使が國旗を仰したる日にして能く在留諸君の記憶に存すべし右損年賊金第二回分も即ち此日を期としたる約定なれば朝鮮政府は此公九千円金を既に拂込みたる由なり

### 書記生更迭

仁川領事館書記生小川盛重、大井敬太郎、京城公使館書記生神代勝三、釜山總領事館書記生葉田周吉の各氏這般歸朝を命せされ元山領事館書記生大木安之助氏及び清國芝罘領事館書記生にして領事館書記生に任せられたる河西信次郎の各氏は京城公使及領事館在勤を命せられたる由

### 十八銀行元山支店

長崎第十八國立銀行は今度元山津支店を設け來る六月一日より開業する由

### 幼稚園

目下準備中の幼稚園用樂器玩具等は先便にて大阪へ注文したる處此程の木曾川丸にて到着したる由

### 興行場

盛なる時捕校現はる韓客連る上司の意は矯風に在りて下卒の眼は腰錢に注ぐ日人稼業の爲め見物を護り捕丁を防ぐ終に攫み合ふ捻ち合ふ田訴となり拘引となる是れ興行場の始末に關する常觀なり昨今も亦この種の一件よりて結果甲乙丙丁の退去者を出す校も混雜

### 西脇長太郎氏

當港第一銀行支店支配人西脇長太郎氏は先般來歸朝中の處去る廿三日の肥后丸より歸任せり

### 八島染之助氏

岡本氏と同行して來仁入京す

### 不幸中の幸

當港唯一の日本旅店として料理店兼業なる水津樓主人水津清三氏は先日來病氣の處去る廿日遂に死去せりと云ふは氣の毒の至りなるを以て同氏は過般明治生命保險會社員出張の際金千円の保險契約を爲し僅一回の保險料金拾貳圓七十六錢を拂込みたるのみにて右保險金千円を受取ることもなり代理店よりは早速遺族へ拂渡の手續を爲せりと云ふ是れ蓋し不幸中の幸なる歟人生の無常猶は朝露の如し斯る場合生命保險の必要大と見るべし



廣告

古阜之亂東黨大勝

御當地ハ申迄モナク京城ノ華主ハ位ノ淺カラズ  
御引立被下候ヨリ勉強致候甲斐モ有之御座候ニ  
テ近頃段々盛ニ相成リ深ク御禮申上候此御手厚  
キ御引立ニ酬ヒ奉リ度ト此後一層品物ヲ精撰シ  
方ノ處ニ御注シ被下候ヒシ御愛顧ニ酬ヒシ  
爲メ今般御地難洞第一号地ニ開店致シ候田中店  
ヲ御引立奉希候敬白  
長崎硝子製造所製品  
一手販賣 江口店  
京城難洞 田中店

●向々こつと類。はい取り類。澤山着荷致居候

廣告

拙者ハ中嶋ニアラス又永嶋ニモアラス  
在京城 長島岳次郎

仁川商況

五月廿五日記

本日正午寒暖計七十度  
●港況 前報後難類各高直になりたるより港  
内何となく活發の方にて加ふる三三日以前より  
運船二三隻入港し居るに、港商連は夫々積  
込準備にて旁港内好人氣の有様  
●米 前報より引續き例の支那米は活發の方  
に港商連は一層買進むより又々々騰貴にて昨  
今の賣買直段六円七八拾錢と云ふ高直なり付  
て支那商人は益々強氣を唱へるに拘はらず此  
程鎮東號にて輸入の分、大抵約定出來たる模  
樣にて、支那米は余程好人氣左と雖、米は之  
に反、品僅少なると拘はらず余り望人なく至極  
沈滞の姿  
●大豆 阪地その高直なるより、弗々望人願  
はれ、從て價格も引續きの方にて前報より余程  
騰貴の模様なり  
●韓錢 其後不相變の商勢にて一向高下なく前  
全機矢張、對九歩七厘半、併今後は平安道  
より、烟錢無之、模樣且つ釜山元山地方も此程來  
より、余程引續きたるに付、最早今後は下落せ  
る姿にて、底意強氣に見受けたり  
●明太魚 全品は既、聊か時季後れの處、一時  
木曾川、肥後の兩船にて多數輸入有之、なるより  
人氣頗る風味、余り望人なく、前元面白から  
ざる商勢なり  
●牛皮 前全機品少く、阪地は失張好人氣との事  
なれども、品少の折、柄港商連は出廻待ち、設け  
の姿なり  
●金物類 不相變當用口賣行けり  
●石油 客月來より小口物の賣行にて、抄々  
ささく先沈滞の姿  
●小豆 更に入品なし  
●雜貨類 相當賣行さある模様

仁川物價 五月廿五日

●米類

品名	單位	價格
精白米	一石	七十四圓三十五錢
白米	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●豆類

品名	單位	價格
大豆	一石	三十四圓九十五錢
中粒	一石	三十四圓九十五錢
大粒	一石	三十四圓九十五錢
小豆	一石	三十四圓九十五錢
並大	一石	三十四圓九十五錢
並小	一石	三十四圓九十五錢
並大	一石	三十四圓九十五錢
並小	一石	三十四圓九十五錢

●金銀類

品名	單位	價格
金	一兩	五百五十五圓
銀	一兩	四百五十五圓
銅	一兩	四百五十五圓
鐵	一兩	四百五十五圓
鉛	一兩	四百五十五圓
錫	一兩	四百五十五圓
鋅	一兩	四百五十五圓
鎳	一兩	四百五十五圓

●雜貨類

品名	單位	價格
米	一石	七十四圓三十五錢
白米	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●油類

品名	單位	價格
大豆油	一石	三十四圓九十五錢
中粒油	一石	三十四圓九十五錢
大粒油	一石	三十四圓九十五錢
小豆油	一石	三十四圓九十五錢
並大油	一石	三十四圓九十五錢
並小油	一石	三十四圓九十五錢
並大油	一石	三十四圓九十五錢
並小油	一石	三十四圓九十五錢

●金銀類

品名	單位	價格
金	一兩	五百五十五圓
銀	一兩	四百五十五圓
銅	一兩	四百五十五圓
鐵	一兩	四百五十五圓
鉛	一兩	四百五十五圓
錫	一兩	四百五十五圓
鋅	一兩	四百五十五圓
鎳	一兩	四百五十五圓

●雜貨類

品名	單位	價格
米	一石	七十四圓三十五錢
白米	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●油類

品名	單位	價格
大豆油	一石	三十四圓九十五錢
中粒油	一石	三十四圓九十五錢
大粒油	一石	三十四圓九十五錢
小豆油	一石	三十四圓九十五錢
並大油	一石	三十四圓九十五錢
並小油	一石	三十四圓九十五錢
並大油	一石	三十四圓九十五錢
並小油	一石	三十四圓九十五錢

●雜貨類

品名	單位	價格
米	一石	七十四圓三十五錢
白米	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●油類

品名	單位	價格
大豆油	一石	三十四圓九十五錢
中粒油	一石	三十四圓九十五錢
大粒油	一石	三十四圓九十五錢
小豆油	一石	三十四圓九十五錢
並大油	一石	三十四圓九十五錢
並小油	一石	三十四圓九十五錢
並大油	一石	三十四圓九十五錢
並小油	一石	三十四圓九十五錢

●海產類

品名	單位	價格
魚	一石	七十四圓三十五錢
白魚	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●日本酒類

品名	單位	價格
酒	一石	七十四圓三十五錢
白酒	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●材木類

品名	單位	價格
木	一石	七十四圓三十五錢
白木	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●薪炭類

品名	單位	價格
炭	一石	七十四圓三十五錢
白炭	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●當五雜貨類

品名	單位	價格
米	一石	七十四圓三十五錢
白米	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢

●京城物價 五月廿四日

品名	單位	價格
米	一石	七十四圓三十五錢
白米	一石	六十四圓三十五錢
中上	一石	六十四圓三十五錢
中	一石	六十四圓三十五錢
上	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
並	一石	六十四圓三十五錢
並中	一石	六十四圓三十五錢
並上	一石	六十四圓三十五錢
油	一石	三十四圓九十五錢
白油	一石	三十四圓九十五錢
中上	一石	三十四圓九十五錢
中	一石	三十四圓九十五錢
上	一石	三十四圓九十五錢
並上	一石	三十四圓九十五錢
並	一石	三十四圓九十五錢
並中	一石	三十四圓九十五錢
並上	一石	三十四圓九十五錢
金	一兩	五百五十五圓
銀	一兩	四百五十五圓
銅	一兩	四百五十五圓
鐵	一兩	四百五十五圓
鉛	一兩	四百五十五圓
錫	一兩	四百五十五圓
鋅	一兩	四百五十五圓
鎳	一兩	四百五十五圓



韓報

地方官悉く更迭せん

(順乱地方)

連般騒乱の原因は種々にして一概に論ずるべからずと雖も各地方官の苛税重斂こそ其最たる要素と認めらるゝを以て韓廷有司も大に憂に顧る所ありて該地方は監司府使郡守縣監に至るまで一大更迭を斷行し以て聊か民の心を和らさ目下の急を緩めんことに決議せし由即ち次項に記する監司更迭の如き其第一着の手段ならん歟

全羅監司の更迭

政府は現任全羅道全州監司を罷め新に外務協辦金鶴鎮を以て其任に該らしめ急遽赴任せしむる由氏は去る明治十八九年の間慶尙道東萊府伯兼釜山監理使に任し後承旨の官に在ること三年、而して今より三年前以來外務協辦の椅子より當年既又耳順を越たる老翁なるか敢て稱すへきの才幹なしと雖も風に清廉潔白を以て朝野に名を博する人なれば氏の赴任は全羅一円の黎民をして稍々満足せしむるならん云ふ

長興府使も亦た更迭す

長興も亦た騒乱地の一部なり現任府伯罷められ曾て仁川監理使たりし朴某之に代ることとなり再昨廿四日下仁、便船次第急遽赴任の誓

征討軍への下賜金

傳曰湖南出駐兵丁、多日控露、能既疾、亦無艱食之歟乎、率々于中、發遣宣傳官另問、特下內帑錢一萬兩、其令招討使、量宜頒給、(韓曆四月十九日朝報)

露國公使の更迭

漢城駐露國公使ウエバー氏は此度清國駐節代理公使を命せられ遠からず赴任する由

軍艦紫

去る廿二日解纜したる軍艦紫は昨日午後四時歸仁せり(本紙参照)

漢陽號に就て

漢陽號の歸港遲延するに就て種々様々なる風説を爲す者あり同船は賊兵に取られたソ、だイヤ打ち摧されたソ、だ、イヤ乗組日本人も尻を打たれたソ、だ、探達方途鉄もなき噂さの中に日本人か繋つて居るからソ、苦もなく取られるのか官の御用船に引き止められて居るのだから云ふ説もあり、いづれがいづれやら分らないと一通り聞くの如し

上海米

去る四月十二日以前より上海米輸入高は曾て報進せしか其後四月十六日より五月廿二日に至輸入出高を聞くに左の如し

月日	船名	袋数	元
四月九日	東	八、二六	九、三三〇
四月十日	東	二、〇九	八、一四八
四月十一日	東	八、〇〇	三、一五〇
四月十二日	東	二、五〇	三、七五〇
四月十三日	東	九、九二	三、九八〇
四月十四日	東	一、九二	三、九八〇
四月十五日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月十六日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月十七日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月十八日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月十九日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十一日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十二日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十三日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十四日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十五日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十六日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十七日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十八日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月二十九日	東	三、〇〇	三、九八〇
四月三十日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月一日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月三日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月四日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月五日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月六日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月七日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月八日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月九日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十一日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十二日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十三日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十四日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十五日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十六日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十七日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十八日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月十九日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十一日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十二日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十三日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十四日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十五日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十六日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十七日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十八日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月二十九日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月三十日	東	三、〇〇	三、九八〇
五月三十一日	東	三、〇〇	三、九八〇

●騒乱地近傍の日本人 は仁川領事館より旅行券を受けて行商中の者目下十六名ある筈なりと  
●英女皇の御降臨日 昨廿五日は英國女皇陛下の御降臨日にして在留同國人は一般休養祝意を表し我能勢領事其他各國領事は英領事よりて祝辭を陳べたりと云ふ  
●神代勝三氏 歸朝を命せられたる公使館書記生の同氏は再昨下仁  
●横田三郎氏 芝罘在勤を命せられたる同書記生は此程の肥後丸にて赴任  
●京城の小失火 去る十九日京城東大門通りに出づる横町梨梨に出火あり韓舍兩三焼けたり  
●船客 別項記載せし外に肥後丸にて上等李蘭九外下等三十七名、木曾川丸にて中等五十一名、明石號にて上等榮田孫兵衛、阿部、三谷、音次郎の各氏いづれも來仁、又木曾川丸にて中等布井加藏氏外下等十八名釜山及日本行  
●正誤 前號の物價表中韓錢相場十六日三割九分九厘、十七日三割九分八厘とあるは二割云々の誤植に付正誤す  
●金玉均詳傳 完 松本正純氏著  
此書は曾て朝鮮に遊びたる紀山先生が得意の筆鋒を揮つて金玉均の政治界に於ける境遇を骨子として其逸話及び著者の意見等を加へ詳叙したるものにて實に金玉均の傳記のみならず朝鮮近代の歴史として見るべき点頗る多く一閱の價値は充分にこれありと認めらる發行所は東京厚生堂なり  
●漁船出入港報告  
●越後丸 明日早朝釜山を経て馬關大坂行  
●伊勢丸 二十八日頃日本釜山を経て入港  
●明石號 二十七日午前十時馬關大坂行  
發行兼編輯人 日外藤岡 印刷人 山本岩吉  
朝鮮國仁川港谷國居留地第十一号地  
朝鮮新報社  
發行所 朝鮮新報社京城支局  
京城羅洞第二十一号地 朝鮮新報社京城支局  
●新聞取次所 威鏡道元山津 蔚山商店  
仁川上町通 山岡書店

朕이曩日에親書를寄하야朕의衷心을表明하  
얏거나와蓋百政이就緒하야維新大業이漸히成하  
所以는本是貴

天皇陛下의深厚하 聖旨에藉하얏치드亦貴公

爵의指導扶植이宜를得함이아니면豈能此外

如하리오上下一齊히貴公爵의竭精하誠意를

感荷함이不堪하비라

今貴

天皇陛下ニ貴公爵の老軀ヲ永ヒ閭外에駐宮  
을不許하시니朕亦其聖慮를不可不敬仰할  
지라茲에貴公爵의健康을祈하시니爾後로太子의  
輔導에勞할것이 아니라又屢屢히朕과相見할을得  
하야朕의闕漏를啓沃할을望하시니라

隆熙三年七月六日

株数  
申の表  
申の

申、出  
下  
申

申、供  
二  
申



漢唐書

以經史子集

部直會通

六書子集

加金史子集

會同之大感悅

江分北皆中其北相

出中其北相

京金北相

帝室持操教

一其北相





或新法  
會社

加口  
スミヤカニキ  
ニ株

十三株  
中  
の  
コニツ  
ル

一  
カ  
家  
口  
精  
神

一  
カ  
或ニ表  
ニ株

一  
カ  
家  
都  
心  
中

一  
カ  
見  
合  
ス  
ト  
者  
ニ  
ト

佐西川善子

リヤト素直同好家

栄光社

株より関一個

利子或

建のたそふか

又韓國王室

三三 易初武王

子數百千

由と付 加筆

比較 子

我由

市中定が共

系位は所もたじ

海外、此やうに作

西のヤリ海に林を

純は其所から今

日と回會結、中

子終る株を、我

雷株數，五刺

杜也

以片現況也

目：行尺，社名

一：振比已甚

上：來，去，在，家

痛：要，方，是，子

株、武株、小株

以所為、何

友軍純精神

的、強壯、勇猛

三、株、武株、小株

知

常字为母

下  
存  
注  
能  
通

内  
地  
之  
国  
像  
十  
二

免  
力  
角  
由  
是  
以

之  
無  
有  
以  
法  
能

道  
如  
中  
法  
河



一 請 在 世 界 的

設 想 一 種 新 的 名 義

自 力 自 救 國 運 視

漸 步 免 力 不

一 同 在 世 界

的件西、  
海、  
海、  
海、

以、  
何、  
官、  
由、  
今、  
存、

是、  
日、  
法、  
中、  
探、  
知、

都、  
法、  
中、  
探、  
知、

訓平直詩

王都文

音字朝長

甲集長

明治三十八年十一月二十九日 韓國皇帝陛下、命

依リ宮内府大臣李載堧、齊貢ニタル陛下、

要札覚書



明治三十八年

十一月二十四日 閣議 閣議 閣下 今三條 閣下 閣下 閣下

本閣議 閣下 閣下 閣下 閣下 閣下 閣下 閣下 閣下 閣下

一從來皇室費ハ莫ク、經常

費ノミ、宮内府ニ於テ豫算ヲ編

製シ之ヲ政府ニ送り、政府ハ各部、

豫算第ト同シ之ヲ議定シテ年額

ヲ定メ而シテ臨時費ハ一切隨時

之ヲ政府ニ要求シテ捧上セシメ

自今此制度ヲ改メ、經常臨時兩

費ヲ合セテ一年ノ皇室費ト

額ヲ定メ之ヲ宮内府ニ渡シ切リ

皇室ノ財政ヲ獨立セシメ度キ

二皇室所有財産即チ皇室

諸屬ノ礦山、紅蔘、驛田、比土

及各宮、陵園所屬ノ田土等ハ從

テ從前ノ如ク、皇室ノ所有

官有財産トシテ

但右之圖之一般、國稅ハ  
従前、如ク之<sup>國庫</sup>納付之事

三 帝室、財政及之所有財  
產、政府財務顧問、平  
涉、帝室自之之處理  
之事

四 一般、財政整理進歩、程  
度下矛盾セハ様帝室ニ於  
テモ務メテ諸弊ヲ矯正整  
理之事

五 宮林手書清其<sup>他</sup>諸制度、契  
害ヲ矯正スル<sup>ハ</sup>總テ文明國、  
模範ニ倣ヒ宮内府ニ於テ漸次  
之ヲ實行ス事

江華博覽會  
 圖書部  
 伊藤博文  
 手翰  
 1900  
 114



新機打破  
高步如飛  
口說無憑  
只恐其後  
初時不免  
多事多心



初遇其方

子其方

子其方

及此

此亦

其方

其方

其方

胡乃崇王老

王乃崇王老

王乃崇王老

王乃崇王老

王乃崇王老

王乃崇王老

王乃崇王老

王乃崇王老

子之父母

之父母

父母

父母

父母

父母

父母

父母

明为心学

何人

王

去

其

老

部官就地派委

派委之友之友

見升之百來世

部視之情新報

部之友之友

部之友之友

文武族域新報

今日到處求易

之知事之無一而

已去ス教之友存分

之發物ト之テ地

派也<sub>ん</sub>ト<sub>レ</sub>毛出

將之要求も之大

存<sub>上</sub>ト<sub>レ</sub>托<sub>テ</sub>此<sub>等</sub>

徳ハ派也難<sub>在</sub>本

不修論將才神奇  
廣潤之武軍職  
而耳之乎迴之盡  
有物令之除之外  
目下之安之鎮  
之半之舉之及之  
之其半之<sup>未</sup>之  
之<sup>之</sup>之<sup>之</sup>之<sup>之</sup>

爭先之氣鋒如

烈火情況窈子元

除口口確畢

竟想律節制

嚴整正力為一言

之昔也之唯上命

依通之進止元

之亦無之必事



情以相繫不教之友一

目以萬口之徒後

事之為年數回

來書步至五家

事之為年數回

事之為年數回

步至

國田總管殿

亦好合良之依新

復之必欲相得也

林其董之乙一說不

都令之乙一說不

都令之乙一說不

都令之乙一說不

都令之乙一說不

都令之乙一說不

續今歲

昔年多事早

子安之句

七月五日

詩

日夕

子安

名

安

子

名 称	伊藤博文文書
標 題	韓国皇帝統監邸臨御,件 明治四十二年二月六日

分 類 番 号	
	390.

国立国会図書館

登録 番号	215956
----------	--------

韓國皇帝統監部院御

明治四十二年二月六日

明治四十二年二月六日

神皇陛下統監官邸

臨御之件

玉案

明六日正午十二時執國皇帝陛下  
統監官邸へ臨御被為在山  
二付午前十一時三十分迄二大禮  
服着同官邸へ御参集  
成後依命此改申進也  
明治四十二年二月五日

統監祕書友古谷久綱

石塚參與官殿

手書

外波大信殿

錫島參與官殿

年書

國分主記友殿

小松主記友殿

中山主記友殿

前田通得友殿

竹井主記友殿

才多通得友殿

萩田主記友殿

岩井主記友殿

池邊主記友殿



鳥居通海友殿  
小山坡師殿  
蘇波通海友殿  
武  
武  
新

皇

明六日正午十二時  
統監官部  
臨御被為立

二付午前十一時三十分  
進三大禮

服着用同官部  
御參集相

成夜依命此段申  
進也

明治四十二年二月五日

統監秘書古谷久綱

國內部次友殿

手書

荒井度支部次友殿

亮并

草

倉富法部

次友殿存承

依學部

次友殿并承

木口農商工部次友殿并承

香阪法務院長殿

高田

國本通信管理局長代理殿

頭本囑託殿

日存所

138

105  
27  
132  
1

陛下

完  
陽  
天

統  
治

所  
治

大  
保  
大  
將

李  
德  
臣  
大  
臣

南  
書  
內  
大  
臣

宋  
內  
大  
臣

任  
事  
相

金鶴銘

廿八

北島洲團長

村田少將

外波大佐

吉谷祿主友

國分主記友

小松主記友

小松枝師

藤波通厚友

中山主記友

石塚主記友

× 錫島 參典友

× 前田 通輝友

× 佐井 祐玉友

× 萩田 玉記友

× 本多 通輝友

× 池邊 玉記友

× 島居 通輝友

× 岩井 牧師

× 香阪 法務院長

× 岡本 通信管理局長代理

石山鐵道管理局長及代理

及國運輸部長代理

乙頭本所託、

兼書記

明石憲兵隊長

山形憲兵中令

荒木憲兵大尉

杉山憲兵中尉



○大久保軍司令官

中務少輔參謀長

十時軍副友

廿八人

小宮 次友

~  
x  
倉富 次友

~  
x  
荒井 次友

~  
x  
岡 次友

~  
x  
懷 次友

~  
x  
木内 次友

~~静~~

三食堂銘百三十七人

陛下

統監公爵

義陽君

(次 席)

任度支部大臣

金中樞院議長

李中樞院議長

權中樞院議長

若林榮親

金奎章閣次官

完順君

內閣總理大臣

陸軍大臣

宮內府大臣

內務部大臣

軍部大臣

法部大臣

學部大臣

農商部大臣

中樞院顧問

承寧府總管

侍從院卿

掌禮院卿

宮內府次官

奎章閣卿

內閣書記官長

陸軍少將

勸業模範局長

典膳司長

伊藤博文

李完

久保春

閔丙

李秉

高永

李載

趙重

朴齊

趙民

尹德

咸岐

小宮三保

趙同

韓昌

朴田

李田

金田

君文

野用

曠

武

喜

應

熙

榮

連

松

熙

珠

澤

金

田

章

鉉

鉉

高階大帥官院副院長

鈴木日親局長

任度支部次官

宮內府書記官

憲兵中佐

統監府屬託

記録課長

副官

內閣總理大臣參事

統監府技師

度支部書記官

農商部書記官

典藥部書記官

內務部書記官

內務部書記官

參事

同

軍部大員副官

正

義陽府書記官

侍從

同

禮式部

李起

山形

李源

王瑜

金明

小芳

久直

川上

兒島

洪哲

吳在

多田

高源

同

朴明

金基

鄭基

李教

鄭東

姜容

劉容

村上

關

貞

鎔

植

秀

介

里

晉

豐

植

植

為

榮

元

趙

金

先

規

鳳

熙

燦

信

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

副院長

明石参謀長  
西島所團長

鄭詩之武乃

與



二

孝

1

副統監石城劉鑑  
前同僚仲蘇面本多

侍從官 典 津  
鄭侍從武及

徐主殿院理事  
前東膳司長

副統監 石塚鋁  
前同僚 井 萩田本多

遇刺電話にて中より有る如く幸之  
改動要領友にて供有随方  
及先客氏姓名を記す處有之  
身及所送身等也  
謹此奉告 百有

井上高内子書記

國公使館書記官

内閣

野八人  
宮内府

齋 重 記 官 長

俞 浩 勅 局 長

洪 重 記 官

金 重 記 官

高 重 記 官

上村 秘 重 官 事 務 記

李 重 記 官

國 公 重 記 官

小 宮 次 官

宮内府

計十一人

咸寧孔隱卿

趙奎厚卿

崔內病隱卿

金忠曠司長

李侍從

李承寧府侍從

高祀武官

李侍從副卿

李主府院卿

金從一品

李侍從

(書永)

李侍從

(奎元)



李礼部官

玄礼部官

劉礼部官

李礼部官(在)

金礼部官

多用礼部官

井上礼部官

李礼部官

青山礼部官

村上礼部官

堀江礼部官

權藤礼部官

平世礼部官

金學典上注書照

安孝子腰

洪典醫

佐伯屬記

呂毅官

白夢師長

魏侍從

金侍從補

李侍從補

李侍從補

朴祀部官

李承寧府侍從

金學典官(世)

計參拾人

軍部

徐之政理學  
徐製衣藥師

魚汝理部官

李步兵司尉

郭全

洪全副尉

金軍部副官

王步兵副尉

吳全司尉

魏全

宋全

金砲兵副尉

申步兵參領

朴砲兵參領

鄭步兵副尉(監)

姜全

鄭砲兵副尉

李全

柳全

李二守軍匠

成三守軍司

金默一匠

出通教官

大然教官

計之廿二人

内部

松井孝雄局長

沢田地方局長

白根重信

境瑞澤信

具志親副官

難本匡信

比島枝師

浜島子學友

中村枝師

劉士本局長

渡部信信

討十八人  
度支部

高陽

方有廷  
劉恩良

林田

子紹  
子官

史

升  
王  
汪  
官

立

許  
多  
官  
官

金

家  
義  
觀  
官  
官

李

手  
官  
觀  
官  
官

趙

書  
官  
觀  
官  
官

龍

本  
之  
視  
官  
官

朴

秘  
官  
官  
官

久

芳  
官  
官  
官

西

漢  
官  
官  
官

計五人  
監事部

計五人  
監事部

坂出技師

李秋吉  
治石子安

中村重隆局長代辦

青山林局長

鄭水產局長

川上重光

鶴岡正徳

張秋才

吉里

討九人  
合計百〇五人

如田勸業権託局長  
黒岩清山局長代行  
通事技師



215956

6

昭和5年10月18日



明治四十二年二月六日午餐

# 献立

一	一	一	一	一	一	一
冷	牛	鯛	牛	洋	山	櫻
鷄	洋	洋	纖	松	七	實
羹	酒	酒	肉	葉	面	入
	蒸	蒸	蒸	獨	鳥	蒸
汁	煮	煮	燒	活	燒	子
物	製	製	燒	元		

乾酪  
雜菓  
果

洋芹添  
注汁



215956

昭和25年11月18日

朕<sup>此</sup>今次地方民情ヲ視察センカ爲  
 マ西南各處ヲ巡<sup>此</sup>以<sup>此</sup>スル<sup>此</sup>當リ伊豫  
 統監前後其ノ老齡ト病軀ヲ惜  
 マ<sup>衝</sup>寒<sup>衝</sup>街<sup>衝</sup>扈<sup>衝</sup>從<sup>衝</sup>シ朕カ躬ヲ憐  
 益<sup>衝</sup>シ對<sup>衝</sup>處熱心曉諭愚昧ナル人  
 民<sup>衝</sup>シ<sup>衝</sup>テ漢<sup>衝</sup>弦<sup>衝</sup>氷<sup>衝</sup>釋<sup>衝</sup>歡<sup>衝</sup>喜<sup>衝</sup>セサルモ  
 ナカラシム居留日本官民モ亦奔走  
 偕<sup>此</sup>ニ來<sup>此</sup>テ同情歡迎ニ和氣融融<sup>此</sup>夕  
 ルモノアリ<sup>此</sup>皇<sup>此</sup>レ實<sup>此</sup>ニ伊豫統監平日

韓日兩國，為<sub>メ</sub>誠心至意，寧  
格<sub>ル</sub>所<sub>レ</sub>朕今日來訪其勤勞<sub>ヲ</sub>  
慰<sub>ム</sub>同<sub>ニ</sub>無<sub>ク</sub>感<sub>ホ</sub>，衷心<sub>ヲ</sub>表<sub>ス</sub>

隆熙三年二月六日

御名

有答

本日陛下ノ出親臨ノ辱ニ  
今固古北西

出巡、方りて、  
臣、  
改シテ、  
微、  
骨、  
と、  
対

之特之修誼之勅詔之賜八

此曜托古，彼ハ曹ハ漢ハ明ハ清ハ先ハ宗ハ

下  
心謝意以奉

救  
悟



朕以此次川地方民情視察言其為言昨西南各處川巡行言  
此時言當言昨伊藤統監川前後川其老齡川病軀言不惜  
言且衝寒扈從言昨朕躬言裨益言且到處言其熱心曉  
諭言昨愚昧言人民言且渙然冰釋言昨莫不歡欣言且  
居留言且日本官民言奔走偕來言昨同情歡迎言昨和氣  
融言且此實伊藤統監川平日川韓日兩國言為言昨誠  
心至意言乎格言且朕川今日川來訪言昨其勤勞  
言慰問言且兼言昨感謝言衷心言表言且且

隆熙三年二月六日

李 圻

明治二十二年十二月五日  
 命此段申進也  
 午前十一時三十分迄二大袈服着  
 用同友部ハ小参集相成夜依

明治二十二年十二月五日

統監祿及古谷久綱

石山鉄之管理局長及代理殿並業

國運輸部

長殿並業

名 称	伊藤博文文書
標 題	伊藤統監謁見始末並大臣會議筆記 明治三十九年七月三十日 井上侍從武官 ニ託シ内奏同日同武官ニ託シ内閣總理大臣へ送付

分 類 番 号	
	392

国立国会図書館

登録 番号	215958
----------	--------



極  
秘

(187)

(第三號)

統  
監  
手  
控

伊藤統監謁見始末並大臣會議筆記

明治三十九年七月三十日井上侍從武官三託內奏  
同日同武官三託內閣總理大臣一寫送付

目次

一六月二十八日伊藤統監正式謁見見始末

一七月二日伊藤統監謁見始末

一七月二十七日伊藤統監謁見始末

一韓國施政改善ニ關スル協議會第六回

一韓國施政改善ニ關スル協議會第七回

一韓國施政改善ニ關スル協議會第八回

一韓國施政改善ニ關スル協議會第九回

215958

2

昭和25年10月12日

六月二十八日伊藤統監正式謁見始末書

儀々々々

六月二十八日午後四時伊藤統監正式謁見始末

隨行員

陸軍少將村田 醇

同上

海軍少將 宮岡直記

同上通譯、為統監府書記官國分象太郎  
兼祕書官

統監御前ニ進ミ寒暄、御挨拶終ルヤ陛下  
ハ我兩陛下始メ皇室御一統御健勝ニ被爲  
渡哉トノ御尋アリ之ニ對シ統監答奏スル所  
アリツツテ我天皇陛下ノ御宸翰ヲ捧呈ス  
陛下ハ右御宸翰ヲ披キ御一覽後

陛下

如斯ク鄭重ナル貴國皇帝陛下  
御宸翰ヲ接閲シ衷心喜悅ニ堪ヘス  
義親王ヲ派シ大觀兵式ニ參列セシメタル  
ハ日韓兩國ノ關係上當然ノ禮ニ屬ス  
然ルニ茲ニ御懇書ニ接シ却テ汗顔ニ  
堪ヘス云々

於是統監ハ滿州視察ノ歸途立寄リタル樺  
山大將西清浦兩樞密顧問官並ニ折柄  
來京中ナル日根野侍從澁澤男爵等ヲ帶  
同セル旨ヲ奏シ且之ヲ陛下ニ紹介セラル、ヤ陛下

下ハ各別ニ御會釋アリ各員御前ヲ退出シタル後

陛下 今日ハ統監、都合次第ニテ陛下ハ

此時明ニ統監トノ語ヲ用ヒラル也諮詢致度件モアリ緩々退出セラレテハ如何

統監 本官モ色々伺ヒ度件モアリ又奏請

シ度件アルモ今日ハ正式ノ謁見ニテ斯ク

禮装ヲ為シ居レルニ付數三日内ニ更ニ

内謁見ヲ乞ヒ通常禮装ニテ參内緩々

奏聞致度就テハ陛下御都合ノ日ヲ御

指定アラシコトヲ希望ス

陛下 果シテ然ラハ七月一日若クハ同二日  
ノ両日中ヲ撰ヒ更ニ召見スル事ニ約シ  
置キタシ云々

右ニテ式了ツテ統監ハ御前ヲ退出セラル

新

58

日

七月二日伊藤統監内謁見始末書

虎

監

守



御覽

七月二日午後四時半伊藤統監内謁見始末

此日内謁見、席ニ唯禮式院卿李容泰  
ノ侍立セリ

國分書記官通譯並筆記

統監

今日、折入テ中上度事アリ且聖慮ノ

程ヲモ伺度旁先日御親翰捧呈、際ノ御  
約束ニ基ツキ参内セリ

帝國政府カ統監ヲ京城ニ駐在セシムルニ至  
リ、所以ノモノ即昨年十月中日韓兩國  
間ニ締結セラレタル協約ノ結果ニ基ツクモノ

ニシテ其ノ又協約タルヤ陛下御承知通陛  
 下ノ御希望ヲ容レ字句ノ修正等ヲモ行ヒタ  
 ル上勅裁ヲ經テ締結セラレタルモノナリ然ルニ  
 何故カ陛下ハ右協約ニ基ツキ帝國政府ノ派  
 遣セル統監即チ本官ノ任務ヲ御承認相  
 成ラサルヤニ漏聞セリ故ニ先般本官歸朝  
 ノ際此ノ次第ヲ我カ天皇陛下ニ奏聞シタ  
 ルニ我カ陛下ニ於セラレテモ其レハ甚不都合  
 ナリ本官歸任ノ日直ニ謁見ヲ乞ヒ聖意ヲア  
 ル所ヲ確メ明確ナル御答ヲ得テ奏聞ス

ヘシト、勅命ヲ蒙リ居リ就テハ之ニ關シ聖  
意ノアル所ヲ承知致度シ

陛下

曾テ左様ノ事ナレ昨年ノ協約ハ只今  
卿ノ云ハル、如ク朕ノ希望ヲ容レ字句等ノ  
修正ヲ為シ然ル上協定ヲ見タル次第ナリ  
且朕ハ卿着任以來屢統監ナル語ヲ口ニ  
セルハ國分書記官モ認ル所ナルヘシ其ノ間  
或ハ書翰往復ノ際其ノ筋ノモノハ不注意ヨ  
リ統監ト書スヘキヲ只侯爵ト記シタル事ア  
ラモ升ハ普通ニ伊藤侯爵ト呼慣

レタル習慣ニ出タルモノニシテ敢テ故意ニ官  
名ヲ除キタルニハアラサルヘシト雖蓋シ是等ノ  
点ヨリ一種ノ誤聞ヲ傳ヘタルニハアラサルカ  
朕ハ更ニ統監不承認等ノ意思アラサルコ  
トヲ了解セラレタル

統監 斯ク明白ニ陛下ノ御答ヲ承ハル上ハ強  
テ之ヲ追窮スルノ必要ナキナリ

ト述ヘ更ニ語ヲ繼テ

夫レ韓國ニ於ケル統監ノ職務ハ各般ニ互ル  
ト雖就中外交事務ニ關シテハ恰モ韓國ノ

外務大臣ト同視スヘキモノナレハ苟モ事外交ニ  
關スルモノハ本官ノ進言ヲ採納セラレサルヘカ  
ラス然ルニ本年三月初ニ於テ各國領事ヲ  
引見セラレントスルニ當リ時ノ統監代理ナリシ  
長谷川大將ハ其ノ謁見ノ席ニ侍立セシコト  
ヲ要求シタルニ陛下ハ何故カ粹カニ各國領  
事謁見ノ舉ヲ却止相成リタルヤニ承  
知セリ長谷川大將、右ノ請求ハ至當ニシテ  
統監代理タル職責上此ニ出タルナリ  
抑貴國ニ於ケル對外關係ヲ日本ニ於テ

引受ケタル以後ハ當地ニ外交官ナルモノナシ  
唯總領事若ハ領事アリト雖是レ外交  
官ニアラス其職務ハ專ラ自國商民ノ利  
益ヲ保護スルニアリテ公然皇帝陛下ニ謁  
見ヲ請求スルノ権能ナシト雖陛下ハ他  
國官吏ヲ優遇セラルハ趣旨ニ出テ其ノ  
着任若ハ歸國ニ當リ本官ヨリ謁見ヲ  
請求スル場合ニ於テハ之ニ拜謁ヲ賜ハルコ  
ソ至當ノ御措置ニシテ彼等ハ又陛下ノ殊  
遇ヲ感戴スヘキナリ

茲又差當リノ問題ハ英總領事ノ申出ニ  
據ル同國ノ支那艦隊ハ其ノ司令長官  
引率ノ下ニ來ル八月十日頃釜山ニ着シ同  
十四日頃仁川ニ廻航スル趣ニテ仁川着ノ上  
ハ其ノ司令長官等敬意ヲ表スル為謁見  
ノ榮ヲ得度旨本官迄依頼アリタリ就テハ  
其ノ節本官ヨリ更メテ拜謁ヲ請求スヘケレ  
トモ豫メ陛下ノ御内意ヲ承知シ置キタレ  
陛下  
其ノ際病氣等ノ故障ナケルハ勿論引  
見スルコトニ致スヘシ

又過般長谷川大將代理中各領事ノ謁見ヲ  
断リタルハ粹カニ病氣罹リタルニ由ル敢テ  
他意アルニアラス

統監

露國總領事モ亦已ニ我國來着

シ居レリ委任状宛名ノ件ニ關シ彼是交渉  
ヲ重ネタルモ是亦帝國政府ノ意見通リ大  
體ニ於テ決定シタルニ付不日當地ニ着任ス  
ヘシ同人モ着京ノ上陛下ニ拜謁センコトヲ希  
望シ本官ニ依頼スル所アリタリ此儀ニ豫  
メ聖聞ニ達シ置ナリ



陛下

承知セリ着任ノ上宜ノ取計ヲヘシ

統監

日本カ韓國ノ外交ニ關スル一切ノ責任

ヲ取リタル今日貴國ニ存在スル國際條約  
ノ原本ヲ一應帝國政府ニ於テ取調ヘ置ク  
必要アリトノ事ニテ過般統監府ヨリ貴國  
府ニ其ノ引渡方ヲ照會シタルニ右ハ宮中ニ  
保管セラル、趣ミテ未タ接受ノ運ニ至ラス  
全體條約書類ノ如キモノハ當然政府ニ保  
管セラルヘキモノニテ宮中ニアルヘキ筋ノモノニ  
アラス兎ニ角一應御引渡ヲ受テ帝國政

府ニ於テ用濟ノ上、重ネテ貴政府ノ保管  
ニ移スモ可ナリ

陛下

宮中ニ條約書ノ原本ヲ保管スルニ至リタ

ル理由ハ去ル壬午年（明治十五年）内亂ノ際

暴徒宮闕ヲ犯シ重要ノ書類ヲ失ヒタルコト

アリ宮中ニ在ルスヲ如此況ヤ政府ニ委スルニ

於テ甚危険ヲ感セリ故ニ之ヲ北漢山上ノ

史庫ニ移シ後又江華城ニ保管セシメ置

キタリ然ルニ一昨年二月日韓間議定書締

結ノ際參考ノ必要アリテ宮中ニ持来ラシ

又當時李址鎔沈相薰等之ヲ一覽シタル  
後三月下旬宮中火ヲ失レ殿閣炎上ノ際  
或ハ燒失シタルニアサルカ以來其ノ所在ヲ發  
見ス能ハス今尚探索中ニ屬セリ

## 統監

凡ソ國際條約ナルモノハ法律ト一般其  
締結ノ際之ヲ公布スルモノナルカ故ニ一旦國際  
間ニ締結セラレタル以上ハ其ノ原本ノ有無ニ  
關シ効力ニ何等輕重アル所アルモノニアラス依  
テ貴國ノ手ニ保管セラレ居ル條約書カ燒  
失シタリトセハ其ノ事實ヲ列國ニ向テ宣言

六足<sup>レリト</sup>信<sup>ス</sup>綴<sup>シ</sup>又一方、原本カ焼失<sup>シタル</sup>  
ニセヨ對<sup>テ</sup>手一方、原本ハ存在<sup>スルカ</sup>故ニ更<sup>ニ</sup>顧  
慮<sup>スルニ</sup>足<sup>ラス</sup>本官ハ右ノ趣本國政府ニ通報  
シ宣言ノ手續ヲ取<sup>ラシム</sup>コト、スヘシ

陛下

李址鎔沈相薰等ニモ聞<sup>ル</sup>紀<sup>シ</sup>今一應  
搜索<sup>スヘキニ</sup>付列國ヘノ宣言 今暫ク見  
合<sup>ハセ</sup>ラセタシ

統監

過日本官カ齎<sup>ラシタル</sup>我天皇陛下ノ御  
親翰中ニモ統監ヲ信任<sup>シテ</sup>其奏請<sup>スル所</sup>ヲ  
聽納<sup>セラレシ</sup>コトヲ望<sup>ム</sup>云々トアリ是レ本官カ

常ニ赤心ヲ披瀝シテ陛下ニ忠實ナルヘキコト  
ヲ我陛下ニ於テ御信用アラセラル、カ故ニ右ノ  
御忠告ニ出テタルモノナリ依テ本官ハ是レヨリ  
貴陛下ニ對シ最忠實ナリト信スル所ヲ諫  
奏スヘシ顧ミレハ客歲十一月廿九日本官當地  
出發ニ當リ陛下ハ宮内大臣ヲ本官ノ許ニ特  
派シ五箇條ノ條項ヲ擧ケ示サレタル中帝  
室ノ財政ニ關スル事項就中帝室費増額等  
ノ事ニ關シテハ本官專ラ陛下ノ御希望ヲ  
達センコトヲ力メ且ツ之ヲ實行シタルニ條ラス

陛下御自身ニ御誓言被爲遊タル事項乃チ  
宮禁ヲ清肅ニシ文明ノ模様ニ倣ヒ宮中ノ改  
革ヲ行フヘシトノ一條ニ至ツテハ未タ何等其實  
行ヲ見ル能ハス而シテ右五條ナルモハ陛下ニ於  
テ今尚御記憶相成リ居ルヤ否

陛下 記憶シ居レリ

統監 果シテ然ラハ其後ニ於ケル宮中ノ情況ハ

如何ト筈巫女ノ輩依然宮禁ニ出入シ挾雜  
ノ徒宮中ヲ紊亂シツ、アル事實ハ内外人ノ等  
シク認ムル所如此キハ文明國ノ宮中ニ其例ヲ

見サル所之レヲ以テ猶ホ陛下ハ文明國ノ模範  
ニ倣ヒ宮中ノ肅清ヲ行フモト思召スヤ否

陛下 黙セラル

統監 日韓議定書ニ據リ帝國政府ハ韓國皇  
室ノ尊嚴ヲ維持シ庸寧<sup>庸寧</sup>ヲ保障スルノ責ニ  
任セリ而シテ直接ノ責任者ハ統監タル乃チ  
本官是ナリ然ルニ本官ハ皇室ニ對シテ彼  
此干渉ケ間敷フトヲ為スハ妥當ナラスト信シ  
タルカ故ニ可成之ヲ避ケンコトニ力メ今日迄之ヲ  
放任シタリト雖モ已ニ宮中ノ亂雜前陳ノ如ク

ナルニ拘ハラス猶此儘ニ打棄テ置カシカ肅清ハ  
 愚カ日韓兩國ノ交誼スラ妨礙セントスル雜  
 輩ノ出入日ニ頻繁ヲ加ヘ結局如何ナル椿事  
 ヲ惹起スルヤモ知レス事爰ニ至ツテハ本官ハ職  
 責上最早黙過シ難キモノアリ例セハ陛下ハ儒  
 生金升敏ナル者ヲ宮中ニ引入レ之ヲ利用セ  
 ント試ミラレタル如キ現ニ同人ハ我憲兵ノ手  
 ニ於テ取調ノ結果其携ヘタル書類中聖上曰  
 島夷敵臣伊藤長谷川云々トアリ是レ陛下  
 諸ナリヤトノ問ニ對シ彼ハ真實然リト答ヘタル



由是レ果シテ陛下カ日常日韓兩國ノ交誼ヲ  
敦睦ナラシムヘシト宣ミ給フ聖旨ト一致スルモノ  
ナルヤ否雖然本官ハ陛下ノ御為ヲ慮カリ帝  
國政府ニ報告スルコトハ之ヲ見合ハセタリ何トナレ  
ハ若之ヲ帝國政府ニ報告セシカ事重大ニ至ル  
ノ虞アレハナリ又本官ハ宮中ト暴徒トノ關係  
ヲ承知シ現ニ暴徒ニ對シテ宮中ヨリ資金ヲ  
供給セラレタルノ證據ヲ有ス同時ニ宮中ト暴  
徒ト暗ニ連絡ヲ保テルコトモ宮中ト上海浦  
鹽地方ニ在ル韓人間ニ密使密電ノ往來スル

コトモ亦能ク承知シ居レリ而シテ今日迄之ヲ放  
任シタルハ全ク寛大ニ失セルモノニシテ既ニ紊亂  
其極ニ達シ尚此ノ儘ニ打棄テ置カニカ本官  
ハ其職責ヲ懈ルノ責ヲ免レス故ニ此際陛下  
下ノ御為ヲ慮リ誠意以テ宮禁ヲ肅清ノ實  
ヲ擧ケン為テ宮中取締ノ方法ヲ講セントス希  
クハ陛下能ク本官ノ諫言ヲ容レ御採納ア  
ランコトヲ

陛下

宮禁肅清ノ事敢テ思ハサルニ非ラスト雖  
モ未タ其實効ノ擧ラサル卿ノ觀察ノ如シ而シ

金

テ李升故ノ一事ニ至ツテハ臣下中同人ヲ稱賛  
シテ推薦スルモノアリ我國古來ヨリノ習慣トシテ  
儒林中其人才ヲ撰ヒ之ニ席ヲ與ヘ其說ヲ聞  
ク例アリ李<sup>金</sup>ノ如キモ亦之レト同一禮遇ヲ與ヘ  
タルニ過キス故ニ其召見ノ席ノ如キ多ク侍臣  
倚立セルアリテ其當時問答傍聽ス豈敵臣  
云々ノ如キ言論ヲ朕自ラ為ス<sup>理</sup>望アラシヤ能ク  
仔細ニ取調ラル、ニ於テ事實自ラ明晰ナルヘシ  
統監 勿論我官憲ニ於テ此上取調ヲモ為スヘシ  
又本官ハ其等ノ事實ニ關シテ判決ヲ下スカ如

オ裁判官ニ非ラサルカ故ニ事實ノ證據調ヲ  
為ス必要モナシ

叔テ本官ハ前ニ陳奏セシ如ク帝室ノ安寧  
及尊嚴ノ維持ニ關シテハ重大ナル責任ヲ有  
スルカ故ニ其責任上相當ノ取締法ヲ設クルハ  
刻下ノ急務ト認メ深思熟考ノ結果一時ハ  
我憲兵ヲ使用センカトモ思ヒタルモ斯クテハ韓  
國ノ體面ニモ係アルヘキニ付先ツ韓國ノ警察  
ナル顧問警察ヲシテ之ニ當ラシムルコトニ決意  
シ即チ九山顧問ヲシテ專ラ官闕ノ外門取締

ハ責ニ任セシメ宮禁肅清ノ實ヲ擧ゲシメント  
シ期ス其詳細ノ方法等ニ至ツテハ貴國當  
該官警務顧問官<sup>及</sup>統監府ノ官吏ヲ以テ  
委員ヲ組織シ之レヲシテ協議セシムルコトニ  
決定セリ右ノ邊陛下ノ御同意ヲ乞ハントス

陛下

先ツ當方ニ於テ相當取締法ヲ設ケ之  
ヲ勵行スヘキニ付其ノ上若シ其實効ヲ奏ス  
ル能ハサル場合ニ於テ顧問警察ノ手ニ一任  
スル事トセハ如何

統監

事ヲ既往ニ顧ミルニ何程陛下力貴

國官憲ヲ督勵シテ官禁肅清ノ事ヲ實  
行セント欲スルモ到底行ハルヘキニ非ラス本官  
カ斯ク今日申上クルニ至リシ迄ニハ充分ノ考  
慮ヲ加ヘタル末ニ出ツ最早此ノ上緩漫ニ附  
スル事ハ事情ノ許サレハ陛下ノ御希  
望ニ副フコトヲ得サルヲ以テ速ニ御同意ア  
ラシクコトヲ請フ

陛下 果シテ然ラハ事情不得止次第ナリ

統監 △陛下カ事大小トナク都テ政事上ニ御干  
渉相成ルハ宜シカラス又如何ナル聰明ナル君

陛下 然ラハ事情不得止次第ナリ  
統監 △陛下カ事大小トナク都テ政事上ニ御干  
渉相成ルハ宜シカラス又如何ナル聰明ナル君

主ト雖モ些末ナル事ニ迄立入ツテ之ヲ主  
宰シ得ヘキニ非ラス宜シク政府當局者ニ  
任シテ之ヲシテ責成セシメ給フニ如カス況ニ  
ヤ小策ヲ弄シ密計陰謀ヲ事トセラル、カ如  
キハ決シテ賢明ナル君主ノ御行為ニアルマシキ  
事ナリ

陛下 否昨今朕ハ敢テ政治上ニ容喙スル如キ  
事ナシ何トナレハ我臣僚等ハ事ノ可ナルモノハ  
自ラ取テ其功ヲ収メンコトヲ欲シ其不可ナル  
モノハ陛下親ラ之ヲ為セリト稱シテ其責ヲ朕

ニ嫁スル如キ傾キアルニ由ル

右ニテ統監ハ御暇ヲ告ケ御前ヲ退出セラル  
時ニ午後七時三十分



七月二十七日伊藤統監内謁見始末書

七月廿七日午後五時伊藤統監内謁見始末書

國分書記官通譯並筆記

陛下統監ト間寒暄ノ挨拶了リ統監ハ  
過日來陛下御不例被為渡タルニ付其御  
見舞ヲ奏上セラレタル後陛下ハ井上侍從  
武官ヲ引見シ左ノ御傳言ヲ我天皇陛下  
ニ轉奏セシトシ以テセラル

一義親王滯在中貴皇室ヨリ鄭重  
隆盛ナル御待遇ヲ享ケタル段朕衷  
心感謝ニ堪ヘス

一 過日御親翰ニ接シ且佳撰ナル物品  
ヲ寄贈セラレタルハ是亦深謝スル所共  
物品ノ如キ永ク之ヲ寶藏スヘシ

一 伊藤統監ノ勤勞壯者ト雖尚ホ及ハ  
サル所朕極メテ満足ニ居レリ

過日不取敢親電ヲ發シ一應謝意ヲ

表シ置キタルモ猶又右ノ趣親シク奏達

セラレンコトヲ望ム云々井上侍從武官謹

テ聖旨ノ在ル所ヲ以テ我天皇陛下ニ

奏達スヘキ旨ヲ答奏シ退出ス嗣テ病

院設立ノ企圖ニ關シ囑託ヲ受ケ來  
韓シタル佐藤軍醫總監不動產法調  
査事務主任ヲ囑託セラレタル梅大學  
教授及赴任ノ途次立寄タル岡崎第十  
三師團長并ニ若見參謀長等ニ順次  
謁ヲ賜ハル

右一同、謁見ヲ終リ御前ヲ退出スルヤ陛  
下ハ總監ニ椅子ヲ賜ヒ御對談ノ始末  
如左  
總監過日謁見、際ハ御迷惑ナルコトヲ

奏請シ且其實行ヲ見タル宮禁肅  
清ノ件モ以來着々其歩ヲ進メ追々  
實効ヲ奏スルコトト信セラル

陛下 宮中肅清ノ事曾テ之ヲ思ハサル  
ニ非カリシト雖未タ其適當ナル者ヲ  
見出ス能ハスシテ其實行自ラ遷延  
ニ及ヒタル次第ナリシ然ルニ今回委員  
等其實行ノ責ニ任シ着手シタル結果  
宮中へ雜輩ノ出入モ爲ニ全ク一掃セラ  
ルニ至レリ而シテ彼ノ金計故ヲ推薦

シタル内官姜錫鎬ノ未タ縛ニ就カサ  
ルハ遺憾トスル所而シテ自ラ義兵ノ  
巨魁トシテ紛擾ヲ挑發シタル崔益  
鉉ノ如キ又朕カ言ヲ詐稱シ兩國ノ  
交誼ヲ傷ケント試ミタル金升故ノ  
如キ共ニ我國法ノ嚴罰ヲ免カレサル  
モハ此際之ヲ我法部ニ引渡シ我國  
法ノ制裁ヲ享ケシムルコトト致シタシ  
統監 洪州暴徒討伐ノ際我軍隊ノ手  
ニ於テ捕獲セラレタルモノノ中五名ハ死

情

刑ニ處セラルヘキ筈ナリシモ本官ハ彼等  
ニ終懲ヲ加ヘ酌量減刑セシメタル結果  
一等ヲ減シ監禁律ニ處セラレタレハ適  
當ノ場所ヲ撰定シ彼等ヲ監禁スル  
コトニ取計ラハシムヘシ  
抑、該暴徒起擾ノ始ニ於テ貴國軍  
隊直ニ之ヲ鎮壓シタランニ何等我軍  
隊ノ手ヲ煩スノ必要ナカリシニ事此ニ出ス  
畢竟我軍隊ノ手ニ於テ之ヲ討滅シ  
其捕獲シタル暴徒ハ即チ我軍隊

# 借

ノ捕虜ナルカ故ニ我ハ我軍律ニ照ラシ  
之ヲ處斷セサルヲ得ス

陛下 洪州暴徒ノ處分ハ右ニテ可ナラシ只  
崔益鉉及金升敏ノ兩人ニ至ッテハ我  
法部ニ引渡ヲ望ム次第ナリ何トナレハ  
崔ハ其稱スル所義我兵ヲ起スニアリト  
云フモ為ニ地方ノ騷擾ヲ醸成シタルモ  
ノナレハ我國法ハ寸毫モ假釋スヘカラ  
ズ金ハ朕ノ言ヲ矯メ國交ヲ傷ケント  
セシモノ我國君臣間ニ於テスラ金ノ如キ



行爲ヲ為スモノアルトキハ死刑ニ處セラル、  
ヲ常トス況ンヤ國際間ニ重大ノ事端ヲ  
惹起セントセシ彼ノ如キモノハ重罰ニ處  
シ懲一儆百ノ舉ニ出ラサルニ於テ將來  
又其尤ニ倣フモノナキヲ保セス

統監 爾來陛下ハ金汁畝ノ如キ輩ヲ輕  
々ニ引見セラレサルヲ要トス縱ヒ如何ナ  
ル學者カ深山幽谷ノ邊ニ棲息シ  
居ルニセヨ其樹木ト對座スルモ安シソ  
世界ノ大勢ヲ遠觀シ國家ヲ料理ス

ルノ卓識ヲ有スルノ理アラシヤ故ニ若陛下  
下金計故ノ輩ヲ信用シテ國政ヲ諮  
詢セラルルナランニ然ニ國家ノ滅亡ヲ速  
ニスルノ外國運ノ興隆ナトハ思ヒモ寄  
ラサルコトナリ其他巫觋ト並念佛祈  
禱ノ如キ人間ノ智識以外ニ何等神  
通靈妙ノアルヘキ筈ノモノニ非ラス之レ  
ニモ係ラス陛下如此徒ヲ近ツケ且之ヲ  
信仰シ給ハシカ恐レ多キコトナカラ是レ  
然ニ暗愚ノ君主タルヲ免カレス

又山林ニ隠クルル儒者ヲ遠ク招キ來テ  
之レト國政ヲ議セントナラハ寧ロ孔夫子  
ノ白骨ヲ求メ來テ之ト對座國政ヲ議  
セラルルノ優レルニ如カス

陛下

御失笑アツテト筵巫瞽ノ輩ニ至テハ

之ヲ近クルノ必要ナシトハ卿ノ言ノ如シ

ト去儒生中山林ノ如キニ至テハ我國

風ハ大ニ之ヲ尊敬シ朕カ政府大臣ヲ引

見スルニ當リ必スシモ起座スルヲ要セザ

ルモ獨リ山林ニ至テハ朕座ヲ起ツテ之ヲ

迎フルヲ例トス故ニ政府大臣モ彼ヲ呼テ  
 長席ト稱ス是レ大臣ノ上席ヲ與ヘラル  
 ル習慣ヨリ來ルモノナリ然ルニ朕雜輩  
 ノ爲ニ誤ラレ金升紋ノ如キモノヲ待ツ  
 ニ山林ノ例ヲ以テシタルカ如キハ全ク朕  
 カ不明ノ致ス所ニシテ顧ミテ報然タラ  
 サルヲ得ス殊ニ可驚一事ハ敬言使ノ報  
 告ニ據レハ金升紋ハ念珠ヲ懷ニシ居  
 タリトノコト果シテ然ラハ是レ即チ佛  
 法ニ歸依スルノ徵證ニシテ其所謂儒

何等活用スル所ナクシテ止ムモナリ外ナシ  
如此キハ小學ノ兒童ト雖敢テ學ヲ  
ニ難キヲ感セサルヘシ

儒者ナルモノノ真價ナキ已ニ如此然ル  
ニ陛下ハ汎ク儒者ヲ野ニ求メ之ニ就  
キテ國政ヲ資セントセラル、如キハ妄モ  
亦甚シキモノナリ

陛下然リ卿ノ言ノ如シ今日●國民ノ知識新  
開發ハ教育ニ待タサルヲ得ス而シテ之  
ニ由ツテ人才ヲ採用スルヲ得策トス頑

固ナル儒者ノ能ク料理スヘキ所ニ非ラス  
過般來政府大臣中ニモ宋山林（宋ハ  
昨年月韓協約締結後藥ヲ仰テ自殺  
シタルモノ）後繼者ヲ出ササルヘカラス  
トノ説ヲ主張スルモノアリテ是レ國家  
ヲ料理スル上ニ必要ナリト云フニアルモ  
朕ハ固ク其不可ヲ執テ許サス何ト  
ナレハ山林後繼者出シカ例ニ由ツテ其  
頑固説ヲ主持シ國政ヲ非難シ  
國務大臣ヲ詰責スル上疏建白百

出シ衆論亦之ニ伴フテ起リ必竟  
施政改善ノ進行ヲ妨害セラル、恐  
アレハナリ

朕ハ茲ニ各大臣ヲ招見シテ注意ヲ  
與ヘント欲スル一事アリ是レ他ニアラス  
今日ノ國務大臣ハ昨年日韓新協  
約ノ締結ニ參加シタルカ故ニ國民  
呼ンテ五賊ト排斥シ且朕ノ信用缺  
乏セルカ為到底施政改善ノ事業  
ヲ決行シテ其効果ヲ收ムルコト能ハ

スト自ラ信ミ自ラ譲讓シテ國政上熱  
心ナラサル嫌ナキ能ハス因テ朕ハ彼等  
ニ對シ他國ニ於ケル志士ナルモノカ國  
政刷新ノ秋ニ當リ如何ニ獻身的ニ  
其事業ヲ遂行シタルカニ就キ例ヲ援  
キ大ニ彼等ノ意ヲ強フシ奮起セシム  
ル所アラントス卿ノ考ハ如何

統監

各大臣ヲ獎勵シテ施政改善ヲ

圖

ラシメラルルコトハ極メテ必要ナリ國

民中頑迷ノ徒當時ノ狀況如何ヲ察



せ不濫ニ五賊ヲ以テ呼フト雖倘ニ其  
 當時協約ノ締結ヲ決行セサリシナラ  
 ニハ國家ハ如何ニ成行オタルヤヲ思  
 慮セサルカ如キハ愚ノ極ナリ要スルニ  
 何ノ時代ト雖國民ノ知識ハ時局達  
 觀ノ明ナキニ座シ徃々意見ヲ異ニス  
 ルコトアルヘキモ升ハ局ニ當ルモノ利害  
 得失ニ顧ミ判斷ヲ下スノ外ナカルヘ  
 シ而シテ國民モ亦終ニ之ニ想到ス  
 ルノ日アルヘキナリ

陛下然リ日本ノ維新ニ當リ當局者ノ  
困難ナリモコトハ實ニ想像以外ニアリ  
大臣中刺客ノ為横死セシモノ四肢ヲ  
失ヒタルモノ救擧スルニ遑アラス其レ  
之ヲ思ヘハ我政府大臣タルモノ勵精  
一番國政刷新ヲ以テ自ラ任ミ且之  
ヲ遂行スルニ於テ何ノ難キ事之レアラ  
ンヤ朕ハ今夕若大臣ヲ召シ以是彼  
等ニ告ケ五賊ト呼ハルルモ敢テ意ト  
スルニ足ラス他日必ラス其實効ヲ期シ

國民ヲシテ會得セシムル所アラシメンコトヲ

勵告セントス

統監 宮中肅清ノ事漸ク其實行ヲ見

タリト雖尚ホ進ニテ宮内府官制改革

ノ必要ヲ認ム然ルニ這回御任命相

成リタル宮内大臣侍從院卿ノ兩人ハ

年少氣銳ノ人々ナルカ故從來宮中ノ

情弊ヲ排斥シテ其刷新ヲ決行シ

陛下ノ恩遇ニ對ヘサルヘカラス本官モ

其積ニテ兩氏ヘ督促ヲ加ヘントスルモノ

ナリ

陛下 然リ彼等ハ皆血氣ノ壯年ナルノミナ  
ラズ能ク日本語ニ通セリ今文明ノ治  
教ヲ我國ニ移スニ當リ日本ヲ模範  
トセハ是レ即チ泰西ノ粹ヲ撰フト一般  
ナルカ故夫等ノ便宜ヲ得ンカ為特ニ  
日語ニ通スル西人ヲ撰フニ至リシ次第  
ナリ

統監 從是本官ハ右西氏ノ教師トシ  
テ為貴帝室指導開設ノ任ニ當

ルヘキニ付兩氏モ亦子弟ノ禮ヲ以テ  
本官ノ言ヲ聽キ之ヲ實行セサルヘカラ  
ス猶ホ右ノ邊ハ陛下ヨリモ御命令  
相成リ置キタシ

陛下 是レ勿論ノ事ナリ子弟ノ關係ニ  
於テ統監ノ指導ニ據ランコトヲ望ム  
トノ御沙汰アリ且陛下ハ宮内大臣ヲ  
顧ミテ其心得ニテ萬事教ヲ乞フヘ

シトノ旨仰セアリ

陛下 曾テ卿ニ告ケタルコトアリ今更メテ之ヲ

○人

一

昨井戸屋字世世は、其に杜絶アサカ  
ラストノ御、實見ハ、古由大五ヲ經テ  
之ヲ承知ス石ハ正極死ハ、子柁  
政定ノ制ハ舊式ニ由ルハ、古中  
ハ行ハレタム手ニモテ是レ舊法ハ、承政  
院カ政事ノ取巻ヲ、為スニ奇  
之、政下ノ情、合ハレ、止アリ、中  
以、何年効力ヲ有スルモノ、非  
ラザリレ、近キ平ハ、正ノ意、外ノ

還、迄効力ヲ及スニ由リシハ契實江  
ノ旨シキナリトシテ、將ナキハ此契  
言ハシ杜絶志爲メ、詔初ヲ發スル  
決定ナリ

統 皇  
一 帝 坐 石 保 少 宮 方 主 成 子  
一 帝 坐 石 保 少 宮 方 主 成 子

繰返スハ稍々重複ニ亘ル嫌ナキニ非ラ  
ストノ仰アツテ

日清戦争ハ何カ故ニ起リタル是レ即  
チ韓國ノ獨立ニ原因セリ我國民タ  
ルモノ日本ニ向テ深ク感謝セサルヘカラ  
サル所然ルニ其終局ノ日ニ於テ閔  
后殂落ノ不幸ヲ見ル是レ我臣民  
中日本ノ壯士ト結托シテ行ヒタル出  
來事ニミテ素ヨリ日本政府ノ意思ニ  
アラサルコトハ我上下ノ齊シク知ル所ナリ



雖然此不幸ナル出來事、為我國  
民ノ憤慨一方ナラス實ニ卧薪嘗膽  
ノ思ヲ為シタル結果茲ニ兩國間ノ交  
情稍<sub>レ</sub>阻隔ノ觀ヲ呈セリ之ニ采ミタル  
我臣僚中切ニ露國ニ親近ノ念ヲ起シ  
終ニ多數ノ士官ヲ彼ヨリ聘用シ來テ  
日本ニ反抗ノ態度ヲ示セリ朕固ヨリ  
露ノ親ムヘカラサルヲ諒トスルカ故ニ時  
、公使加藤等ト祕密ニ策ヲ講シ露  
國士官ノ聘用ヲ斷ハリ卒フシテ其後

禍ヲ免カレタリ而シテ日本カ終始我國  
ニ對シ厚意ヲ以テシタルニ係ラス我臣  
民力之ニ親ムノ念<sup>ツキ</sup>薄カラシナタルモノ  
職トシテ中間不幸ノ出來事アリタ  
ルニ由ラスンハアラス思フテ爰ニ至レハ  
痛歎ノ念ニ堪ヘサルナリ統監モ蓋ニ  
同一ノ感ヲ起スナランカ

統監 已往ハ逐フテ益ナシ中間不幸ノ  
出來事ハ無之ニ如カサリシト雖已ニ有  
之タル以上ハ今更ラ致方ナシ貴國ニ大

院君ノ如キ人アリタレハコソ此出來事モ  
生シタルナラン要ハ此出來事アリタルト  
否トニ係ラス日韓兩國ノ關係ハ相  
密着シテ離ルヘカラス是レ國家ヲ維  
持スル上ニ於テ必要ナレハナリ左スレハ  
如何ナル場合ニ於テモ當路者ハ兩國  
ノ交誼ヲ親密ナラシメ提携ノ實ヲ舉  
グルコトヲ勉メサルヘカラス

陛下 然リ今更ラ致方ナシ只從來經過  
上ノ缺點ヲ追懷シタルニ過キス扱テ免

角卿ト朕トノ間事情疏通セサルヤノ感  
ナキ能ハス故ニ今後ハ卿ニ於テ朕ノ舉  
動ニ疑ハシキ點アラハ何時ト雖之ヲ朕  
ニ糺スニ於テ却テ釋然タルモノアラハ朕  
モ亦卿ノ舉動ニ關ミ疑ハシキモノアラハ  
直ニ卿ノ參由ヲ煩スカ又ハ人ヲミテ  
諮詢スル所アルヘシ斯クミテ兩者ノ間  
ニ事情ノ疏通ヲ圖ル事トセハ誤解シ  
避クル上ニ好都合ナリト信ス

統監 本官ニ於テハ更ニ事情不疏通ナ

トノ感ヲ起シタルコトナシ勿論疑ハシキ  
コトハ聖聞ニ達シ聖意ノ在ル所確  
ムヘリ又陛下ノ御召ニ由リ入對セハ本官  
ハ我天皇陛下ニ奉對スルト同様誠意  
赤心ヲ披瀝シテ陛下ノ諮詢ニ奉答  
スルコト勿論ナリ

陛下 貴陛下ノ御親翰中卿ヲ信用セ  
ヨ云々トノ意味アリタルニ付朕ノ親電  
中卿ニ信賴スル旨ヲ以テ御答ヘ致シ置  
オタルカ故ニ特ニ今日此席ニ於テ卿ト約シ

置キ度爲斯ク申タル次第ナリ就テハ爾  
今事ノ重大ナルモノハ卿ノ参内ヲ煩ス  
ヘリ其小ナルモノハ中間人ヲ介シテ卿ニ諮  
詢スヘケレハ卿モ亦事ノ大小緩急ヲ  
察シ自身若クハ人使ヲ以テ朕ニ其  
意ヲ致サレタモ一方ニ統監トシテ職務  
上ノ責任ヲ盡サルルト同時ニ又一方ニハ  
朕カ數年前ニ卿ヲ最高顧問トシテ  
招聘セントセシ當時ノ關係ヲ想起シ  
個人的ニ輔弼ノ勞ヲ執ラントシ望ム

次第ナリ

統監 聖意ノ在ル所謹シテ之ヲ領ス

又過日ハ貴重ナル物品ヲ下賜セラレ早  
速参内御禮可申上ノ所陛下御不例  
ニ被為渡<sub>ニ</sub>延引今日ニ及ヘリ此席  
ニ於テ序ヲ以テ申上ルハ甚タ恐縮ノ至  
リナルモ謹テ聖恩ノ渥キヲ感謝ス

陛下 麗末ノ邦産謝辭ヲ受クル程ノモ  
ノニアラス

統監 数三日前義親王殿下冊封ノ典ヲ

舉ケラレ其儀式全ク終了シタル趣敬  
ニテ祝詞ヲ奏ス序ニ一言奏聞致置  
キ度事アリ昨日同殿下ニ御面會致  
タル際同殿下ハ今回亦十字社總裁  
ニ被任タル由然ルニ未タ貴國ニハ赤  
十字社ナルモノニ付完全ナル組織ヲ見  
サレハ追テ其規則等制定ノ要アルハ  
ミト信ス又同殿下ノ事務所ハ舊通  
信院ノ官衙ナリトノ事ニテ同所ニ赴  
カレタル由ノ處同衙ハ已ニ蘆白麟ナル



龍 鑑 月  
モノ陛下ヨリ下賜セラレタルヤニテ今ハ現  
ニ同人ノ住宅トナリ居レリトノ事右ノ趣  
今日本官謁見ノ序ニ奏聞シ置キ呉  
ル様トノ御依頼アリタリ

陛下 蘆白麟ニ與ヘタル事アリヤ否取  
調ヘ置クヘシ蘆ハ日本士官學校卒  
業ノ士官ニシテ田舎ノ住人ナレバ京城  
ノ勤務ニ従事スルニ當リ或ハ軍部  
大臣ヲ經テ一時其住居ニ充ル為談  
官衙ヲ貸與シタルヤモ知レス

又陛下ハ一家内同様ノ心得ニテ聞取呉  
ル、様望ムトノ御沙汰アリテ義親王宛  
角金錢ヲ濫用スルノ癖アルニハ當惑ナ  
リ歸國以來淳妃ノ金ヲ引出シタル分  
ニテモ己ニ壹萬餘圓ナリ其他猶ホ五  
千圓ノ急需用アリトテ昨今東宮淳  
妃宮内大臣等ニ出金ヲ促スコト矢ノ  
如シ何トカシテ之ヲ矯正シ其濫費ヲ  
戒メサルヘカラストノ御言葉ニ對シ統監ハ  
月々ノ入費貳千五百圓ト御決定相

成リタル上ハ之ヲ毎月定日ニ支給セラレ  
其以上ハ如何ニ請求セラルルモ一文モ支  
出セラレサルコトニ決定相成ル外ナシト信  
スル旨奏セラルルヤ陛下モ然リ左様為  
スノ外ナカルヘシトノ御沙汰アリ

右ニテ統監御前ヲ辭シ退出セラル時  
ニ午後七時

215958

5

昭和25年10月8日

韓國施政改善ニ關スル協議會 第六回

韓國施政改善ニ關スル協議會第六回

開會時刻

明治三十九年六月廿七日午前十時十分

場所

統監官舎

列席者

統監侯爵伊藤博文

參政大臣 朴齊純

學部大臣 李完用

軍部大臣 李根澤

法部大臣 李夏榮

農商工部大臣 權重顯

統監府總務長官 鶴原定吉

統監府農商務總長 木内重四郎

通譯者

統監府書記官兼  
統監秘書官

國分象太郎

筆記者

統監秘書官 古谷久綱

伊藤統監

本年四月諸君ト訣別セル際ニ

ハ可成速ニ歸任スル豫定ナリシモ一度歸

國スルヤ我カ 天皇陛下又ハ日本政府ヨリ

種々ノ用務ヲ命セラレ殊ニ陛下ヨリハ一ト

通り大問題ヲ解決シテ歸任セヨトノ勅命ヲ

蒙リタリ此等ノ問題ハ日本ニ取リテ最重

大ナルモノニシテ例ハ滿洲處分ノ如キ外交

上ノ關係問題ノ如キモノアリ今一々茲ニ列舉  
スルヲ得スト雖此等ノ案件ヲ解決スル為  
二箇月ノ日子ヲ要シ遺憾ナカラ約ノ如ク  
速ニ歸任スルヲ得サリシナリ

朴參政 御滯留ノ延引スルコトハ新聞紙上ニ  
テ拜承シ御事情己ムヲ得サルコト、存シ居  
レリ

李法相 世上ノ事ハ兎角意ノ如クナル能ハサル  
カ常ナリ

伊藤統監 本日ハ自分ノ出發以前諸君ト

御相談セル事項ニ付尚協議ヲ繼續セ方  
為態、諸君、御來駕ヲ請ヘリ、凡ソ改革  
ノ事タル只之ヲ口ニスルノミテハ無益ナリ、須  
ラ之ヲ實行セサルヘカラス、然ルニ貴國、如  
キ國ニ在テハ其ノ當初ニ於テ種々ナル議  
論及異存ノ起ルヘキハ當然ノ事ニテ日本  
ニ於テモ昔時ハ亦然リシナリ、併ナカラ當局  
者タルモノ事ニ臨テ看々其ノ實ヲ舉ゲ  
改善ノ利益ヲ證據立ツル國民ハ終ニ悦  
服スルニ至ルヘシ抑、施政改善ハ先見者ノ



事業ナリ國民カ眼ヲ開クヲ待ケテ改革  
ヲ實施セント欲セハ竟ニ着手ノ時機ナキ  
ニ至ラレ故ニ當局者タルモノ進テ事實ニ  
就キ其ノ效果ヲ國民ニ示シ之ヲ指導  
スルノ途ニ出ラサルヘカラス而シテ國民カ改革  
ニ反對スルコトハ寧ロ當然ノ事ト覺悟シ初  
ヨリ一身ヲ犠牲ニ供シテ事業ヲ遂行シ以  
テ民ヲ濟フノ決心ナカルヘカラス自今ハ今日  
ヲテ常ニ此ノ主義ニ遵テ諸君ト協議ヲ盡  
シ來トリ今後モ亦此ノ主義ニ據ラントス

改革ノ順序ニ關シテ既ニ諸君ノ參考ノ  
 為自分ノ意見ヲ明示セル如ク先ツ鑛山  
 問題ヲ解決シ而シテ後人民ノ財産所有  
 權ノコトニ及ハサルヘカラス依テ出發前ノ約束  
 ニ從ヒ今般法學博士梅謙次郎タルモノヲ  
 シテ當國ノ為ニ盡力セシムルコト、シタレハ不  
 日當地ニ來着スヘシ同人ハ現ニ我カ東京帝  
 國大學法科大學ヲ教授ニシテ嘗テ自分、  
 指揮ノ下ニ久シク法律制定ノ事務ニ從  
 事シタル者ナリ同人ハ日本ニ於テ最有名

ニシテ且學識アル法律家ニシテ其ノ地位モ  
高キモノナレハ至極適任ト認メ之ヲ渡韓  
セシムルコト、セリ同人到着ノ上ハ兼テ法部  
大臣及度支部大臣ノ提議モアリタルコトナ  
レハ先ツ財産所有權ヲ鞏固ナラシムル爲  
土地所有者ニ地券ヲ交付スルコトニ關シ法  
律ヲ起草セシメ然ル後司法問題ニ移リ  
韓國ノ裁判制度ノ改正案ヲ起稿セシメ  
トス同人ハ種々日本ニ於ケル用務ヲ處分シ  
タル上ニ非サレハ渡韓スルコトヲ得サルカ故ニ

少シ後ルヘキモ其ノ指揮ノ下ニ調査ニ  
從事スヘキ屬僚ハ一兩日中ニ到着ス  
ル筈ナリ本件ハ自分ノ當地出發以前ニ  
協議シ置キタルコトナハ定メテ諸君モ御  
記憶ノコト、存ス

朴參政 然リ其ノ要領ハ之ヲ記憶シ居シ  
リ

伊藤統監 本日ハ不幸ニシテ内部大臣ハ列  
席セラレサルモ學部大臣ノ列席アルヲ以テ  
序ニ病院問題ニ就テモ一言スヘシ韓國

ニ於ケル醫術ノ發達ヲ圖ラント欲スルニ方リ  
相當ノ病院ナキハ實ニ一大缺點ナリ故ニ  
兼テ御協議セル如ク現在、三病院ヲ合  
同シテ一ノ完全ナル病院トナスコトニ盡力セシ  
メ且又韓國醫術ノ進歩ヲ圖ラシカ為  
佐藤軍醫總監ヲ渡韓セシムルコト、セ  
リ蓋シ遠カラス到着スルナラン

朴參政 佐藤軍醫總監ハ梅博士ト同時ニ  
到着セラル、ヤ

伊藤總監 殆ト同時ナルヘシ

權農相

佐藤氏ハ病院ノ顧問ナリヤ

伊藤統監

顧問ノ名稱ヲ佐藤ニ付スルハ頗

ル困難ナリ彼ハ自分ヨリ勸誘セル際喜テ

渡韓シ命ニ從テ韓國醫術ノ發達ニ盡

瘁スヘキモ韓國政府又ハ皇室ヨリ俸給ヲ

受クルコトハ之ヲ欲セサル旨ヲ明言セリ同人ハ

日本醫師ノ泰斗ニシテ又學者ナリ所謂

先生トシテ之ヲ待タサルヘカス彼ハ統監府ノ

官吏ニモアラス又韓國政府ノ傭聘セル顧

問ニシテモナシ彼ハ日本ニ於テ大ナル病院ヲ有

シ又舉多ノ後進子弟ヲ養成シ今回ノ日  
露戦争ニ際シテモ廣島ニ於ケル陸軍  
病院ヲ管理シ自己ト其ノ部下トカ治療  
セル俘虜及我カ軍人ノ數ハ約二十萬ニ上  
リタル由ナリ何レ他日實地ニ就キ諸君御  
協議スヘキモ兎ニ角然ルヘキ場所ヲ撰定  
シテ病院ヲ建立セサルヘカラス勿論病院ノ  
組織ハ之ヲ完全ニシ各専門ノ醫師ヲ養  
成スル方針ヲ執ラサルヘカラス此等ノコトニ  
關シテハ蓋シ諸君ニ於テ御異存ナキコト、

信ス果シテ然リヤ

各大臣 此事ハ既ニ決定セル問題ナルノミナラス

我國ノ衛生上必要ナルコトナレハ異存ノア

ルヘキ筈ナシ

伊藤統監 自今ノ上京中滯原參與官ノ

傭聘ヲ解キ其ノ後任者ヲ選定シテ派

遣セリ學部大臣ニ於テ蓋シ御承知ノ事ト

信ス

李學相 然リ後任者三土氏ハ既ニ着任シ

學部ニ於テ日々執務シツ、アリ



伊藤統監

幣原參與官、當國ニ於ケル成績

ヲ視ルニ教科書、如キ脱稿セルモノ甚僅  
ナリ彼ハ教官トシテハ或ハ適任ナリシモ著述  
家トシテハ不適任ト認メタルカ故ニ更迭セシメ  
タルナリ

李學相

後任者三士氏トハ數回面晤セリ蓋

シ適當ナル人物ト信ス

伊藤統監

教育擴張ノコトモ可成速ニ着手

シタシト存ス兒童ノ教育ヲ進メサレハ到底  
韓國ノ發達ヲ企圖スルコトヲ得ス

李學相

教育擴張ニ關シテ最重大ナル急務

ハ教員ノ速成ナリトス 自分ハ表書記官ト

隔日會談シテ教育擴張ノ事務ニ従事

シツアリ

伊藤總監

内部大臣不在、片參政大臣ニ關

ハシ内部ニ於テ従事セル地方制度改善ノ取

調ハ進行シタリヤ

朴參政

自分ハ未タ書類ニ就テ之ヲ見タリニ

ハ非サレトモ大體ノ方案ハ既ニ取調濟ノ

趣ニ承知ス

伊藤統監 此問題ハ經費ニ關係スルハ故ニ

調査結了ノ上ハ豫算ヲ作り實際ノ運用如何ヲ考査セサルヘカラス兎ニ角多少地方ノ經費ヲ増加セサル何等ノ改正ヲモ企圖スルヲ得サルヘシ

朴參政 然リ地方官ノ俸給及地方廳ノ經費ハ之ヲ増加セサルヘカラス

伊藤統監 本問題ニ關シテハ追テ目増由願閣ニ調査セシメテ財政上實際如何ナル點迄改革ヲ決行シ得ヘキカラ調査セシムル存念

ナリ

李法相

梅博士ハ法部顧問トナランヤ

伊藤統監

否法制調査囑託ト稱スルカ如

キコトニ致シタレ彼ハ日本ニテモ勅任一等ノ位

置ニ在ル者ナレハ決シテ顧問ト稱スルカ如

キ名義ヲ欲スルモノニアラス只其ノ専門ニ

屬スル事務ノ調査ヲ囑託スルカ故ニ喜

テ之ニ應スル次第ナリ同人ニ對シテハ別ニ

俸給ヲ支出スルヲ要セサルモ調査其ノ者

ハ多少ノ經費ヲ要スルコト勿論ナリ又俸

給ト稱シテ定額ヲ支給スルニハ及ハサレトモ  
韓國政府ヨリ多少ノ報酬ハ之ヲ支出シ  
テ可ナリ

李法相 然リ無報酬ニテ人ヲ使用スルコト  
ハ相濟マサル次第ナハ多少ノ報酬ヲ呈  
スヘキハ勿論ノコトナリ

伊藤統監 佐藤總監ハ全ク自分ノ名譽  
ノ為及韓國ノ為ニ働クモノニシテ決シテ金  
錢ノ為ニ働クモノニアラサルコトハ前陳セル如ク  
自分ニ對シテ彼ノ明言セル所ナリ彼ハ相

當ノ財産ヲ有スモノニシテ決シテ報酬ヲ得  
テ一家ヲ支フルノ必要アルモノニアラス梅佐藤  
兩人トモ自分ヨリ陛下ニ言上シテ拜謁モ  
ナシ御陪食モ仰付レ韓國ノ為ニ盡力  
セヨトノ勅諭ヲモ受ケタル次第ナリ但し兩人  
トモ日本ニ於テ相當ノ事業ヲ持テ居ルカ  
故ニ常ニ此地ニ在テ其ノ任務ヲ盡スコ  
トヲ得ス時々此地ニ來リテ大體ノ指揮ヲ  
ナシ而シテ又本國ニ歸ルトイフ如ク兩國ノ間  
ヲ往復セシムル積ナリ兩人トモ其ノ専門ニ

於テハ日本有數ノ人物ナリ此ノ如キ不便  
ハ之ヲ忍ハサルヘカラス苟モ最適任者ヲ  
聘セント欲セハ到底韓國ニ於テ之ヲ專  
有スルコトハ出来サルナリ

朴參政 梅佐藤兩博士ニ附屬スル人々ハ補  
佐官トセラルヤ

伊藤統監 其ノ豫定ナリ彼等西人ハ西洋人  
日本人ヲ問ハズ如何ナル學者大家ニ對シ  
テモ匹敵シ得ル人物ナリ殊ニ梅博士ノ如  
キ其ノ著述ハ現ニ佛國ニ於テスラ教科

書レシテ之ヲ使用シ居ルナリ

是ヨリ更ニ他ノ問題ニ移ルニ鑛山法ニ關シ  
テハ自分ノ歸國中鶴原總務長官ヨリ  
請訓シ来リタルヲ以テ夫々訓示ニ置キタ  
ルコトモアリハ自分ノ意思ノ在ル所ハ諸君  
ニ於テモ御承知ノコトナルヘシ此ノ問題モ速  
ニ解決シタキモノナリ

朴參政 此ノ問題ニ關シテハ度々統監府ト

御協議シタルモ未タ全ク決定ニ至ラス

伊藤統監 鑛業法及其ノ施行細則ノ規定



ニ據ル處分ハ豫メ統監ノ承認ヲ經ルコトヲ要  
スル件ニ付テハ自分ノ出發前諸君ハ此ノ規定  
ヲ附則ノ中ニ加フル差支ナレト明言セラレタルニ  
非スヤ且自分カ此ノ規定ヲ必要ト見タル種  
々ノ實例アルカ故ニシテ即チ韓國人カ先ツ鑛  
山ニ關シテ權利ヲ收得シ然後之ヲ日本人ニ  
讓渡シ更ニ又他ノ外國人ニ轉スル等ノ事ア  
ルカ為竟ニ頗ル面倒ナル事件ヲ惹起シタルコ  
ト甚カラス故ニ此ノ權利ヲ事業家ニ與ル  
以前ニ必統監府ニ於テ之ヲ承知スルノ必要

アリ從來ノ事實ニ徴スルニ果シテ正當ニ特許ヲ  
得タルモノナリヤ否ヤサヘ未タ分明ナラサル間ニ權  
利ヲ轉々シ從テ種々煩雜ナル問題ヲ惹起ス  
ルノ虞アルヲ以テ特ニ此ノ規定ヲ設ケテ弊害  
ヲ豫防セント欲スルナリ

朴參政 自分等ニ於テモ貴説ノ如キ弊害アリシ  
コトヲ慮リ之ヲ豫防スルノ必要ヲ認メタリ然レ  
トモ豫防ノ手段ハ必シモ原案ノ如ク為サル  
モ修正案ニテモ實際差支ナシト存シタル  
ナリ

伊藤統監

現今ニ於テモ既ニ十分信ヲ措ク

能ハサル實例アリ即ケ宮内府ノ鑛山ノ如キ  
果シテ正當ナル特許ナリヤ否疑ハシキモノアリ  
殊ニ或ル外國人ニ與ヘル特許證ノ如キ政  
府大臣ノ承知セサル間ニ官印ヲ盜用シ責任  
者ノ署名スラナキモノモアリト云フ斯ノ如キ狀  
態ニ至ル到底鑛山行政ノ統一ヲ期スルコトヲ  
得ズ故ニ原案ニ規定セルカ如ク豫メ統監ノ  
承認ヲ經ルコト、セハ農商工部大臣ハ其ノ  
處分ヲ為スニ於テ甚容易ナル地位ヲ占

ルコトヲ得シ區々ニ體面論ノ如キハ決シテ

採ルニ足ラサルナリ眞ニ韓國鑛山行政ノ統

一ヲ圖ルヲ得ハ此ノ規定ヲ存スルトモ決シテ

諸君ノ面目ニ關スルカ如キコトナキニアラスヤ

朴參政 當方ニ於テモ殊更ニ本法ノ發布ヲ

遲延セシメント欲スルノ意思ヲ有スルニアラス

却テ可成速ニ之ヲ發布センコトヲ希望ス

ト雖内外人ノ區別ハ之ヲ本案中ニ規定

センコトヲ欲シタリ且又宮内府ノ鑛山ニ弊

害アルコトモ熟知セルカ故ニ之ニ鑑ミ宮内

府鑛山モ本法ノ中ニ入レシト欲シ種々熟議  
ノ結果此ノ修正案トナリタル次第ニテ自分ニ  
於テハ是ニテ差支ナカルヘシト信ス

權農相 修正案ハ表面上ハ内外人ノ區別ヲナ  
セトモ原案ト何等ノ差異ナシト信ス此點  
ニ付テハ統監府ノ諸君ニ對シテモ充分説明シ  
タル所ナリ

朴參政 自分ハ修正案ニテモ弊害ヲ豫防ス  
ルコトヲ得ヘシト信スレトモ若他日弊害ノ生シ  
タル節ハ何時ニテモ之ヲ改メテ可ナリ

伊藤統監

諸君、法律の素養ヲ有セラレサル

カ故ニ斯ノ如キ議論ヲ敢テセラル、モ法律ハ

吾人カ氣候ニ應シテ更衣スルカ如ク輕々シク

改正スヘキモノニアラス何トナレハ法律ハ總テ人

民ノ權利義務ニ關係スルモノナレハ初ヨリ

確實ニ之ヲ制定セサルヘカラス

李法相 御尤ナリ法律ハ容易ニ改ムヘキモノニ

アラス

伊藤統監

修正案ノ如クセハ合同又ハ賣

買讓與等ニ依テ内外人ノ間ニ將來必種

カナル紛議ヲ生シ韓國政府ニ取り頗ル面倒  
ナル問題ヲ惹起スヘシ大觀スルハ區々ニ體  
面論ノ如キハ今日ニ於テ敢テ意トスルニ足ラサ  
ルナリ

權農相 少ニテモ外國人ニ關係スル場合ニ於テハ  
統監承認ヲ經ルコト、スル事實上差支ナ  
カルヘシト信ス

伊藤統監 凡ソ法律ハ可成均一ニ之ヲ適用シ  
得ル様制定セサルヘカラス殊ニ韓國ニ於ケル鑛  
山事業如キハ決シテ單純ニ内外人ヲ區別

シ得ヘキモノニアラス 鑛山ヲ抵當トシテ外國人ヨリ  
 資金ヲ借入レ又ハ内國人ノ經營スル鑛山ヲ外  
 國人ニ賣却又ハ讓渡ス等事實ニ於テ非  
 常ニ錯綜シ来ルヘキハ到底免ルヘカラサルコト  
 ナリ故ニ机上ノ論トシテハ内外人ヲ區別シ得ヘ  
 キカ如シト雖實際ニ於テハ非常ニ煩雜ナル取  
 扱ヲナサルヲ得ス諸君ノ高慮ハ之ヲ測リ知  
 ルヲ得スト雖韓國モ將來條約ヲ改正シ治外  
 法權ノ如キハ之ヲ撤去スルノ策ヲ講セサルヘカラ  
 ス治外法權ヲ撤去セント欲セハ先ツ法律ヲ



制定シテ裁判制度ヲ改善セサルヘカラス而シ  
テ其ノ法律ヲ制定スル際ニ於テ徒ニ内外人ノ  
區別ヲ設ケ内國人ニ對シテ適用スル法律ト  
外國人ニ對シテ適用スル法律トヲ異ニスルカ如  
キコトアラス到底治外法權ノ撤去ハ之ヲ期ス  
ルヲ得サルノミナラス韓國ノ法治ハ殆ト亂雜  
極ヨリナキニ至レ故ニ鑛業法ニ斯ノ如キ規  
定ヲ設ケハ單ニ弊害ヲ豫防セント欲スルニ  
止マリ決シテ統監ノ手中ニ大ナル權力ヲ收メ  
ト欲スルノ意ニ出ラズルモノニアラス諸君ニ於テモ

此邊ハ十分御諒察アラシコトヲ望ム

權農相

内外人ヲ區別スルモ弊害ハ之ヲ豫防

シ得ルナラント考ヨリ斯ノ如キ修正案ヲ提

出シタリ之ニ據ルハ内國人ト雖決シテ統監承

認ヲ經スレテ鑛山事業ニ従事スルコトヲ得

ス而シテ其事ハ何レ公文ヲ以テ通知致スレ

伊藤統監

韓國内ニ於テ總テノ事正確ニ行ハ

ルハ斯ノ如キ條項ハ初ヨリ全然不要ナリ然

レトモ實際正確ニ行ヒサルカ故ニ自分ハ之ヲ主

張スルナリ

權農相

韓國、政府部内ニ於テ或ハ事務ノ

正確ニ行ハサルカ如キコトナキニモアラスト雖從  
來外國公使ニ對シテ為シタル約定ハ決シテ  
違背シタルコトナシ況ヤ公使以上ノ權力ヲ有  
セラル、統監ニ對シテ為シタル約定ニ背クカ如  
キコト萬々此ラルヘキ筈ナシ

伊藤統監

農商工部大臣、言ハル、如キ約定

ニシテ若國民ノ探知スル所トナシカ當局者ハ  
却テ迷惑ヲ感セラルヘシ韓國ハ決シテ祕密  
ヲ保ツコトヲ得サル國ニシテ宮廷ニモ政府ニモ

殆ト何等ノ機密ト稱スヘキモノナシ  
斯ノ如キ  
國ニ在テ諸君カ今公文ヲ以テ内國人ノ事  
業ニ對シ統監ノ承認云々ヲ約セラルレハ國  
民ハ他日却テ諸君ヲ怨ムニ至ラン

# 權農相

勿論此ノ公文ハ人民ニ知悉セシムル  
積リナリ乍併法律ノ上ニ内外人ノ區別ヲ  
為サレハ人民ハ頗ル不服ヲ唱フヘルト信ス  
乃ケ法律ニ於テ之ヲ區別スルモ實際ニ於  
テハ之ヲ原案ト何等ノ相違ナカラシメント欲  
スルナリ

伊藤統監

然る如何ナル方法ナリヤ

此時木内總長韓國政府ヨリ提出セル修正案ヲ統監ニ説明シ鶴原總務長官々各大臣ニ向テ修正案ハ實際ヲ顧ミシテ單ニ體面ヲ装ヒト欲スルモノニ過キサルハ断然原案ニ賛成セシムコトヲ勧誘セリ

伊藤統監

體面上徒ニ内外人ノ區別ヲナスノ

弊ハ茲ニ最適切ナル一例アリ即チ土地所有ノ如シ現ニ韓國領土内ニ於テ外國人ハ事實上土地ヲ所有シ居ルニ拘ハラス韓國

政府ハ法律上之ニ附屬スル義務ヲ外國人  
ニ負ハシムルコトヲ得サルニアラスヤ内外人ノ區  
別ヲ為スニ伴フノ弊害ハ概子此ノ如シ

李學相

我カ政府、主張ヲ一言以テ説明ス

ト下、如シ即ケ外國人ハ法律ヲ以テ統監、

承認ヲ要スル旨ヲ定メ内國人モ亦均ク

承認ヲ經ルコトヲ要スレトモ之ヲ法律ノ明

文ニ掲ケス單ニ公文ヲ以テ之ヲ聲明スルコ

ト、セハ公文ノ効力ハ蓋シ法律ト同様ナ

ルヲ以テ事實ニ於テ原案ト異ルコトナキ

ニ至ルヘシト云フニ在リ

伊藤統監

公文ハ其ノ實條約ナルカ故ニ其

効力ハ勿論法律ニ優ルトモ劣ルコトナシ

内國人ニ關係スルモノミテ法律ヨリ除キ

條約ヲ以テ規定セシトセラルハ諸君ノ為

却テ得策ナラサルヘシ又農商工部大臣

ハ此ノ公文ヲ發表スルモ可ナリト述ヘラレタル

モ想フ貴政府カ條文ニ於テ内外人ノ區

別ヲ為シ且内國人ノ場合ハ統監ノ承認

ヲ經ルコトノ規定ヲ避ケ而モ其ノ實公文

ヲ以テ承認ヲ經ル旨ヲ保證セント主張セラ  
ルハ取リモ直ス表面ノ體裁ヲ粧ヒ裏面  
ノ取極ニ止メントセラルノ意思ナルヤ疑フヘ  
モアラス然ルニ農相ノ議論ノ如ク之ヲ公然  
發表シテ憚<sup>カラストセハ</sup>敢テ條文ノ上ニ明記  
スルト毫モ擇フ所ナキナリ要スルニ農相  
ノ議論ハ自家撞着ノ甚<sup>シキモノニシテ</sup>畢  
竟議論窮極ノ結果、外ナラス是レ恐ラ  
貴政府ノ修正論ト一致スルモノニ非サルヘト  
思考ス故ニ終ヒ諸君ニ於テ公文ニ認メ



且之ヲ發表セラントスルトモ自分ハ之ヲ止メシ  
ト欲スルモノナリ此ノ如キ約束ヲ發表センカ本  
案ニ對スル我等一同ノ苦心モ殆ト水泡ニ歸  
スヘシ元來此ノ規定ニ關シテハ諸君ニ於テ  
初ハ何等ノ異議ナク單ニ附則ニ加ヘタシト  
ノ希望ナリシヲ以テ自分ハ夫レニテモ可ナリ  
ト答ヘ置キテ次第ナレハ今日ニ於テ可成之  
ヲ修正セサル様希望ス

此時鶴原總務長官及木内農商工務總長ヨ  
リ再ヒ原案ニ賛成セシコトヲ各大臣ニ勸告ス

權農相

過日議政府會議ニ於テモ長官ト總

長ト固ク原案ヲ維持セラレタル為遂ニ決定  
ニ至ラスレテ止ミテ自分等モ強テ本案ノ發  
布ヲ延引セシメント欲スルノ意思アルニアラス成  
ルヘク統監府ト妥協シテ本問題ヲ圓滿解  
決セシコトヲ希望スルモノナリ

伊藤統監

修正案ノ内國人并ニ外國人ト

共同云々ノ條文中「私カニトアルハ法律上明

確ナル意義ヲ有セサルカ如シ

木内總長

「私カニ」ハ蓋シ「不正トイフ意味ナ

ルヘント解釋（註）ニタリ

伊藤統監

要スルニ公文ヲ發表セハ韓國政

府ハ將來ニ於テ非常ノ迷惑ヲ感セラル、  
地位ニ立ツコト明瞭ナリ而シテ公文ハ縱令一  
時之ヲ祕密ニ附ストモ早晚世間ニ漏泄  
スルハ免ルヘカラサルコトナルカ故ニ之カ為諸君  
ハ却テ法律文中ニ統監ノ承認云々ヲ存  
スルニ比シ一層激烈ナル攻撃ヲ招クニ至  
ルヘシ

是ヨリ各大臣互ニ論議ヲ盡シ其ノ際鶴原總

務長官 木内農商工務總長 國分書記官等  
交、原案ノ韓國政府當局者ニ取リテ便利ナル  
理由ヲ説明シ就中國分書記官、農商工部  
大臣ニ對シ若修正案ノ如ク内國人ニ對スル  
許可ハ單ニ農商工部大臣ニ於テ之ヲ與フル  
コト、セハ不條理ナル勅命ニ接シタル場合ニ於テ  
農商工部大臣ハ非常ニ困難ナル位置ニ立タ  
ルヘカヲサルコトヲ説明セリ之ニ對シ權農相ハ法律  
ノ明文アルカ故ニ之ヲ楯トシテ縱令勅命ト雖盲  
從スルコトナレト辯明セリ之ニ對シテ

伊藤統監

農商工部大臣ノ説ハ之ヲ口ニスルハ

易シト雖實際ニ於テ果シテ實行セラル、  
ヤハ疑ナキ能ハス況ヤ勅命ニ依リ許可ヲ與  
フル韓國人ニシテ密ニ外人ト結託シ居ルカ  
如キコトアル殆ト農商工部大臣ハ其ノ職責  
ヲ盡ス能ハサルノ位置ニ立至ルヘシ

鶴原總務長官

要スルニ各大臣ノ希望ハ統

監府ノ提案ニ多少ノ修正ヲ加ヘテ國民ニ  
對スル面目ヲ保タントセラル、モノニテ必シモ  
本案ニ事實上反對セラル、ノ意ナキカ如シ

伊藤統監

然ラハ原案ノ「承認」ヲ「同意」

ト修正セハ如何又若此ノ修正ニ不同意ナラ  
ハ別ニ案ヲ立ツルモ可ナリ要スルニ統監府ハ  
實際韓國政府カ許可ヲ與フルニ先タケ之  
ヲ知悉スルコトヲ得ハ可ナリ

是ヨリ伊藤統監ハ自ラ筆ヲ執テ「修正案

」起草シ原案ノ「承認」ヲ「同意」改ムル案ト

両ナカラ之ヲ各大臣ニ交付シ兩案其ノ一ヲ撰ハン

コトヲ改ム旨言明セル各大臣乃ケ室ノ一隅ニ

集テ暫ラテ疑議シタル後左ノ如キ修正ヲ加ヘ

チ原案ニ賛成スルコトニ決シ之ヲ統監ニ明言ヤリ

第二十七條

本法及施行細則ノ規定ニ依ル處

外國人ニ關スルモノ多クキラス日本  
人ハ豫メ統監ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス  
同意

所屬ノ鐘山ニ關シテモ亦同ニ

此外原案第六條中「公園地」下ニ「墳墓」ニ

字ヲ挿入センコトヲ農商工部大臣ヨリ要求アリ之ニ對

シテ木内農商工務總長ノ原案維持說アリタルモ

統監ハ斷然韓國側ノ主張ニ同意ヲ與ヘタリ斯

ノ如クニシテ統監出發後約二月間懸案トナリ居

リタル鑛業法案モ確定シタルニ付直ニ移民保護

法案モ確定シタルニ付直ニ移民保護

法案ノ協議ニ移リ其ノ第二十條ハ韓國側ノ希望ニ依リ左ノ如ク修正スルコトニ決定セリ

第二十條 本法及施行細則ノ規定ニ依ル處分

外國ニ關スルヲ以テ日本同意ハ豫メ統監ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス

伊藤統監 本日幸ニ鑛業法案及移民保護

法案ノ決定ヲ見ルニ至リタル上ハ可成速ニ之カ

實行ニ着手セラレシコトヲ切望ス

各大臣 領承

鶴原總務長官 斯ク決定ヲ見タル上ハ其ノ内

容ヲ示サスレテ單ニ確定シタルコトノミナラシ新



聞ニ發表致シテ御異議ナキヤ

伊藤統監 自分ハ異議ナキモ列席各大臣

意向ニ依テ決スル方然ルヘシ

各大臣 決シテ異議ナシ自分等モ却テ發表

セラレシコトヲ希望ス

於是統監ハ一同ヲ食堂ニ導キ午餐ヲ共ニ于  
時午後一時ナリ

食堂内ニ於テ統監ハ軍部大臣ニ對シ病氣全快、  
上下度日本ヲ視察セシコトヲ勸告シ又朴參  
政ニ向ヒ不日皇帝陛下、御都合ニ隨テ謁見

ヲ賜ハラレコトヲ希望スル旨並ニ今回ハ御親翰ヲ  
捧持シ来ル旨ヲ陳述シタルニ朴參政ハ直ニ  
統監ノ希望ヲ違フ様盡力スヘシト確答セリ  
夫レヨリ統監ハ東洋ノ大勢及露韓間ノ關係  
ヲ説キ自己ノ此地ニ在任スルハ極東ノ為日本  
ノ為ナリト雖亦韓國ノ為ナルコトヲ説明シ人々目ニ  
於テ韓國ノ施政ヲ改善セサレハ他日殆ト其ノ  
機ナカルヘシト信スルカ故ニ此際韓國ノ為ニ全力  
ヲ盡スヘキモ韓國人ニシテ自滅ヲ招クカ如キ策  
ニ出ツハ他ヨリ之ヲ救フ途ナキニ至ルヤモ測レシ

サル旨ヲ發告シ更ニ進テ韓國々務大臣タルモノ  
現ニ困難ノ地位ニアルハ十分之ヲ諒トスル所ナル  
モ困難ナリトテ徒ニ失望落膽何ノ成ス所ナリ  
ハ國家ハ到底發達ノ途ナシ須ラ百折不撓  
ノ精神ヲ發揮シ若困難ニ遭遇スル之ヲ利  
用シテ上君ヲ正シ下民ヲ濟フノ方法ヲ講セ  
サルヘカラサルコトヲ最熱心懇切ニ諭告シテ各  
大臣ヲ鼓舞獎勵セルニ對シ各大臣ハ自己  
ノ力及ビ限リハ奮發盡瘁スヘキコトヲ答  
ヘリ

午後二時散會

新

臨

月

215958  
6  
昭和25年

通  
秘

韓國施政善關之協議會

第七回

韓國施政改善ニ關スル協議會第七回

開會時刻

明治三十九年七月三日午前十時三十分

場所

統監官舎

列席者

統監侯爵

伊藤博文

參政大臣

朴齊純

宮内府大臣

李載堧

内部大臣

李址鎔

度支部大臣

閔泳綺

軍部大臣

李根澤

法部大臣

李夏榮

學部大臣 李完用

農商工部大臣 權重顯

統監府書記官 國分象太郎

兼統監秘書官 古谷久綱

統監秘書官 古谷久綱

伊藤統監

日本ヨリ捧持シ来ル御親翰ヲ

捧呈スル為過日謁見セシ際ノ御約束ニ

基ツキ自今ハ昨日午後四時再ヒ參朝謁

見セリ其節奏奏聞シタル件ヲ諸君ノ御

參考トシテ茲ニ開陳スヘシ劈頭第一自今

ハ陛下ニ奏上シテ曰ク

陛下ハ博文ノ統監トシテ當地ニ來任セルヲ  
御承認相成ラサル由ニ承ル抑昨年十月  
ノ協約中ニ統監ニ關スル明文アリ該協約  
其ノ調印ニ先タ陛下ノ思召ニ依リ修正  
ヲ加ヘテ御裁可相成リタルモノナリ然ルニ今日  
ニ至ルモ尚統監ヲ承認セラサルハ博文了解  
ニ苦マサルヲ得ス故ニ東京滞在之中ヲ我カ  
天皇陛下ニ奏聞シタルニ陛下モ亦博文ト  
御同感ニテ今回歸任セハ本件ニ關スル韓  
國皇帝陛下ノ確答ヲ承ルヒト、勅命ヲ



蒙リテ仍テ本日ハ勅答ヲ拜承セシコトヲ望ム

ト自分カ斯ノ如キ上奏ヲ為シタルハ陛下ノ統

監ヲ承認セラレサル明證ヲ有スルカ故ナレトモ

陛下ハ決シテ然ルコトナレ昨年ノ協約ハ確ニ裁

可キ卿ニ宛テタル文書ニ伊藤侯爵ト記セ

ル居常伊藤侯爵ナル語ヲ慣用セルカ故ニ

臣僚或ハ誤テ斯ク書シタルナラント辯解セラレ

タルヲ以テ自分ハ陛下ヨリ直接其ノ勅詔ヲ

承ル足ルト奉答セリ

次ニ自分ハ陛下ニ對シテ統監ノ職務ヲ畧述

シ統監ハ日本國ヲ代表シテ韓國ニ駐劄スルモ  
ノナハ日本國ノ韓國ニ對シテ取ルヘキ責任即  
チ皇室ノ尊嚴康寧ノ維持、外交ノ管理、  
施政ノ改善、國土ノ防衛等ハ皆統監ノ職  
責トナリ居レリ故ニ統監ノ職務ハ一ニシテ足ラ  
ス就中韓國ノ外交ヲ管理スル上ハ名義ハ免  
ニ角事實ハ韓國外務大臣同様ノ職務ヲ  
執ルモノナリ左ハ外交ニ關シテハ陛下ハ統監  
ノ進言スル所ヲ一々御採用アラセラレサルヘカラ  
ス隨テ又外國人ニ謁見ヲ仰付ケラルル場

合ノ如キモ 統監其ノ席ニ列セサルヘカラサルコト  
ヲ言上セルニ 何レモ御承諾ノ意ヲ表セラレタリ然レ  
トモ今一々茲ニ之ヲ細述セハ長時間ニ亙ルヲ  
以テ其ノ中必要ト認ル一事ヲ除ク外之ヲ  
省畧スルコトトスヘシ

此時宮内府大臣李載克刺ヲ通シテ謁ヲ統監  
ニ求メ 統監ハ直ニ之ヲ協議會ニ列セシム于時午  
前十時四十分

伊藤統監(李宮相ニ對シ)

唯今昨日奏聞ノ顛末

ヲ各大臣ニ語リツツアリ

李官相 拜承

伊藤統監

外交ニ關スル奏聞ノ詳細ハ前陳ノ如

ク一々諸君ニ説述スルノ暇ナシト雖其ノ中ノ一

事ハ茲ニ之ヲ陳述スルノ必要アリ即チ日本カ

韓國ノ外交ニ關スル責任ヲ取リタル上ハ條約

書及外交文書ハ總テ之ヲ引繼クヘキ筈ナリ

故ニ曩ニ統監府ヨリ韓國政府ニ對シ條約書

ノ引渡ヲ要求シタルニ右官中ニ保管セラルル

由然レトモ條約書類ノ如キハ元來之ヲ官中ニ

保管スヘキモノニ非サルヲ以テ速ニ之ヲ統監府

ニ引渡し調査、後ハ更ニ韓國政府ヲシテ保管  
セシムルモ可ナリ兎ニ角一應引渡し、手續ヲ取  
ラレンコトヲ望ム旨奏上セルニ陛下ハ條約書ハ  
重要文書ナルカ故ニ北漢山ニ之ヲ保管セシメ  
後江華ニ遷シ一昨年二月更ニ宮中ニ遷シタ  
ルモ其後見當ラサルヲ以テ或ハ宮闕炎上、際  
焼失シタルヤモ知ス其ノ顛末ハ沈相薰、李  
址鎔之ヲ承知シ居ル筈ナリト答ヘラレタルヲ以テ自  
分ハ條約ハ法律ト同キモノナラハ原書ナケレハト  
テ効力ヲ有セサルモノニアラス故ニ果シテ焼失シタ

ルモノナラハ其ノ事實ヲ各條約國ニ宣言致ス  
ヘシト上奏セルニ陛下ハ暫ク其ノ宣言ヲ猶豫  
センコトヲ望マセラレタリ條約ノ原本ハ假令焼失  
スルトモ之ニ規定セル權利義務ニハ何等ノ變  
化ヲ及ホスモノニアラス又條約國モ宮中炎上  
ノ際烏有ニ歸シタリト云ハ決シテ韓國ニ對  
シテ苦情ヲ提起スル筈ハナケレトモ只此ノ儘ニ  
放任スルハ不可ナルヲ以テ自分ハ宣言ノコトヲ  
言上シタル次第ナルニ陛下ハ之カ猶豫ヲ望マセ  
ラレタリ此點ハ聊曖昧ナリト認メサルヲ得ス

内部大臣ハ此ノ事實ヲ記憶セサルヘカズ

李内相

日韓議定書締結ノ際從來ノ條約

書ヲ閱讀スルノ必要起リ江華ヨリ取寄セ

一見シタルコトアルモ其ノ後更ニ原本ヲ見ス然

レトモ自分ハ如何ニシテ紛失シタルモノナルヤヲ承

知セス但シ當國ニ於テ重要文書ハ其ノ

寫ヲ政府又ハ宮中ニ止メ原本ヲ北漢山又

ハ江華ニ保存スルノ例ハ從來之レナキニ非

ルナリ

伊藤統監

果シテ實際ニ燒失シタルヤ否ハ近

日之ヲ確カルヲ要ス法律ハ既ニ之ヲ公布シ新  
聞ニモ記載セシ人民モ之ヲ承知シ居ルカ故ニ  
假令原本ノ消滅スル如キコトアルモ其ノ効力ニハ  
何等ノ影響ヲ及ホスコトナレ條約モ亦然リ  
假令當方ニ於テ之ヲ知ラスト云フモ先方ニ於テ  
孰知シ居ルカ故ニ其ノ義務ヲ免ルルコトヲ得ス  
然レトモ燒失ノ事實ハ之ヲ證明シ置クコト  
必要ナリ

李内相　了承調査上果シテ見當ラサハ其ノ  
事ヲ通知スルノ必要アルヘト存ス



伊藤統監

此奏聞長キニ亙リ一段落ヲ告ケタル

後自分ハ皇寧ヲ尊嚴及康寧ヲ保持スル

コトニ付キ陛下ニ奏聞セリ其ノ要旨ハ下ノ如  
シ

過日自分ノ齎ラレタル日本皇帝陛下ノ宸翰

中ニモ「統監ヲ信任シテ其ノ奏請スル所ヲ聽

納セラレンコトヲ望ム」トノ言辭アリ是レ自分カ

常ニ赤心ヲ披瀝シテ必陛下ニ忠實ナルヘ

キコトヲ日本皇帝陛下ニ於テ誠信用アラセラ

ルルカ故ニ如上ノ誠告ニ出テラレタルモノナリ依

テ自分ハ是ヨリ韓國皇帝陛下ニ對シテ最忠  
實ナリト信ス事ヲ陳奏致スヘシ顧ル昨年  
十月日韓協約ノ調印了リ同月二十九日自分  
ノ出發歸國セントスニ際シ陛下ハ宮内府大  
臣李載克氏ヲ自分ノ許ニ遣ハサレ五箇條  
ノ御希望ヲ傳示セラレタリ其ノ第一ハ皇室ノ經  
費增加ニ關スルコトニシテ臨時經常ヲ合シテ一  
トナシ之ヲ今國庫ノ財政ト區分シテ王室ニ一  
任セヨトコトナリ此ノ件ハ自分ニ於テモ直ニ御  
同意申上ケ目賀田顧問ニモ之ヲ諮リ竟ニ五

拾萬圓ノ増額ヲ為スコトセリ第二、皇室財産ニ關スルコトニシテ此ノ點ニ付テハ他日慎重ニ調査ヲ加ヘテ上ナラズ直ニ自分ノ意見ヲ言上シ難キ旨ヲ覆奏セリ第三、皇室所有ノ財産ニ對シテハ財政顧問ヲシテ干涉セシメサルヲ第四、皇室ノ財政ハ宮内府自カラ之ヲ整理シ一般財政ノ整理ト區別スルヲ第五、宮中ノ肅清ヲ為シ文明國ノ模範ニ據リ將來ノ弊害ヲ防カントスルヲ等ナリシ此ノ五箇條ニ對シ第二條ヲ除ク外自分ハ悉ク御同意申上

ナ且其ノ言責ヲ重シテ之ヲ實行セシメタリ  
然ルニ宮内府、於テ其ノ後何等肅清ノ實  
ヲ舉ケシヤ將テ文明國ノ模範ニ隨テ何  
ノ改革ヲ加ヘシヤ勿論日韓議定書ニ據  
リ韓國皇室ノ尊嚴ヲ維持シ康寧ヲ保  
障スル自カノ責任ナリ雖常ニ皇室ニ對  
シテ干涉ヲ為ス安當ナラスト信シタルカ故ニ今  
日迄ハ之ヲ放任シタリ然レトモ尚此ノ儘ニ打棄  
テ置カンカ肅清ハ愚カ日韓兩國ノ交誼ヲ  
妨礙セントスル雜輩ノ出入日ニ頻繁ヲ加ヘ

自分ノ職責上最早之ヲ傍觀スルヲ得サルニ依リ

茲ニ陛下ニ對シ最忠誠ナル心ヲ以テ此ノ事ヲ陳

奏ス陛下ハ現ニ金升斂ナル者ヲ御使用アラ

セラレタルカ如シ同人ヲ我カ憲兵ニ於テ拘留審

問セル際同人ノ有セル書類ニ「島夷敵臣伊

藤、長谷川」云々トアリ是レ陛下ノ語ナリヤト詰

問セシニ同人ハ然リト答へタル由此レ果シテ日韓

兩國ノ交際ヲ敦睦親密ナラシムル所以ナリヤ

然リト雖自分ハ陛下ノ御為ヲ慮リ日本政

府ニ報告スルコトハ之ヲ見合ハセタリ何トナシハ若

之ヲ日本政府ニ報告セ、事重大ニ至ルノ虞アリ  
トナリ又自分ハ宮中ト暴徒トノ關係ヲ熟知  
シ現ニ暴徒ニ對シテ宮中ヨリ資金ヲ供給セ  
ラタリノ證據ヲ有ス且宮中ト暴徒ト暗ニ連  
絡ヲ保テルコトモ宮中ト上海浦塩地方ニ在ル  
韓人ノ間ニ密使密電ノ往來スルコトモ亦能ク  
之ヲ知レリ而シテ今日迄之ヲ放任シタルハ全ク寬  
ニ失セルモノニシテ既ニ紊亂甚ク極ニ達シ尚此  
儘ニ打棄テ置カレカ自分ハ職務ヲ懈ルノ責ニ  
任セサルヘカス輒々此ノ場合ニ於テ陛下ヲ御

輔ケ申上ルノ誠意ヲ以テ宮中取締ノ方法ヲ講  
セシト欲ス希ク陛下能ク自分誠意ノ存ス所  
ヲ御諒解アリシコトヲ請フ奏上シ更ニ進テ宮  
中ニト筆至女等ノ出入頻繁ナルニハ決シテ  
文明國ニアルマレキ失態ナレハ先ツ以テ斯カル輩  
ヲ遠サケラレサルヘカラサルコトヲ陳奏セリ陛下ハ  
之ニ對シ多少ノ辯疏ヲ試ミラレモ自分ハ裁  
判官ニ非サルガ故ニ事實ノ證據調ヲ為スノ  
必要ナレ殊ニ今自分ヨリ陳奏セル事ハ内外  
人ノ齊ク認ムル所ニシテ到底韓國ノ宮禁

ヲ肅清ナリト稱スルコトヲ得ス故ニ之ヲ取締ル為  
我カ憲兵ヲ使用セシカト思ヒタルモ斯テハ韓  
國ノ體面ニモ係ルヘキニ付先ツ韓國ノ警察  
ヲ警察務顧問部ヲシテ之ニ當ラシムルコトトシテ  
山顧問ヲシテ宮闕外門ノ取締ニ任セシメ更ニ  
宮禁内ノ取締ニ付テハ宮中府中ノ官吏警  
務顧問部及統監府ノ官吏ヲ以テ委員ヲ組  
織シ其ノ執行方法ヲ協議セシムヘシト奏上セ  
リ之ニ對シテ陛下ハ暫時ハ猶豫ヲ留王マセラレ  
先ツ當方ニ於テ相當ノ取締法ヲ設クヘキニ付



若其ノ實效ヲ奏スル能ハサル場合ニ至リ警務  
 顧問<sup>ヲ</sup>シテ之ニ着手セシムルコトトシタレトノ御談  
 アリシモ自今ハ最早宮内府單獨ニテハ到底之  
 ヲ有効ニ實施スルコトヲ得スト認メ斯ク進言ニ  
 及ヒタル次第ニハ陛下ノ御希望ニ副フコトヲ得  
 サルヲ以テ速ニ御同意<sup>アラレ</sup>コトヲ請フ旨奉答セル  
 ニ陛下ハ然ラズ異存ナド仰セラレテ自今ハ尚  
 進テ陛下カ總テノ政事ニ干涉セララルノ不可  
 ナ所以ヲ述ヘ政府當局者ニ任<sup>其</sup>シテ責任ヲ取  
 ラシメラルル様アリタキ旨殊ニ親ラ小策ヲ弄シ

テ密計陰謀ヲ事トセラルカ如キハ聰明ナル君主  
御所行ニアルマシキコトナル旨ヲ奏上セルニ朕餘  
リ干涉ヲ為ササルモ兎角大臣等ハ事ノ可ナル  
モノハ自カウ其ノ功ヲ收メ事ノ不可ナルモノハ  
陛下親ラ之ヲ為セリト稱シテ罪ヲ朕ニ嫁スル  
ノ傾アリトノ勅答アリキ自分奏上ノ顛末ハ  
大要斯ノ如シ此ノ陳奏長時間ニ亙リタル以  
テ自分ハ御暇申上ケ昨夜来宮禁肅清ノ  
實行ニ着手セシメ次第ナリ

朴參政

閣下御謁見ノ後自分等二三人御

前ニ伺候タルニ陛下ヨリ閣下御奏聞ノ顛末  
ヲ御詔アリ金升岐ノ事ニ關シテハ朕カ下賤ナ  
ル者ノ虚説ニ耳ヲ傾ケタルカ故ニ斯ル結果ヲ  
生シヨリ聞タ所ニ據テ彼ハ今軍司令官ノ許  
ニ拘留セラレ居ルトミテ彼ノ如キハ帝ニ日本ノ為  
ニ不利益ナルノミナラス我カ皇室ニ取リテモ不  
忠ナル者ナク取調ノ上嚴重ニ處分シテ可ナリ  
ト仰セラレタリ

閔度相 加之陛下ハ金升岐ハ初之ヲ推薦シタ  
ル者アリ朕ノ彼ヲ延見シタルハ今ヲ推薦シタ

ル者ノ言ヲ信シタルニ依ルモノナレハ須ラ此ノ推薦  
者ヲ罰スヘキモノナリ云々ト宣ハセラル

伊藤統監 推薦者ハ蓋シ咸鏡道觀察使

ナレ

朴參政 否、茲、其ノ際下サレテ詔勅ノ寫アリ

御一覽ヲ請フ其ノ文ニ曰ノ

詔曰參領李敏和誤薦人材致損國體尙  
饒委錫鎬程中周旋頗多爽實究厥罪  
狀俱極痛駭並為先免本官令法部拘拿  
懲辦

又宮中肅清ニ就テモ陛下ハ更ニ一詔勅ヲ下サ  
タリ其ノ文左如シ

詔曰前後以肅清宮禁一事屢下勅諭而  
久輒懈弛終歸文具以致淆雜是豈事  
體乎從今以後雖有實職而如非公事  
無得汙漫出入至於無實職之人雖曾  
經大臣官如非召命勿許進宮其外閑散之  
輩若有無常出入如前犯科者直行拘  
拿定罪之意令主殿院及警務廳嚴  
立規條恪遵施行

伊藤統監

宮中肅清ノ詔勅ハ其ノ當ヲ得

タルモナリ蓋シ自分ノ奏聞ヲ至當ト認メラ

レ斯ノ如キ詔勅ヲ發セラルモノナルヘシ然ト

モ金井敏推薦者處罰ノ詔勅ニ付テハ自

分ハ安當ナラスト信ス勿論推薦者モ宜カ

ラルニハ相違ナキモ薦タル者アラハ何人ニテモ

之ヲ採用スルト云フニ至テハ則ケ是レ君主ノ

過錯ヲ示スモノナリ要スルニ斯ノ如キハ支那

流ノ舊法ニ外ナラサレハ自分ハ之ヲ發セラシ

サルヲ可ナリト認ム君主ニ取リテ第一ニ必要

ナルハ人ヲ視ルノ明ニ在リ

朴参政

古昔堯舜ノ如キモ四寃凶ヲ誤用シタル

例アリ我カ大明法典ニモ誤テ人ヲ薦ムルノ罪  
アリ

伊藤統監

然リ然レトモ开ハ支那流ノ舊法ナ

リ文明ノ主義ニ協フモノニアラス

朴参政

陛下ハ罪ヲ人ニ讓ラントセラルルノ意ニ

アラス將來ノ弊害ヲ防カンカ為ニ推薦者ヲ

處罰

セラレントスルナリ

伊藤統監

推薦者ハ他人ヲ薦ムルニ當リ其

者カ果シテ善ヲ為スヘキカ將タ惡ヲ為スヘキ  
カラ容易ニ鑑別シ得ルモノニアラス故ニ責任ハ  
之ヲ採用スル人ノ明不明如何ニ依テ決セラルヘ  
キモノナリ例ヘハ皇帝陛下ハ日本ヨリ飯野  
吉三郎ナル者ヲ傭聘セラレントスル思召ニテ  
朴魯銳ナル者ヲ我カ國ニ遣ハサレ密勅ヲ下  
サレタルコトアリ飯野ナル者ハ自分モ之ヲ承知  
シ居リ彼ハト筈者ニハ非サルモ學識人物  
共ニ決シテ價值フルモノニアラス然ルニ如何ナル故  
ニ陛下ハ彼ヲ宮中ニ傭聘シテ自分ノ頭



ヲ抑ヘシメントセラル、ノ思召ナリシヤニ聞ク蓋シ  
朴魯銑ナル者嘗テ日本ニ渡航セル際飯  
野ニ面會シタルコトアリ依テ之ヲ陛下ニ推  
薦シタルモノナルヘシ加藤顧問此ノ事ヲ自  
分ニ語りタルヲ以テ謁見ノ際之ヲ奏上シタ  
ルニ陛下ハ實ニ耻入リタル次第ナリト御挨拶  
アラセタリ

李軍相 自分ノ信スル所ニテハ金升皎ハ僅ニ  
二三回陛下ニ謁見シタルニ過キス然ルニ陛下  
ノ彼ヲ信セラル此ノ如ク厚キ所以ノモノハ李

敏和、錫鎬等内ニ在テ交、陛下ニ傳  
奏シ且之ヲ稱揚シタルニ由ルモノナラント推  
セラル故ニ此ノ兩人ノ處罰ハ必之ヲ斷行スヘキ  
モノニシテ臣子ノ分之ヲ默止スルコトヲ得ザリ

伊藤統監

御勝手次第ナリ然レトモ復讎ハ三

百年以前ノ古法ニシテ歐米ノ文明世界ニ

ハ斯ノ如キコトアルナシ今日ニ於テ古法ハ可成

之ヲ改ムヲ可ナリス諸君ノ御意見如何ヤ

閣度相

自分共ハ個人トシテ決シテ彼等ニ怨

アルモノニアラス

伊藤統監

貴國ニ於テ誤テ人ヲ推薦スルノ

罪ヲ糾サント欲セハ其ノ數枚舉ニ遑アラサ

ルヘシ寧ニ初ヨリ斯ル輩ノ出入ヲ禁スルニ如

カス

関度相

内ニ在テ推薦スル者ナクハ在野ノ

學者ハ陛下ニ直接其ノ意見ヲ奏上スル

ヲ得ス從來學者ヲ厚遇スルハ我カ國ノ風

習ニシテ儒林ノ錙々タル山林ノ如キハ草莽

ノ臣或ハ一躍ニテ祕書院卿祕書丞等

任セラレ登筵即チ陛下ノ御前ニ於テ自説

ヲ陳述シ得ルノ資格ヲ有スルニ至ルヲ了茲  
列席ノ諸大臣中輔國タルモノハ一人モ無シ隨  
テ登筵ヲ爲ス資格ナレ然ルニ金升皎ノ如キ  
在野一介ノ儒生ニシテ一躍登筵ノ優待ヲ  
享クルニハ必内ニ在テ極力陛下ニ推薦ス  
ル者ナカルヘカラス又所謂登筵ナルモノハ公  
席ニ於テスル例ナルカ故ニ決シテ機密ニ互  
コトヲ上奏スルコトヲ得スサレハ今回ノ舉ノ如キ  
必内ニ在リテ奸策ヲ弄シタル者アルニ相違ナシ  
而シテ斯ノ如クニシテ内ヨリ君主ヲ誤ラシムル者

アス決シテ其儘ニ放任スルコトヲ得サルナリ

伊藤統監

斯ノ如キ貴國ノ古法ハ飽クコトテ之ヲ

繼續セラルル方針ナリヤ貴國ハ斯カル古法

ヲ尊重セラルルカ故ニ日々貧弱ニ赴クニアラス

ヤ今日ニ於テハ頑迷ナル清國ニ於テスラ古來

ノ及第法ヲ廢止セルトスルモノ、如シ周ノ文物

制度ハ其ノ當時ニ於テ實ニ燦然タルモノ

ナリシト雖今日ニ在リテハ時勢ノ必要ニ應ジ

之カ改廢ヲ企テツツアリ貴國ニ於テモ一國內

ニ塾居シテ世界ノ大勢ニ通セサル時代ニ於テハ

或ハ已ラ得サルモノアリシナリモ既ニ眼ヲ開キテ文  
明ノ式ニ隨ヒ國利民福ヲ興サントスル今日ニ於  
テハ斯カル有害無益ノ舊慣ハ速ニ之ヲ廢  
棄スル方寧ロ韓國ノ為ニ忠ナル所以ニアラス  
ヤ

閔度相 自分ハ必シモ舊習ヲ襲ハント欲スルモノニ  
アラス唯金升旼ノ有セル書中ニ聖上曰ク島  
夷敵臣之ヲ語ハ決シテ皇帝ノ口ヨリ出タル  
モノニ非スシテ仲介者ノ口ヨリ出タルモノナルコトヲ  
明示セント欲シタルナリ

伊藤統監

自分、此地ニ來任セル、韓國ヲ世

界ノ文明國タラシメント欲スルカ故ナリ、若山林ヨ

リ太公呂望ノ如キ者出テ來テ韓國ノ君

臣ニ耳ヲ假スカ如キコトアルハ自分ハ早速

歸國スル外ナシ

李官相

自分ハ過日來病氣療養ノ為引

籠中ナリシヲ以テ禮式院卿ヲシテ宮内府大

臣ヲ署理セシメ居リ、昨夜天機ヲ伺ハシカ為

入闕セント欲シタルニ統監上奏ノ結果、巡查憲

兵ノ官門ヲ衛ルアリ、内ニ入リテ國分祕書官ヨ

リ事情ヲ聴キ始メテ之ヲ了解シテ昨午十一  
月勅使トシテ五箇條ヲ傳達シタル自分ナレハ  
其ノ後之カ實行ヲ懈ク者ノ責ハ自分ニ於テ之  
ヲ負ハサルヘカス隨テ統監閣下ニ對シテ今更  
何等辯解ノ途ナド雖今後日本巡查カ門  
衛ヲ爲スノ一事ハ人心ニ疑惑ヲ起サレムルノ虞  
アルニ依リ之ヲ宮内府大臣ニ於テ擔當シ極力  
宮中ノ肅清ヲ圖ルヘケレハ一應自分ヲシテ  
其ノ任ニ膺ラレメ之而モ尙自分カニテハ到底  
其ノ實効ヲ奏スル能ハサル場合ニ立到ラハ



統監ノ御説ノ如クセラルルコトレシ警衛ハ一時  
撤回セラレシコトヲ切望ス

伊藤統監

コノ奇怪ナルコトヲ承ルモノカナ自今ハ

昨日陛下ニ奏上シテ其ノ御同意ヲ得タル上  
實行ニタルモノナリ然ルニ貴大臣ノ一言ヲ以テ  
之ヲ撤回セヨト抑如何ナル意ナリヤ

李官相

統監閣下昨日謁見ノ結果トシテ陛

下モ大ニ反省セラルル所アリ斯ノ如キ詔勅ヲ

發セラレタ次第ニシテ且警務署及警衛

院ハ内部大臣ト小官ノ管轄ナルカ故ニ兩人協

議ノ上充分嚴重ニ取締方ヲ實行スヘキ旨命  
セラタリ依テ自分等ハ将来飽クマテモ宮中肅  
清ニ盡瘁スヘキコトナラス一方ヨリ觀ル宮門、取  
締ヲ今日如ノ日本巡查ノ手ニ於テ為スハ當  
國人心ノ上ニモ影響ヲ及ホス所少カラス近テ痛  
歎スヘキ大事ヲ惹起スルニ至ルヤモ測ラレサルヲ  
以テ旁宮門取締ノ件ハ敢テ統監閣下ノ  
御再考ヲ望ム

伊藤統監 自分ハ到底宮内府大臣ノ要求ニ  
應スルコトヲ得ス何トナレハ本件ニ關シテハ自

分モ之ヲ實行スル前十分慎思熟慮ヲ加ヘ  
 リ當初ハ我カ憲兵ヲ以テ宮門護衛ノ任  
 ニ當ラシメンカト考ヘタルモ斯テハ韓國ノ體面  
 ニモ關スルニ依リ韓國ノ警察ヲ以テ之ニ當  
 ラシメタル次第ナリ若是ニテ宮中肅清ノ實  
 ヲ舉ぐるト能ハスハ次ニ憲兵ヲ以テシ憲兵  
 ヲ以ラタルモ尚其ノ切ヲ奏スル能ハスハ更ニ軍  
 隊ヲ使用セント欲スルナリ要スルニ此ノ事タル  
 決シテ重大ノコトニ非サルカ故ニ御配慮ハ  
 寧ロ杞憂ニ屬スルナラン

李宮相

顧問警察ハ勿論韓國ノモノニ相

違ナキモ其ノ中ニ日本ノ警官モ聘傭シ居ル

コトナハ人心ニ影響ヲ及ホス處少カラスト存ス

伊藤統監

御配慮無用ナリ人心ニ影響ヲ及

ホスコト重キカ果タ皇室ノ安全ヲ圖ルコト重

キカ物ニ大小輕重ノ別アリ當局者タルモノ

能ク之ヲ考慮セサルヘカラス

朴參政

此ノ事タル政府ニ於テモ其ノ責ハ免シ

サルコトニテ詔勅ニ據ルモ今後ハ宮内府及政

府協力シテ宮中肅清ニ力ムヘキハ勿論ナ

六宮内府大臣希望主ノ如ノ統監閣下ニ於テ  
再考セラレコトヲ自分ニ於テモ希望スル次  
第ナリ

伊藤統監 内部ノ取締ニ關シテハ委員ヲ組  
織スルコトニナリ居ルハ宮内府大臣モ其ノ委  
員ノ一人トシテ肅清法ヲ講セラルレハ可ナリト  
信ス

朴參政 警務顧問ハ雜輩ヲ熟知セサルカ  
故ニ却テ宮内府ニ於テ政府ト協議ノ上取  
締ル方有効ナラト信ス

伊藤統監

貴説不可なり貴國人ノミニテハ到

底有効ヲ取締ヲ為スコトヲ得ス若之ヲ

為シ得ルモノトセバ今日迄ニ既に充分嚴重ナ

ル取締ノ實蹟ヲ擧ケ得ヘカリナリ加之現

ニ宮闕外門ノ取締ハ警務顧問ノ手ヲ以テ

實施シツ、アルニ非スヤ

李内相

昨夜自分モ宮闕ニ伺候シ丸山顧問

及國分祕書官等ニモ面會セリ宮闕取締

ノ事モ政府ニ於テモ從來其ノ論ナキニシモ

非サリシカ今日迄之ヲ實行スルコトヲ得サリ

レナリ然レトモ一度詔勅下リテ以上政府ニ  
於テモ宮内府ト協力シテ充分之カ取締ノ任  
ニ膺レコトヲ期ス加之警務顧問部下ノ巡  
査ハ我カ國ノ事情ニ通セサル人モ多カルヘシ  
ト信ス

伊藤統監

然ラ事情ヲ解ス者ヲ之ニ附セ

ラルレハ可ナラスヤ要スルニ自分ハ到底諸君ノ

希望ヲ容ルコトヲ得ス自分ハ昨夜一睡

タニセス今朝三時過ヨリ五時頃迄李宮

内府大臣署理ノ來訪ニ接シ懇々我カ意

ノ在ル處ヲ説明シタル末同氏ハ自分ニ對シ其  
ノ實行ヲ約シテ辭シ去リ然ルニ今更之ヲ取  
消サントセラルカ如キハ到底不可能ノ事ナリ  
李内相 決テ實行ヲ止メント欲スルノ意ニ非ス  
實行ノ必要ハ自分ニ於テモ之ヲ認ム然レト  
モ其ノ目的ハ雜輩ノ出入ヲ禁セントスルニ在  
ルヲ以テ穩和ナル方法ヲ以テ此ノ目的ヲ達シ  
得ンニハ之ニ依ルニ如カスト信スルナリ

伊藤統監 現在、儘ニテ可ナリ之ヲ更ムルノ  
必要ヲ見ス抑、警務顧問ハ何レニ屬スル



官吏ナリヤ言フマテモナク内部大臣ニ屬スルモノナ  
ハ貴大臣ハ之ニ對シテ相當ノ命令ヲ下シ自  
己ノ欲スル如ク使役セラルルハ可ナリ

李内相

自分共ハ宮内府及政府ニ於テ之

ヲ擔任シ宮中肅清ノ實行ニ着手スル

以上必之ヲ成就センコトヲ期ス若自分等ニ

於テ其實功ヲ舉グルコト能ハサルコトモアラハ

憲兵軍隊等ヲ以テセラルルモ更ニ遺憾ナシ

伊藤統監

諸君ハ其ノ意ニ隨テ如何ナル説

ヲ吐カルルモ可ナリ自分ハ皇室ノ尊嚴安

寧ヲ保持スルノ責任アルヲ以テ自分ノ確實  
ナリト認ル方法ニ依テ之ヲ實行スルノ職權  
アリ

李内相 自分モ金升敎ノ有セル文書ノ寫ヲ一讀  
セリ其ノ中ニハ伊藤侯及長谷川大將ヲ目スル  
ニ島夷敵臣ヲ以テスルノ語アリ然レトモ顧ハ  
自分等モ昨年十月ノ協約ヲ締結セシ以  
来我カ國民ヨリ亂臣賊子ト呼ハレワアリ  
是レ皆宮中ニ出入ル雜輩ノ指嗾ニ出  
タルモノニシテ宮中ノ肅清ハ寧ロ自分等

ニ於テモ切ニ其ノ必要ヲ感スルモノナレ之ヲ  
自分等ニ擔任セシメラルルハ誓テ其ノ功ヲ  
奏センコトヲ期ス

伊藤統監 自分ニシテ若陛下ニ奏聞セテ獨  
斷ヲ以テ此ノ舉ニ出テタルモノナラニハ或ハ諸  
君ノ説ノ如キモ安當ナルヘシト雖自分ハ之ヲ  
實行スルニ先タケ充分ニ思慮ヲ費シ然  
ル後之ヲ陛下ニ奏上シ其ノ御同意ヲ得テ  
實行シタルコトナレ最早之ヲ變更スルコトヲ  
得ス本日ハ只我カ腹心ヲ披キテ諸君ニ昨

日以來ノ經過ヲ報告スルニ止ムルニ諸君ニ  
於テモ其ノ意ヲ諒セラレテ可ナリ尚本日ハ  
例ニ依リ粗末ナル午餐ヲ準備シアレハ自  
分ト食卓ヲ共ニセラレシコトヲ請フ

是ヨリ統監ハ各大臣ヲ導キ食堂ニ入ル于時午  
後一時

食堂ニ於テ宮内府大臣ハ反覆數回外門ノ日  
本巡查撤回ヲ統監ニ懇請スル所アリシモ統監  
ハ飽マテ之ヲ排斥シテ更ニ同意ヲ與ヘザリキ宮内  
府大臣ノ懇請最力ナルヤ統監ハ遂ニ同大臣ノ

斯クマテ熱心ニ日本巡查ヲ排斥セントスルハ蓋シ  
皇帝ノ御希望ニ因ラレ、モナラシ果シテ然ラハ再  
三再四統監ニ懇請シタルモ彼ハ執拗ニ其ノ説  
ヲ主張シ到底屈服セシムルヲ得サリキト復命  
セラレテ可ナリト擲掄スルニ至リ

統監ト宮内府大臣ト應對中関度相ハ日本  
警官ヲ以テ指揮官トナシ實際宮門ノ敬言護  
ハ韓國巡查ヲ以テ之ニ當ラシメタレト折衷説ヲ  
提出セシモ統監ハ尚之ヲ却ケ此ノ事ハ人種  
論ニアラス又國粹論ニモアラス韓國ノ為ニ固

リテ最忠實ナル誠意ヨリ出ラタルコトナハ徒ニ體面  
ヲ装フノ説ニ同意スルコトヲ得ス若韓國警官ニ  
シテ警務事務ヲ遺憾ナク執行シ得タラニハ  
初ヨリ警務顧問ノ如キモノハ之ヲ置カサルモ可ナ  
ルニ非ヤト丁寧及覆之ヲ訓諭セリ

斯ノ如ク統監ノ意志到底之ヲ翻ヘス能ハサルヲ  
觀ルヤ閣度相ハ更ニ一説ヲ出シテ統監ノ指揮  
ノ下ニ宮内府大臣及内部大臣ニ於テ宮中肅清  
ノ實ヲ舉グルコトニ修正ナク如何ト提議シタルモ  
統監ハ既ニ決行シタルコトハ如何ナル事情アリトモ

之ヲ變更スルコトヲ得ス但シ内部ノ取締ニ至テハ  
前陳ノ如ク委員ヲ組織シテ相當ノ方法ヲ講  
セシムヘシト答ヘタリ

斯クテ列席大臣百方懇請スルモ統監ノ意志牢ト  
シテ拔クヘカラサルヲ察スル中宮内府大臣ハ悵然大息  
宮中ヲシテ今日ノ如クナラシメタル全ク自己ノ罪ナシ  
皇室及國民ニ對シテ其ノ責ヲ負ハサルヘカラスト  
陳述セリ統監ハ之ニ對シテ升ハ統監ノ與カリ知ル  
所ニアス若過アラハ今後ニ於テ之ヲ改ムル策ヲ  
講スヘキナリ而モ現ニ其ノ策ヲ講シツハアルニアスヤ

宮内府大臣及内部大臣ノ如キ直接關係者ハ宜  
ク宮禁取締方法調査委員トナリ自ラ其ノ  
衝ニ當リ大ニ盡サルヘカスト慰撫獎勵セリ  
斯ノ論議ヲ盡シテ後宮禁内取締方法委員ハ  
統監ノ提議ニ基ツキ左ノ如ク決定セリ

宮内府大臣 李載克

内部大臣 李址鎔

主殿院卿 李根浩

敬務顧問 九山重俊

統監府書記官  
兼統監秘書官 國分象太郎



委員ノ撰定スルヤ 統監ハ委員タル大臣ハ勿論各  
大臣ニ於テモ充分宮中肅清ニ盡瘁スルヤ否ヤヲ  
再問シ孰モ奮テ之ニ膺ルヘシト 確答ヲ得タル後  
懇切熱心ニ宮闕取締ノ方針ヲ開陳シ日本及  
諸外國ノ例ヲ参照シテ起稿スルヤ法規ノ大要ヲ  
訓示セリ

宮中肅清問題一段落ヲ告グルヤ 統監ハ農商  
工部大臣ニ向ヒ鑛業法及移民保護法ハ既ニ  
陛下ノ御裁可ヲ經タリヤ否ヤヲ問ヒタルニ 權農  
相ハ本日頃御裁可アルヤ答ナリト返答セリ

次ニ統監ハ佐藤軍醫總監ハ今夕到着スヘキ旨ヲ  
告テ速ニ適當ナル土地ヲ選定シテ病院ノ敷地ト  
ナスヘキコトヲ内部大臣及度支部大臣ニ注意シ兩  
大臣ハ直ニ相當ノ處置ヲ取ルヘキ旨ヲ確答セ  
リ

又東京高等師範學校教授三土忠造傭聘ノ  
件ニ關シ統監ハ學部大臣ニ對シ三土ハ幣原ト  
同ク其ノ名稱ハ學部參與官ト為スヘキモ別ニ契  
約ヲ要セス辭令ヲ以テ任命シテ可ナリト告ケ尚  
當分主トシテ教科書編纂ニ從事セシムヘキ旨

ヲ當人ニ直接申聞ケルコトヲ語レリ  
午後三時散會

附記

散會ニ先クテ内部大臣ハ明日ハ皇太子妃  
丹立ノ為處女ヲ揀擇セラルヘキ當日ナルヲ  
以テ大臣自カラ許多ノ婦女子ヲ伴ヒ入闕ス  
ヘキニ付キ豫メ了承セラレシコトヲ請フト述  
ヘ統監ハ此等ハ勿論妨ナキコトナレハ其ノ  
旨前以テ貴大臣ヨリ警務顧問ニ通達  
シ置カルヘト注意セリ

215958  
7  
昭和25年10月/日

極  
秘

韓國施政改善ニ關スル協議會 第八回

韓國施政改善：關元協議會第八回

開會時刻

明治三十九年七月十二日午前十一時三十分

場所

統監官舎

列席者

統監侯爵

伊藤博文

參政大臣

朴齊純

内部大臣

李址鎔

度支部大臣

閔泳綺

軍部大臣

李根澤

法部大臣

李夏榮

學部大臣

李完用

農商工部大臣 權重顯

通譯者

統監府書記官  
兼統監秘書官

國分象太郎

筆記者

統監秘書官

古谷久綱

此ノ日伊藤統監、佐藤軍醫總監及梅法學博士

ト共ニ應接間ニ出テ各大臣ノ參集スルニ隨テ兩博

士ヲ紹介ス其ノ際統監ヨリ各大臣ニ交渉シタル事

項中特記スヘキモノ左ノ如シ

一 本年八月英國支那艦隊司令長官ムーア中將

艦隊ヲ率テ正式ニ來訪ストノ報知ニ接シタル

ヲ以テ統監府ハ之ヲ歡迎ス豫定テ韓國側ニ

於テモ統監府ト協力スルカ、或ハ單獨ニ同中將以下ヲ款待スル方法ヲ講シ然ルヘシト提議セルニ各大臣ハ至極同感ナレハ其ノ方法ニ付テハ追テ協議ノ上貴意ヲ得ヘシト即答セリ

二、統監ハ軍部大臣ニ對シ仁川月尾島ニ韓國砲臺アリ舊式ノ砲二門ヲ備ヘ同港ニ出入スル外國軍艦ニ對シテ禮砲ヲ發シ來レリ然レトモ近來世界各國軍艦ト砲臺トノ禮砲交換ハ何レモ之ヲ廢セルヲ以テ韓國ニ於テモ此ノ例ニ倣ヒ之ヲ廢スル方然ルヘシ現ニ屢同港

一 出入スル日本軍艦、如キモ其ノ煩ニ堪ヘサルヲ  
 訴ヘ來リ若此、砲臺ヲ以テ韓國ノ威力ヲ  
 世界ニ示サントセハ僅ニ門ノ舊式砲ヲ以テ其  
 ノ目的ヲ達スルコト能ハサルハ明ナレハ寧ロ世界ノ  
 常例ニ則ルヲ可トスル旨提議シタルニ軍部大臣  
 ハ其ノ意ヲ諒シ奏上裁可ヲ經テ之ヲ廢スル  
 コトトナスヘレト確答セリ

此外統監ハ鑛業法及移民保護法本日ノ官  
 報ヲ以テ發布ノ運至リタルハ農商工部大臣ノ盡  
 力蓋シ多キニ依ルヲラント同大臣ヲ稱揚シ又佐藤



博士ノ指揮ノ下ニ新設スヘキ病院ハ大韓病院ト命  
名シ其ノ内ニ赤十字部ナルモノヲ設ケナハ當初ノ目  
的ヲ達スルニ幾カシカト閑陳セリ又近着ノ新聞  
紙ニ依リ英國外務大臣ノ同國下院、於テ為レル  
演説ニ關スルルター電報ヲ各大臣ニ示シテ英  
國當局者ハ日本カ公共心ヲ以テ韓國ノ施政ヲ  
改善シツ、アルコトヲ認マル旨ヲ語レリ

斯ク談話セル際各大臣悉ク參集セルヲ以テ統監  
ハ佐藤梅兩博士ハ最早退席スルモ差支ナレト  
告ケ直ニ各大臣ヲ協議室ニ導ケリ于時午前十

一時五分

伊藤統監

地方行政改善取調委員ノ報告

出來タル之ヲ閱讀シタル

李内相

了承、調査一ト通終結シタルハ淨書

ノ上高覽ニ供スル存念ニテ塩川通譯官

目下翻譯中ナリ

伊藤統監

教育擴張ニ關スル調査ハ終結

シ其ノ成案ハ既ニ之ヲ閱讀セリ而シテ自

分ハ其ノ通實行タル可ナシト申置ケリ

李學相

彼ノ成案ハ一時ニ之ヲ實施スルコ

トヲ得サルカ故ニ先ツ視學官ヲ十三道ニ派  
遣シ其ノ實行方法ニ付テ調査攻究ヲナ  
サシムルコトニ致シタリ

伊藤統監 地方行政改善ニ關スル書類完成  
ノ上之ヲ一見シ如何ナル改善ヲ實施シ得ヘキ  
カラ判斷セント欲スルカ故ニ可成速ニ調査ノ結  
了センコトヲ以テ云ム

李内相 了承

伊藤統監 梅博士モ到着シタルコトナク兼テ度  
支部大臣ノ希望モアリ先ツ土地ニ關スル法

律ノ制定ヲ同博士ニ委任セント欲ス想フニ  
 韓國ノ土地ニ關スル行政ハ紊亂其ノ極ニ  
 達シ之ヲ整理スルコト頗ル困難ナリト信ス依  
 テ先ツ法律ヲ以テ土地所有者ニ地券發給  
 ノコトヲ規定セサルヘカラス而シテ此ノ法律編纂  
 ニ付テハ土地所有ニ關スル從來制度習慣  
 ヲ明ニシ其ノ取ルヘキモノハ之ヲ採リ廢スヘキ  
 モノハ之ヲ廢シ又新ニ規定ヲ設クヘキモノハ之  
 ヲ設ケサルヘカラス自分ノ知レル處ニテハ從來韓國  
 ニ土地所有權ナルモノ存在スルヤ否頗ル不確

實ナリ故ニ法律ヲ以テ之ヲ確實ニセント欲  
セハ之カ基礎タルヘキ條項ハ該法文起稿  
ニ先チ豫メ之ヲ決定シ置カサルヘカラス右ニ付  
如何ナル手段方法ヲ取ルヲ可トスルヤ今日ハ  
先ツ諸君ト此ノ問題ヲ協議致シタル

関度相 土地ニ關スル法律制定ノ参照トシテ從  
來ノ制度習慣等ヲ調査研究スルハ最  
必要ノコトナレハ先ツ當方ニ於テ之ヲ調査  
シ其ノ結果ヲ書面ニ認メテ高覽ニ供スル  
コト、致スヘシ

伊藤統監

貴方：於テ調査ヲ遂ケ之ヲ書

類：認メラル、ニハ長日月ヲ要スヘシ然ルニ

梅博士：現ニ我カ法科大學ノ教授ニシテ

又自分ノ總裁セル帝室制度調査局ノ御

用掛ヲ兼ネ我カ宮廷ノ制度改正ニ盡力

シツ、アリ其ノ外尚公私ノ學校ニ教鞭ヲ執

リ居ルカ故ニ今回モ餘リ長キ互リテ同博士

ヲ此地ニ滞留セシムルヲ得ス去レハ自分ノ考

案ニテハ内部又ハ度支部等ニテ土地ニ關スル

制度ニ精通スル者ニ三人ヲ選テ委員ヲ組

織シ之ニ梅博士ヲ加ヘ同博士ノ質問ニ應シ  
テ其ノ知ラント欲ス所ヲ答辯スルコトニセハ可ナ  
ラント信ス而シテ梅博士カ長ク當地ニ滞在ス  
ルコトハ前述ノ如ク之ヲ許サル事情アルカ故  
ニ自ラ大體ノ方針ヲ定メ然ル後其ノ部  
下ノ者ヲシテ法案起草ノ任ニ當ラシムルコ  
トニスルノ外ナシ

李内相 内部ニモ度支部ニモ適當ノ人物アリ  
之ヲ以テ委員ヲ組織シ梅博士ノ質問ニ應  
セシムルコトニ致スヘシ

伊藤統監

夫レニテ可ナリ但シ委員ハ何時之ヲ

組織シ得ルヤ

李内相

度支部大臣ト協議上然ルヘキ人物ヲ

選定スヘキヲ以テ明日ニテモ差支ナレ

是ニ於テ各大臣委員ノ集會スヘキ場所ニ付キ

種々協議ヲ凝ラシテ末法部ノ裏手ニ在ル英

語學校ハ目下休校中ナルヲ以テ一時之ヲ使用スル

コトニ決シ其ノ旨統監ニ報告ス

伊藤統監 場所ハ諸君ノ決定セラル、所ニ隨

ヒ何レニテモ可ナレトモ該委員ハ是非共連ニ



之ヲ選定セサルヘカラス

李法相

委員ハ必シモ官吏ナラサルモ可ナルヘシ

但シ若官吏以外ノ者ヲ選定セハ之ニハ幾  
分カノ俸給ヲ與ヘサルヘカラス

伊藤統監

然リ例ハハ尹致昊ノ如キ人ハ如何

各大臣

否、彼ハ常ニ外國ニ在テ我カ國ノ土

地ニ關スル制度ニ精通セスト信ス寧ロ多

年地方官ノ任ニ在リタル者ヲ選定スル方適

當ナリト認ム

伊藤統監

經費ハ多額ヲ要セサルヘシ

李法相 調査上韓國一般ノ法律ニ通シタ

ル人物モ必要ナルヘキニ付<sup>キ</sup>法部ノ官吏一名ヲ

此ノ委員ニ加ヘラレテハ如何

伊藤統監 貴說ノ如キ人物アル之ヲ加フルモ可

ナリ要スルニ委員ハ明日迄ニ選定アリタシ

閔度相 目下ノ處ニテ專ラ人民ノ土地所有

權ニ關スル法律ヲ制定スルヲ以テ第一ノ目

的トセラル、コト、信ス併ナカラ<sup>ニ</sup>附帶スル

目的ハ他<sup>ニ</sup>之レアラサルヤ

伊藤統監 附帶スル目的ト稱シテ特ニ之ヲ

列舉スルノ要ナシト雖凡ソ所有權ニ關スル  
法律ハ一切之ヲ制定スル豫定アリ例、所  
有權ニ關シ紛議ノ生シタル場合ニ之ヲ決定  
スルキ法律及土地ニ對スル納税ノ義務ヲ規  
定スル法律等ハ總テ之ヲ制定スルヲ要ス  
関度相 自分カ此ノ如キ質問ヲ發シタル所  
以ハ委員ヲ選定スルニ當リ大體ノ方針ヲ  
承知スルノ必要アリ故ナリ即チ第一土地所有  
權ニ關スル古來ノ制度ヲ調査セラルンヲ欲セ  
ハ之ヲ熟知セリ人 第二土地ニ關スル紛議ヲ裁

判<sup>シタル</sup>法規先例等ヲ承知セラレントモ之<sup>ニ</sup>精  
通セル人第三<sup>結</sup>納税其他土地ニ關スル納税  
制度ヲ調査セラレントモ新舊兩法ニ通セ  
ル人思フニ此三項ニ精通スル人々ヲ調査委  
員ト爲サ其ノ目的ヲ達シ得ヘシト信ス果シ  
テ然リヤ

伊藤統監 貴説頗ル其ノ當ヲ得ナリ尚目

賀田顧問ヲ委員加フルノ必要ハナキヤ

此ノ間對シ閣度相ハ財政ニ關係スルコトモ加フル  
方然ルヘシト提議シタルモ他ノ諸大臣ハ大體ニ方針

決定ノ上ニテ同顧問ヲ加フルヲ可トスルノ意見ヲ陳述  
セリ

伊藤統監 然ラハ大體方針決定ノ上目賀田

顧問ヲ加フルコトハスヘシ

權農相 我カ國ニテハ從來地券ト稱シ土地賣買

讓與ノ際之ヲ證明スル官文書アリ此地券

ヲ交付シ來ル官吏ヲ委員ニ加フハ如何

伊藤統監 郡守ナリヤ

權農相 然リ地方ニ於テハ郡守京城ニ於テハ

漢城判尹ナリ但シ地券ハ賣買讓與ニ付テ

悉ク之ヲ與ヘタルモノニアラス賣買證ヲ紛失又ハ  
燒失シタル際官署ニ於テ此ノ事ヲ證明スルコト  
トナリ居リ此ノ證明ヲ名ケテ立旨ト稱ス

伊藤統監 要スルニ韓國ニ於テ土地ニ關スル法

律ノ完備セルモノナレ立旨ノ如キハ事ノ變

態ニ備フルモノシテ今後與ヘントスル地券ハ即チ

常態ニ應セシタルモノナレハ之ヲ同一視スヘキモノニ

アラス

權農相 土地測量ヲ為サシテ土地ニ關スル法

律ヲ發布シ得ルヤ

伊藤統監

之ヲ發布スルモ可ナリ單ニ三角術ヲ

應用シテ土地ノ測量ヲ為スハ蓋シ多年ノ

日月ヲ費サ、ルモ之ヲ成シ得ヘシト雖全國ニ

亙リ土地ノ實測ヲ為シ精密ニ官民有ノ區

別ヲナシ民有地ニ就テ各其ノ所有者ヲ定

メント欲セバ十年乃至二十年ノ歲月ヲ經サ

ヘカラス帝ニ多年ノ日月ヲ要スルノミナラス又

巨額ノ經費ヲ支出セサルヘカラス故ニ自分ノ考ニ

テハ縦ヒ坪數ノ如キハ誤謬アリトモ之ヲ忍テ

地券ヲ與ヘ他日之ヲ賣買讓與スル際ニ精

密ナル實測ヲ為サント欲ス輒々先ツ所有權ヲ  
確定スル方法ニ看手セント欲スルナリ

權農相 勿論全國ノ測量ハ容易ノ業ニアラス然

レトモ度支部ニ於テ耕地ト宅地ノ測量ヲ為  
サンコトヲ企テ現ニ測量手ヲ養生<sub>成</sub>シツアリ

関度相 法律ハ法律ニテ梅博士ニ囑託シテ之ヲ

制定セシムルコト最必要ナリ但シ自分ノ考ニテハ

耕地ト宅地ハ早晚之ヲ精密ニ實測セサルヘ

カラスト信<sub>成</sub>シタルヲ以テ現ニ度支部ニ於テ測量

手ヲ養生<sub>成</sub>シツアリ過日モ其ノ生徒六人ヲ西



門内ノ王宮ニ遣ハシ地圖ヲ作ラセタルニ三日ヲ  
費シテ其ノ成績頗ル好良ナリ此ノ結果ニ徴  
スレハ茲ニ二百人ノ生徒ヲ養成シ八道ニ派遣  
セハ約二年間ニテ全國ノ耕地及宅地ヲ實  
測シ得ヘシト信ス

伊藤統監

蓋シ可ナラシ然レトモ二百人ノ生

徒ヲ養成スルハ容易ノ事ニアラス殊ニ測量

ノ妨礙トナルカ如キ法律ヲ作ルノ必要モアラ

サルハ法律制定ノ後ニ實測ヲ為スコト、スルモ

可ナリ

関度相

了承

伊藤統監

鬼毛角モ明日迄ニ相當ノ委員ヲ

選定シ梅博士ニ紹介シテ直ニ調査ニ着手

セシムルコトニ致シタシ

各大臣

了承 明日選定シ来ル十五日ヨリ委

員ヲ參集セシムルコト、致スヘシ

伊藤統監

可ナリ但シ升ハ諸君ニ於テ保證セ

スルヤ

各大臣

委員ノ選定ハ御裁可ヲ經テ官報ニ

掲載スルニ非サルカ故ニ必御約束ノ通實

行致スヘシ

伊藤統監

法律家トシテハ日本第一流ノ人物

ヲ伴ヒ来レルニ拘ラス徒ニ手ヲ拱シテ時日

ヲ空費セシムル甚遺憾ノ事ニアラスヤ

関度相

貴意拜承

伊藤統監

佐藤總監モ亦然リ彼ハ從來

韓國ニ

渡航シタル

醫師トハ同一ノ論ニ非サ

ルカ

故ニ同博士ヲシテ日月ヲ徒費セシムルハ

甚不可ナリ

朴參政

梅博士ニ對シテハ

俸給三千圓ヲ附シ

附シ

一  
辭令ヲ閣下迄送付致置ケリ

伊藤統監

慥ニ落手セリ併ナカラ未タ本人ニ

交付セス

朴參政

佐藤博士ニ對シテ如何ニ致スヘキヤ

伊藤統監

同博士ニ初ヨリ韓國ノ醫術ヲ發

達セシムルハ醫師及學者トシテ最名譽アル

コトナラ奮テ其ノ任ニ膺ルヘキモ金錢ノ為ニ渡

韓スルモノニ非サルコトヲ明言セリ依テ自分ハ已

ムヲ得ス日本皇帝陛下ニ奏請シテ手當

ヲ下賜セラル、様致置キナリ

朴參政

然ルカ

伊藤統監

前述ノ如ク兩人共斷ヘズ此ノ地

ニ留マルコトヲ得サルカ故ニ大體ノ方針ヲ定

メタル上ハ之カ監督ノ為時々來航セシムルコ

トニ致スヘキニ付之ニ要スル旅費ノ如キハ

韓國政府ヨリ支出セラレタシ

朴參政

其ハ勿論ノ事ナリ想フニ一年ニ二三

回ハ往復セラル、ナラシ

伊藤統監

然リ當地ニ留マルハ先ツ一年ノ三

分ノ一位ナルヘシ故ニ一年ニ二回往復スルモノト

見テ大差ナカルヘシ

朴参政

旅費ノ如キハ勿論文給致スヘシ

各大臣

帝ニ旅費ノくナス相當ノ報酬ヲモ

致スヘシ

伊藤統監

佐藤博士ハ貧者ニ非ス且漸次

老境ニ赴クヲ以テ寧ニ閑地ニ悠々自適

ヲ望ムモノ、如キモ自分ノ勸誘ニ對シ閑

下カ自分ヨリモ年長者ナルニ拘ラズ韓國ノ為

ニ盡力セラル、ヲ見テハ自分ニ於テモ決シテ

閑散ヲ貪ルヘキニアラストテ奮テ渡韓ノ決

心ヲナシタルナリ

李内相

若佐藤博士ニ辭令ヲ交付スルモノトセハ

蓋シ囑託ノ名稱ヲ以テセラル、ナルヘシ而シテ此ノ

辭令ハ何處ヨリ發スヘキヤ

伊藤統監

先ツ議政府ヨリ囑託スルヲ妥當ナリ

トス但シ目下計畫中ノ病院ヲ赤十字社病院

トスハ帝室ヨリ其ノ辭令ヲ發セラレテ可ナリ然レ

トモ茲ニ注意スヘキハ韓國ニ於テ赤十字社如何

ナル現狀ニアルヤノ一事ナリ日本ニ於テ赤十字社

ナルモノアリ近來ハ非常ニ隆盛ニシテ一十年百萬

圓以上ノ彙集スルニ至ル同社ハ我カ皇后陛下  
御保護ノ下ニ在リ親王之カ總裁タリ而シテ赤  
十字病院ハ即ケ赤十字社ニ附屬シ皇室ニ屬  
スルモノニ非ス韓國ニ於テ現在名義上赤十  
字社ナルモノ存在スルモ到底我カ日本ト同日ノ  
論ニ非ス若韓國赤十字社ニシテ實際有力  
ナル慈善團體トシテ宮内府ニ直接關係ヲ有  
スルナラシムル今固新設ノ病院ノ如キ全然赤十  
字社ノ事業トシ佐藤博士モ宮内府ヨリ囑託  
ノ辭令ヲ交付スルモ可ナリ然レトモ事實ハ然



ヲサルヲ以テ之ヲ大韓病院ト稱シテ政府ノ事業  
トシ其内ニ赤十字部ナルモノヲ設ケ其ノ事  
務ヲ取扱ハシムレハ可ナリト思考ス諸君ノ意  
見果シテ如何

李内相

自分ハ初ヨリ大ニ惑ヘルモノアリ即チ

曩ニ内部ノ廣濟院學部ノ病院醫學  
校及赤十字病院ヲ合併シテ新ニ一大病院  
ヲ組織シ之ヲ赤十字病院トナシ而シテ義  
和宮殿下赤十字社ノ總裁トナラルレハ全然  
政府ノ手ヲ離ル、ニハアラサルヤトノ事ナリ然

ルニ今日閣下ヨリ拜承スル所ニ據レハ大韓  
病院トシテ政府ノ事業トセラル、カ如シ果シテ  
然ラハ廣濟院及醫學校ノ官制ヲ廢シ  
之ニ代フルニ大韓病院ノ官制ヲ制定スルコ  
ト、ナルヘシト信ス

伊藤統監

自分モ初ハ内部大臣ノ言ハレル如キ

考ナリシモ更ニ熟慮ヲ加ヘタル末寧ロ政府ノ

事業トシテ經營スルヲ可ナリト信スルニ至レリ

赤十字病院トスレハ衛生又ハ種痘等ノコトハ

附帶ノ事業トナリ又政府直轄ノ病院トスレハ

赤十字事業ハ客トシテ之ニ附屬スルコトハ  
ナリナリ

李學相 大韓病院ノ組織ハ梅博士ノ法制  
調査ト異リ官制ヲ制定シテ裁可ヲ經サ  
ルヘカラス故ニ速ニ着手スルノ必要アリ

伊藤總監 序ニ一言シ置クヘシ諸君ハ斯ノ如  
キ區別ヲ承知セラルヤ否ヤ即ケ文明國ニ於  
テハ皇室專屬ノ事業アリ皇室ト政府ト協  
力シテ經營スル事業即ケ國家事業アリ  
又皇室カ社會一般ト協力シテ經營スル事

業アリ慈善病院貧民救助等ノ如キハ此ノ  
第三種ノ事業ニ屬スルモノナリ韓國ニ於テハ  
果シテ皇室カ社會一般ノ為ニ實施セラルハ  
事アリヤ若之レアリトセハ自分ハ承知シ置キ  
タシ然レトモ自分ノ觀ル所ニシテ誤ラスンハ  
韓國ノ皇室ハ國庫ヨリ皇室費ヲ文輯セ  
シ而シテ國家又ハ社會ノ為ニ更ニ之ヲ消  
費セラレサルモノ、如シ之ニ及シテ日本ノ皇室ノ  
如キハ國家及社會ノ為年々多額ノ出費ヲ  
致サレツ、アルナリ兎ニ角今更ニ設立セントスル大

韓病院ノ如キモ韓國皇室カ社會一般ノ為  
經營セラル、モノニ非スシテ純然タル政府ノ病  
院ナリ隨テ國庫其ノ經費ヲ負擔ス此ノ  
區別ハ之ヲ明ニセサルヘカス

李内相 内部ニ衛生局ナルモアツテ全國一般ニ  
互リ衛生ノ事務ヲ執リツ、アリ其ノ機關ト  
シテ從來ハ廣濟院ナルモノアリタルモ今回大  
韓病院ニ合併セラル、コト、ナリタルハ大韓病  
院ハ自然内部ノ所管ニ屬セシムヘキモノト  
信ス

伊藤統監

諸君ハ衛生ノ何物タルコトヲ委シ

知ラレサルカ如シ衛生ハ即チ一ノ行政ニシテ或ハ流  
行病ヲ豫防シ汚物ノ取締ヲ為ス等ノコ  
トヲ掌ルモノナリ然ルニ病院ハ個人ノ病氣ヲ治  
療スルモノナリ故ニ若他日韓國ノ教育發  
達シテ大學ヲ設立スルカ如キコトアラハ此ノ病  
院、如キハ學部ニ屬スヘキモノナリ

李内相 了承

伊藤統監 自分ノ見ル所ニ依レハ貴國ハ未タ

衛生ノコトニ着手セラレス尤種痘ノ如キハ天

然痘ノ豫防ナハ衛生ト見テ差支ナカルキ  
モ未タ一般衛生ニ着手セラレタルヲ聞カス  
所謂衛生ト一個人ノ衛生ニ非スレテ國民ノ  
健康保護又ハ國民ノ健康妨害豫防ト解  
釋スヘキモノニシテ地方行政ト密接ノ關係ヲ有  
スルモノナリ

李内相 了承

伊藤統監 大韓病院ノ所屬論モ亦其ノ官  
制ニ關スルコトモ尚一層熟慮ヲ加ヘ置クヘシ  
而シテ決定ノ上ハ之ヲ佐藤博士ニモ心得置

カシムルノ必要アリ但し目下ノ急務ハ病院敷地  
ノ選定ナリ何トモハ建物ノ建築ニ年月ヲ要  
スルカ故ニ成ルヘク速ニ着手セサルハカラサレハナリ  
聞クカ如クハ西大門外ニ好箇ノ空地アリ  
元ハ火藥ヲ製造シタル場所ニテ其ノ爆  
發ノ為ニ建物ハ焼失シ目下空地ト居レルナ  
リト而シテ此地所ハ宮内府ニ屬スルモノナ  
ル由勿論之ヲ政府ニ引渡サシムルノ必要ナシ  
ト雖之ヲ政府ニ借入レ大韓病院ヲ建築セ  
ハ最適當ナラント信ス之ヲ實行スルコトハ出



來マシクヤ

此、時李内相權農相李軍相李法相等協議  
上權農相ヨリ左ノ如ク返答セリ

權農相 右敷地ハ宮殿跡ニテ尚少シク建築  
物アリ宮内府ニ屬シ將來宮殿ヲ建築セ  
ントス地所大カ故ニ其ノ貸下ヲ陛下ニ奏請  
スルヲ得ス

伊藤總監 大韓病院ノ設立ハ韓國ノ為ニ謀  
テ最忠實有益ノコトナリ而シテ右ノ敷地ハ現  
在不用ニ屬シ居ルニモ拘ラズ宮殿ノ跡ヲ一々

保存セントセラル、カ如キハ其ノ如何ナル故ナルヲ  
知ラス本来ナリハ陛下ヨリ病院敷地トシテ下  
賜セラレテ然ルヘキモノナリ

權 農相 此敷地ニ元來宮殿ヲ建築セラル

ル思召ニテ先年慶運宮ヨリ道路ヲ踰エ

架橋セラレタルナリ然ルニ其ノ通行ハ露國公

使館ヨリ故障起リテ遂ニ其ノ當時ハ沙汰止

ミトナリナリ

伊藤統監 果シテ然ラズ現今ノ王宮ヲ彼地ニ

移サルハ可ナルヘシ斯ノ如キ口實ヲ以テ進

歩的、國家事業ヲ阻止スルニ至テハ韓國ノ

前途ヤ知ルヘキノミ

李内相 彼ノ敷地ニ後苑ヲ築造セラレントスル

思召ナルカ如シ

伊藤統監 貴國ノ皇室ニシテ斯クマテニ御

富裕ナラハ皇太子御婚禮ニ對シテモ度支

部ヨリ經費ヲ支出セスシテ可ナルヘシ

関度相 他日皇室富裕ニナレタル時ノ御計

畫ナルヘシ

伊藤統監 然ラハ尚賣官セラル、ノ慮慮ト

承リテ宜敷ヤ

權農相

公園地ヲ病院敷地トシテ如何哉

伊藤統監

頗ル狹隘ナリ纔ニ千坪内外ナリ

ト謂フ

李軍相

公園地ノ近傍ニ在ル軍樂隊ノ宿舍

モ使用セシテ可ナリ

伊藤統監

軍樂隊ハ何レニ移サルヤ

權農相

軍樂隊ヲ移スハキ場所ハ無キニ非サ

ルヘシ例ハ廣濟院及學部所屬病院跡ノ

如キモ之ヲ使用スルコトヲ得

李軍相

公園地敷地約三分の一ハ軍隊ニ

於テ占有シ居ルナリ

伊藤統監

過日來佐藤博士ハ毎日市中ニ出

テ、適當ノ場所ヲ選擇シ、アリ聞ノ所ニ

據ル南大門外龍山兵營ノ近傍ニモ適

當ノ場所

ナキニアラスト

謂フ然レトモ

頗ル京

城市中ヨリ

遠隔セルヲ

以テ不便

ナラント思フ

各大臣

然リ南大門外ハ

遠隔セリ

最便利ナ

ル點ヨリ

見ル公園地ヲ

推サルヲ

得ス

李法相

公園地ハ

便利ナルニ

相違ナキモ土地

狭ノ水悪シク空氣モ亦甚不純ナル適當ナル病院敷地トハ思ハス

伊藤統監 然リ公園地ハ適當ト稱スルヲ得ス

之ヲ要スルニ諸君ハ大英斷ヲ以テ速ニ相當ノ敷地ヲ選定セラレサルヘカラス内部大臣ノ如キ實ニ因循姑息ニシテ嘗テ我カ國ノ紳士カ二十五萬圓ヲ支出シテ韓國ノ為ニ商業學校ヲ設立セシト欲スアリ其ノ敷地選定方ヲ自分ヨリ同大臣ニ依頼シタルヲ既ニ二回ニ及ブニ未タ何等ノ回答ニ接セス

此ノ時各大臣病院敷地ニ付キ種々論議ヲ盡シタ  
ルモ尚決定ニ至ラサルニ統監ハ各大臣ヲ導キ食堂  
ニ入ル時ニ午後一時

食堂ニ於テ統監ハ來ル陰曆八月二十八日皇太子  
殿下御結婚ニ付キ政府ヨリ相當ノ經費ヲ支出  
セラル、コト固ヨリ差支ナシト雖我カ皇太子御結婚  
ノ際ハ僅ニ三十五萬圓ヲ要シタルノミ而モ之ヲ國  
庫ニ負擔セシメス全ク帝室ヨリ支出セラレタリ而シ  
テ我カ日本ノ歲入ト韓國ノ歲入トハ其ノ額ニ於テ  
非常ニ相違アルニモ拘ラス斯ノ如キ次第トハ貴

國ニ於テモ充分ノ注意ヲ加ヘ力メテ冗費ヲ省カル  
ヘシト度支部大臣ニ注意セリ之ニ對シ度支部大臣ハ  
未タ宮内大臣ヨリ何等ノ交渉ヲ受ケス若ク交渉アラ  
ハ統監ノ訓戒ニ基キ充分冗費ヲ節減スヘシト  
答ヘ次ニ李内相ハ今回ノ御結婚ニ付キ自分ハ  
都監トシテ萬事ヲ總裁スルノ責任ヲ有スルガ故ニ  
統監ノ訓戒ハ之ヲ服膺スヘシト述ヘ且御結婚經  
費豫算ハ約百二十五萬圓ニ上ル旨ヲ語リ統  
監ハ韓國陸軍ノ經費一箇年分ト異同額ノ  
經費ヲ皇太子殿下ノ御結婚ニ消費スル其ノ



當ヲ得ルモノニ非サルコトヲ説明シ李内相ノ如キ皇  
帝ノ信用最深キ人ハ皇帝ヲシテ過ナカラシムルノ  
義務ヲ有スルコトモ亦最重シト警告セリ

次ニ統監ハ日露韓三國ノ關係ヲ歴史的ニ敘  
述シ日本ハ到底韓國ヲ他國ノ併吞ニ安スルコト  
ヲ得ス之カ為ニ一國ノ存亡ヲ賭シテ清露ト交  
戦スルヲモ辭セサリシナリ然ルニ若不幸ニシテ日  
露戦争ノ結果反對ニ出テ露國ノ勝利ニ歸シタ  
ラシハ蓋シ彼ハ忽ケ韓國ヲ併吞シタルヘシ今ヤ日本  
ニシテ若併吞ニ意アラハ實ニ一舉手一投足ノ勞

ヲ以テ其ノ目的ヲ達シ得ヘキニ拘ス其ノ然セサル所以  
ハ日本ハ韓國ヲ併吞シ巨額ノ經費ヲ消費シテ自  
ラ之ヲ統治スルノ愚ヲ學ビヨリハ寧ニ韓國ヲ興  
シテ隆盛ノ域ニ導キ韓國人ヲシテ完全ニ自國ヲ  
防衛セシメ之ト同盟シテ以テ我カ國ノ安全ヲ圖ラシ  
ト欲スルニ由ル乃自分ハ此ノ目的ヲ達センカ為當國  
ニ求任セル次第ナハ我カ國ニ於テ韓國ニ對シ何  
等野心的希望ヲ有セサルコトハ蓋シ夙ニ諸君ノ諒  
知セラル所ナラント信ス然ルニ當國內閣諸大臣ハ  
因循姑息此レ事トシ毫モ大英斷ヲ以テ施政ノ

改善ヲ圖ラん、ノ實ヲ見サルハ自分ノ甚遺憾ニ  
堪ヘサル所ナリ自分カ當國ニ来リテ各般ノ施設ヲ  
為ス所以ハ前述ノ如ク衷心ヨリ韓國ノ國利民福  
ヲ増進セント欲スルニ由ル自國人ノ毀譽褒貶ノ  
如キハ意ニ介スル所ニ非サルナリ去レハ施政改善ノ如キ  
モ纔ニ法規ヲ制定シ文書ヲ調製スルヲ以テ能事  
了ハレリトナスヘキニアラス之ヲ實際ニ施シ韓國民ヲ  
レテ其ノ恩澤ニ浴セシメサルヘカラス然ルニ自分着  
任以來私カニ各大臣ノ行動ヲ察スルニ常ニ君主ノ  
意ヲ迎フルコトニノミ汲々タルモノ、如レ夫レ一國ノ大

臣タルモノ君主ノ命令トアラハ理非曲直ヲ問フニ違アラ  
ス悉ク之ニ同意服従スルカ如キハ君主及國家ニ對シ  
最不忠實ナルモノナリ苟モ輔弼ノ大任ヲ帶ヘル以  
上自己ノ良心ニ顧ミ國家ノ為將ク君主ノ為利益  
アリト信スルハ縱令君主ノ意思ニ反シテモ之ヲ諫奏  
實行スルノ決心ナカルヘカラス夫ノ唐ノ太宗ヲ見スヤ  
彼カ支那有史以來ノ明主トシテ稱揚セラル、所以ハ  
抑何ニ基ツクモノナルヤ同帝カ明君タルノ資ヲ有セ  
ラレタルコトハ言フ俟タスト雖亦杜如晦、房玄齡、虞  
世南、褚亮、姚志康、李玄道、蔡允恭、薛元

敬、顏相時、蘇勗、于志寧、蘇世長、薛收、李  
守素、陸德明、孔穎達、蓋文達、許敬宗等所  
謂十八學士ノ功臣下ニ在テ苟モ事ノ國家ニ有  
益ナリト信ス所ノモノハ帝意ヲ冒シテモ之ヲ直  
諫實行シタルニ因ラスハアラス吾々モ亦此ノ方針  
ヲ以テ韓國ノ前途ヲ經營セハ韓國ノ隆盛ヲ  
期スルコト蓋シ難事ニ非サルヘシト信ス故ニ今日ニ  
方リ自分ハ諸君ニ對シ切ニ王陽明ノ所謂知行  
合一ノ說ヲ勸告スト述ヘ各大臣ハ深ク其ノ厚  
意ヲ謝シ奮テ驥尾ニ附スヘキ旨ヲ確答セリ

是ヨリ統監ハ本日本各府ノ職務權限等ニ就キ協  
議ヲ為シ其ノ改廢スヘキモノハ速ニ之ヲ實行セント  
欲シタルモ長時間ニ亙ルノ虞アリテ之ヲ他日ニ讓  
リ目下緊要ナル他ノ事項ニ就テ協議ヲ繼續ス  
ヘキ旨ヲ告ケ

伊藤統監 先ツ茲ニ協議スヘキハ軍收用地ノ件  
ナリ韓國ニ於テ軍收用地ハ其ノ面積非常ニ  
大ナル拘ラス軍ヲ賠償トシテ貴國政府ニ  
交付シタルモ僅ニ二十萬圓ナリ而シテ此ノ收  
用地ノ件關シテハ初ヨリ雙方ノ取極不完

全ナリシ為常ニ煩雜ナル問題ヲ惹起シ自  
分ノ赴任後ニ至ルモ尚未ク満足ナル解決ヲ  
見ル能ハサルコトヲ憂慮シ東京滞在中軍事  
當局者トモ協議ヲ遂ケ差當リ不必要ナル土  
地ハ之ヲ收用セサルコトナリ兵營建築敷地又  
ハ官舎敷地練兵場等必要缺クヘカラサル地  
域ハ甚廣キ面積ヲ要スルモノアラズ依テ家  
屋取拂ノ面積ヲ成ルヲ縮少シ既ニ交付セ  
ル二十萬圓ヲ以テ之カ賠償ヲ為サレムコトニ  
決セリ例ハ平壤ノ如キ今回新ニ査定ナリ

所用地域内ニ於テ人家僅ニ五軒ニ過キス故ニ  
過日平壤理事官上京ノ際速ニ之ヲ取拂  
ニ着手スヘキ旨命シ置ケリ斯ノ如キ方法  
ヲ以テセハ蓋シ團満本問題ヲ解決シ得  
ルナリト信ス

李内相 自分ハ初ヨリ本問題ニ關係セリ當初  
軍官憲ヨリ二十萬圓ノ交付ヲ受ケタル際ハ  
自分ニ於テモ其ノ額過少ナル為殆ト文拂  
方ニ當惑シタリ單ニ龍山ノ如クニテモ此ノ少  
金額ニテハ到底賠償ノ目的ヲ達スルヲ得



ス困却ノ餘林公使ト談合シタルニ公使モ此ノ  
以上支出スルヲ得スト斷言セラレタリ然ルニ又  
退テ考フレハ日本ハ我カ國防衛ノ任ニ當  
リ居ラルコトナレハ我カ國ノ財政之ヲ許サハ我  
カ國庫ヨリモ幾分ノ經費ヲ支出スヘキ筋ノモ  
ナリ兎ニ角日本ヨリ二十萬圓ヲ支出セラレタ  
ル寧ロ頗ル好意ノ處置ト云ハサルヲ得ス依テ  
此ノ金額ヲ暫ク銀行ニ預入レ之ヨリ生スル多  
少ノ利子ヲモ賠償金中ニ加ヘント欲シ之ヲ銀行  
ニ預入シテ次第ナリ而ルニ我カ政府ニ於テハ

之カ為多少ノ出費ヲ為スコトハ遺憾ナカラ到  
底財政ノ許サル所ナルニ拘ラス龍山ノミニテ  
モ家屋ノ撤退ヲ要スルモノ三百戸ニ餘リ殆  
ト當惑シ居リタル所今ヤ統監閣下ノ御盡  
力ニ依リ約百戸ニ減シタル由ヲ聞キ欣喜至  
ニ堪ヘス又平壤方面モ圓満ニ解決ヲ得  
ヘキ見込アル趣ヲ奉告至極好都合ナリ  
從來本問題ニ付テハ人民ヨリノ請願頻々ト  
シテ至リ實ニ其ノ煩ニ堪ヘサル適當ノ方  
法ヲ以テ成ルヘク速ニ解決セラレシコトヲ望ム

伊藤統監

一々人民ノ希望ヲ採用スル殆ト底  
止スル處ヲ知ラサルヘシ然レトモ兎ニ角收用地ハ  
無代價ヲ以テ之ヲ沒收スルニアラス必相當ノ  
賠償ヲナスヘシ自分上京中軍事當局者  
ト協議ノ結果差向キ必要ナラサル部分ハ容  
易ニ收用セサルコトニ決シテハ平壤ノ如キハ右  
二十萬圓ノ中ヲ以テ相當ノ賠償ヲ與フルノ  
外ナレ而シテ若將來賠償金ニ不足ヲ生シ  
タル場合ニ於テ臨機相當ノ處置ヲ講ス  
ヘシ

李内相

御盡力ニ依リ斯ノ如ク解決セバ誠ニ

幸福ナリ平壤ノ賠償モ龍山ノ前例ニ從

ヒ早速着手スヘシ現ニ右收用地内ノ家屋

敷土地及別等ヲ精細ニ調査セシムル様命

シ置キタル右調査完成ノ上ニ從來ノ慣例

ニ依リ賠償金ヲ所有主ニ交付スルコト致

スヘシ

伊藤統監

然リ爾ノ着々懸案問題ヲ解

決セシコトヲ望ム

李内相

軍收用地ノ事ニ夫如上満足ナ

李内相 平壤収用地、内部ノ官吏ト軍官憲

ト立會シ区域ヲ明ニシタリ云々

此ノ時國分書記官、李内相、所謂平壤収用地、調査シ其ノ全域ニ亘リテ之ヲ為セントセラル、モノ、如ク未タ全ク統監ノ趣意ヲ了解セザルモノトテ之ヲ同相ニ注意シタル後其ノ旨統監ニ報告ス

伊藤統監 然リ升、非常ニ誤解ナリ平壤収用地ノ全坪數ハ三百九十萬坪ニ達スルモノ自今ト陸軍當局ト交渉ノ結果直ニ収

用タルモノ僅ニ六萬坪ニ過キ不故ニ此、調  
査ハ速ニ之ヲ為スリ得ヘント信ス必シモ内部  
ヨリ特ニ官吏ヲ派遣セサルモ郡守ト我カ理  
事官ヲシテ協力調査ニ從事セシムレハ是レ  
依テ頃日平壤理事官出京ノ際自今ヨリ  
委細訓示シ置キテ同理事官ノ語ル所ニ  
據レハ郡守モ此ノ件ニ付テハ非常ニ配慮  
シ同理事官出發ノ前夜ノ如キモ同官ヲ  
來訪シテ種々談合シタリト云フ故ニ理事  
官ヲ郡守ヲシテ之ニ從事セシムレハ六萬坪

以内、調査ハ直ニ完結スルコトヲ得ヘント信  
ス即チ其ノ内ニテ官有地或ハ民有地或  
何及撤去スヘキ家屋若干ト云フ如キコトハ  
知セズ之ヲ明瞭ニスルコトヲ得之ヲ明瞭ニシ  
タル上ニテ相當ノ賠償金ヲ與フルハ本問題ハ  
立トツテ完結スルコトヲ得ヘシ

李内相　了衆、軍收用地ハ幸ニシテ如上満  
足ナル措置ヲ見ルヲ得タルモ爰ニ又他ノ困  
難ナル問題アリ升ハ京義鐵道ノ敷地ニ関  
スルコトヲ該鐵道ハ軍事位價ノ際敷設セリ

レタルモノニシテ其ノ敷地ニ對シ約三十萬圓ノ賠  
 償ヲセラル、御計畫ナリシモ内十七萬圓ハ未拂  
 ナリトテ之ヲ地方政府ニ交付セラルタリ然ルニ  
 其ノ金額ハ舊ニ京義鐵道ノ敷地ノミナラス  
 元山鐵道ノ敷地賠償金ヲモ包含セルニ依  
 リ之ニ對シテハ餘リニ少額ニシテ殊ト賠償ニ  
 着手スルニ由ナシ殊ニ本年ハ京義鐵道ノ全  
 部ニ亘リテ改善工事ニ着手セラルハ更ニ新  
 敷地ヲ要スルコトナリ一層困難ヲ増シタル  
 次第ナリ



伊藤統監 此問題ハ追テ充分調査セシメル  
考案ナリ兎ニ角鉄道敷設ハ當初軍事  
上目的ヲ急速ニ導ヒタルヲ以テ殆ト假鉄  
道ノ状態ニ在リ例ヘニ隧道ノ如キ長日月  
ヲ要スル工事ハ力ヲシテ之ヲ避ケ山麓ヲ迂回  
スルノ方法ヲ採リタレ今日之ヲ改善ノ工事  
ヲ施スコトハ蓋シ已リ得サレトモ然レトモ  
既ニ改善ヲ為シタル上ハ從來ノ敷地ハ不用  
トナルカ故ニ之ヲ人民ニ還付スルモ可キ尤新  
ニ収用シタル敷地ニ關シテハ充分調査ヲ遂

ケレタルツト、スヘシ

孝内相 了兼、不用ノ敷地ハ之ヲ人民ニ還付

シ新ニ収用セル土地ニ對シテ賠償ヲ與フルツ

ト、セハ本問題ハ圓滿ニ落着致スヘシ尚馬

山浦支線ノ如キハ軍用トシテ架設セウシタルモ

ナレハ是レ亦調査ヲ要スルツト、信ス

伊藤總監 然リ共ニ調査セシムヘシ尚其ノ序、

諸君ト協議スルヘキハ我々海軍省ニ於テ軍

事工ノ目的ヲ以テ鎮海灣附近一定ノ地域

ヲ収用セシツトヲ希望シ其ノ旨自分ニ通牒

有り然レトモ今回ハ曩ニ陸軍ノ軍用地ヲ収  
用シタル方法ヲ踏襲スルノ不可ナルヲ信シ  
賠償金ノ如キハ郡守ト日本官憲ト立會ノ上  
直接ニ之ヲ所有主ニ交付スルコトニ致シタレ又  
家屋撤去ノ如キモ一定ノ時間ヲ與ヘ相  
當ノ補償ヲ得セシメト欲ス但シ収用地内  
ニアル官有地及荒蕪地ノ如キハ議定書ノ條  
項ニ據リ之ヲ無償ニ収用セシメ差支  
ナカルヘシト信ス

李内相 海防上必要ノ地點ヲ収用セラルハ

則々是レ國防上已ムヲ得サルコトナハ致方  
ナレ而レテ賠償等ニ關シテ貴説ノ如キ方  
法ヲ以テセハ人民モ蓋シ迷惑致サ、ルヘシ  
伊藤統監 人民ニ決シテ迷惑ヲ掛ケス今回  
ハ土地ヲ引取ルト同時ニ賠償金ヲ交付スヘ  
シ若之ヲ預リ置クトキハ為ニ却テ面倒ヲ生  
スルノ虞アリ

李内相

眞ニ然リ

伊藤統監

自分ハ鎮海灣ノ如ク又永興灣

、如キ巴ニ海軍ノ根據地ナル以上即チ

之ヲ韓國軍港トシテ其附近ノ土地賣買

ヲ禁止セバ可ナシト思考ス何トナク他國ニ

於テ之ヲ買收スル虞アリナリ例ハ露國

カ馬山浦ニ於テ土地ヲ買收シタルカ如シ

各大臣 賣買禁止ハ頗ル事宜ニ適シタルモノ

ト信ス

伊藤統監 何レ本問題ニ關シテハ後日委シ

御協議スベシ

閣度相 自分ノ管轄スル問題ニ付キ統

監閣下、教示ヲ仰キタレ我カ國ニテハ

從來二十五萬圓ヲ支出シ度量衡器ヲ  
製造販賣スル權ヲ井上宣文ナル者  
ニ委託シ尚井上ニ支拂フヘキモノ約十一萬  
圓程アリ然ルニ之カ委任ヲ爲シテ當時ハ  
未タ會計審査規則ヲ發布セラレサル以  
前ナルヲ以テ支拂命令官モ井上、支拂ヲ  
爲ス者モ井上、材料ヲ供給スル者モ亦井  
上ナリ如斯井上一身ニテ或ハ監理者ト  
ナリ又被監理者トナリ居リ然ルニ先般一ト  
度計算ヲ爲シ五萬幾千圓カラ今人ニ

支拂ヒキ自分ノ考ニテ之ニテ全部ヲ打切  
 ル豫定ナリシモ本人ハ之ヲ承知セズ故ニ目賀  
 田顧問トモ相談ノ結果今回右殘額ヲ悉  
 皆同人ニ支拂ヒキ上同人ト關係ハ一應斷  
 絶シ更ニ同人ヲ聘用シテ事業ニ與カラシム  
 ルト否トハ同人ノ意向ヲ確メキ上ノ事トスヘ  
 キモ兎モ角モ該事業ヲ舉ゲテ農商工  
 部ノ所管ニ屬セシメントス之ヲ要スルニ同人  
 ハ從來本事業ニ付キ相當ノ功勞モアル  
 コト故斯ノ如キ處置ニ出テモト存ス御高

見如何ヤ

伊藤統監

至極宜シカレ

関度相

斯クシテ井上ノ關係ヲ絶テ自今

之ヲ官業ニ移シ一切新規ノ會計法徒  
ラ之ヲ處理スル考ナリ

伊藤統監

至極宜

シカラント存ス然レトモ自

今ハ此ノ事業ヲ

熟知セサルカ

故ニ目賀田

顧問トモ

顧問トモ

高議ノ上

實行セラル

然ルヘシ

関度相

目賀田顧問トモ

既ニ

協議ヲ

遂ケタ

リ



權農相

此ノ事業ハ將来自分ノ管轄ニ

屬スルコトナク行政ト製造事業トハ之ヲ一

ニシテ政府ノ手ニ於テスルトモ或ハ又製造ハ井

上ニ委任スルトモ鬼モ角モ新ナル契約ヲ為

スコト、致シタシ

伊藤統監

其ノ邊ハ逐テ御實行ノ際

承ルヘシ

權農相

現在ノ法規ニ適合セサル理由ヲ

以テ當然支拂フヘキモノヲ仕拂ハサルハ不

當ナリト信スルカ故ニ斯ノ如ク度支部大

臣トモ協議シタル所以ナリ

伊藤統監 自分ハ前陳ノ如ク此ノ事業ヲ

熟知セサルカ故ニ目賀田顧問等ト協議  
上諸君ニ於テ至當ト認めラルハ仕拂ハ  
レテ可ナルヘシト信ス

関度相

實ハ此ノ問題ニ付キ度支部ト農

商工部トノ間ニ議論一致セザリシカ故ニ今

日迄之ヲ決行スルコトヲ得サリニ次第ナリ然

レトモ最早協議モ調ヒタレハ之ヲ實行ス  
ヘシ

權農相

畢竟此問題ニ付テ、度支部ヨリ

自分ノ連署ヲ求メラルヘキ筈ナルコトヲ求メ  
ラレサルヲ以テ一時意見ノ一致ヲ缺キタル次  
第ナリシナリ併ナカラ最早議論ハ之ヲ支  
拂フコトニ一致セリ

伊藤統監

參政大臣ニ問ヒタキ事アリ升ハ

餘ノ儀ニアラス加藤宮内府顧問ノ關係セ  
ル明太洞ノ砂金採收ニ關スル問題ナリ初  
此權利ハ韓國人李某ナル者ニ對シ宮  
内府ヨリ特許シ李某ハ禁制ヲ犯シテ

凡そ宮内府より自ラ  
之、経官スヘキ者  
ソ公布シテ然レ  
此ノ変更ニ直接  
関係ヲ有スル者  
ハ其後ハ

之ヲ西洋人ニ譲リ而シテ其ノ後此ノ特許  
ハ宮内府ヨリ之ヲ取消サレ更ニ加藤顧  
問等ノ關係モ日本人ノ會社ニ命シテ事  
業ニ當ラレメ其ノ利益ヲ收メワ、アリトテ一  
美人ハ不平ヲ英國總領事ニ訴ヘタル由  
ニテ英國總領事ハ公文ヲ以テ之ヲ當方ニ  
照會セリ仍テ此ノ件ニ關シ統監府ヨリ貴  
方ニ交渉シタルコトハ定メテ貴大臣ニモ御承  
知ナレト思フ

朴參政

本件ニ關スル公文ハ慥ニ之ヲ受領セ

リ右ハ早速宮内府ニ移牒シ同府ノ返答ヲ  
得ル上統監府ニ回答スル筈ナルモ未タ宮  
内府ヨリ何等ノ回答ニ接セズ

伊藤統監 斯ノ如キ問題ハ容赦遠慮ス

之ヲ明ニセサルヘカラス

朴參政 畢竟一ノ鑛山ニ對シ李某ト加藤  
顧問等ト孰シモ權利ヲ有スル如クナリ

朴參政ハ日本ハ人肉採ノ金社ヲシテ度々侵害ニシテナリト云フ

恒寧ノ特許ヲ取消スル

此問題ハ惹起セラレタリナリ

伊藤統監 自分ハ英國總領事ニ對シ回答

ヲ發セサルヘカラス故ニ宮内府ノ回答ニシテ不

明ナラ充分之ヲ取糺サルヘカス

朴參政 了承

伊藤統監

此ノ事業ハ其ノ後又李某ニ對シ

外國人ニ讓與スルモ可ナリ許可アリカカ如

シ尚英國總領事ニ不平ヲ訴ヘタ英人

書面ニ此ノ事業ニ關シ加藤顧問ハ利

益ノ分配ニ與リ居ルト明記セリ若果シ

テ事實ナラ勿論加藤ヲ免職セサルヘカ

ラス

李法相

名譽ノ地位ヲ保ラル人ナラ決シテ

左様ナルコトハナカルヘシ

伊藤統監

此レナクハ可ナリ要スルニ斯ル煩

雜ノ問題起ルカ故ニ鑛業法ハ一日モ速ニ  
發布セサルヘカラサケ必要アリタリ

李内相

眞ニ然リ

伊藤統監

自分ノ不在中鴨綠江森林問題

ニ關シ統監府ヘ交渉セシ統監府ヨリ回  
答セリト謂フ右ハ度支部大臣ヨリナリヤ

朴參政

否政府ヨリナリ

伊藤統監

此ノ問題ニ關シ自分ハ其ノ回答ヲ發

セシ際ノコト更ニ知ラサリシモ聞ク所ニヨレハ林公使  
ヨリ曾テ軍用トシテ鴨綠江森林ヲ伐木ス  
旨ノ通知ヲ貴國政府ニ發シ其ノ承諾ヲ  
得タラ以テ右ノ趣意ニ基キ統監府ヨリ  
回答致ス由ナリ然レトモ自分ノ考ニテハ軍用  
トシテ同森林ヲ伐採スルコトハ之ヲ禁スル積リ  
ナリ此件ニ關シテハ自分上京中軍事當  
局トモ委細談合セリ清國側ノ森林ニ付テハ  
日清兩國ノ間ニ既ニ協約ヲ締結シ日清兩  
國ノ會社ヲ組織シ伐木スル計畫ニテ其ノ



資本金ハ之ヲ二百萬圓トナシ兩國ニ於テ折  
半出資スルコト、シタリ聞クカ如クハ奉天將  
軍ニ於テ四十萬圓袁世凱ニ於テ六十萬圓  
ノ募集シ引受ムトス此ノ會社ハ專ラ清  
國領域ニ屬スル鴨綠江森林ノ伐木ヲナス  
モノナルカ故ニ自分ハ我カ當局者ニ向テモ清國  
側ノ伐木ヲナスコトニ至テハ更ニ異存ノ揮ムハ  
キモノナシト雖韓國側ノ伐木ヲ為スニ付テ  
ハ自分ノ承知セサル限り決シテ之ヲ實行セ  
シムルコトヲ得ヌト明言シ置ケリ自分ハ此ノ

森林ヲ利用シテ以テ韓國政府ノ歲入ヲ增  
加センコトヲ欲ス即ケ日韓兩國合同又ハ日  
清韓三國合同ノ會社ヲ組織シ其ノ伐木  
ニ當ラシメ韓國政府ノ歲入ヲ增加セント思フ  
諸君ノ考案如何哉

朴參政

至極御名案ナリ

伊藤統監

會社組織

トナスハ例ハ日韓兩國

ニテ之ヲ合同經營スル一本ノ材木ニ付韓國  
政府ニ於テ若干ノ租稅ヲ徵收ストムフカ如  
キ方法ヲ以テ會社ヲシテ其ノ負擔ニ任セシ

メサルヘカラス

權農相

然リ斯ノ如キ方法ニ依ルニ非サハ徒ニ

材木ヲ失フ過キス

関度相

自分等ハ日清兩國合同會社ノ例ニ

則リ日韓人ノ會社ヲ組織スルヲ適當ナリト

信ス惟フニ多額ノ資金ハ之ヲ要セサルヘキヲ

以テ日韓兩國ニ於テ折半負擔スルコトハ

セハ可ナシ蓋シ二百萬圓ノ資金ハ之ヲ要

セサルヘシ

伊藤統監

然リ左様ニ多額ノ資金ハ要セ

サルヘシ但シ輪伐ノ法ヲ設ケ森林ノ保存ヲ圖  
ラサルヘカラス

各大臣 至極賛成ナリ

伊藤統監 伐採ニモ材木ハ雨季ニ非サレハ之ヲ

河ヨリ流出スルコトヲ得ス然ルニ雨季ハ韓清

兩國同時ナレハ各自ノ木材ヲ鑑別シ易カラシ

ム為各木材ニ極印ヲ附クル外ナカルヘシ

各大臣 眞ニ然リ

伊藤統監 韓國ニ於テ會社ヲ組織スノ方法

アリヤ

関度相

農商工部大臣ト協議シ必之ヲ組織

致スヘシ而シテ資本金ハ日韓西國ヲ合シテ

四五十萬圓ニ達スル可ナラント思フ御高見

如何ヤ

伊藤統監

資本金額ニ關シテ豫メ精細ナル

調査ヲ要ス輸送<sup>費</sup>水力ヲ利用<sup>スル</sup>別<sup>ニ</sup>之ヲ

要セスト雖河口ヨリ一定ノ場所ニ運搬スルノ

經費ハ之ヲ見積ラサルヘカラス又斫伐及製材

ニモ相當ノ經費ヲ要スヘシ想フニ清國側ノ伐

木ニ對シテモ二百萬圓ノ資本金ハ之ヲ要セサルヘ

し然レトモ自分ノ察スル所ニ依ル多分清國ニ  
於テ負擔スル資金名目ハ之ヲ清國人ヨリ募  
集スト稱スルモ内實袁世凱自ラ六十萬圓  
奉天將軍自ラ四十萬圓ヲ支出セントスルカ  
為ニ斯ノ如キ額ヲ定メタルナシ

関度相 我カ國ニ於テハ人民ニモ株券ヲ所有セシ  
ムル積リナリ

伊藤統監 貴國人民ハ株式ニ加入スルヲ得ルヤ  
各大臣 然リ加入セシムルコトヲ得ヘシ

權農相 鴨綠江森林ニ關シテハ地方官ヨリ外

國人、邊伐云々の事ヲ報告セル、  
後來、軍官憲ニ於テ之ヲ伐採セシモ一進會員ハ軍  
官憲及宮中ヨリ承諾ヲ得テ今後ハ同會  
員ニ於テ之ヲ伐採スヘシト聲言セルヲ聞キ尤ヲ  
以テ曩ニ御照會ヲ發シテ次第ナリ故ニ此ノ問  
題ニ付テハ軍官憲ノ方ヘモ然ルハテ御注意ヲ  
願ヒタシ

伊藤親監

承知セリ 韓國側ニ付テハ過般自分

ノ上京中軍官憲ニ對シ自分ノ承諾ヲ經  
スレテ之ヲ伐採スルヲ得サル旨言明シ置テ

リ

權農相

此森林ハ始メ我國ノ手ニ還リ来リタ

ルコト故斯ノ如キ方法ヲ設ケテ伐木スルハ頗ル

好都合ノ事ナリ

伊藤統監

自分ハ常ニ韓國ノ歲入ヲ増加

スルノ手段トシテ此ノ森林ノコトヲ考慮シ

居リタリ

權農相

此ノ伐林事業ハ蓋シ多額ノ資本ヲ

要セスシテ之ヲ為スコトヲ得ヘシ而シテ必要ノ金

額ハ我カ國ニ於テモ之ヲ募集スルコトヲ得ル



ナリ

朴參政

鶴原長官ノ回答ニ依ル林公使時

代ニ於テ既ニ韓國政府ト交渉濟ノ問題

ナレハ今日ニ至リ再ヒ彼是言ハレサル方宜カラ

ニトノコトナリシヲ以テ再度ノ照會ヲ發シタリ

伊藤統監

然リ鶴原ハ自分カ我カ軍官憲

ニ協議シタルコトヲ知ラザリシカ故ニ左様ナル回

答ヲ發シタルモノナルヘシ本件ノ關シテハ自分

上京中ニ軍官憲ト委細協議ヲ盡シテ

歸任セリ

李法相

日韓兩國合資、會社成立セハ是

レ實ニ閣下御盡力ノ結果ナリ

權農相

帝ニ鴨綠江森林ノミナラス軍收用地

問題ノ落着モ亦閣下ノ賜ナリ

伊藤統監

軍收用地ニ付テハ自分ノ就任以來

軍官憲ト頻リ

交渉シタル結果曩ニ閣陳

セムカ如キ

解決ヲ見ルニ至リ

即チ我カ軍隊ニ

必要缺クヘカウサル區域ノ直ニ之ヲ收用スル

ニ止メ其他ノ土地ハ其ノ儘之ヲ人民ノ手ニ

存シ置クモ可ナリ勿論一朝事アルトキハ軍

隊ニ於テ之ヲ使用スル已ムヲ得サルコトナリ

權農相

我カ國民モ閣下ノ恩澤ヲ蒙リテ

コトハ永ク之ヲ忘レサルヘシ

李内相

中山成太郎君ノ所屬ニ關シテ如何

ニ之ヲ處置致スヘキヤ

伊藤統監

初ヨリ所屬ヲ定ムルカ或ハ又法制調

査會ノ如キモノヲ

組織シ同人ヲ之ニ屬セシ

メ一定ノ

俸給ヲ

與フルコト、

ナスカ其ノ邊ニ

付テハ尚一層考慮ヲ加ヘ置クヘシ

李内相

然ラ

高見ノ

決定ニ

至ルマデ暫ク此

儘ニ致シ置クヘシ

伊藤統監

兎ニ角梅博士ヲ總裁トシテ中山ハ

其下ニ働カシメサルヘカス委員ノ選定ニ當

ル韓國官吏モ亦然リ

李内相 了承

伊藤統監

本日ハ種々問題ヲ決定シタルモ

病院敷地問題ノミハ尚未定ナリ

權農相

天然亭ノ傍ニ適當ナラント思ハル

敷地アリ人ヲ派シテ踏査セシメラレテハ如何哉

此ノ土地ハ宮内府ノ所屬ナレトモ政府ニ於テ

之ヲ借受ルコトヲ得ヘシト信ス尤モ少數ノ  
人家其ノ中ニ在リ是ハ買収セサルベカラサル  
コト勿論ナリ

伊藤統監 然ルカ一應踏査セムヘシ

此ノ時學部大臣ハ三土忠造ニ學部參與官ヲ命  
ストノ辭令ヲ交付セントシタル處同人ノ應聘ニ關  
スル日本皇帝陛下ノ勅裁未濟ナルヲ以テ未タ之  
ヲ交付スルヲ得サル旨ヲ語り統監ハ勅裁ヲ經タル  
上ニテ交付セラレテ可ナリト答フ

伊藤統監 軍部大臣ハ經理院卿ナリ故ニ一

應御協議致シテ義和宮ハ自カカ統監ト  
シテ來任スルニ先タ會見シテ實際同宮モ歸  
國スルコトヲ得ル様幹旋セヨト依頼セラレタル  
故自分ヨリ貴國皇帝陛下ニ奏上シ陛下  
ヨリ召還ノ勅電ヲ得テ歸國セラレタルモノ  
ナレトモ歸來常ニ恐怖ノ念ヲ懷カレ暗殺又  
ハ毒殺ノ厄ニ逢<sup>遭</sup>ハシコトヲ恐レルヲ以テ已  
ヲ得ス自分ヨリ憲兵ヲ附シテ護衛ノ任ニ  
當ラシメ居リ併ナカラ此ノ護衛モ何時迄  
モ之ヲ繼續スルコトヲ得サレハ之ニ對シ相當

ノ處置ヲ考ヘサルヘカラサレトモ今ヤ護衛問題  
 ヲモ尚緊要ナルアリ他ナレ同宮ノ生活問  
 題ナリ曩ニ陛下ヨリ同宮ニ對シテ一年二萬  
 五千圓ヲ下賜セラルコト成リ居ルモ未タ其ノ  
 實行ヲ見ルニ至ラス又先般同宮ノ日本ニ派  
 遣セラルヤ旅費約一萬圓ヲ要スルヲ以テ陛  
 下ヨリ宮内大臣ニ其ノ支出方ヲ命セラル  
 モ宮内府ニ於テ支出スヘキ資金ナレトノ理由  
 ヲ以テ之ヲ支出セス已ムヲ得ス度支部ニ於  
 テ一時之ヲ繰替ヘル次第ナリ今回又歸

國セシタルニ聞ク所ニ依テ同宮ハ殆ト全ク無  
資財ナリトモ然ラズ則チ如何ニシテ生活セラ  
ルヤト問ヒタルニ常ニ親王妃ヨリ食物ヲ贈  
之ヲ食シ居ラルナリトモ斯ノ如キ次第ニ  
テハ實ニ體面上ニ於テモ面白カラサルヲ以テ經  
理院ヨリ一定ノ額ヲ支出スル外ナレト信ス  
如何哉

李軍相 過日陛下ハ宮内大臣ヲ召セ自今  
一箇月二千五百圓宛ヲ義和宮ニ支給セヨ  
ト命令アリ其内ニテ取敢ヘス二千圓ヲ同



宮ニ支拂ヒタリ今後モ毎月二千五百圓  
ヲ經理院ヨリ支出スヘトノ勅命ニ接スル其  
ノ通り遵奉致スヘシ

伊藤統監

過日二千圓ヲ受取ラレタルコトハ

自分モ之ヲ承知ス然レトモ茲ニ軍部大臣  
及各大臣ノ考慮ヲ煩ジタキハ義和宮ノ  
日本滞在中如何ニ待遇ヲ享ケラレタル  
ヤノ一事ナリ觀兵式際ノ如キ我カ天皇陛  
下皇太子殿下ノ御馬車ノ次ニ義和宮ノ  
馬車ヲ置カレ即チ我カ各親王ノ上位ニ

居ラレタリ又新宿御苑ノ大宴會ノ際モ  
天皇陛下ノ右ニ其ノ席ヲ設ケラレタレハ此  
ノ時モ矢張我カ國各親王ニ比シテ一段ノ  
優待ヲ享ケラレタルナリ而シテ其ノ日本滞  
在中ノ經費ハ勿論我カ宮内省ニ於テ支  
出シタルニ止マズ同宮カ我カ國文武ノ高  
官ヲ招待セラレ宴會ヲ開カレタル時モ其  
ノ費用ハ申分レ注意ト依リ我カ宮内省  
ヨリ之ヲ支出セラレタリ我カ國ニ在テ斯ク  
マテ優遇ヲ享ケラレタル同宮ニシテ其ノ本

國ニ歸來セハ食フニ食ナキ有様ナリト云フニ  
至テハ豈不都合ノ極ナラスヤ

李軍相 我カ國帝室資金ハ内藏司及  
經理院ニ於テ之ヲ保管セリ故ニ勅命ニ接  
スハ何レヨリニテモ直ニ支出致スヘシ

伊藤統監 義親王ノ言ハル所ヲ聞クニ英  
親王ハ其ノ待遇實ニ鄭重ニシテ種々ノ  
優遇ヲ享ケラルニ拘ラス余ハ斯ノ如キ  
情態ニ在リト自分ニ訴ヘラルナリ然レトモ  
此ノ事ハ固ヨリ貴國ノ内事ニ屬スルコ

トナレ自分ノ與リ知ル處ニアラスト返答ス  
ルモ自分ニ於テ更ニ不都合ナキコトナレトモ  
斯テ韓國ノ體面ニモ關スルコトナレ自分  
ヨリ一應注意致置テ次第ナリ想フニ何  
レニ至リテ之ヲ訴フルモ到底其ノ實効ヲ見  
サルニ依リ來テ自分ニ之ヲ訴ヘラル、ナルヘシ  
聞ク所ニ依レハ同室ノ日本滯在中諸方ヨリ  
巨額ノ負債ヲナシ遂ニ我カ國ノ法庭ニ訴  
ヘラル、ニ至ルヤモ測ラレサルカ如キ情態ニ在  
リタリトシテ我カ國ノ法庭ハ義親王ナリトテ

決シテ民法上ノ義務ニ關シ容赦スルモノニア  
ラサルコトハ諸君ニ於テモ之ヲ熟知セラル、ナレ  
現ニ居住セラル、家屋ノ如キモ此ノ儘政府ヨ  
リ義和宮ニ貸與ヘ置テ方宜カルヘシ何ト  
ナレ之ヲ義親王ノ名義ニ引替フレハ直ニ  
債主ヨリ差押ヘラレ、虞コレハナリ

関度相 曩ニ義親王カ陛下ニ謁見セシタ  
ル際彼ノ家ハ政府ノ所有ニシテ自分ハ所謂  
借家住居ノ身分ナレハ頗ル居心地惡シト  
述ヘラレタルコトアリ其ノ際自分モ偶御前ニ在

リタル以テ政府ノ家ナリトテ決シテ政府ニ於  
テ殿下ノ居住セラル、モノヲ引上クルカ如キコ  
トナキ故ニ御安心アリテ可ナリ加之古例ニ據ル  
モ親王ノ家ハ戸曹ニ傳ツテ之ヲ作りタルノ  
先例モアリト辯解シタルコトアリ過日モ同邸  
ニ雨漏ノ箇所アリタルニ殿下ハ人ヲ自分ノ  
許ニ遣ハサレ政府ノ家ナルニ依リ直ニ政府ニ  
於テ之ヲ修繕スヘシトノ命令アリ自分ニ於  
テハ御尤ノ次第ナリトテ直ニ技手ヲ派遣  
シ修繕ヲ加ヘタルコトアリ兎ニ角全ク借家

住居ノ御氣持ニテ在ラセラルハカ如シ

伊藤親監

過日モ義和宮ニ對シテ五萬圓ノ債

權ヲ有ス日本人アリ當地ニ來リテ同宮ニ償

還ヲ請求セルモ返濟セラレサルヲ以テ我カ理

事廳ニ訴ヘ理事廳ヨリ之ヲ自分ニ稟申

セリ其ノ借用證書ナルモノヲ見ルニ明ニ返濟ノ

義務ヲ果ス能ハサルキハ義和宮即チ引渡ス

ヘシトノ條件ヲ記載シテアリタリ

各大臣

然ルカ

伊藤親監

義和宮ニ關スル問題ハ之ニ止メ尚

他ノ一事ニ付テ内部大臣ニ承リテ自分ハ未ダ  
曾テ斯ノ如キコトヲ申出セシコトハ一回モナケレ  
トモ李根滌氏等ト共ニ日本ニ赴キ先者ノ中  
ニ朴重陽ナル者アリ同人ハ先般韓皇陛下  
ニモ謁見シ李根滌氏ニ於テモ其ノ任用方  
付キ種々配慮シ居ルヤニ聞及ヘリ同人ハ内  
部大臣ニ歎願シ郡守ヲ拜命シタシト希望  
シ居リ自分ハ未ダ曾テ當局者ニ韓國  
官吏ノ任命ニ付容喙シタルコト人知ラズ之ニキモ  
試ニ之ヲ内部大臣ニ尋テ見ルヘシト答ヘ置キ



アリ而シテ本人ニ對シ何處ノ郡守ヲ拜命セント  
欲スルヤト問ヒタルニ大邱郡守ヲ勤メタシト申出  
テナリ斯ノ如キ事果シテ出来得ルモノナリヤ

李内相

大邱ハ日本人ノ居留スルモノ漸次多數

トナリタルヲ以テ政府ニ於テモ相當ノ人物ヲ郡  
守ニ任命シタシト協議中ナルノミナラス現在  
ノ郡守モ外國人ト交渉スルカ如キハ其ノ長  
所ニ非サルカ故ニ他ニ轉任ヲ希望王シ居トリ  
權農相ノ說ニ據ルモ朴重陽ハ適任ナル由  
ナラ成ルルヲ本人ノ希望ヲ貫徹スル様盡

力致スヘシ

此ノ時李軍相ハ同人ノ事ニ付テハ家兄ヨリ聞キ  
タル事モアレハ密ニ運動シ居ル者ノ一人ナリト談笑  
セリ

伊藤親監 然ルハ内部大臣ニ申込ニ置キタル  
カ故ニ貴大臣ヲ訪問スヘシト同人ニ申付ケ置ク  
ヘシ

李内相 了承、來訪セハ面會致スヘシ

伊藤親監 自分ハ韓國官吏ノ任官取次ヲ為  
シタルハ之ヲ以テ嚆矢トス併ナカラ所謂韓國

流義ニテ推薦者ニ其ノ責任アリト稱スルカ如  
キコトハ御免蒙リテ

各大臣 哄笑ス

朴參政 本日ハ有益ナル高説ヲ承リ感謝ノ至  
ニ堪ヘス之ニテ退出致スヘシ

伊藤親監 然ラズ今日ハ之ニ步他日諸君ノ  
御都合ニヨリ又來會ヲ請フヘシ

閔度相 假令御召集ヲ蒙ラストモ自分等ヨ  
リ參上致スヘシ

午後四時半散會

韓國施政改善ニ關スル協議會 第九回

韓國施政改善ニ關スル協議會第九回

開會時刻 明治三十九年七月二十三日午前時三十分

場所 統監官舎

列席者 統監侯爵 伊藤博文

參政大臣 朴齊純

内部大臣 李址鎔

度支部大臣 閔泳綺

軍部大臣 李根澤

法部大臣 李夏榮

農商工部大臣 權重顯

通譯者

統監府書記官  
兼統監祕書官

國分象太郎

筆記者

統監祕書官

古谷久綱

伊藤統監

木月、鴨綠江森林ニ精通セル

今川技師ヲ諸君ニ紹介スヘシ惟フニ韓國

人中ニモ氏ノ如ク鴨綠江森林ヲ精密ニ

調査セル人ハアラサルヘシ今ヤ同森林ノ經

營ヲ為スニ當リ其ノ實情ヲ知悉スルハ

最必要ナルコトナリト信スルニ依リ是ヨリ今

川技師ヲシテ同森林ニ關シ一場ノ談話

ヲ為サシムヘシ

各大臣 拜承

伊藤統監

(今川技師、陸軍大臣ニ提出セル

報告書ヲ各大臣ニ示シツツ)此ノ圖ハ即ケ

今川技師ノ調査シタル鴨綠江森林ヲ示セ

ルモノナリ之ニ據テ鴨綠江ノ兩岸及豆滿

江西岸並間島方面ノ森林ヲ明ニスルヲ

得ヘシ今川技師ハ一昨年ヨリ昨年ニ懸ケ

親シク實地ニ就キテ之ヲ調査シタルナリ自

分ノ言フ迄モナリ鴨綠江森林ハ韓國ノ

寶庫ナク相當ノ方法ヲ設ケテ之カ保存ヲ

圖ラサルヘカラス 幸ニ其ノ方法ニテ宜ヲ得ハ韓  
 國ニ相當ノ利益ヲ與フルコト必セリ然レトモ  
 之ヲ經營スルニハ充分新學術ヲ應用シ  
 一定ノ方針ヲ立テテ之ヲ遂行セサルヘカラス  
 自分ハ森林經營ニ付キ専門ノ知識ヲ  
 有セサルカ故ニ今川氏ヲ煩ハシテ一昨午以來  
 同君ノ調査シタル結果ヲ一應聴取リタル  
 モ本日ハ更ニ同君ヲシテ實際ノ情況ヲ説  
 明セシメ以テ諸君ノ參考ニ供セントス

權農相 自分等ハ鴨綠江森林ノ事情モ



通セス又會社ヲ組織スルコトニ關シテモ甚未

熟ナルニ依リ幸ニ相當ノ方法ヲ御垂示ア

ラハ其ノ實行ニ付テハ十分盡力致スヘシ

今川技師 鴨綠江上流ノ山林中拙者ノ目撃

セタル部分ニ就キ諸公ノ清聴ヲ煩ハスヘシ

此ノ山林ハ露國人モ清國人モ將テ日本

人モ非常ニ廣大ナル山林ノ如ク吹聴ニ隨

テ之ヲ經營其ノ宜ヲ得ハ莫大ノ利益ア

リトノ事ナルヲ以テ拙者ハ如何ニ多大ナル

富カ長白山脈ニ實在スルヤ又如何ナル

方法ヲ以テセハ此ノ木材ヲ河口ニ搬出シ  
 テ實用ニ供スルコトヲ得ヘキカノ二問題ヲ攻  
 究セント思立ケ一昨年以來探檢ノ為同  
 地方ヲ旅行シタリ時恰モ日露戰爭中  
 ナリシヲ以テ種々ノ困難ニ遭遇シタルモ幸  
 ミテ其ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ最初ノ旅  
 行ハ一昨年十月ヨリ昨年三月ニ至リ鴨綠  
 江ノ左岸ニ沿テ溯リ當初ハ韓國慈城  
 マテ行カハ必大森林アルヘシトノ想像ヲ以テ  
 進ミタルニ該地方ニ格別ノ森林ナカリシ

為更ニ鴨綠江ヲ橫斷シテ清國領帽兒  
山（銅鑛ノ所在地ナリ）ニ赴ケリ然ル此ノ  
方面モ鴨綠江ノ沿岸ニ於テハ殆ト森林  
ト稱スヘキモノナレ是レ數十年來清人ノ  
濫伐ニタル結果ナリ但シ鴨綠江ヲ隔ツ  
ルコト四五里乃至七八里ニ及ハハ美ハシキ森  
林アリ尚進テ長白山脈ニ達シタルニ鬱葱  
名森林東西ニ亘リ更ニ進テ長白山頂  
湖水ノ附近ニ至ルニ三十里乃至四五十里  
ノ間ハ全ク大木高樹ヲ以テ蔽ハレ居リ

李法相

長白山頂ノ湖水ヲ見ラセタルヤ

今川技師

目撃致シテ其ノ寫眞ハ收メテ報

告書中ニ在リ此ノ湖水ハ太古ノ噴火口ニ

シテ冬季ハ雪ヲ以テ埋メレ夏季ハ湖水ト

ナリ又此ノ水流シテハ鴨綠江トナリハ豆

滿江トナリ又他ハ松花江トナリ長白山頂

ニ立ケテ滿洲ヨリ韓國ノ方面ヲ見渡スニ

韓國ニ於テハ甲山郡及茂山郡ノ一部ニ大

森林アリ其ノ大部ハ孰シモ落葉松ナリ

是レ即チ韓國ニ現存スル大森林ニシテ其ノ

外ニ平安南北道ヲ分ツ山脉ト咸鏡南  
北<sup>通</sup>分ツ山脉ニ沿ヘル小森林ト狼林山ニ多  
少ノ森林ニ過キス而モ此レ等ハ皆面積  
狭小ナルニナラス狼林山森林ノ如キハ山高  
ク山腹險難ニシテ森林經營ニ適セス故ニ  
韓國ノ大森林ヲ擧グルハ第一ハ甲山郡ノ  
森林ニシテ次ハ豆滿江上流ノ我山郡森林ヲ  
推サレヲ得ス但シ豆滿江沿岸ノ森林ハ  
水利ノ便惡ヲ更ニ充分ノ調査ヲ遂クル  
ニ非サル直ニ之カ經營ニ從事スルコトヲ得ス

之ニ及シ甲山郡森林ニ至テ鴨綠江、支流  
 アリテ木材ノ搬出ニ利用スルコトヲ得尤場所  
 ニ依リ深林ヨリ河流ニ木材ヲ運搬スルニ他  
 ノ勞力（例ハ輕便鐵道ノ如キ）ヲ假ル必要  
 アリ而シテ甲山郡森林ノ面積ハ少ノトモ  
 約百方里内外ニシテ茂山郡ノ森林モ亦大  
 約百方里餘アルヘシ斯ノ言ハハ韓國ハ頗  
 ル森林ニ富メルカニ感アルヘキモ之ヲ面積廣  
 大ナル韓國全土ニ比較セハ實ニ其ノ狹小ナ  
 ルヲ歎セサルヲ得ス加之獵夫農民等カ之

ヲ開墾シテ僅少ノ利益ヲ得シカ爲森林ノ  
一部ヲ燒キ其ノ火延燒シテ處々ニ山火  
事ヲ起シタルノ跡アリ然ルニ一度燒土トナ  
リタル土地ハ養分減少シ樹木ノ成長甚遅  
キモノナリ放火ハ相當ノ取締法ヲ設ケテ之  
ヲ嚴禁セサルヘカラス然ラズンハ此ノ豊裕ナル  
富田ハ漸次煙トナリテ遂ニ滅盡スルニ至ルヘシ  
現ニ拙者ハ長白山ヨリ豆滿江方面ニ向テ降  
下スル途中大森林ヲ横キリタルニ其ノ間五  
六千町乃至一萬町歩位ノ燒跡頗ル多キ

ラ見テ實ニ痛歎愛惜ノ念ニ堪ヘサリシナ  
 リ今鴨綠江方面ノ森林ト豆滿江方面ノ  
 森林ヲ比較スニ後者ハ前者ニ比シテ其ノ地  
 味頗ル粗惡ナリ想ニ其ノ第一原因ハ太古  
 長白山ノ噴火スル頃豆滿江方面ニハ鹿麕  
 砂飛散シ鴨綠江方面ニハ細砂飛散セルニ  
 因ルナシカ又第二理由ハ豆滿江方面ハ  
 鴨綠江方面ニ比シテ火災ノ夥シカリシニ  
 因ルナルヘシ之ヲ要スルニ豆滿江森林ハ鴨綠  
 江森林ニ比シテ劣等ナルヤ論ナシ畢竟



火災ハ前述ノ如ク非常ナル損害ヲ來ス  
モナルカ故ニ充分取締方法ヲ設ケテ之  
ヲ豫防セサルヘカラス惟ニ大韓十三道ノ山  
嶽今日ノ如ク禿山ト化シタル所以ノモ、ハ  
一、行政ノ惡シキニモ因リタルモノナルヘシト雖  
一、火災ノ然ラシムル所ナリト斷セサルヲ得  
ス元來咸鏡道方面ノ人民ハ富裕ナラス  
又農業モ發達セスト雖山林ノ職業興  
リタル以來ハ之ニ附屬シテ種々タル事業  
起リ衣食住等種々ノ幸福ヲ彼等ニ與

之ニ至リ現ニ我カ陸軍ニ於テ同地方ノ伐  
 木ニ着手シタル以來ノ經驗ニ徴スルニ韓國  
 人ハ日々平均四十六七錢ノ勞働賃ヲ得  
 テ欣然俚歌ヲ唱ヘツツ伐木ニ從事シ居  
 リ且彼等ノ收入モ舊ニ比シテ増加シタル  
 モト見ヘ正月ニ至ル孰モ其ノ小兒等ニ  
 着色ノ新衣ヲ與ヘ居ルヲ目撃セリ又自  
 轉車蓄音器其他ノ物ヨリ新知識ヲ  
 彼等ニ注入シタルコトモ爭フヘカラス  
 人或ハ韓  
 國人ハ怠惰ナリ殊ニ西海岸方面ノ韓人

ハ最懶惰ナル者多シトノ説ヲ為スモノアリ勿  
論多少其ノ事實ナキニアラスト雖咸鏡道  
方面ノ人民ニ就キテハ今ヲ之ヲ虚説ナリト謂  
ハサルヲ得ス拙者ノ觀ル所ヲ以テハ此ノ方面ノ  
人民ハ其ノ精神身體共ニ頗ル健全ナリ  
一例ヲ舉グルハ攝氏ノ零度以下二十度内  
外ノ酷寒ヲモ厭ハス手袋ヲモ穿タスレテ  
平然勞働ニ從事セルナリ而シテ其ノ初ニ  
於テハ日本人ト共ニ勞働セシメクリシモ日本人  
ハ彼等ヲ虐待スルノ弊害見ユコトヲ發見シ

タルニ依リ爾來日本人ハ日本人ノミ韓人ハ  
 韓人ノミ勞動セシムルコトト為シテ以來彼等  
 ハ愉快ニ作業ヲ為シツツアリ韓國勞動者  
 等ハ斯ノ如キ情態トモ今ヤ鴨綠江ノ上  
 流韓國ニ屬スル森林ヲ伐木セントセハ之ヲ  
 濫伐スル甚不可ナリ相當ノ方法ヲ設ケテ  
 幾萬年モ永久ニ此ノ森林ヲ保存スルノ途  
 ヲ講セサルヘカラス從來兎角便利ノ宜キ處  
 ヲ伐木ニ着手スル弊アレトモ此ノ如キコトハ  
 カナラシヲ禁止スヘシ故ニ之ヲ經營スルモノハ政

府ニマレ會社ニマレ將々箇人ニマレ此ノ濫伐ト  
放火トニ件ハ之ヲ嚴禁セサルヘカラス否ラサレハ  
韓國ニ終ニ殆ト森林ト稱スヘキモノナキニ至ラ  
ン何トナレハ鴨綠江森林ノ廣袤ハ前陳ノ  
如ク百方里アリト稱スルモ其ノ内ニハ燒跡アリ  
又長白山頂ニハ湖水アリ湖水ノ周圍一里  
以内ハ火山岩ヲ爲シ樹木ヲ生セス更ニ其ノ  
周圍一里許ハ灌木ナルヲ以テ此レ等ヲ控  
除シ眞ニ好森林ト稱スヘキモノハ僅ニ其ノ  
三分ノ二内外ニ過キサレハナリ故ニ之ニ對シテ

相當ノ資本ヲ下シ永久的經營ノ方法ヲ  
講スル最必要ナリ

大體ノ狀況ハ前述如シ尚茲ニ同山林ニ關  
スル拙者ノ愚見ヲ附言致スシ下度山林ノ中  
ニ入ル空氣純潔ニシテ水亦清ク風光頗ル  
明媚ナリ而シテ此ノ中ニ雉、山鷄、如キ或  
ハ虎熊麋鹿豺豹其他無數ノ麋鹿ハ  
ニキ野禽ト野獸トヲ包藏ス拙者ハ銃ヲ携  
ヘテ山林ニ入りタルニ實ニ其ノ獲物ノ夥ニキ  
ニ自ラ驚キ名程ナリ殊ニ下度山林ノ事

事起<sub>ラ</sub>都會<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>生活難<sub>ク</sub>歎<sub>ル</sub>人々  
 ハ進<sub>テ</sub>山中<sub>ニ</sub>移住<sub>ス</sub>社會經濟ノ上<sub>リ</sub>  
 見<sub>ル</sub>モ頗<sub>ル</sub>好都合ナ<sub>ラ</sub>スヤ現<sub>ニ</sub>鴨綠江方面  
 ノ山林中<sub>ニ</sub>在<sub>ル</sub>貧者ノ生活ヲ京城附近  
 ノ貧者ノ生活<sub>ニ</sub>比<sub>ス</sub>ル<sub>ニ</sub>衣食住共<sub>ニ</sub>同日ノ  
 論<sub>ニ</sub>在<sub>ラ</sub>ス粟稗麥<sub>ノ</sub>如<sub>キ</sub>ハ到<sub>ル</sub>處耕作  
 ニ適<sub>シ</sub>野獸<sub>ノ</sub>肉<sub>ハ</sub>以<sub>テ</sub>副食物トナスコトヲ得  
 例<sub>ハ</sub>家屋ヲ建築スル<sub>ニ</sub>モ其ノ材料豊富  
 ナ<sub>ル</sub>為<sub>キ</sub>其ノ代價ノ廉ナル實<sub>ニ</sub>驚<sub>ク</sub>ヘキモ  
 ノアリ京城附近<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>一軒ノ茅屋ヲ建築

スルモ尚四五十圓ノ經費ハ之ヲ見積ラセカ  
ラス然ルニ森林中ノ<sup>胞</sup>砦臺山<sup>洞</sup>稱スル部落ノ如  
キハ一家族四五人ヲ容ルニ足ルヘキ家屋ヲ建  
築スルニ僅ニ三圓ヲ要スルノミナリト云フ此ノ  
方面ニ移住セル人々ハ甲山郡地方ヨリモ寧  
口咸興・洪原・北青・利源<sup>原</sup>・端川・城津・  
吉州等東海岸方面<sup>ヨリ</sup>人民甲山ヲ經テ  
来セル者多シ彼等ハ小ナル部落ヲ作り團  
練<sup>シテ</sup>頗ル平和的<sup>ニ</sup>生活ヲ為シツツアリ

李法相

火賊又ハ馬賊ハ出テザヤ



今川技師

火賊ハ約三年以前迄ハ稀ニ来リ

タルアリタル由ナルモ今日ハ更ニ其ノ厄ニ遭フ者  
ナシ尚山林ニ關スル愚見ヲ續キテ開陳致スヘ  
シ適當ナル方法ヲ設ケテ山林ノ保存ヲ圖ラ  
サルヨリ國家ニ非常ナル損害ヲ及ホシタル實  
例ノ顯著ナルモノ歴史上頗ル多シ例ハ希臘  
ノ如キ一時ハ隆盛四隣ヲ壓スル勢アリタルモ  
山林濫伐ノ弊害甚ク洪水旱魃頻ニ  
至リ國家ハ之カ爲ニ非常ナル損害ヲ蒙  
リ希臘ノ滅亡ハ政治上ノ弊害及人民ノ奢

多ニ流レタルモ其ノ原因ニ相違ナカルヘキモ山林  
濫伐カ其ノ一大原因ヲ為セリトハ歴史家ノ異  
口同音ニ唱道スル所ニテ毫モ疑フヘキノ餘  
地ナシ又十八世紀初ニ當リ佛蘭西ニ於  
テ山林濫伐ノ弊盛ナルヤ時ノ宰相大ニ之ヲ  
痛歎シテ佛國ヲ滅亡セシムルモノハ敵國ニ  
ラスシテ寧ロ山林ノ濫伐ナリト絶叫シ又近  
ク我カ日本ノ如キモ山林濫伐ノ為著シキ  
影弼者ヲ蒙リタルコトアリ殊ニ韓國ニ於テハ  
現ニ山林ハ殆ト皆無ノ有様ニテ早魃洪

水脚氣咽喉病其、他各種、地方的傳染  
病、因皆之ヨリ起リ來リ而モ尚此儘之ヲ  
放任セシカ希臘ノ例ヲ襲ハサルヲ得サルニ至  
ルモ亦測リ知リ難シ但シ山林經營ノ事々  
ル幾多、歲月ヲ要シ橋梁ヲ架シ隧道  
ヲ穿ツカ如ク直ニ其ノ結果、人目ニ映ル  
モノニ非サルモ政府及人民志ヲ一ニシテ之カ經  
營ニ従事セハ其ノ成功ヲ見ルコト決シテ  
難キニ非サルナリ

權農相

山林ノ國家ニ及ス關係ハ至大ナリ

一  
我カ國ニ於テ旱魃水害、甚ニキハ蓋シ山  
林無キヨリ來ルモノナルヘシ

今川技師 然リ併ナカラ旱魃ヲ豫防スルコトハ決

シテ困難ナリニアラス我カ國ニ於テ其ノ實  
例乏シカラス元來降雨ハ山林ト最密接ナ  
ル關係ヲ有スルモノニシテ例ハ岡山藩ノ儒  
者ニシテ且政治家タリシ熊澤蕃山ノ如キ余  
ノ少時小豆島ニ樹木鬱鬱タリシ頃ハ岡  
山地方ニ屢驟雨沛然トシテ來リタリシモ  
今日ハ小豆島ノ禿山トナリタル為驟雨ノ

至ルコト甚稀ナリト歎シタルコトハ尙記録ニ存  
セリ其ノ他我カ國ニ於ケル實例ヲ引證スレ  
ハ其ノ數實ニ尠カラスト雖今一々之ヲ列  
舉セス要スルニ山ニ樹木アル雲ヲ招キ驟  
雨ヲ生ス驟雨生スハ雷鳴起リ雷鳴起レ  
ハ空中ニ「オゾン」ヲ生ス而シテ此ノ「オゾン」  
ハ有害「バクテリア」ヲ殺スノ作用ヲ有スルカ  
故ニ傳染病ノ如キ自然ニ之ヲ撲滅スルコ  
トヲ得ルナリ加之綠色ハ太陽ノ光線ヲ直  
接反射セサルカ故ニ綠樹鬱葱タル土地

ハ愉快ナル生活ヲ為スコトヲ得拙者ハ韓國  
モ大ニ奮起シテ永久ノ經營ヲナシ以テ斯ノ  
愉快ナル生活ヲ為シ得ヘキ樂土ヲラシメシコト  
ヲ切望シテ止マサルモノナリ若夫レ樹木ハ雨水ヲ  
シテ直ニ海ニ注カシメス漸次ニ之ヲ流出シテ  
以テ旱魃ヲ防クカ如キ効用ヲ有スルコトハ  
今更贅言ヲ要セサルヘシ且木材ヲ國內  
ニ產出スルハ現今ノ如ク亞米利加又ハ日本  
等ヲ輸入スルコトナク自國ノ材木ヲ以テ造  
家造船架橋ヲ為スヲ得ヘキ韓國ノ

獨立亦始メテ完全ナルニ至ルヘシ終ニ臨ミ拙  
者ハ本問題ニ付キ諸君ノ清聴ヲ讀シ  
タルハ最光榮トスル所ナルコトヲ茲ニ陳謝ス

今川技師ノ談話終ルヤ權農相ハ義親王封冊  
式ニ關スル用務アリトテ辭シ去ル

統監ハ今川技師ニ對シ其ノ勞ヲ謝シ旅宿ニ  
引取り休息シテ可ナリト告ケ今川技師旨ヲ領  
シテ退出ス時ニ十二時半

伊藤統監 鴨綠江森林ハ先刻來今川  
技師ノ説明シタル如ク清國側ハ韓國側

ニ比シテ頗ル繁茂セリ勿論彼此ノ精確ナル  
比較ニ至テハ今之ヲ知ルニ由ナシト雖先ツ韓  
國方面ハ清國方面ノ四分ノ一ト推算セハ  
大差ナカルヘシ隨テ之ヲ伐採高モ清國  
方面ニ於テハ年々百八十萬本ノ材木ヲ  
伐出ス計畫ナルカ故ニ韓國方面ハ大約  
四十萬本内外ト見テ可ナルヘシトノコトナリ就  
テハ先ツ此ノ數ヲ基礎トシテ經營ノ計畫  
ヲ立テサルヘカラス而シテ右經營ノ大體方針  
ニ關シテハ二様ノ考案アリ第一ハ韓國モ日



清兩國ノ資本ヲ以テ組織スル會社ニ加入シ即  
チ日清韓三國合同事業トナスコト是ナリ  
第二ニ過日協議シタル如ク日韓兩國ノ會  
社トシ全ク日清兩國會社ト其ノ組織ヲ別  
ニ單獨以テ之カ經營ニ當ルコトナリ但シ日  
清共同會社ノ資本金過日自分ヨリ二百  
萬圓ナリト報セシモ今川技師ノ云フ所ニ依ル  
ニ百五十萬圓ニシテ日清兩國ニ於テ之ヲ折  
半シ各百二十五萬圓ヲ分擔スルモノナリトコ  
トナリ尙韓國カ此ノ日清兩國會社ニ加入ス

少得失如何ニ付キ今川技師ノ意見ヲ徴シ  
 タルニ便宜上及經濟上ノ點ヨリ見テ合同經  
 營ヲ可ナトス其ノ理由ハ深山ヨリ河岸ニ至  
 ル輕便鐵道ノ如キ又ハ挽割器械ノ如キハ兩  
 方面ニ於テ交互ニテ流用スルコトヲ得ルノミナラ  
 ス同一ノ河流ニ同時ニ兩側ヨリ木材ヲ流出ス  
 ルコトナラズ其ノ間種々ノ紛議ヲ醸スコトアル  
 ヘキハ到底避クヘカラサレハナリ而シテ又共同採  
 伐ヲ為ストキハ如何ニシテ雙方ノ利益ヲ算  
 出スヤト問ヒシニ一箇年ノ材木伐採高ニ比

例シテ雙方ノ利益ヲ定ムルコトヲ得ヘシトモ又  
伐採數少ケハ株金額モ少キハ當然ノコトナリ  
併ナカラ右ハ一應日清兩國政府ニ交渉シ  
ル上ニ非サハ果シテ兩國カ合同經營ヲ承  
諾スルヤ否ヤハ判明ナラス此レ等交渉ノ煩  
ヲ簡單ニ經營ニ着手セント欲セハ單獨  
ニ日韓兩國ノ會社ヲ組織スル外ナシ自分  
ハ此ノ二點ニ付キ最綿密慎重ニ利害  
得失ヲ研究中ナク遠カズ自分ノ意見ヲ  
定メ重子テ諸君ト御協議致スコトスヘシ

関度相

了承左様願ヒタレ日清合同會社ノ資

本金二百五十萬圓十六日韓合同會社ノ

資金ハ約五十萬圓ヲ見積リ置カサルヘ

カラス

伊藤統監

其ノ問題ハ尙少ク調査ヲ要ス合

同經營ト為スヘキカ或ハ單獨經營ト為ス

ヘキカ其ノ可否得失ハ周到ニ思慮ヲ加ヘ

タル後ニ非サル之ヲ判斷スルコトヲ得ス何トナ

ル是レ單ニ目前ノ利害ノミナラス將來ノ得

失ヲモ考慮セサルヘカラサルナリ

関度相 此、利害得失ニ付テハ自分等ニ於テモ  
考慮ヲ加ヘキヲ以テ統監閣下ニ於テモ宜  
ク御熟慮ヲ仰キテ

伊藤統監 了承、縦ヒ會社ヲ組織スルコトナス  
モ山林經營ヲ擧ゲテ之ヲ會社ニ一任ス  
ルコトヲ得ス是レ單ニ韓國方面ニ付テ然ル  
ミナラス清國方面ニ付テモ亦然リ山林ノ經  
營ハ當初ヨリ専門家ヲ以テ最適切ナル  
計畫ヲ定メシメ之ニ隨テ相當ノ實行方  
法ヲ案出セサルヘカラス若計此ニ出テスレテ

一 門外漢ニ一任セハ濫伐火災ノ結果遂ニ山林消滅スルニ至ルヘシ故ニ山林行政ハ一ノ委員ヲ組織シテ之ニ委任セサルヘカラスト思考ス

関度相 然リ

伊藤統監 而シテ其監督ニ至テハ之ヲ統監ニ

屬セシメサルヘカラスト何トモハ火賊盜伐等モ了ヘケルハ之カ保護上兵力ヲ使用スル已ムヲ得サルニ至ルヤモ測レサナリ

関度相 然リ

伊藤統監 今川投師ハ陸軍ニ屬スルカ故ニ之

ヲ當方ニ採用スルコトハ困難ナルヘシト雖彼ノ如  
キ人物ヲ森林行政委員ノ首班ニ置キ大  
體ノ監督ヲ統監ニ屬セシムルコトトセハ可ナ  
シ韓國政府ノ盡力ニ依リテ株券ハ之ヲ人民  
ヨリ募集スルコトヲ得ヘシ然レトモ韓人ニハ行政ノ  
能力ナシ否日本人ト雖單ニ株主等ニ其ノ  
經營ヲ一任セハ目前ノ利益ヲ獲ニコトニシテ  
之レ努メ自然勝手ナルコトヲ為スニ至ルヘシ  
要スルニ監督ノ必要ハ最緊切ナリ

閔度相

貴説ノ如シ會社ノ役員等ハ成ルヘ

自己ノ利益ヲ増大セシメ為將來ノ事ヲ慮  
 ラスレテ濫伐ヲ為ス虞アリ故ニ監督ノ必  
 要最切ナルモノアリ之カ為ニ輪伐法ヲ設ク  
 ルトカ兎ニ角相當ノ方法ヲ講スルヲ要アルコト  
 勿論ナリ孰レニシテモ合同經營又ハ單獨  
 經營ノ一點ニ付テハ種々ノ方面ヨリ考察シ  
 テ自分ハ單獨經營ヲ可ナリトスルモノナリ只  
 今承ル處ニ據ル韓國方面ハ清國方面  
 ニ比シ木材ノ數少シトノコトナレハ合同經營ヲ  
 ナス場合ニ於テ出資額モ少クシテ可ナルヘ



ニト雖出資額少ケル自然發言權ニモ關  
係スルコトナクキヲ以テ自分ハ斯ノ單獨經  
營說ヲ主張スルナリ

伊藤統監 自分ニ於テ電篤ト勘考スヘシ日清合  
資會社設立ノ細目ニ關シテモ未タ北京政  
府ト充分ニ取極ヲナシタルニ非ス目下奉  
天將軍及袁世凱等ノ熱心ヲ希望シヨ  
リ之カ設立手續中ナルニト考フ今川拔  
師ノ說ニ依リ日本側ニ於テハ全株券ノ十  
分ノ六以上ヲ政府負擔シ其ノ殘餘ヲ人

民ニ加擔セシムル方針ナク、如シ之ニ及ニ清  
 國ニ於テ政府其ノ全部ヲ負擔シ又表面  
 ハ之ヲ政府ト稱スルモ或ハ袁世凱及奉天  
 將軍カ各其ノ私財ヲ以テ全部ヲ出資  
 スルモノナルヤモ測リ知ルヘラス 依テ先ツ日本  
 政府及人民ノ分擔額ニ關シテモ一應之ヲ  
 確メタル上韓國政府ニ於テモ之ニ倣ヒ十分  
 ノ六ト四ト云フ如キ割合ニ於テ政府人民ノ分  
 擔額ヲ定メラレテ然ルヘシ而シテ政府ノ分擔  
 ニ屬スル十分ノ六ハ借款ノ資金ヲ以テ之ニ

應スルモ可ナラシ  
斯クハ韓國ニ於テ株券ヲ  
募集スルモ頗ル容易ニ成功スルナラント信ス  
尤此ノ問題ヲ決定スルハ先ツ以テ之ヲ日本  
政府ニ交渉セサルヘカラサルハ申スマテモナキコトニ  
テ前陳政府人民ノ分擔說ノ如キモ蓋シ會  
社組織ノ一方法ナラント  
勘考シ居ルニ過キサル  
ナリ

閔度相 日本ニ於テハ如何ナル方法ヲ採ラルルトモ  
株券募集ハ容易ナルニ然レトモ當國ニ於  
テ人民ヨリ株券ヲ募ルニ困難ナルハ近ク

農工銀行ノ株券募集ニ照ラスモ明ナリ故  
ニ十分ノ六ヲ政府ニ於テ負擔スルハ最妙案ナ  
リト信ス要スルニ日清合同會社・關係ナ  
成ルヘク速ニ日韓合同會社ヲ組織致度モ  
ナリ

伊藤統監 自分ニ於テモ篤ト熟慮ヲ加ヘタル上  
日本政府ニモ交渉スル積リナリ

関度相 何卒左様願ヒタシ要スルニ山林ヲ  
保存スル為速ニ相當ノ方法ヲ講スルハ目  
下ノ急務ナリ

伊藤統監

了承、如何なる方法ヲ以テ之ヲ保存

スヘキカハ尚今川技師トモ篤ト相談致スヘシ

兎ニ角其ノ方法、如何ヲ問ハス早晚森林

ノ經營ニ着手スルコトヲ得ヘシ

関度相

假ニ韓國ニ於テ負擔スル資本額ヲ

二十萬圓トスル十二萬圓ハ之ヲ政府ニ於テ

負擔シ八萬圓ハ人民ヨリ募集スルコトナ

ルヘシ而シテ右八萬圓ノ募集ヲ為スニハ多少

盡力ヲ要スルカ故ニ成ルヘク速ニ御決定ヲ願

ヒクメシ

伊藤統監

募集ハ自ラ其ノ方法アリト信ス韓

國人民ハ如何ニ資力ヲ有スルカ諸君ニ於

テ熟知セラルコトナク其ノ募集ハ諸君盡

力ニ須ツヘキコト論ナト雖卑見ニヨレハ此ノ

募集ハ左程困難ナルコトニアラス其ノ證據

ニハ現ニ李根培ノ如キ何處ヨリ聞込ミタルニ

ヤ此會社組織ニ頗ル賛成ノ意ヲ表シ居

レリト云フ

閔度相

李根培ハ曩ニ銀行設立際出資ヲ

勸誘シタルモ容易ニ之ニ應セザリシカ今回ハ何

故カ進テ之ニ加擔セシコトヲ希望シ居ルモノ如シ  
伊藤統監 頗ル熱心ナル由人ヲ以テ自分へ申出  
テタリ

関度相 彼ハ農工銀行設立ノ際容易ニ  
加入セサリシヲ以テ一進會長宋秉畎ヲシ  
テ勸誘セシメ殆ト壓制的ニ加入セシタリ  
伊藤統監 資本家ニテ安心セシムルカ如キ  
方法ヲ立ツレハ彼等ハ容易ニ出資スルニ  
至ルヘシ

各大臣 眞ニ然リ

伊藤統監

森林問題ハ暫ク之ヲ他日ニ

譲リ茲ニ諸君ニ協議シタキハ土地ニ關スル

一問題ナリ尤茲ニ所謂土地ナルモノハ軍收

用地又ハ鐵道敷地ノ謂ニアラス韓人ノ私

有地ニ關スル問題ナリ是レ強ク韓人ノミ

ヲ惡シシト斷スヘカラス日本人モ亦全然其

ノ罪ナシトハ言ヒ難カルヘシト信スルモ聞ク所

ニヨレハ韓人ハ往々地畧ヲ偽造シテ日本人

ニ質入又ハ賣買ヲ為スノ結果眞實

ノ持主ハ之ヲ知ラサル間ニ其ノ所有地カ他人



有ニ歸シ居ルカ如キヲアリトスラ尚又特許ノ如  
キモ韓國ニ於テハ其ノ制度紊亂ニ宮中  
ヨリモ政府ヨリモ各種ノ内外人ニ之ヲ與ヘ甚  
シキハ韓國ノ人夫ノ如キモノニ對シテスラ之ヲ  
許スノ狀況ナリ然レトモ特許問題ハ暫ク  
之ヲ措キ專ラ私有地問題ニ就キ協議  
セシニ土地ヲ擔保トシテ日本人ヨリ借金ヲ  
為ス勿レト禁止スルコトハ到底不可能ナ  
ルヘク又相當ノ理由ナクシテ私有地ノ賣  
買ヲ禁止スルコトモ出来サルヘシト雖セメ

テ詐偽ヲ豫防スルニ足ルキ方法之ヲ設  
ケタレト存ス諸君ノ御高見如何

此時関度相李軍相李内相等室ノ一隅ニ  
於テ互ニ意見ヲ交換シタル後  
関度相 私有地ノ事ニ付キ我カ國ニ於テハ

古來左ニ開陳スル如キ習慣アリ即チ大家  
ノ子弟ニシテ地券家券ヲ詐偽ノ手段ニ  
依リ賣買シタル事實發見セハ其ノ大  
家ノ主人ハ無償ニ其ノ土地ヲ取戻スコ  
トヲ得タリ而シテ古ノ大家ハ概チ兩班ナルヲ

以テ互ニ相警戒シテ斯ル災厄ニ遭遇セ  
サル様カメタ夫今日ノ如ク詐偽事件ノ  
起ルコトナカリシモ其ノ後外國人ノ本邦ニ  
在住スルニ及ヒ其ノ對手カ外國人ナル  
トキハ古來ノ慣例ヲ踏襲スル能ハス隨  
テ今日ノ如キ有様トナリタリ故ニ法律  
ヲ以テ之ヲ禁止スルノ必要アリト信スルニ  
依リ梅專士ニ依頼シテ調査セシメテハ如  
何又特權ニ關シテハ從來種々ノ弊  
害アリタルヲ以テ政府ニ於テ取扱フ特許

ハ必閣議ニ提出スルコトトシ之ニ關スル勅  
令案ヲ起草<sup>ニテタルヲ故ニ通</sup>進<sup>テ</sup>統監、高覽ニ  
供ヘ名上實施セント欲ス此ノ案ニ依レ  
ハ各部ヨリ許可シタル特許ハ毎年五月  
三十一日ヲ以テ内閣ニ報告シ五年毎ニ之  
ヲ總括シテ一ノ完全ナル報告書ヲ調  
製スル豫定ナリ

伊藤統監

斯ノ如キ方法ハ無効ナリト信ス

一年トモ五年トモ事ノ起ル後ノ報  
告書ハ決シテ特許ノ濫用ヲ豫防シ得

ルモノニアラス然レトモ自今カハ茲ニ特許問題  
ヲ議論セントスルモノニ非サルカ故ニ是レハ  
別問題トシテ他日ニ譲ルヘシ要スルニ特許  
ハ官衙ト人民ト關係ナク政府ニ於テ注  
意スル之ヲ取締ルノ方法無キニアラス然  
レトモ質入ト賣買ハ個人間ノ關係ナルカ故  
ニ相當ノ方法ヲ設ケテ之カ制裁ヲ附セサ  
ルハカラス自今カハ是マテ韓國ニ土地券ナルモ  
ノ無シトモ思ヒ居リタルニ聞ク所ニ依ルハ矢  
張り韓國ニモ之ニ代ハルヘキ舊文券アル

由ナルニ付中賣買質入ノ際ハ此ノ文券  
ヲ郡守ニ提出シ其ノ正確ナルヤ否ヲ  
證明スルコトセハ偽造ノ弊害ヲ豫防ス  
ルコトヲ得ヘシ勿論郡守ハ之カ證明ヲ為スニ  
先々當該村落ニ就テ調査スルノ要フルヘシ  
聞クカ如クハ各村ニ郷長アリテ地券ノ正確  
ナリヤ否ハ判明シ居ル由諸君ニシテ幸ニ御  
同意ナラハ郡守ヲシテ之カ證明ヲ為サシムルコ  
トトシ若此ノ證明ヲ經ス偽造券ヲ擔保トシ  
テ受取ルモ其ハ當事者ノ損失ニ歸セシ

ルコトニ  
統監府ヨリモ亦此ノ如キ法規ヲ作り  
テ之ヲ韓國ニ在留ル日本人ニ公布スル此弊  
ヲ豫防シ得ヘキニ非スヤ

各大臣  
至極御名案ナリ而モ本案ハ最至急  
ヲ要スルコト信ス

関度相  
之ニ關スル法律ノ起草ハ梅博士ノ調  
査ニ付シテ如何

伊藤統監  
今俄ニ綿密ナル法律ヲ作ルモ郡守ニ  
於テ之ヲ施行スルコト難カルヘシ卑見ニ依ル此ノ  
法律ハ至極簡單ナルモノニテ可ナリト信ス梅博

一  
系 臣 片  
才調査ハ永遠ニ彌ル、法律ナルカ故ニ最綿  
密ニ調査ヲ要スレトモ、本案ハ只目下ノ急ニ  
應セシメトスルニ過キサルモノナリ

李法相 本件ハ法部ニ於テ為スヘキ事業ナリ、當  
テ某會社申請ニヨリ法部ニ於テ之カ豫防法  
ヲ講セト目論見タルコトアリ、然ルニ茲ニ考慮ス  
要スヘキハ郡ノ下ニ面ナルモアリ、面ノ下ニ郷ナル  
モアリ、面任又ハ郷長ニ於テ速ニ其ノ手續ヲ  
運ハハ可ナリト雖、往々私怨ノ為ニ容易ニ證明  
ヲ與ヘサルコトアルヘシ、之カ為却テ弊害ヲ醸ス



伊藤親監

然る左様致サルヘシ

此時國分書記官傍リ法相ノ説、如ク相留ノ規定ヲ設

ケ置カサル却テ種々ノ弊害ヲ生スル虞アルコトヲ説明シ例

ハ郡守面任郷長等ハ當事者ニ對シテ何等私怨ヲ持ム

コトナシトスモ當該村落カ共同シテ日本人ヲシテ土地ヲ所有セシム

ルコトヲ好ミサル為郷内又ハ親族ニ於テ豫メ之ヲ買収スルガ如キコ

トヲ為シ音<sup>日</sup>排<sup>日</sup>日<sup>日</sup>の弊害ニ陷ルコトナキヲ保セスト注意ス

伊藤親監

兎ニ角本問題ハ懸案トシテ御互ニ

尚熟考致スヘシ

李法相

兎ニ角モ法部ニ於テ草案ヲ起稿スヘシ

伊藤親監

然るに様致サルヘシ

此時國分書記官傍り法相ノ説、如ク相留ノ規定ヲ設  
ケ置カサル却テ種々ノ弊害ヲ生スル虞アルコトヲ説明シ例  
ニ郡守面任郷長等ハ當事者ニ對シテ何等私怨ヲ拂ム  
コトナシトスルモ當該村落カ共同シテ日本人ヲシテ土地ヲ所有セシム  
ルコトヲ好ミ且為郷内又ハ親族ニ於テ豫メ之ヲ買収スルガ如キコ  
トヲ為シ暗ニ排日ノ弊害ニ陷ルコトナキヲ保セスト注意ス

伊藤親監

兎ノ角本問題ハ懸案トシテ御互ニ

尚熟考致スヘシ

李法相

兎ノ角モ法部ニ於テ草案ヲ起稿スヘシ

伊藤統監

官内府に於て敬字ノ御印ヲ

濫用セラルノ弊害實ニ甚シキモ亦此ノ

問題、關シテハ曩ニ官内大臣ニモ注意シ置

キタル所ナルカ今ヤ弊害甚ノ極ニ達シ敬字

ノ御印ヲ捺シタルモノヲ賣買タルモノアリ

尚此、儘ニ打棄テ置カシカ終ニ其ノ真偽

ヲ判別タルコト能ハサルニ至ラン我カ日本ニ於テハ

各省ヨリ内閣ニ提出シ閣議ヲ經テ上奏裁

可ヲ請フモノ斯ノ如キ形式ヲ取リツツアリハ

統監自ラ其ノ形式ヲ書シテ各大臣ニ示ス此

方法に依りて篆書可なり經六後日に至り何等  
ノ誤謬ヲ惹起スル虞ナシ韓國に於て是亦  
此ノ形式ニ據ラレテハ如何

朴參政

啟字ノ御印ハ現時御使用在る

甲午乙未(明治)  
ラレタ此レハ二十七八年以前ノモノナリ

伊藤統監

(皇帝ヨリ義和宮ニ與ヘラレタル

特許證ヲ示シタリ)本書ハ本月十日付ナリ  
而シテ斯ク明ニ啟字御印ヲ押捺シ見  
テ見ル又過日未照會中ナラハアルガレニ  
件書類ニモ明ニ啟字ノ御印押捺シアリ

御印使用、實證斯、如何明ナリ如何立制  
度アリトモ實際ニ行ハレズハ無益ナラズヤ

朴參政 近時政府ヨリ提出スル書類ニハ啓字  
ノ御印ヲ用ナサセシメス

伊藤統監 或ハ然ラシ然レトモ外國人ニ對シ此  
ノ御印ヲ使用セラルル以上之ニ關シ外國人ヨリ  
照會アリタル場合ニ官内省ノ為シタルフツナレハ  
政府ハ之ヲ與カリ知ラスト称スルヲ得ルヤ

各大臣 否

伊藤統監 然ラズ須ラズ弊害ノ根本リ防遏ス

ルノ策ヲ講セサルハヤク知ス諸君ノ高見果  
シテ如何

朴參政 政府ハ只今統監ヨリ示セ先日本  
政府ノ書式ニ倣ヒ現ニ上奏裁可ヲ請ヒ居  
ルモ陛下ニ於テ今ノ啟字御印ヲ封セラレ  
以上其ノ弊害ヲ防遏スルト難カルヘシ

伊藤統監 領事封印ヲ奏請スヘシ否ラサレハ  
韓國ノ政治ハ紊亂底止スル所ヲ知ラサルニ至  
ヘシ

朴參政 元來啓字御印ハ宮内府部内ノ書

類に限り押捺せらるゝ御印なりしか近來陛下に之  
り種々、書類に押捺せらるゝに至り

伊藤統監 陛下ノ使用せらるゝに委しき之カ中止  
ヲ奏上せされ韓國ハ遂ニ亡滅スルニ至ラン諸君  
ハ韓國ヲ滅却スルモ可ナリトせらるルヤ

各大臣 無言

伊藤統監 何カ速ニ防遏ノ方法ヲ講せされハカ  
朴孝政 陛下カ今後之ヲ使用せしストノ初  
令ヲ煥發せられハ可ナリ

伊藤統監 然リ爾等ハカ久事差此ニ出テ

ラレサルに於テハ今後絶エス日本政府ヨリモ韓  
國ニ對シテ種々ナル難問題ヲ提出スルコト  
ヲ得サルニ至ルヘシ而シテ一度此等難問題  
起ラハ貴政府ニ於テ爲ラズ引受ケルハ力  
ヲ乏故ニ是非共連ニ此ノ榮ヲ改ムル策ヲ  
講グル要ス而シテ右封印ノ勅令煥發セラ  
ルト同時ニ政府ヨリモ之ヲ公布シ統監府モ  
亦之ヲ公布スヘシ斯ノ如キ手續ヲ取リ置テ  
ハ將來縦ニ敎字御印ヲ押捺シタル特許  
證ヲ提供スルモノアリトモ何等顧慮スル所ナ



キナリ

李法相

今日ハ雅既ニ偽物アリ

伊藤親監

啟字御印ハ頗ル簡單ナルモノナレハ

容易ニ之ヲ偽造シ得ヘシ然レモ偽物ヲ以テ韓

國ノ政治ヲ紊亂セシムニ至ラレ之ヲ容赦スヘキニ

アラズ諸君カ常ニ論スル所ヲ聞クニ如何ナル惡

事モ如何ナル弊害モ陛下ノ為サレ事トシテハ

最早如何トモ致方ナキモト考ヘ居ラレモノノ如

シ韓國ハ古ヨリ果シテ左様ナル國柄ナリシニヤ

朴參政

稀ニ諫奏スルコトナキニ非スト雅十中

ハ九ハ皇帝ノ意ノ如ク之ヲ遵守奉行セリ是レ無  
上君權ノ然ラレタル所ニシテ如何トモスルニ由ナキナリ  
度相 今日ハ初任官以上ハ意ヲ陛下親ラ之ヲ  
任命セラルル昔時ハ總テ三大臣ノ推薦ニ依ラレタル  
モノナリ

伊藤統監 君主ト雖決シテ完全ナルモノト非サハ輔  
弼ノ臣トシテ之ハ場合ニ依リテハ充分ニ諫奏シ之  
リシテ過ナカラシムルツトモカメサレハカラス 諸君ハ漢籍ノ  
素養アリト善シ仲甫之ヲ補フノ故事ヲ知ラレル  
ナリ

各大臣 然り

伊藤親王 自分、陛下、御前、於て自分、確信  
ある所、奏上、決、心、す、諸君、若、自分、説、き、し、  
國家、爲、有、害、ナリト、認、め、ら、れ、ば、諸君、ハ、陛下、に  
對、し、之、に、同意、せ、ら、れ、ば、樣、奏、請、せ、ら、れ、ば、可、ナリ  
又、其、ハ、可、ナ、ル、所、以、テ、極、端、せ、ら、れ、ば、可、ナリ、然、レ、ト  
モ、國家、に、取、リ、テ、有、益、ナリト、信、ぜ、ら、れ、ば、事、ヲ、モ、徒  
に、陛下、ノ、意、ヲ、迎、へ、シ、カ、爲、伊、藤、ノ、説、ハ、不、可、ナリト  
奏、請、せ、ら、れ、ば、困、却、ノ、至、ナリ

李法相 吾々モ、閣下ト、心、ヲ、一、ニ、シ、國家、ノ、爲、ニ

盡力致スヘシ

伊藤統監 譬へん敕字御印ノ如キモ法律上使  
用セラレザルコトヲ展ルニモ拘ラズ實際ニ於テハ之  
ヲ使用シ居ルニ實證アリ此ノ如キ事ハ縱ニ陛  
下ナリトテ決シテ之ヲ寛恕スル事ニ非ス

各大臣 然リ

伊藤統監 一方ニ鑄造法ノ如キ綿密ニ法  
律ヲ發布シツツアルニ及シ一方ニ宮内府ニ  
於テ單ニ敕字御印ヲ以テ特許ヲ與フル  
カ如キハ決シテ之ヲ等閑ニ付スル能ハサルナリ

朴參政

元來敎字御印ハ金リ宮内府

内部ノモノニテ特許ノ如キ外部ニ出スモノニ對シ  
テ押捺スヘキ御印ニ非ス

伊藤統監

然ラズ之ヲ復舊シタキモナリ此ノ

件ニ關シテハ自分ヨリモ直接陛下ニ對シ陛下  
カ非法ノ行為ニ出テラルル為外國人及日  
本人ノ間ニ種々ナル紛議ヲ醸シ延テ韓  
國ニ損害ヲ及ホス如キアリ是レ君主タルモノ  
大ニ慎マサルニヤラセラルトナル旨ヲ諫奏スル積リ  
ナリ諸君モ自分ト志ヲ一ニシ此ノ弊害ヲ矯正ス

ルフトニ盡カセラレタシ

朴参政

閣下ヲシテ斯ノ如キ上奏ヲ爲サシムルニ至

リタル是レ皆自分等ノ罪ナルハ自分等モ亦其ニ  
諫奏致スヘシ

伊藤親監

啟字御印問題ニ此ニ止テ次ノ問題

ニ移ルヘシ即チ近時郡ノ合併ニ付キ民間ニ

議論凡由聞知ナリ諸君モ御兼知ノ如ク今

日ハ未タ果シテ合併ヲ實行スヘキヤ否サヘモ決

定セサルニ明日ニモ之カ實行ヲ見ルカ如キ説ヲ

唱ヘ人四ヲ動搖セシメツツ凡者アリト云フ自分ハ

未夕内部大臣ヨリ提出セラルヘキ調査ノ顛末  
夕モ見サレトモ聊他ニ思フ所モアル郡ノ合  
併ハ之ヲ實行セサル可ナト認ム抑々本内  
題ハ儒生ノ激昂ヲ買ヒ人心ヲ不穩ナラシ  
メルモ尚且之ヲ断行セサルハカウサルノ價値凡  
モハニ非サレハ内部大臣ニ於テ本件ニ関シ人  
心ヲ動搖セシメサル様適當ノ措置ヲ取ラレ  
ンコトヲ希望ス

孝内相　了義

伊藤統監　亡命者ノ件ニ関シテモ種々ノ風説アリ

リト雖是レ亦何等ノ根據ナキ説ナリ元來  
亡命者歸國ノ事ニ陛下ノ許可ナクハ之  
ヲ實行スルコトヲ得セハ勿論ナクモ又自分ハ  
近時本件ニ関シ何等ノ要求ヲ為シタルコトナシ  
朴參政 貴説ノ如キ事實無根ナレトモ新  
聞紙上時々亡命者問題ヲ散見セリ

伊藤統監 聞クカ如クシハ宮中ニ於テハ過日御憂  
慮ノ餘評議リ凝ラサレタル由誠ニ笑止ノ  
至ナリ尚又誤解ヲ避ケシカ為茲ニ一言シ置  
クヘキコトアリ其ハ平壤軍收用地ニ関スルコ



トナリ過日平安南道觀察使自分ヲ來  
訪シタル陰六萬坪ハ有償ニテ收用シ其ノ  
他ハ所有主ニ返還スルカ如ク内部大臣ヨリ傳  
聞セリ云々ト諸レニ依リ自分ハ其ノ誤解ナ  
旨ヲ説明シ殘餘ノ部分ニ對スル處分ハ未  
タ決定セズ併ナカク可成韓人ノ迷惑ニナラサ  
ル様相當ノ措置ヲ取ル心算ナリ但シ此ノ  
事カニ自分人ニシテ之ヲ專決スヘキモノニ非セラハ  
今日ヨリ之ヲ確言スフヲ得ズト附言シ置ケリ  
斯ノ如ク誤解ヲ抱カシタル當方ニ於テモ迷惑

ノ次第ナルハ再應茲ニ之ヲ辯明シ置クナリ  
李内相 开ハ金ヲ觀審使ノ誤解ナリ過日彼カ  
自分ヲ來訪シタル砌自分ヨリ先ツ以テ六萬  
坪ヲ收用セシ其ノ賠償ハ萬ヲ預リ置ケル  
金額ノ中ヨリ之ヲ支拂ヒ殘餘ノ收用地處  
分ハ後日ニ讓ルフトトセリト語リ置ケリ  
伊藤統監 或ハ然ラシ兎ニ角自分ノ意思ヲ誤  
解セラレシ様希望ス

是ニ於テ一同食堂ニ入ル時ニ午後一時五十分  
食事中度支部大臣ヨリ郵便局ニ公金取扱ヲ

委嘱シ急件並ニ第一銀行券發行ニ関シ監  
督細則ヲ制定シタル件ヲ統監ニ報告シ又中原  
統監府技師ニ河川水道工事監督ヲ囑託スヘ  
キ旨鶴原総務長官ヨリ照會ニ接シタルモ右ノ  
監督ハ既ニ之ヲ中島博士ニ委託シタルカ故ニ可  
成其儘ニナシ置キタキ旨ヲ提言シタリ之ニ對シ  
統監ハ東京ニ奉職セル中島博士カ果シテ監  
督ノ責任ヲ取ルヤ否ヲ統監府ヨリ同博士ニ問  
合セタル上其ノ返答如何ニヨリ中島博士ニ囑託  
スルカ或ハ中原技師ニ囑託スルカヲ決定セラル

然ルヘント答フ其ノ他食事中ノ談話ハ特ニ記  
載スヘキモノナシ食後ハ食堂ニ於テ協議會ヲ  
繼續ス

李法相

農商工部大臣不在ナルヲ以テ同大臣ノ

委嘱ヲヨリ統監閣下ノ御意見ヲ承リタキ一内

題アリ京釜鐵道線中ニ鳥致院ト名クル停

車場アリ<sup>同驛ヨリ</sup>忠清南道江界ニ至ル鐵道敷設

權ヲ曩ニ韓國人ニ許可シタル其ノ際林公使

ヨリ抗議ノ申込アリ當時自分ハ外部大臣在職

中ナリシヲ以テ交渉ノ衝ニ膺リタルカ抗議ノ要

旨ハ日本政府ハ軍事上ノ關係ヨリ此ノ許可ニ  
同意スルコトヲ得ス何トモハ該資本主カ皆韓  
人ノミナレハ不可ナケレトモ勢外國人モ之ニ出資  
スルノ虞アリ而シテ日本ハ外國人カ韓國内ニ於  
テ鐵道ヲ敷設スルハ到底之ヲ默許シ能  
ハサレハナリ故ニ此ノ許可ハ寧ろ之ヲ取消スル  
可ナリトカト云フニ在リ然ルニ當事者ハ其ノ後  
線路ノ測量ヲ爲シ敷地ヲ買収シ實際  
敷設ニ着手セントシタルニ近時又統監府ヨリ  
該鐵道敷設ハ之ヲ許可セザルニ當テ

トノ申込リ受ケタリ然レトモ該地方ノ人民ニ大ニ  
此ノ鉄道敷設ヲ歡迎シ敷地ノ如キモ其ノ幾  
分ハ所有者ヨリ寄付シタルモノスラアルノ實況  
ナハ今日ニ至リ之ヲ中止スルツトハ甚困難ナル  
情態ニアリ畢竟此ノ如キ事業ノ進捗シタル  
ハ林公使時代ニ於テモ書面上ニテハ日本公使  
館ハ飽迫許可ニ同意セラレザリシモ事實上  
默認ノ姿ナリシヲ以テ當事者ハ漸次其ノ歩  
ヲ進メタルナリ

伊藤統監 當事者ハ日本人ナリヤ又ハ韓國人ナリヤ

李法相

徐干準李<sup>元</sup>用等ナリ

伊藤統監

延長ハ幾哩ニシテ又京釜幹線ニ

接續

スルモノナリヤ

李法相

幹線ト接續スルモノヲ延長僅ニ八哩

ナリ

伊藤統監

今日迄日本側ニテ異議ヲ提出シテ

理由孰レニ在リヤ

此ノ間ニ對シ國分書記官ハ公使館時代ニ於テ

異議ヲ申込ミタルハ今ノ外國資本家ノ出

資セシツトテ<sup>慮リ</sup>タルカ為ナリト辯明ス

伊藤統監

鐵道、築港及郵便事務、如キ

ハ國家ト最密接ナル關係ヲ有スル事業

ニシテ之ヲ鑛山業ノ如キモト同一視スベキコ

トス故ニ若外國人ニシテ韓國ニ於テ直接國

權ニ關係スル事業ヲ經營セルト企ツルモノ

アル日本ハ飽迫之ヲ否認セサルヲ得ス譬ハ

露國カ威鏡道ニ於テ鐵道ヲ敷設セルト

シ英佛又ハ其他ノ諸外國カ他ノ韓國領

土内ニ於テ鐵道ヲ敷設セルト欲スルカ如キコ

トアルハ日本ハ到底之ニ同意スルコトヲ得ス何



トナレハ此等諸外國人ハ治外法權ヲ有ル  
カ故ニ彼等ノ經營スル事業ノ上ニ韓國  
ノ國權行ハス隨テ爰ニ國權ノ衝突ヲ  
起ス、處アルナリ要スルニハ哩内外ノ鉄  
道ノ如キハ外國人ノ關係タリナラハ許可ス  
ルモ妨ナカルヘキカト思ハレ

東法相ノ云来此、鐵道ハ全然韓國ノ資本  
ヲ以テ敷設スルモノナレハ統監閣下ニ於テモ  
許可ニ同意セラレシフナリ、切希望ス

此ノ時國分書記官ハ鐵道ノ資本約五十萬圓

内外ヲ要スルモノトシテ韓人ノミヨリ資本ヲ募集  
スルコトヲ得ルヤ否疑ハシキモノアリ若之ヲ許  
可スルトセハ飽迄モ其ノ資本ハ全然外國ニ  
關係ナキコトヲ明ニシ置カサルヘカラサル旨ヲ  
陳述ス

伊藤統監 唐ニ現在ノミナズ将来ニ於テモ此  
點ハ注意スルニ必要アリ否ラセハ當局者ノ  
知ラサル間ニ實際外國人ノ所有ニ歸シ居  
ル様ノコトナキヲ保セザレハナリ

李法相 外國人ニハ全然關係ナシ若之アラハ

統監ノ説カレタル如ク國權ノ衝突ヲ惹起  
スルノ恐アルカ故ニ之ヲ許可スヘキニ非ス

伊藤統監 知リ特許條件ヲ定メ若右條  
件ヲ履行シ居ラサルコトヲ發見セハ何時ニテ  
モ特許ヲ無効トラシムルコトヲ為セハ可ナリ  
各大臣 眞ニ然リ

伊藤統監 英米佛獨伊自等ノ條約國民  
及露西亞ノ如キ無條約國ナレモ尙最惠  
國條款ノ待遇ヲ享スルキ國ノ人民ヲ韓國  
ニ於テ均等ニ取扱フヘキハ商工業ニ關シテノ

ニナリ政治上ニ於テハ決シテ機會均等主義ヲ取ルヘキモノニ非ス現ニ戦争以前ニ於テハ各國皆京城ニ其外交代表者ヲ駐劄セシメタルモ今日ハ只領事ヲ駐在セシメルニ領事ハ公使ト異リ自國民ノ商工業上ノ利益ヲ圖ルニ任務ト韓國ノ如キ治外法權ヲ有ル國ニ於テハ裁判權ヲ有スルノミニシテ決シテ國家ノ代表者ニ非ス是レ明ニ各國共ニ政治上ニ於テハ日本ノ韓國ニ於テハ優越ナル權利ヲ認メ決シテ均一主義ヲ取

るガリシ證明タルモナリ故ニ鐵道ノ如キ直接  
國權ニ關係アルモノハ日韓兩國人ヲ除キ  
外外國人ヲシテ之ヲ敷設セシムルコトヲ許可  
スヘキニ非ス隨テ島致院江景間ニ敷設ス  
ヘキ鐵道ノ如キモ豫メ條件ヲ明示シテ之  
ヲ公布シ外國人カ之ヲ買収シ又ハ擔保ト  
シテ資金ヲ為スモ全然無効タルヘキコトヲ知  
悉セシメサルヘカラス尚序ニ日本ノ韓國ニ對ス  
ル政治上ノ優越權ニ關シ一例ヲ示サンニ  
戰爭前ニ於テハ韓國ニ騷亂起リ諸外國

公館に危険ヲ及ホカノ虞アリト認メタルトキハ  
諸外國ハ孰レモ自國ノ兵力ヲ以テ之ヲ防  
衛スルコトヲ得タリト雖今日ニ於テ保護ノ責  
任全然日本政府ノ肩ニ在ルカ故ニ諸外國  
ハ自ラ兵力ヲ以テ自衛ノ策ヲ講スルコトナクハ  
シ其代リ若何等損害ヲ蒙リタル場合ハ日本  
ニ向テ賠償ヲ要求スルハ必然ナリ

是ヨリ統監ハ日本ノ韓國保護ニ關スル責任ヲ  
實例ヲ引證シテ詳細ニ説明シ要ニ進テ在  
韓露國領事認可狀問題ニ移リ本年四月

露國政府ヨリ各國、對シ韓國、駐在スヘキ  
外國領事ハ韓國皇帝ヨリ認可狀ヲ受ク中  
モノナルコトヲ說述セル公文ヲ送レンコト及英獨米  
伊諸國ノ之ニ關スル意見ヲ細述シ日本ノ主張  
有理ニシテ且國際公法上ノ慣例ニ遵據セルヲ以テ  
露國モ遂ニ日本ノ要求ニ同意スルニ至レル顛末ヲ  
說明シタル後上海浦鹽等ニ在ル亡命韓人及  
韓國内ニ在ル一種ノ外人等ハ種々ノ風説ヲ虛  
構スレトモ各國政府ハ決シテ之ヲ為ニ動搖スルノ  
虞ナシト断定シ更ニ進テ

伊藤統監

斯ノ日本、韓國、於テ政治上優

越ル權利ヲ有スルハ故ニ鐵道敷設ノ如キ

トニ付テハ諸外國共手續上先ツ之ヲ日本ニ

請求セサルヘカラス然レトモ鐵道ハ軍事ト密接

ノ關係ヲ有スルノミナラス前陳ノ如ク諸外國

ハ治外法權ヲ享有スル結果トシテ國權ノ衝

突ヲ惹起スル虞アルヲ以テ日本ハ十中八九

之ヲ許ササルヘン

各大臣 然リ

伊藤統監

談偶ニ治外法權ニ及ヒタルヲ以テ尚一



言ふへし韓國：於テモ是ヨリ種々ノ改善  
ヲ施シ文明ノ進歩スルニ隨テ早晚治外法  
權ヲ撤去スル手段ヲ取ラサルハウラス日本  
ニ於テモ昔時ハ韓國ノ如ク外國人ノ治外法  
權ヲ承認シタルモ今日ニ於テハ之ヲ撤回シ如  
何カ外國人モ日本ノ法律ニ服從セシムルコト  
トナレリ韓國ニ於テモ之ヲ撤回セシムル欲セハ外  
國人ニ向テ種々ノ權利ヲ許容シ其ノ結果  
法律ノ衝突ヲ錯雜ナラシメ諸外國ヲシテ  
其ノ煩ミ堪ヘスシテ遂ニ治外法權ノ撤回ニ

同意スルニ至ラシメサルヘカラス

各大臣 眞ニ然リ

此、時度支部大臣ハ公務上先約アリ以テ他、  
諸大臣ニ先タチ退出ス時ニ午後三時四十分ナリ  
是ヨリ統監以下食卓ヲ離レ雜談ニ移レリ其ノ中  
ニ就キ特記スヘキモノ左ノ如シ

一、李内相ヨリ統監ハ目下合郡ノ意思ナキ旨ヲ地方  
官ニ訓令シ且新聞紙上ニ發表スルモ可ナリヤト  
ノ問ニ對シ統監ハ勿論差支ナシト言明セリ  
二、李内相ヨリ縦ヒ郡合併ハ此ノ際之ヲ見合ハス

トスルモ地方官ノ俸給ハ是非トモ之ヲ増加セ  
サルヘカラス又地方廳費及旅費並外國  
人ノ居留スル者多キ地方ニ在ル地方官ニ對シ  
テハ俸給ノ外相當ノ手當ヲ與スルノ必要アリ  
ト提議シタルニ對シ統監ハ地方制度調査  
完結後ニ非サル之ヲ確言スルヲ得サレトモ約  
四十萬圓内外ハ地方ノ經費ヲ増加シ得ヘキ  
見込ナリト明言セリ

三、李内相ヨリ京畿道ニ現ニ漢城ニ判尹アルニ  
係ラス別ニ觀察使ヲ置ケルモ是レ二重ニ屬ス

故、他ノ合併ハ之ヲ見合ハストスルモ京畿道ノ觀  
察使<sup>警務</sup>ハ之ヲ廉官トシ漢城府ニ合併スル方然  
ラト思考ストノ意見ヲ提出セシニ統監之ニ  
同意ス尚各港監理ヲシテ郡守ヲ兼掌セシ  
メ且之ヲ府尹ノ名称ニ改ムルコトモ大體ニ於テ  
不可ナシトノコトニ決定セリ

四、李内相ヨリ日本ヨリ僱聘セル警察官漸次  
到着各地ニ赴任シツツアリトノ報告ニ對シ統  
監ハ地方ニハ暴動起ル毎ニ軍隊ヲ動カスハ  
種々ノ不便アルカ故ニ日本ノ陸軍省ヨリ無償

ニテ連發銃一千挺ヲ讓リ受ケ之ヲ各警  
察署ニ備付ル豫定ナリト語レリ

五、統監ハ次回ノ會議ニ於テ一般山林ノ事ニ  
關シテ協議ヲ盡シタキ旨ヲ提議シタルニ  
各大臣ハ直ニ之ヲ快諾セリ

午後四時散會

名 称	伊 藤 博 文 文 書
標 題	伊 藤 特 派 大 使 韓 國 往 復 日 誌

分 類 番 号	
	389

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	215955
------------------	--------

215955
1
昭和25年10月8日

伊藤特派大使韓國往復日誌



# 御沙汰

昨七日午後二時三十分樞密院議長侯爵  
伊藤博文ヲ御前ニ召シ今般韓國皇室御  
慰問ノ御思召ヲ以テ特派大使トシテ差遣  
サルル旨御沙汰アラセラルタリ

以上明治三十七年三月八日官報號外載  
録



宮内省辭令

樞密院書記官長 都筑馨六

陸軍少將

宇佐川一正

海軍少將

坂本俊篤

各通

侍從

子爵東園基愛

公使館二等書記官 國分象太郎

外務省參事官

坂田重次郎

帝室制度調查局秘書 古谷久綱

樞密院議長侯爵伊藤博文ヲ特派大使ト

ニテ韓國ハ被差遣ニ付隨行被仰付(三月八日付)

勲六等

高橋種紀

樞密院議長侯爵伊藤博文ヲ特派大使ト

シテ韓國ハ被差遣ニ付隨行被仰付（三月十日付）

樞密院屬

高島張輔

各通

式部屬

黒澤滋太郎

帝室制度調査書記竹村貞彦

樞密院議長侯爵伊藤博文ヲ特派大使ト

シテ韓國ハ被差遣ニ付隨行ヲ命ス（三月八日付）

警視廳警部

日高憲明

樞密院議長侯爵伊藤博文ヲ特派大使ト

ニテ韓國被差遣ニ付隨行ヲ命ス（三月十日付）

三月十三日 雪

午後零時三十分大使一行（坂本海軍少將及國  
分公使館書記官ヲ除ク）新橋停車場ヲ發入國務  
大臣樞密顧問官各省高等官宮内大臣同次  
官宮内高等官及内外紳士數百名、見送ア  
リ此、日朝來六花紛々寒氣層ヲ刺スカ如シ平  
沼驛ニハ神奈川縣知事以下地方高等官十  
數名ノ見送アリ大磯町民ノ見送頗ル盛ナリ  
列車進シテ箱根山ニ入ルヤ白雪皚々真ニ銀  
世界ノ觀アリト雖モ沼津以西復タ雪ヲ見ス

午後九時靜岡驛通過、際ハ地方高等官數  
名、見送アリ此、夜一行寢臺車中ニ眠ル

三月十四日 晴

名古屋、岐阜、馬場（大津）京都、大坂等府縣  
廳所在地通過ノ際ハ知事地方高等官其  
他ノ見送アリ午後二時三十分三宮驛着大  
使一行此處ニ下車ニテ暫ク諏訪山西常盤ニ  
休憩午後五時四十五分假裝巡洋艦香港丸  
ニ搭乗ス大使ノ乗艦アルヤ本艦ハ直ニ十九  
發ノ禮砲ヲ行フ六時出港ノ際神戸港警備  
ノ任ニ膺レル天龍艦ヨリ大使ニ對シ十九發  
ノ禮砲ヲ行フ因テ本艦ヨリ直ニ七發ノ答砲

ヲ行フ香港尤、由長海峽ヨリ土佐沖ニ出テ  
航行船稍々動揺ス

因ニ記ス隨行ノ一人タル坂本海軍少將ハ現  
ニ佐世偶鎮守府參謀長ノ職ニ在ルヲ以テ同  
港ヨリ香港尤ニ搭乗神戸ニテ大使一行ニ加  
ハレリ

參照

香港九乘組員如左

艦長

海軍大佐

井上敏夫

先任分隊長

海軍少佐

廣瀨順太郎

航海長

海軍少佐

布目滿造

分隊長

海軍大尉

岩室哲次郎

分隊長心得

海軍中尉

加村康政

乘組

海軍中尉

齋藤清

乘組

海軍少尉

益子六彌

機關長

海軍機關中監 清水門之助



分隊長

海軍大機關士 城戸駒次郎

軍醫長

海軍大軍醫 秋田松次郎

主計長

海軍大主計 石本久萬男

下士以下

百七十名

三月十五日

晴

午前八時二十二分沖島南端ヲ右舷正横二  
哩半ニ見テ北西ニ變針シテ豊後水道ニ入ル  
海波頗ル平穩ナリ十一時四十分高島ヲ左舷正  
横ニ見ル午後二時四十分姫島東端ヲ左舷正  
横ニ見ル午後五時水雷艇第十七十八十九  
下ノ關海峽外ニ本艦ヲ迎ヘ海峽通過間前後  
ニ隨行護衛ス五時四十五分馬關海峽ニ入ル下  
ノ關門司兩市ノ人々小蒸汽船ニ乗シテ一行  
ヲ見送ル五時五十分門司碇泊中ノ軍艦

大和ヲ左舷ニ見テ通過ス六時四十分水雷艇  
ニ別ル六連島ノ望樓ヨリ點火信號アリ「見渡  
ス限り危険ナシ安全ヲ祈ルト乃チ本艦ヨリ  
好意ヲ謝スト返信セリ是ヨリ船ハ玄海灘ニ  
出ツ海波幸ニシテ穏ナリ七時三十分本艦ノ右  
舷艦首ニ二點ノ探海燈光ヲ認メタリ井上艦長  
ハ右ノ燈光ハ孟シ對馬海峡警備ノ水雷艇ナリ  
ト推測シタレトモ念ノ為メ船窓ヲ鎖シ大樺燈  
艦尾燈ヲ消シ艦内兵員ヲ其ノ部署ニ就カシ  
メ八時十分舷燈樺燈ヲモ消シテ進行セリ

十時五十分 探海燈光ヲ見失ヒタルヲ以テ 艦  
長ハ直ニ航海燈ヲ出サシメタリ

三月十六日 暑

午前一時對州南端神崎望樓前ニ達ス左ノ  
信號アリ

角田戰時指揮官ヨリ伊藤大使ノ安全ナル  
御航海ヲ祈ル

右信號ニ對シ次ノ如ク返信ス

感謝ス

午前九時巨文島西島ヲ北方六哩ニ見ル午  
後微雨然レトモ海波平穩航海中特記ス（キ  
コトナシ

三月十七日 曇

午前八時三十五分水雷艇隊（第九艇隊、内四隻）  
仁川沖ニ来リテ本艦ヲ迎ヘ追尾護衛シ十一時  
仁川着沈没露艦ワリリヤクコレイツ及沈没露  
國商船スニガリ一等指顧ノ間ニ在リ碇泊  
帝國先任軍艦大島ヨリ十九發、禮砲ヲ發ス  
因テ本艦ヨリ大島艦長ニ對シテ七發、答砲ヲ  
行フ又本艦ヨリ二十一發、皇禮砲ヲ發シ韓  
國月尾島砲臺之ニ應シテ二十一發、答禮ヲ  
行フ林特命全權公使、萩原公使館一等書記官

伊地知陸軍少將、野津陸軍步兵中佐、和田海  
軍軍醫少監、加藤領事、新井海軍少將、廣瀨大  
島艦長、藤本赤城艦長、矢島艇隊司令、其他  
陸海軍人等、船迄來迎、又韓國政府ヨリハ  
左ノ官員、香港ニ遣ハシ大使ヲ迎ヘシム

議政府贊政

權重顯

宮内府協辦

朴鏞和

宮内府禮式院副長 閔泳璘

宮内府禮式院外務課長 高義敬

仁川港監理

河相驥

宮内府禮式院參理官嚴達煥

右ノ外仁川港碇泊ノ伊國<sup>イギリス</sup>艦長ハ  
親シク來艦シテ大使ヲ訪問シ佛艦<sup>フーカン</sup>  
ハ訪問使ヲ送レリ伊國艦長ノ特ニ大使ヲ  
訪問シタルハ大使カ同國最高勲章「アンサンショ  
ー」ヲ有スルカ故ナリ大使ハ香港丸食堂ニ於  
テ來迎韓國大官及伊地知陸軍少將等ト午  
餐ヲ共ニシタリ食後大使退艦ノ際ハ本艦  
ヨリ十九發ノ禮砲ヲ行フ大使一行ハ埠頭ニテ  
陸軍儀仗兵并ニ無數ノ在留官民ニ迎ヘラレ



徒歩領事館ニ入リ少憩時ニ特派大使接待  
委員長學部大臣関泳煥、警衛總管權重顯、  
京畿觀察使李根濬、鐵道院監督玄暎、運表勲  
院制章局長鄭東植、宮内府禮式院參理官玄百  
運、宮内府官制調査委員金鎔濟等來館シテ  
大使ヲ迎フ又宮内府大臣関丙奭ハ韓國皇帝陛  
下ノ特命ニ依リ同シク領事館ニ大使ヲ來迎セリ  
午後三時五十分大使一行仁川停車場ヲ發ス傳  
車場前ニハ我カ海陸ノ儀仗兵アリ發車ノ際居留  
民一同萬歳ヲ三唱ス列車ハ韓國ノ宮廷列車

ニシテ今回初メテ使用シタル由ナリ前記韓國  
大官等同車セリ午後五時京城西大門外停車  
場着韓國大官及我々公使館領事館郵便局  
ノ官員并ニ守備隊付士官等無數ノ來迎者  
アリ韓國官吏ノ重ナル者左ノ如シ

參政外部大臣署理趙秉世

法部大臣

李址鎔

農商工部大臣

金嘉鎮

禮式院長

閔種默

漢城判尹

金奎熙

軍部大臣

尹雄烈

議政

李根命(代人)

内部大臣

李道宰(代人)

大使ハ宮内府ヨリ差遣ハサレタル轎ニ乘シ韓  
國儀仗兵ニ小隊巡檢二十人及我々憲兵若  
干名ニ護衛セラシテ旅館華屋(ソシタク嬢郎  
トシテ世間ニ知ラル)ニ向フ隨行高等官亦同シ  
ク轎ニ乘シテ之ニ隨フ沿道人山ヲ為ス西側  
ハ殆ント全路我々儀仗兵ヲ以テ掩ハレタリ  
旅館ノ食事萬般ハ悉ク宮内府ノ響應ニシ

ニ今夕ハ左ノ諸官来リテ接待ノ爲メ大使  
ト食卓ヲ共ニセリ

接待委員長學部大臣関詠煥

宮内府大臣

関丙爽

外部協辦

尹致昊

鐵道院監督

玄暎運

禮式官參理官

高義誠

參照

伊藤特派大使接待、任三當、韓廷、官員如左

迎接委員長

學部大臣

関泳煥

迎接委員

議政府贊政

權重顯

外部協辦

尹致昊

陸軍法院長

関商鎬

警衛總管

權重顯

鐵道院監督 玄映運

表勲院制章局長 鄭東植

電話課主事 金鎔濟

宮內府大臣 閔丙奭

同 協辦 朴鏞和

宮內府禮式院長 閔種默

同 副長 閔泳璘

同 外務課長 高義敬

同

參理官

高義誠

同

玄百運

同

嚴達煥

同

繙譯官

朴基駿

同

會計課長

白時鏞

同

主事

玄暘運

同

金光默

同

秦學信

同

閔肯鎬

同

韓聲東

同

雇二名

同

介子(亦使)三名

伊藤特派大使護衛ノ任ニ當ルル韓國警官如左

警衛院警務官韓弘洙

總巡 李競淳

權任一名

巡檢六名



伊藤特派大使護衛ノ任ニ當レル韓國  
軍人如左

小隊長陸軍參尉吳殷泳

參校王順吉

兵卒十名

### 附記

韓廷ヨリハ更ニ多數ノ警官及軍  
人ヲ護衛ノ爲メ大使ニ附スル豫定  
ナリシモ大使ヨリ辭退ノ結果如斯少  
數ニ減シタルナリ

三月十八日 曇

本日午前宮内府ニ照會シテ我カ聖上ヨリ  
韓國皇室へ御寄贈品ヲ送附ス品目如左

御紋附銅花瓶

壹對

刺繡卓被

壹枚

右韓國皇皇帝陛下へ

御紋附銀花瓶

壹對

右韓國皇太子殿下へ

御紋附銀製桐彫大鉢

壹個

刺繡卓被

壹枚

右韓國皇太子妃殿下へ

御紋附銀花瓶

壹對

右英親王殿下へ

午餐ハ大使旅館ニ於テ左ノ諸官接待、為  
大使ト食卓ヲ共ニセリ

學部大臣

岡泳煥

宮内府大臣

岡丙重

禮式院副長

岡泳璘

外部協韓

尹致昊

午後二時過大使ハ旅館ヲ出テ儀仗兵巡檢

、警衛ニテ景運宮ニ参内午後二時三十分  
咸寧殿ニ於テ韓國皇帝陛下並ニ皇太子  
殿下ニ正式謁見ニテ御親書ヲ捧呈ス隨行  
高等官皆隨ッテ謁見ス（別冊謁見始末参  
照）歸路大使ハ隨行員ト共ニ外部ヲ訪問  
シ大臣及協辦ト會談ス晚餐ニハ隨行高  
等官一同公使館ニ招待セラレ日本食ノ饗  
應ニ預リ大使ハ旅館ニ於テ萩原國分西書  
記官及接待ノ為メ來館ニタル左ノ諸氏ト  
晚餐ヲ共ニセラル

宮内府大臣 関丙廣

禮式院副長 関泳璘

禮式院外務課長 高義敬

禮式院参理官 高義誠

晚餐後大使ハ 関泳煥尹致昊兩氏ヲ引見

談話セリ

本日午後侯爵伊藤博文ノ名ヲ以テ左ノ二  
品ヲ嚴妃ニ贈ル

銀製菊彫大鉢

壹個

牡丹櫻絹緞

壹卷

右ノ外英親王殿下ヨリ何カ珍奇ナル玩弄  
品ヲトノ御内意ニ基キ大使ハ蓄音器  
一具ヲ獻上セタリ

三月十九日 雪

午前十一時ヨリ大使ハ旅館ニ於テ隨行員ト  
共ニ京城在留ノ外交官及韓國大官ノ来  
訪ニ接ス其人々如左

北米合衆國特命全權公使 ホーレス、エヌ、アルレン

同 公使館書記官兼總領事 ゴルドン、パツドック

同 公使館附陸軍武官 大尉 ブルエスター

同 同 中尉 ウィンガース、フリン

清國特命全權公使 許 台 身

同 公使館書記官 徐 士 培

同 公使館英語通譯官

吳 其 藻

同 總領事

陳 本 仁

佛國代理公使

子爵ド、フォント子ー

同 副領事

フェルナン、バルトウ

同 領事官補

ユーージェー、グラジェ

同 公使館守備隊長

中尉ドサン、カンタン

英國辦理公使兼總領事

ジエー、エヌ、ジヨルダン

同 外交官補(アッシスタント)

トーマス、バーリントン

同 同

ハロルド、ポルター

同 公使館守備隊長

大尉 ジョーンス



白耳義國總領事

レオン、ヴァンカール

同 副領事

ロベール、ド、ヴァス

獨國韓理公使

フオン、サルデルン

同 公使館附陸軍武官

少佐フオン、クレール

伊國韓理公使兼總領事

アツテリヲ、モナツ

同 公使館守備隊長

中尉ル井ギー

以上京城在留外交官團

法部大臣

李 珥 鎔

内部大臣

李 道 宰

農商工部大臣

金嘉鎮

議政府贊政軍部大臣

尹雄烈

參政外部大臣署理

趙秉式

議政府贊政

成政運

議政府贊政

韓圭高

通信總辦

李夏榮

陸軍法院長

閔商鎬

軍部協辦

李漢英

內部協辦

李鳳來

法部協辦

金錫圭

學部協辦

韓肯鎬

農商協辦

閔景植

度支協辦

高永喜

漢城府判尹

金奎熙

宮內府警衛總管

權重奭

以上韓國大官

本日午前十一時三十分韓國皇帝陛下、御  
使トシテ完順君李載完大使旅館ニ来リ皇  
帝陛下ヨリ御答禮、爲メ當館ニ臨幸アルヘキ  
ノ處明憲太后、喪中ニ付不得止差控ヘラ

ルル旨傳達セリ午後大使ハ都筑書記官長  
宇佐川坂本兩少將ヲ率ヒテ林公使ト共ニ外  
國公使館ヲ訪問答禮セラレ過日仁川及京  
城停車場ニ大使ヲ迎ヘタル韓國大官及今  
朝來訪シタル韓國大官ノ官衙又ハ邸宅ニハ  
坂田參事官ヲシテ大使以下ノ名刺ヲ持參セ  
シメラレタリ本日ノ午餐ニハ

學部大臣 関詠煥

宮内府大臣 関西英

議政府贊政 權重顯

晚餐二八

陸軍法院長 関商鎬

外部協辦 尹致昊

禮式院繙譯官 朴基駿

學部大臣 関泳煥

禮式院副長 関泳璘

鐵道院監督 玄暎運

禮式院參理官 高義誠

等接待ノ為ニ大使ト食卓ヲ共ニセリ

三月二十日 曇

大使ハ朝來旅館ニ於テ内外ノ來訪者ニ接  
見ス午後三時過大使ハ隨行高等官ヲ率  
ヒテ景運宮ニ参内三時半九成軒ニ於テ韓國  
皇帝陛下及皇太子殿下ニ内謁見ヲ為ス同時ニ  
林特命全權公使モ亦公使館員ヲ率ヒテ参内  
同所ニ於テ内謁見ヲ為セリ其際大使ニハ皇帝  
陛下ヨリ大勲位金尺大綬章ノ御親授アリ  
其レヨリ皇帝ハ一時間餘大使ト御懇談アリ  
其ノ間林公使及大使隨行員並ニ公使館員

ニハ別室ニ於テ茶菓ヲ賜ハレリ（別冊謁見  
始末参照）午後五時大使御前ヲ退出スル際  
ニハ皇帝陛下頗ル御満足ノ御模様ニテ親シク  
九成軒ノ玄關口トモ稱スヘキ場所ニ出御セ  
ラシ大使ノ轎ヲ此處ニ持テ来ラシムル様侍臣  
ニ命セラレ御丁寧ニ大使ニ握手告别セラレタ  
リ歸館後宮中ヨリ御使ヲ以テ左ノ勲章ヲ隨  
行員ニ贈與アリタルヲ以テ大使ハ一々之ヲ本  
人ニ交付セリ

太極一等勲章

都筑樞密院書記官長

太極二等勲章

宇佐川陸軍少將

同

上

坂本海軍少將

同

上

東園侍從

八卦二等勲章

國分公使館二等書記官

太極四等勲章

坂田外務省參事官

同

上

古谷帝室制度調查局祕書

太極五等勲章

高橋種紀

八卦六等勲章

高島樞密院屬

同

上

日高警部

同

上

黑澤式部屬



同

上

竹村帝室制度調査局書記

本日午後六時半ヨリ完順君李載完聖旨ヲ奉  
シテ大觀亭ニ宴ヲ張ル列席者如左

正賓

特派大使侯爵伊藤博文

特命全權公使林權助

樞密院書記官長都筑馨六

陸軍少將

山根武亮

同

伊地知幸介

同

宇佐川一正

海軍少將

坂本俊篤

陸軍少將 大谷喜久藏

侍從 子爵東園基愛

海軍大佐 井上敏夫

陸軍中佐 齋藤力三郎

公使館一等書記官萩原守一

陸軍中佐 野津鎮武

公使館二等書記官國分象太郎

外務省參事官 坂田重次郎

帝室制度調查局秘書古谷久綱

公使館通譯官 鹽川一太郎

陸軍大尉

井上一次

高橋種紀

以上日本文武官及大使隨員

學部大臣

関泳煥

宮内府大臣

関丙奭

宮内府禮式院長

関種默

法部大臣

李址鎔

宮内府禮式院副長

関泳璘

外部協辦

尹致昊

宮内府協辦

朴鏞和

宮内府禮式  
院外務課長

高義敬

# 以上韓國官吏

食事中伊藤大使ハ杯ヲ舉ケテ韓國皇帝陛下ノ健康ト韓皇室ノ安寧ヲ祝セラシ完順君ハ兩國ノ交誼益々親密ナランコトヲ祈リ我々皇帝陛下及帝室ノ繁榮ヲ祝セラシ接待委員長閑泳煥ハ伊藤大使ノ健康ヲ祝セリ午後九時半歸館

三月二十一日 曇時々雪

大使ハ旅館ニ於テ宮内府大臣関丙奭外數  
名ノ訪問者ニ接見ス午餐ニハ左ノ韓國官  
吏等接待ノ為メ大使ト食卓ヲ共ニス

學部大臣 関源煥

宮内府大臣 関丙奭

陸軍法院長 関商鎬

禮式院副長 関泳璘

鐵道院監督 玄暎運

禮式院參理官 高義誠

今夕午後八時ヨリ林特命全權公使ハ伊藤大  
使ヲ正賓トシ公使館ニ晚餐會ヲ催ス列席  
者如左

主人

林 特命全權公使

正賓

伊藤 特派大使

米國特命全權公使 アルレン

清國特命全權公使 許台身

獨國辦理公使 フォン・カルデルン

伊國辦理公使 兼總領事 モナコ

佛國代理公使 子爵 ド・フォントナリ

白國總領事 ヴァンカール

都筑樞密院書記官長

伊地知 陸軍少將

宇佐川 陸軍少將

坂本 海軍少將

總親務司 ブラウン

萩原公使館一等書記官

清國公使館英語通譯官 吳其藻

古谷 帝室制度調査局秘書

食後主客別室ニテ閑談夜半歸館因ニ記入

林公使ハ英國辦理公使兼總領事ヲ招待シタルモ  
同公使ハケムブリッジ公薨去葬儀未済ニ付速  
慮シテ列席ヲ辭シタリト云フ



三月二十二日 晴

午前十一時ヨリ隨行高等官（宇佐川少將ヲ除ク）  
昌德景福兩宮ヲ拜觀シ午後五時歸館大使  
ハ朝來旅館ニ於テ英國人ベ子ツト宮内府大臣  
閑丙顯外數名、來客ニ接ス午餐ニハ左記四  
名ノ官員接待、爲メ大使ト食卓ヲ共ニス

學部大臣 閑泳煥

外部協辦 尹致昊

陸軍法院長 閑商鎬

禮式院副長 閑泳璘

今夕六時半ヨリ外部大臣署理趙秉武ハ外部ニ於テ夜會ヲ催シ伊藤大使ヲ招待ス隨行高等官林特命全權公使日本公使館員京城駐在日本領事同領事館員駐屯隊長其他京城駐劄ノ我々陸軍武官數名モ亦招ル此ノ席ニ列シタル韓國官吏如左

宮内府内大臣完順君李載完

宮内府大臣 閔丙奭

内部大臣 李道宰

軍部大臣 尹雄烈

學部大臣

閔泳煥

法部大臣

李址鎔

農商工部大臣

金嘉鎮

議政府贊政

成岐運

司

韓圭高

禮式院長

閔種默

通信院總辦

李夏榮

禮式院外務課長 高義敬

以上外部以外，韓國大官

外部大臣署理 趙秉式

外部協辦

尹致昊

同 交涉局長

金益昇

同 通商局長

丁大有

同 參書官

金聖基

同

徐相郁

同

李範奭

同

李民溥

繙譯官

魚允迪

同

李建春

以上外部官吏

酒酣十九ニ及ヒテ大使ハ趙秉式尹致昊等  
ノ請ニ應シテ一場ノ談話ヲ為ス其要旨如  
左

國家ニハ君主ト人民兩々相俟テ完全ナル  
組織 (*Organic entity*) ヲ為ササルヘカラス人  
民ハ君主ニ忠實ニシテ君主ハ人民ヲ愛シ  
一定ノ法規ニ從テ之ヲ治メ決シテ專恣ニ  
陷ルヘカラス是レ近世國家ノ大方針ナリ  
韓國ニ於テモ急激ナル改革ハ嘉スヘキ  
コトニアラサルモ統治ノ大方針ハ如斯ナラ

ナルハカラス

午後九時歸館其ヨリ大使ハ旅館ニ於テ農  
商工部大臣金嘉鎮及嚴妃ノ親戚四名(元帥  
府記録局長嚴柱源、警衛院警務局長金永振、元  
軍部協辦嚴柱益外一名)ヲ引見セラル

三月二十三日 晴

午前八時隨行判任官一同昌德景福兩宮ヲ拜  
觀ス

大使ハ朝來訪問者ニ接シ午後一時ヨリ都筑  
書記官長宇佐川陸軍少將坂本海軍少將ヲ  
率ヒテ米國公使ノ午餐會ニ臨マル列席者ハ  
名國公使ナリ

午後七時ヨリ大使ハ旅館ニ於テ晚餐會ヲ催  
シ韓國大官及我文武官ヲ招待セリ列席者  
如左

內大臣完順君

李載完

參政外部大臣署理趙秉式

學部大臣

閔泳煥

度支大臣

朴定陽

法部大臣

李趾鎔

宮內府大臣

閔丙奭

內部大臣

李道宰

軍部大臣

尹雄烈

農商工部大臣

金嘉鎮

特進官

閔泳韶



贊政

韓圭高

贊政

權重顯

禮式院長

閔種默

贊政

成岐運

通信院總辦

李夏榮

陸軍法院長

閔高鎬

外部協辦

尹致昊

禮式院副長

閔泳璘

宮內府協辦

朴鏞和

林 特命全權公使

山根 陸軍少將

伊地知 陸軍少將

大谷 陸軍少將

齋藤 陸軍中佐

萩原公使館一等書記官

野津 陸軍中佐

吉田 海軍少佐

右ノ外大使ハ韓國贊政沈相薰元帥府總  
長申箕善并香港元艦長并上海軍大佐ノ  
諸氏ヲ招待シタルモ孰レモ病氣又ハ事故

ノ爲メ列席ヲ辭シタリ隨行員中ニテ當夜大  
使ト共ニ接待ノ爲メ列席シタルハ都筑樞密  
院書記官長、宇佐川陸軍少將、坂本海軍少將、  
國分公使館書記官、四名ナリ宴會中大使ハ  
談笑ノ間ニ列席ノ韓國大官ニ向テ舊來清  
國使節ノ朝鮮ニ來リタル際ハ如何ナル敬禮  
ヲ行ヒタルヤヲ問ハレタルニ大官等ハ事實ヲ  
以テ之ニ答ヘタリ大使ハ今日モ尚此ノ事行ハレ  
ツ、アルヤト再問シタルニ大官等ハ下ノ開條  
約ニ依リ韓國ノ獨立確定シタル以後此ノ事

ナシ全ク對等ノ交際ヲ為シツ、アリト答ヘタ  
リ大使更ラニ曰ク余ハ下ノ關條約ニ執テハ幾  
分カ株主ノ一部タルカ如キ關係ヲ有スル者  
ナレハ諸君ニ望ミ且ツ問フヘキコトアリ諸君  
ハ將來露西亞ニ對シテ昔日ノ支那ニ對スル  
カ如キ敬禮ヲ盡スニ至ラサル様充分努メラ  
ルルノ決心ナリヤト列席ノ大官一同其ノ決  
心ヲリト確答セリ茲ニ於テ大使ハ果シテ然  
ラハ余ハ衷心ヨリ大韓國皇帝陛下ノ萬歲  
ヲ唱フヘシトテ杯ヲ舉ケ一同之ニ和セリ右諷

刺的雜談ハ談笑ノ間ニ至大ナル感觸ヲ列  
席者ニ與ヘタル模様歷然タリ次ニ完順君  
李載完立テ大日本皇帝陛下ノ萬歲ヲ祝  
ヒタリ食後閑談午後九時半散會

三月二十四日 曇

午後一時大使ハ林特命全權公使、都筑樞密  
院書記官長、宇佐川陸軍少將、坂本海軍少  
將ト共ニ英國韓理公使ノ午餐會ニ臨マル  
列席者ハ英國公使館員ナリ

午後四時大使ハ旅館ニ於テ宮内府禮式院長  
関種默ト懇談ス同氏ハ齡既に古稀ヲ越エ  
老耄ヲレトモ大使着京以來ハ韓國皇帝陛  
下ノ勅命ヲ奉レテ毎日一回必ス旅館ヲ來訪  
シテ大使ノ安否ヲ皇帝ニ奏上スルヲ常トセ

リ來訪ノ際ハ時ニ大使ト親シク會見シテ歸  
ルコトアリ時ニ隨行員ニ就キテ大使ノ起居  
ヲ聞キ取りテ歸ルコトアリ本日ハ時ニ長時  
間懇談ヲ爲シタルアリ

今夕午後九時ヨリ林特命全權公使ハ大使  
旅館ニ一大夜會ヲ確シ伊藤大使及其隨  
行員各國公使公使館員韓國顯官帝國  
文武官京城仁川在留内外人男女約百  
五十名ヲ招待セリ韓國軍樂隊アリ歡極リ  
テ來賓中舞蹈シ望玉モモノアリ大使ノ

許可ヲ得之ヲ始ニ翌二十五日午前  
一時散會



三月二十五日 晴

大使ハ朝來訪問者ニ接シ正午林特命全權  
公使ノ請ニ應シ隨行員公使館員及京城  
在留ノ文武官ト共ニ旅館ニ於テ採影  
セリ

午後一時大使ハ御暇乞ノ為メ隨行高等官  
ヲ率ヒテ景運宮ニ参内九成軒ニ於テ皇帝  
陛下皇太子英親王兩殿下ニ謁見朝鮮  
料理ノ御陪食アリ皇帝陛下ハ大使ト約  
二時間御懇談アラセラレタリ此ノ間隨行

員ニハ別室ニテ同シク朝鮮料理ヲ賜フ  
學部大臣閑詠煥、禮式院長閑種默、宮内  
府大臣閑丙奭、宮内府協辦朴鏞和接待  
ノ任ニ膺ル午後三時過大使ノ宮闕ヲ辭  
スルノ際ハ先日ノ如ク皇帝陛下ハ九成  
軒ノ玄閣迄見送ラレタリ（別冊謁見始  
末参照）

午後六時ヨリ大使并ニ隨行員ハ田中元  
三郎、江南哲夫、小田枏捨次郎諸氏ヲ招ニ  
應ニ南大門外京釜鐵道會社役宅ニ於テ

晚餐ヲ喫シ午後十時歸館セリ

本日午後四時表勲院制章局長鄭東植  
大使旅館ニ來リ韓國皇帝陛下ヨリ特派大  
使便乗ノ理由ニ依リ井上香港丸艦長ニ  
贈與スル勲章ヲ大使ニ交付シ傳達ヲ依  
賴セリ

本日午前大使ハ左ノ通寄附ス

金貳百圓

京城小學校

同上

京城學堂

同上

仁川小學校

金百圓

京城日本人俱樂部

本日午前大使ハ接待委員外部禮式院官吏其他ニ對シテ左ノ通寄贈ヲ為セリ

卓被一枚

完順君李載完

服地二卷

卓被一枚

外部大臣署理趙秉式

大巾琥珀五本

服地二卷

銀七寶入卷食箱一個

學部大臣岡詠煥

服地二卷

議政府贊政權重顯

銀箱一個

金時計一個

數寄屋敷一匹

金時計一個

縫ハシカチ一打

金時計一個

金時計一個

銀箱一個

甲斐絹一匹

銀箱一個

甲斐絹一匹

外部協辦尹致昊

陸軍法院長関商鐫

警衛總管權重典

鐵道院監督玄映運

表勲院制章局長鄭東植

電話課主事金鎔濟

服地二卷

銀菊彫卷萬箱一個

宮內府大臣関丙爽

金時計一個

宮內府協辦朴鏞和

數寄屋二匹

白數寄屋五匹

宮內府禮式院長関種默

銀箱壹個

白甲斐絹五匹

宮內府禮式院副長関永璘

金時計一個

數寄屋二匹

銀箱一個

同外務課長高義敬

甲斐絹一匹

銀箱一個

甲斐絹一匹

銀箱一個

甲斐絹一匹

銀箱一個

甲斐絹一匹

銀箱一個

甲斐絹一匹

卓被一枚

福島絹二匹

同 參理官 高義誠

同 玄百運

同 嚴達煥

同 繙譯官 朴基駿

同 會計課長 白時鏞

銀卷簾入一個

同主事

玄暘運

銀卷簾入一個

同

金光默

銀卷簾入一個

同

秦學信

甲斐絹一匹

同

関肯鎬

甲斐絹一匹

同

韓聲東

金五圓宛

同

雇二名

金貳圓宛

同

介子三名

福島絹二匹

警衛院警務官韓弘洙

福島絹二匹

總巡 李兢淳



金貳圓

權任一名

金貳圓宛

迎檢六名

福島鮪三匹

小隊長陸軍參尉吳殷泳

金五圓

考校王順吉

金貳圓宛

兵卒十名

今夕韓國皇室ヨリ大使初メ隨行員一同從  
者ニ至ル迄御下賜品アリ左ニ大使宛、分  
リ記載ス

虎皮二張

繡屏八幅

甲冑一套

銀茶台二坐

鐵原紬五匹

錦畫團扇三把

右皇帝陛下ヨリ

徽皮二十令

繡屏八幅

細苧三匹

銀巾環二件

楚布三匹

白羽扇三把

右皇太子殿下ヨリ

山蓼三兩重

檄皮十令

右英親王殿下ヨリ

紅蓼十斤

鹿茸一對

鐵原紬三匹

右皇貴妃ヨリ

繡屏八幅

楚布二匹

右嬪宮ヨリ

今夕又趙東武玄映運玄百運ヨリ左ノ通大  
使ハ寄贈セリ

虎皮一領

細簾二部

江華席三部

仁蓼二斤

右外部大臣署理趙秉式ヨリ

明紬二匹

細苧二匹

磁器二個

色簾四疋

色席四立

筆一百四十柄

右鐵道院監督玄映運ヨリ

色簾二疋

色席二立

右宮内府参理官玄百運ヨリ

今夜随行判任官ハ徹宵行李ノ準備ヲ  
為ス

三月二十六日 晴

大使一行朝來旅裝ヲ整フ本日午前完順  
君李載完閑詠煥閑詠璘閑商錫等左ノ  
物品ヲ大使ニ寄贈ス

玉盒

銅爐

右完順君李載完ヨリ

虎皮一領

繡囊二件

青玉盒一座

右學部大臣関詠煥ヨリ

関芸楣畫蘭珠聯一幅

丁崔喬畫石珠聯二幅

繡錦囊二部

右禮式院副長関詠璘ヨリ

墨圖十二幅

右陸軍法院長関商鎬ヨリ

午前十一時五十分大使旅館ヲ出テ儀仗兵  
巡檢ニ護衛セラレ西小門外蛤洞関詠煥  
氏別邸ノ午餐會ニ臨マル郎ハ小丘ノ上ニ



位に京城周圍、連山ヲ一望、内ニ收メ風  
景極テ美ナリ。林公使及隨行高等官一  
同（但し宇佐川少將ヲ除ク）列席ス。韓人ハ主  
人関詠煥、宮内府大臣関丙奭、法部大臣李  
址鎔、特進官関詠韻、賛政韓圭高、外部協  
辦尹致昊ナリ。食後邸内ヲ散歩シテ少憩  
午後三時半西大門外ノ停車場ニ赴ク。沿道  
人山ヲ築クカ如シ。我カ守備隊整列シテ大  
使ヲ送ル。停車場ニハ各國公使領事及内  
外人、大使一行ヲ見送ルモノ夥シ。韓廷ノ

接待委員宮内府大臣宮内府協辦及禮式院  
ノ諸官三十餘名ハ一行ト同車ニテ仁川ニ来  
レリ三時四十分發車途中特記スヘキコトナシ  
五時領事館ニ入りテ大使ハ韓國官員ニ告  
別セリ

今夕大使以下隨行員一同加藤領事、旭  
日樓ニ確ヲシタル晚餐會ニ臨ム因ニ記ス字  
佐川陸軍少將ハ公務、都合ニ依リ本日ハ  
京城ニ留マリ明日仁川ニ来ルコトナレリ  
今回京城日本公使館附武官、職ヲ免セラ

レタル伊地知陸軍少將ハ井上陸軍大尉ト  
共ニ大使一行ト同行スルコトナリ明日京城  
出發下仁ノ約ヲ為セリ

三月二十七日 晴

午前十時過大使以下日本領事館ヲ辭シ十  
一時香港丸ニ搭乗ス仁川市街ハ無數ノ日  
韓兩國人兩側ニ立テ大使ヲ送レリ埠頭ニ  
ハ仁川中學校生徒及我カ駐屯隊ハ整列ス  
ルアリ林公使、萩原書記官、國分書記官、加藤  
領事、大谷陸軍少將、新井海軍少將、廣瀬大  
島艦長、藤本赤城艦長、野津陸軍歩兵中佐、  
宮内府鐵道院監督玄暎運其他我陸海軍  
人京仁兩地ハ重ナル居留民ハ船迄見送レリ

大使、乗艦アル中本艦ヨリ十九發、禮砲ヲ行  
ヒ續キテ朝鮮、陸地砲臺英米獨佛伊ノ五  
國軍艦并ニ我カ先任軍艦大島ヨリ各々十  
九發、禮砲ヲ行ヒタルヲ以テ本艦ハ一々之ニ  
對シテ十九發ノ答砲ヲ行ヒタリ（但シ大島艦  
長ニ對シテハ七發）正午仁川港解纜海波頓  
ル平穩ナリ一行船房ニ休息ス

三月二十八日 晴

午前八時海軍假根拠地八口浦ニ入りテ投  
錨灣内ニ平遠愛宕ノ二艦海軍病院船西  
京丸及海軍工作船運送船二三艘外ニ風帆  
船(石炭搭載)數艘アリ香港丸、投錨スルヤ  
一水雷艇来リテ海軍大臣ヨリ平遠艦長ニ充  
テタル電報ヲ持参シ續キテ平遠艦長愛宕  
艦長モ亦来艦アリ聞ク所ニ依レハ平遠艦長  
ハ本艦ノ八口浦ニ寄港スルヲ知ラサルヲ以テ  
今朝午前一時ヨリ水雷艇ヲ浦外ニ出シ本

艦、通過スルヲ待タシメタリト云フ電報中海  
軍大臣ハ香港丸ノ航路ノ極メテ安全ナルコ  
トニ言及セリ午前十時過大使隨行高等官  
并ニ伊地知少將井上大尉ハ小蒸汽船ニ搭  
テ病院船西京丸ヲ訪フ太田軍醫大監ハ去  
ル二月九日夜祿順港外驅逐船激戦ノ負傷  
者死者收容ニ關スル談話ヲ為シ南澤機  
關少監島少尉以下ノ負傷圖ニ就キテ説  
明ヲ與ヘ且船内ヲ細カニ案内セリ其レヨリ大  
使一行ハ再ヒ小蒸汽船ニ搭乗シテ八口浦灣

内ヲ巡リ至島ニ近キ海上ヨリ海底電線無  
線電信及假砲臺ノ設備ヲ視察シ十二時  
歸艦同十五分出帆海波平穩午後五時朝  
鮮南岸九針岩ヲ左舷正横ニ見ル



三月二十九日 晴

午前八時佐世保軍港着投錨鯨島司令長官  
村田要塞司令官黒井參謀吉田副官馬淵  
長壽縣書記官同縣警部長佐賀縣警部長  
佐世保市助役等來迎一行上陸鎮守府  
樓上ニ少憩海軍病院造兵廠船渠倉庫  
ヲ見ル病院ニハ南澤機關少監松村大尉高  
橋中尉島少尉負傷水兵若干名アリ戸塚  
病院長案内説明ス露西亞ノ負傷下士一  
名アリ鎮守府ニテ午餐後市外ノ水源地及

漣過地ヲ見タル後ハ蒸汽船二艘ニ分乘シ  
テ一行佐世保港口ノ一灣ニ至リエカトリノストラ  
ヴ、ニコライ、マンケユリア、アルゲン以下九艘ノ捕  
獲船ノ周圍ヲ一週シテ午後五時四十分歸艦  
六時出帆隨行員坂本海軍少將ハ當地ニテ  
上陸

三月三十日 晴

午前五時四十八分馬關海峡ニ入ル六時四  
十分大和ハ十九發、禮砲ヲ行ヒ本艦七發  
、答砲ヲ為ス海峡通過、際ハ水雷艇二隻  
、護衛アリ瀬戸内海、航海ハ特記スヘキコト  
ナシ夜半十二時神戸着直ニ上陸諏訪山西  
常盤ニ投ス

三月三十一日 晴

午後一時十四分三ノ宮發車東上大坂京都  
馬場岐阜名古屋等ニハ府縣官ノ大使ヲ迎  
フルモノ多シ一行寢臺車中ニ寢ル因ニ記ス  
木下鐵道作業司技師ハ遞信大臣ノ命ヲ奉  
シ往返共ニ大使一行ト汽車ニ同乗職務上  
種々轉旋ノ勞ヲ取レリ

四月一日 晴

靜岡大磯平沼等ノ停車場ニハ大使一行、  
知友及縣官、出迎先日ノ如シ天氣快晴  
車窓ヨリ遠近ノ春色ヲ賞シツ、午後三時  
十四分新橋停車場着出迎人、夥多シキ  
コト出發ノ際、如シ大使ハ停車場ヨリ直  
ニ参内謁見ス

附記

隨行高等官ハ四月四日午前十時三十分  
拜謁同七日正午十二時御陪食、榮ヲ荷